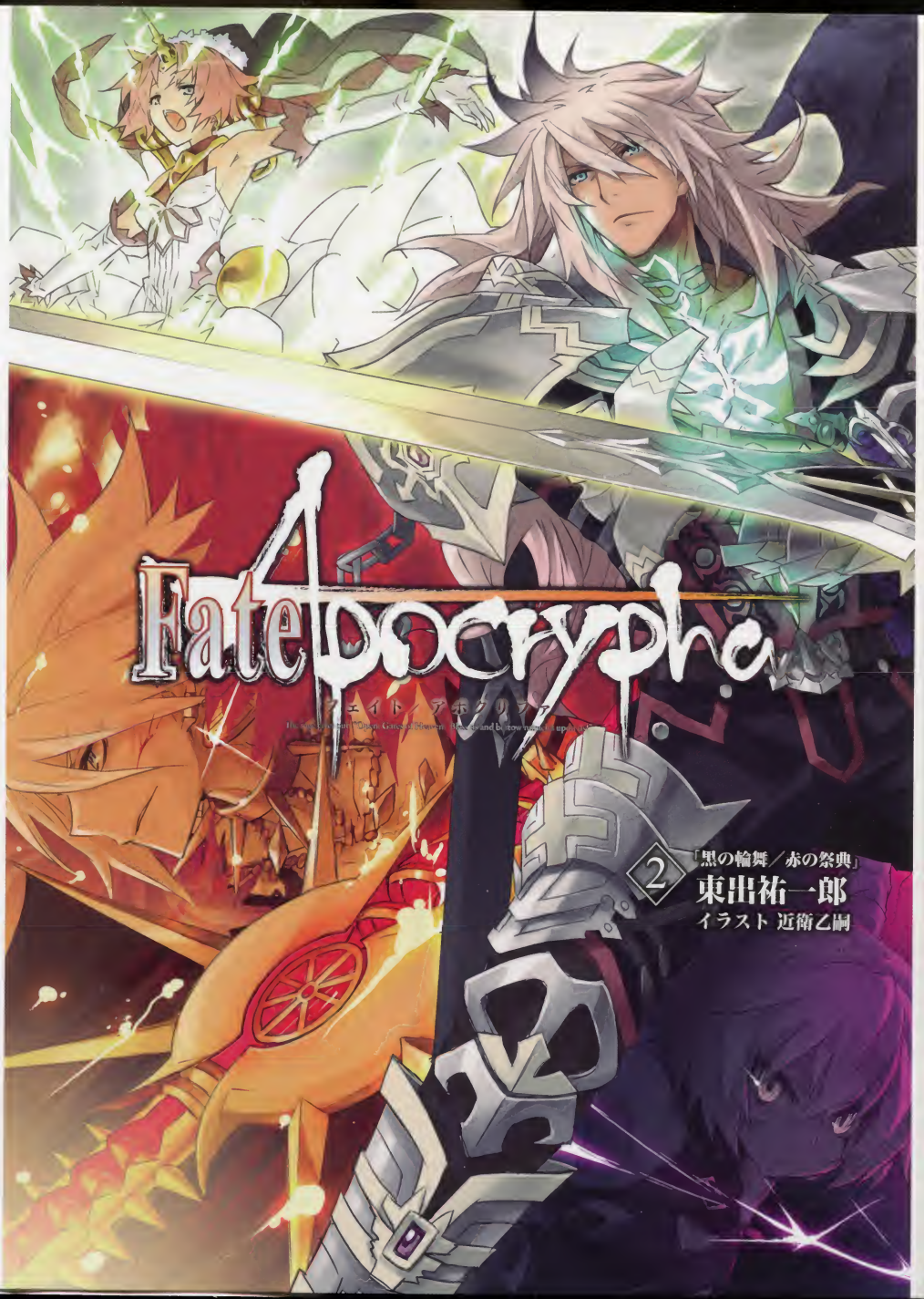


カバーイラスト／近衛乙嗣
カバーデザイン／WINFANWORKS
©TYPE-MOON



舞／赤の祭典」
祐一郎
ト 近衛乙嗣

フェイト／アポクリファ 2

「黒の輪舞／赤の祭典」

東出祐一郎

TYPE-MOON BOOKS
ヒA-02

TYPE-MOON BOOKS

定価：本体1300円(税込)

“黒”のセイバー（ジークフリート）の消滅という衝撃も覚めやらぬまま、ユグドミレニアの陣営は次なる戦いへと突入。

“赤”のセイバー（モードレッド）との小競り合いを経て、遂に戦場で“黒”と“赤”の軍勢が全面対決する。“黒”の陣営はランサー（ヴラド三世）を中心に、アーチャー（ケイローン）、ライダー（アストルフォ）、バーサーカー（フランケンシュタイン）、キャスター（アヴィケブロン）。そして、“赤”から奪い取ったもう一人のバーサーカー、スパルタクスを使役して、“赤”に立ち向かう。

一方、“赤”の陣営はアサシンによる驚天動地の宝具『虚栄の空中庭園（ハンギングガーデンズ・オブ・バビロン）』によって、空から急襲を仕掛けた。

“赤”のアーチャー（アタランテ）、ランサー（カルナ）、ライダー、キャスター（シェイクスピア）を指揮し、自らも戦いに赴くはアサシンのマスター、シロウ神父。

“黒”と“赤”が凄絶な戦闘を繰り広げる中、ルーラーのサーヴァント、ジャンヌ・ダルクはある目的を抱いて戦場を駆け抜ける。一度は逃げたはずのホムンクルスもまた、ルーラーと異なる目的のため、戦場へと舞い戻る。

互いの策謀が交錯し、英雄の銀刃がぶつかり合う。

そして積み重ねられた幾つもの運命によって、“竜殺し”は戦場へと帰還する。

「Fate/stay night」「Fate/Zero」とは異なる道を歩んだ外典（アポクリファ）の聖杯戦争はますます苛烈さを増していく――！

東出 祐一郎
YUICHIROU HIGASHIDE

-代表作-

あやかしびと

ケモノガリ

近衛 乙嗣
OTOTSUGU KONOE

-代表作-

RIGHT×LIGHT（ツカサ著／ガガガ文庫）

Fate Apocrypha

フェイト／アポクリファ

The sage cried out. "Open, Gates of Heaven. Bless us and bestow miracles upon us!"

2

「黒の輪舞／赤の祭典」

東出祐一郎

イラスト 近衛乙嗣



フィオレ・フォルヴェッジ・ユグドミレニア

Fiore Forvedge Yggdmillennia

Height/Weight:162cm/47kg
Blood type:A
Birthday:7.12
Measurements:B84 W57 H82



ユグドミレニア一族の魔術師。“黒”のアーチャーのマスター。
可憐な貴人という印象を与える女魔術師。
二流が多い一族の中では随一の傑物であり、一族の長であるダーニックの後継者と目されている。
魔術回路の変質により両足が麻痺しており、車椅子での生活を強いられている。

“黒”のアーチャー

Height/Weight:179cm/81kg
Blood type:unknown
Birthday:unknown

フィオレと契約した弓の英霊。
穏やかな知識人であると同時に、卓越した武人。
サーヴァントとしてフィオレに忠を尽くし、軍師としての助言も行う。

Archer of “Black”



セレニケ・アイスコル・ユグドミレニア

Celenike Icecolle Yggdmillennia

Height/Weight:168cm/53kg
Blood type:AB
Birthday:12.11
Measurements:B86 W59 H88

ユグドミレニア一族の魔術師。“黒”のライダーのマスター。
怜悧な美貌を持つ残忍な女魔術師。
他者の呪殺を生業としており、自身が召喚したライダーに執着している。
ユグドミレニアの陣営であるが、我欲を優先させている。



“黒”のライダー

Rider of “Black”

Height/Weight:164cm/56kg
Blood type:unknown
Birthday:unknown
Measurements:B71 W59 H73



セレニケと契約した騎乗兵の英霊。
天真爛漫、無邪気で享楽的な騎士。自身の良心と願望に従って行動し、
それを悔いることは決してない。
ステータスこそ他サーヴァントよりやや劣るものの、豊富な宝具でそれを
補い、相手を翻弄する。
気ままな行動で、此度の聖杯大戦に思わぬ状況を作り出してしまう。



“黒”のキャスター

Height/Weight:161cm/52kg
Blood type:unknown
Birthday:unknown

ロシェと契約した魔術師の英霊。
直接的な戦闘能力こそ低いものの、稀代の
ゴーレム使いであり
戦争における歩兵（ポーン）を増やす役割を負う。
人間と深く関わり合うことを避けるため、
仮面をつけている。

ロシェ・フレイン・ユグドミレニア

Height/Weight:152cm/45kg
Blood type:O
Birthday:9.15

ユグドミレニア一族の魔術師。
“黒”のキャスターのマスター。
十三歳という若輩でありながら、ゴーレム使いとして名を馳せている。
同じゴーレム使いであるキャスターを先達として尊敬しており、マスターとサーヴァントというよりは、教師と教え子という立場に近い。



Frain Yggdmillennia



六導玲霞

Reira Rikudou

Height/Weight:164cm/53kg
Blood type:B
Birthday:1.9
Measurements:B90 W62 H89

“黒”のアサシンのマスター。
娼婦であり、アサシン召喚の際の生贄として捧げられるところを、
アサシン自身がマスターとして彼女を選ぶことで救われた。
魔術師ではないが、聖杯を欲するアサシンのために聖杯大戦への参戦を決意する。

Assassin of "Black"



“黒”のアサシン

Height/Weight:150cm/45kg
Blood type:unknown
Birthday:unknown
Measurements:B69 W49 H71

六導玲霞と契約した暗殺者の英霊。
生前は連続殺人鬼であり、マスターのことを「おかあさん」と呼称する。
今回の聖杯大戦では“黒”と“赤”どちらとも敵対しており、全てのサーヴァントを皆殺しにしようとする。



Archer of "Red"

“赤”のアーチャー

Height/Weight:166cm/57kg
Blood type:unknown
Birthday:unknown
Measurements:B78 W59 H75

魔術協会に雇われた魔術師と契約した弓の英霊。
冷徹で、やや時代がかった喋り方をする。英霊としての誇りよりも、
野生の本能を優先することができる狩人。
女神の祝福を受けた弓を愛用している。



“赤”のランサー

Height/Weight:178cm/65kg
Blood type:unknown
Birthday:unknown

魔術協会に雇われた魔術師と契約した槍の英霊。
太陽の如く輝く黄金の鎧と神すら滅ぼす槍を身につけた、万夫不当の英雄。
マスターに対して一切異を唱えることなく、淡々と任務をこなす。



Rider of "Red"

“赤”のライダー

Height/Weight:185cm/97kg
Blood type:unknown
Birthday:unknown

魔術協会に雇われた魔術師と契約した騎乗兵の英霊。
眉目秀麗な美青年。自由闊達で、マスターであれども不当な命令には従わない。
“赤”のランサーと並ぶ強靱さを誇り、豊富かつ強力な宝具で圧倒する。
此度の聖杯大戦における、随一の大英雄。



Berserker of "Red"

"赤"のバーサーカー

Height/Weight:221cm/165kg
Blood type:unknown
Birthday:unknown

魔術協会に雇われた魔術師と契約した狂戦士の英霊。
バーサーカーのクラスとしては珍しく会話が可能であるが、
狂化ランクが低い訳ではなく、相互理解は絶対に成立しない。
命令にはほとんど従うことがなく、ただ強者を屠ることのみ
を喜びとする。

“赤”のキャスター

Height/Weight:180cm/75kg
Blood type:unknown
Birthday:unknown



魔術協会に雇われた魔術師と契約した魔術師の英霊。
キャスターでありながら、魔術はほとんど使用できない。
壮麗な物語を紡ぐことを人生の目的としており、戦闘面においては
マスターの援護を中心とする。
よく自分の作品からその場に相応しい文句を引用して、悦に浸る。

Caster “Red”

Saber of Red



“赤”のセイバー

Height/Weight:154cm/42kg
Blood type:unknown
Birthday:unknown
Measurements:B73 W53 H76

獅子劫界離と契約した剣の英霊。
傲岸不遜、過剰なまでの自信に満ち溢れた騎士。
ステータス隠蔽のため、戦闘の際は宝具である兜で顔を隠している。




これまでの小競り合いなどとは訳が違う。戦場があり、兵があり、兵器があり、将があり、獲るべき領地があり、何より討ち果たすべき『王』がいた。


「あれは蛮族だ。我が領土を穢し、傲岸不遜に下劣に高笑いする死ぬしかない愚者どもだ。笑いながら連中を殺すがいい。恐怖という知識が欠けている彼奴らには、牛革の鞭で徹底的に躾け直してやらねばならぬ」




苦悶を押し殺し、ただ前を見て——暴力的な光の渦
に、ルーラーはただ耐える。









フェイト／アポクリファ　Vol.2「黒の輪舞／赤の祭典」

目次
CONTENTS

プロローグ――5
第一章――11
第二章――111
第三章――291
解説――462

プロローグ



イラスト／近衛乙嗣
装丁／ＷＩＮＦＡＮＷＯＲＫＳ

プロローグ

かつて、英雄がいた。竜を殺した大英雄だ。

ネーデルラントの王子。勇敢で気高く、誰もがその威容を褒めそやし、栄光を讃えた。男たちはこぞって彼の部下になろうと馳せ参じ、女たちは彼にひたむきな愛情を寄せた。英雄もまた、彼らの期待に応えた。

憩いの時など稀にしか持たず、ただただ戦いを求めた。否、彼が戦いを求めたのではなく、戦いが彼とその大いなる力を逃さなかった。

霧の一族から手に入れた名剣バルムンク。討ち滅ぼした邪悪なる竜の血を浴びた鋼の肉体。

無敵の剣と、無敵の軀。彼が数多の戦に求められたのは当然の理といえよう。その生涯に穢れはなく、その人生はただただ絢爛だった。

だが、彼はあまりに英雄だった——英雄すぎた。求められればそれに応じた。跪いて乞

い願われたならば、その手を必ず握り締めた。
竜殺しを求められれば竜殺しを為した。誰の意にも添わぬ絶世の美姫を抱かせるよう求められたならば、そうするように知恵を絞った。そこには善もなく、悪もなかった。……それは、さながら願望機の如き生き方だった。彼はそれでいいのだと、そう思っていた。善と悪など、所詮は立ち位置の問題でしかない。
私腹を肥やしていた役人が、家族を殺されたと訴えれば仇を討った。
貧困に喘いでいた村人たちを、ただ望まれなかったために見捨てた。
だって、そうでもしなければ切りがない。世界の全てを自分の両腕で抱え込もうなんて不可能だ。だから、求められたならば応じると。ただそれだけを決めた。
行動に己の意志はなく。戦闘に己の好みはない。そうしている内に、英雄はふと気付いてしまった。自分が望んでいるものが、まるで分からない。希望がなく、夢がない。未来を思い描くこともできない。英雄を理想的な存在だという者はいるのに、肝心の英雄は理想そのものを見失っていた。

――何たる欺瞞。まるで歯車が噛み合っていない。求められて応じていたならば、己の求めるものが何だったのか分からなくなるのは、当然だろうに。

見失い、彷徨い、それでも――この果てに何かがあると信じて。この終わりに、何かがあると信じて。英雄はただ、戦い続けるしかなかった。
敗北はない。あるはずがない。勝利を求められた以上、どれほどの苦難と絶望を踏みにじっても、彼は勝利を摑み取った。
勝利、勝利、ただ勝利しかない。「あの怪物を倒して欲しい」「我々の村を救って欲しい」「我々の敵を倒して欲しい」「あの山が欲しい」「あの美女が欲しい」「あの国が欲しい」
――願い事は人の数だけあり、叶えた数は乞われた数だけ。
それは最早、英雄という名の『聖杯』に過ぎない。それでも良い、と英雄は思う。だって、誰かに感謝されるのは悪い気分ではない。
これしかない、と必死の表情で乞われれば心が動くは当然だ。
だからひたすらそれを続けて――挙げ句の果てに、竜殺しまで成し遂げてしまった。心の何処かに、穴がある。穴の底には何もない、空虚な黒い空間が広がっているだけ。
人を愛しているのに。
世界を愛しているのに。
その空虚さだけは、どうしても埋めることができなかった。

英雄の名は――

第一章



第一章

よろめきながら立ち上がろうとすると、手がひんやりとした荒い岩肌に触れた。ここは何処なのかを自問するより先、眼前に居るものの気配を知覚して、悪寒を抱く。

しゅうしゅうと、吐息が漏れている。だが、その息を全身に浴びているのは何故だろう。

……それは、眼前に存在すると思しき『何か』がとてつもなく巨大なのだ。猛々しい憤怒と邪悪を抱え込み、自分を喰らおうと待ち構えているのだ。

自身の呼吸が荒くなる。逃げ出したい、一刻も早く全速力で逃げて逃げなければ。なのに、軀は影に縛り付けられたように動かない。冷たく不快な汗が、蛞蝓のように全身を這い回っている。

――寒い。

軀の芯は恐怖で凍りついている。なのに全身がひどく熱いのは、眼前のソレが如何なる焔よりも猛々しい存在であるが故か。

吸い込む空気は毒のようで、苦痛と共に吐き出される。だが、ソレは決して己に手を出

そうとはしなかった。

姿を現すこともなく、声を掛けることもなく、ソレはのっそりと方向を転換した。逃げるのでもなければ、立ち去る訳でもない。ただ、奥にその巨軀を引っ込めただけだ。

ソレが自分に伝えたい言葉は唯一つ。

忘れるな。まるで刺青のように、その言葉は男の肌に刻み込まれた。

――これは夢ではなく、現実でもない。夢と現実の境界線に位置する狭間の世界。

決してソレを忘れるな、すぐにまた出会うことになる。

そうして針が突き立てられたような胸の痛みと、焔の如く燃え盛る血の感覚で――彼は目を覚ました。

§§§

凍るような空気、凍るような静寂。森はただ、暗くて静かだった。先ほどまで感激のあまり啜り泣いていた〝黒〟のライダー、アストルフォはようやく立ち上がった。

倒れていたホムンクルスを引っ張り上げる。ライダーよりわずかに小さいかほぼ同じはずだった背丈が、随分と伸びていた。どうやら、〝黒〟のセイバー――ジークフリートの心臓を呑み込んだことで、急激な身体変化が訪れたらしい。

信じられないような面持ちで、ホムンクルスは自分の手を二度三度と握る。心臓が破裂した際の鈍痛はまだ残り続けているが、既に支障がないレベルだ。

「どうやら、セイバーの心臓が機能しているみたいだね」

ライダーは感心したように頷いた。ホムンクルスが心臓に手を当てると、確かに力強い脈動が伝わってくる。汗が滲むほど熱い血が、全身に流れていた。

「ああ――」

ホムンクルスは苦しむことなく声が出せることに、微かな感動を覚えた。息を吸い込み吐き出すことが、これほど心地よいとは！

彼はやや興奮したように周囲を見回し、一本の樹に目を留めた。

ホムンクルスは呼吸を整えて、魔術回路を励起させる。樹木にそっと手を当て、触れた木の材質を確認、魔力を放出して破壊した。木は枯枝のように容易くへシ折られたが、ホムンクルスの軀は魔術回路の駆動に見事耐え切った。

それを見たライダーは、どこか寂しそうに頷いた。

「……うん。これなら、此処から先はキミ一人で大丈夫だろう。セイバーが死んだ以上、

誰かがさっさと説明しないと、ややこしいことになりかねないし」

ライダーの言う通りだ。サーヴァントの状況は、ミレニア城塞に居るマスターたちも逐一確認しているだろう。セイバーはライダーとホムンクルスを追跡していたのだから、このままでは新たな追手が差し向けられる可能性が高い。

「こいつも連れて行かないとなぁ」

セイバーに殴られ、気を失ったセイバーのマスター……ゴルド・ムジーク・ユグドミレニアの頭を軽く叩く。体格的にとても担げるはずはないのだが、そこは仮にも英霊だ。担いで運ぶのに、問題はないのだろう。

「お、そうだ。道中何があるかも分からないし、この剣あげる」

ひょいと、何の気なしにライダーは腰に吊していた細身の剣を手渡した。困惑したていで、ホムンクルスはそれを受け取る。細身とはいえ、鋼でできている剣はずしりとした重みを彼の両手に伝えた。

「だが、これでは君が――」

「ああ、ボクは剣の他に槍も持ってるし本もある。それに、何と言っても幻馬がいるからね。実のところ、剣はあまり使わないのだ」

満面の笑み＋ピースサイン――断る理由が見つからず、ホムンクルスは剣を腰に吊した。片側にある重みのせいで、少しバランスが気になるがその内慣れるだろう。

「……大切に使って欲しい。どうやらボクはセイバーを誤解していたみたいでさ。その、何というか。むっつりしてる、堅物で退屈な奴だと」

「分かっている。ありがとう、君には本当に助けられた」

「いいさ、いいのさ。ボクは大して役に立ってないんだから」

そんなことはない、とホムンクルスは思う。ライダーはただ一人、自分の声に応えてくれた。助けようと、その手を差し伸べてくれた。与えられる報酬はなく、報われることすらもない行為を躊躇いなく行った。……そんな彼の言葉だからこそ、セイバーも最後の最後で助けようとしてくれたのかもしれない。

「ところで、前から聞こう聞こうと思っていたんだけどさ。――キミの名前は？」

「……俺の名前か」

難しい、とホムンクルスは腕を組む。当然ながら、これがメイドや戦闘用として特別に鋳造されたものならば、固有識別用の名が与えられることはあるが、大量生産されたただの工業製品である彼には名が与えられる必要がなかった。

だから、今から自分で考えねばならない。まさか、一生をホムンクルスという名で過ごすという訳にもいくまい。

ふと、心臓に手を当てた。これは、英霊からの授かり物だ。ならば、せめて――。

「ジーク、でどうだろうか」

「ジークフリートでなく？」
「……完全に名を模倣するのは、あまりに恐れ多い。だが、忘れ去られるのは口惜しい。ならば、ジークでと思ったのだが」
ふんふんふん、とライダーは大きく首を縦に振った。
「そうだね。……うん、ジークというのは良い名前じゃないかな？」
「ありがとう。では、俺の名はジークだ」
「あはは。ジーク、よろしく！」
ライダーが手を差し出したので、躊躇いがちに握り返す。今生の別れは、もう間近に迫っているとお互いが理解っていた。
「何か、君にできることはないだろうか？」
ライダーはどこか切なげな表情を浮かべ、ゆっくりとした仕草で頭を振った。
「――無いよ。キミはこの戦いから解放された。自由の身だ。多分だけど、寿命も真っ当な人間並みになっているんじゃないかな？　だから、普通に生きて普通に死ぬ。それなら、キミを救ったセイバーも喜ぶだろう」
優しく、乙女のような仕草でライダーが頬に手を当てて笑った。それから感極まったようにジークの頭を引き寄せ、髪の毛をぐしゃぐしゃに掻き回す。
しばらくして、ライダーはようやく彼を解放した。

「よし、行くんだ。こっちはこっちで何とかなるさ」
わずかに突き放したようなライダーの言葉に頷き、ジークは一歩、二歩と後退していった。ゆっくりと、だが確実に離れていく。ライダーは名残惜しそうに手を振っていたが、やがて何かを断ち切るように頷くと、ゴルドをひょいと担いでジークに背を向けた。
「ライダー！　俺は、何をすればいいんだろう？」
ジークが立ち去る背中に声を掛けた。ライダーはくるりと振り返り、満面の笑みを浮かべて叫ぶ。
「何でもいいさ！　今のキミなら、何だってできる！　街に行って人と会って、誰かを好きになったり嫌いになったりして、愉快に人生を過ごすんだ！」
なるほど、確かにそれは愉快だろう。ジークは納得する。……心の何処かに、薄い皮膜が貼りついたような違和感があるが、彼は極力それから目を逸らした。
ライダーは満足げに溜息をつく。
ああ、あのホムンクルスは最早庇護される存在ではなくなった。頑丈な軀と一流の魔術回路がある、これならひっそりと世界に紛れて生きて行くことも不可能ではないだろう。
無論、ユグドミレニアの代償はあまりに大きかった。特に聖杯大戦を戦うにあたって最優と称される剣士を失ったことは致命的だ。

〝黒〟の側も〝赤〟（スカーレット）のバーサーカー（バルタクス）を打ち倒し、手駒にしてはいる。だが、セイバーとバーサーカーでは、とてもではないが釣り合わない。

「……ま、いいか。なるようになるさ」

それきり、ライダーは聖杯大戦の趨勢を考えることは止めた。自分はとにかく空を舞って戦うだけなのだ。無論、このセイバーとの一件をどうやって説明しようか頭を捻らなければならないが――嘘は苦手だし、悪いことをした覚えもない。

確かに〝黒〟のセイバー（ジークフリート）はホムンクルスに心臓を与えて逝ってしまった。これはもしかすると、この聖杯大戦において致命的な行為だったかもしれない。だが、それがどうした。結局のところ、第二の生を得た彼はやりたいことをやったのだ。あれは誰に強制されることもない、滅私の――正義の行為だった。

正直に、素直に、彼は正しいことをしたと胸を張って告白しよう。

ライダーはそう決意した。

そうして。ジークはゆっくりと歩き出す。足は力強く踏み出され、凍った地面に薄い足跡をつけた。ただ、それでもその歩みは鈍かった。一歩進むたび、振り返っては遠ざかるライダーの背中を目で追う。

ライダーは未だ存命であるゴルドを殺すことはない。彼はマスターだし、令呪が残っているならば、新たなサーヴァントと契約できる可能性があるからだ。

問題は、ライダーが罰を受ける可能性があるということ。自分は聖杯戦争については生まれついて保有している知識以外は分からない。だが、セイバーが最優であると謳われていること程度は知っている。

それが、死んだ。しかも自分に心臓を与えることによってだ。これは言ってしまえば、自殺に等しい行為だ。サーヴァントとはいえ、彼らにとっては紛れもない現実である。第二の生とでも言えるこの状況下で、何故そんな行いに至ったのか。

……彼が何を望んだのかは分からない。自分は彼の仲間ではなく、友人でもない。知り合いですらなかった。木っ端の如く消費される命という点では、ある意味で共通点があったのかもしれないが。

それでも、ジークは彼に救われた。感謝の念は溢れて留まるところを知らず、どうすれば恩に報いられるのかは分からない。

さて。ともあれライダーの言葉通り、街に向かうとしよう。とは言え、まさかトゥリファスに潜り込む訳にもいくまい。あそこはユグドミレニアの領域だ。だからここを真っ直ぐ歩いて、村に行く。

……行かなければ、ならないのだが。

彼にとっては何とも不思議なことに、ライダーの姿はどうに消えたにも拘わらず、足は

止まりがちで遅々として進まない。

「ふむ、何故だろうか」

何となく、独り言を呟いてみる——喉が痛くならないので、それが少し嬉しい。ホムンクルスである自分に、分からぬことなど何もない。少なくとも、己の軀の異常（エラー）に関することなのだから、分からなければならない。

負傷している訳ではない。体調は短い生の中でも最高だ。体内に熱があり、鼓動は強く弾んでいる。足に異常は全くない。脳の異常——なし、神経の損傷——なし、ウィルスなどによる疾患——なし。

正常だ。そして目標はまず『村へ行くこと』。何故ならトゥリファス以外の拠点を確保しなければならないからだ。成功率は八割強といったところか。運が悪ければ、偶然にユグドミレニアの手にかかり、あえない再期を遂げるだろう。

目標もあり、身体能力は正常で、足が動かないはずはない。なのに、動かない。

「ライダーに足を動かす方法を聞いておけば良かったか……」

ふと今更ながら。

また独りになったと、ホムンクルスは気付いた。もうこれから先、ライダーには二度と会えないということにも気付いた。

「……ふむ」

少し胸が締め付けられて、痛いと思った。努めてそれを無視するようにして、彼はどうにか歩き出す。

§§§

結論から言うと〝黒〟のライダー、アストルフォは両手両足に杭を打ち込まれた上、流体式のゴーレムによって動きを封じ込められ、〝赤〟のバーサーカーと共に事実上幽閉された。

彼はあまりに正直に語りすぎた、おまけに自身の感想（「いや、実にスカッとした！」）さえ交えた。〝黒〟のランサー——ヴラド三世が激昂するのも当然の理である。

〝黒〟のセイバーの真名（しんめい）を聞かされたマスターたちも、こぞって非難の目を〝黒〟のライダーに向けていた。何しろ、ネーデルラントの〝竜殺し〟ジークフリートだ。〝黒〟の陣営にとっては、まさに切り札と成り得る存在だったろう。

ランサーはライダーの幽閉を命令すると、即座に霊体化してしまった。彼のマスターであるダーニックが取りなしているが、当分機嫌は戻るまい。生前の彼であれば、間違いな



く誰かの命が機嫌を取るために必要だったろう。

全員を地下牢から追い出したマスターであるセレニケは、ライダーの頬を引っぱたいた。彼女にとっては忌々しいことに、音は何とも軽い。ライダーも厳粛な表情を浮かべてはいるものの、痛みに悶えていたり——何よりも、絶望していたりする様子はない。

「貴方、一体何をしでかしたか分かっているの？」

「分かってるよ？　一人のホムンクルスを救った。……ただそれだけのコトさ」

「ふざけないで！　セイバーが消えたのよ!?　サーヴァント中最優のセイバーが！　しかも戦ってない。戦ってすらいない！　内輪揉めで消えたなんて、馬鹿馬鹿しいにも程があるわ！　貴方のせいで！」

しばしライダーは考え込み、怒られるかもなと思いつつ呟いた。

「いや。ボクの責任じゃないな。セイバーは英雄らしく、立派に志を全うしたんだから」

セレニケはもう一度ライダーの頬を引っぱたいた。それでも平然としている彼にますます苛立ちを募らせ、彼女は両手と両足に突き刺さった杭を手で摑み、揺り動かした。

「いた、イタタタッ！　いや、ちょ、ちょっとそれは勘弁！」

それで、ようやくライダーが苦悶してくれたので満足した。ベッドの上では、何をやっても見ることのできなかった表情だ。

——これだけでいいのに。

心の底から、セレニケはそう思う。サーヴァントが軀を持っていないのは本当に惜しい。

「サーヴァントならサーヴァントらしく、私の傍で控えていればこんなコトにならなかったでしょうに」

「あー、今からでもそうしたら、コレを外してくれたりするかな？」

セレニケも、さすがにその提案には首を横に振った。少なくとも、〝黒〟のランサーがそれを許すはずがない。巻き込まれるのは御免だった。

「――それが外れるのは、戦うときだけ。貴方はこの聖杯大戦において、徹底的に駒として扱われることになるわ」

セレニケは酷薄な笑みを浮かべ、彼の耳に口を寄せて告げた。

「恨むならホムンクルスを恨みなさい」

そう言って立ち去るセレニケを見て、ライダーはぼんやりとした表情で首を傾げた。

「……何で？」

セレニケは自身のサーヴァントをまともな人間と同一に考えすぎている。何しろライダーには、ホムンクルスを恨めという彼女の言葉がまるで理解できなかったのだ。〝黒〟のランサーから杭を打ち込まれ、マスターから痛罵されてもなお。

セレニケと入れ違うように、〝黒〟のアーチャー――ケイローンがライダーのもとへ訪れた。先ほど、マスターとサーヴァントたちが勢揃いする中、彼はただの一言も口を開くことがなかった。

「――せめて、私が取りなせばここまでされなかったでしょうに」

事実である。ランサーはアーチャーの戦略眼を高く評価しているし、その高潔にして清廉な人格にも信頼を寄せている。彼が口を開き、ライダーを庇えば叱責で収まった可能性は高かった。

だが、ライダーは最初に軽く目線を送ることで真っ先にその手を封じた。

「いやいや。こんな下らないコトで陣営が二つに分かれてもしょうがないだろ。今回の一件はボクが叱られ、罰を受けた。それで済むなら構わないさ」

ライダーは罰を受ける経緯そのものに関しては理解している。正しくあろうがなかろうが、結果としてセイバーが死んだことに変わりはない。ならば、王であるランサーには罰を与える者が必要だろうと考えたのだ。そして、罰を受けるべきはセイバーがいない以上、ひとまず自分以外にいない。

理不尽ではあっても、間違っていないと分かっていても、ライダーは罰を受けることを拒絶しない。ここに辿り着くまでに、そう決めていたのだ。

――そもそも。閉じ込められたり幽閉されたりするのは、これが初めてという訳ではない。とある魔女に樹木にされた経験だってある。

「しかし……」

ライダーが気に病んでいたのはただ一点、アーチャーが自分もホムンクルスの解放に一枚噛んでいたと訴えれば、ランサーはアーチャーを疎んじるかもしれない点だった。

これから戦争を行おうというのに、王と軍師が争っていては困る。無謀な騎士を一人罰する程度で済むならば、まだ戦線が完全崩壊したとまではいかない。

「いいんだよ、コレで。そもそもさ、セイバーを失っただけでボクたちは敗北した訳じゃない。そうだろ？」

ニヤリと、ライダーは不敵な笑みを浮かべた。

「――ええ、その通りです」

確かにセイバーを失った。だが、アーチャーの考える限り、こちらの優位が完全に覆された訳ではない。〝赤〟のバーサーカーは戦線に投入すれば相手方に莫大な損害を与えることは確実だ。全くの偶然だったが、捕獲するという作戦こそが、あの状況下では最善の策だった。下手に討ち滅ぼそうとしたならば、遥かに大規模な被害を蒙っていたかもしれない。

と言って、取り扱いに要注意なのは間違いないのだが。

「……それにしても。まさか、セイバーがそんなコトをするとは思いませんでした」

「ああ、それはボクも同感。うん、アイツとはもっと話しておくべきだったかも。今更になって、そんな後悔してる」

「マスターであるゴルドが会話を禁じていた以上、それは難しかったでしょうけれどね」

「あー……」

セイバーにとって最大の悲運はユグドミレニア一族の中で、よりによって彼がマスターだったことだろう。あの稀代の英雄が、あんな小心者……もとい、慎重なマスターに使役されていたとは不運も極まるものだ、とライダーは嘆息した。

「ともあれ、彼は無事でしたか？」

「うん。セイバーの心臓を呑み込んだせいかな？　背丈も顔つきも、立派な勇士となっていたとも。あれなら大丈夫、ボクの見立てなら百年は生きられる」

アーチャーはほう、と珍しく驚きを露わにした。

「セイバー……ジークフリートは竜の血を浴びることで鋼鉄の軀になり、呑んだことで体内に循環させていたと聞きます。心臓は血液を軀に送り込む臓器ですから、その過程で竜種としての血が混じったのかもしれませんね」

「いいなぁ、竜殺し。ボクも竜殺しの称号は欲しかったー」

「――いずれにせよ。彼ならば上手く世界と折り合いをつけて生きていくでしょう」

アーチャーもライダーも、その点については不安を抱かなかった。彼はこの城塞に数多いるホムンクルスの中でただ一人、「生きたい」と己の意志を敢然と指し示したのだ。

どれほどに困難な状況でも、逞しく生きていけるだろう。
「それにしても。どうしてアーチャーはあそこまで力になってくれたのさ？」
「我々は所詮、肉無き仮初（かりそめ）の亡霊。そんな我々が――一つくらい、この世界に刻めた存在（もの）があったとしても良いでしょう」
アーチャーの声はただただ穏やかだった。
「ボクは君が王になるべきだったんじゃないかと思う」
ライダーはランサーが聞けば殺しかねないほどに物騒なことを呟いた。アーチャーは首を振って苦笑する。
「矢面に立つのは苦手なんですよ、私は」
その言葉にライダーははぁ、と溜息をついて「上手くいかないもんだ」と嘆いた。

§§§

余裕がある、というのは良いことだ。歩きながら、ジークはそう思う。歩くことで疲弊し、苦痛を覚えてしまう以前の肉体では、歩きながら何かをぼんやりと考えることすら困難だったのだ。
結界が機能しているせいで、森は変わらず沈黙している。生き物の気配はない。だが、もうあの城塞からは大分離れた。結界で漠然とどこに居るかが分かったとしても、わざわざ追跡を仕掛けることはあるまい。
山の中腹に差し掛かると、軽やかな鳥たちの声が漏れ始めた。それはつまり、生物を払う結界の機能すらなくなったということ。立ち並ぶ大木のせいで未だ薄暗くはあるが、間もなく明け方らしい。となると数時間以上歩いていた計算になるのだが、未だ軀は疲れを見せない。晩秋の山登りに彼の服は薄すぎるのに、肌寒いとすら感じられない。
いくら健康になった、と言ってもこれは少し異常だ。恐らくは〝黒〟のセイバー、ジークフリートの心臓による力だろう、とジークは推測する。
……思考する事案がもっと欲しい、複雑怪奇な方程式に身を任せていたい。そうすれば、先ほどから脳にまとわりついて離れない、正体不明の靄（もや）からわずかながら逃れることができる。
相変わらず歩みは鈍重だが、それでも――前に進み続ければ、いつしか道は開かれる。山を越え、ジークは遥か眼下に街とも呼べぬ小さな村を視認する。そこはトゥリファスと違って魔術師（ユグドミレニア）の手が伸びていないはずだ。
暗示で村人たちの意識を操作するのに恐らく一日も掛かるまい。つまり、あの村でなら

平穏な日常を手に入れることができる。あるいは、そこを踏み台として違う街、違う国に行くことだって可能だ。

だからこの一歩を踏み出せば、その日々が始まるのだ。生きるということ、何かを手にすること、あるいは希望を見つけることも。

そんな日々をこう呼ぶ——『自由』と。

素晴らしい。良いことだらけだ。どうしたって、先の自分より悪い状況は存在せず、それを好転させるならば、この一歩を踏み出せばいい。

この一歩のために、一人の英雄が命を授けてくれた。一人の英雄が自分を癒してくれた。そして、一人の英雄が共に歩んでくれた。

全ては、この一歩を踏み出すためだ。

だけど。何故。どうして。己の足はこの一歩を拒絶しているのだろう？

嘆息。脳にかかった靄を振り払うことはできそうにもない。人として生きるということは、これと生涯付き合っていくということなのだろうか。

それでもどうにかして、足を振り上げ——。

〝止まって！〟

自分を制止する声と、続きざまの音に慌てて振り返った。今の音は、確実に自然のそれではない。重い何かが倒れた音だ。

追手だろうか？　だが魔術を行使される気配はなく、サーヴァントのように巨大な魔力も感知できない。わずかに迷ったものの、少し様子を見るくらいはいいだろうとジークは踵を返した。

山道から少し離れた森に足を踏み入れる。音のした方向は、確かにこのあたりだったと周囲を見回し——見つけた。

その一瞬で、魂を奪われた。

「————」

驚嘆の息を吐き出すことさえもできず。大木に軀を預けて、苦しげに蹲る少女を見た。

木々の隙間から漏れる黎明の微かな光に照らされ、わずかに揺れる髪は金色の絹糸のよう。こちらを見つめる紫水晶のような瞳はどこまでも清らかで、ジークに必要もない罪悪感を抱かせた。

ホムンクルスのような精密な造形美ではなく、ライダーのような傍にいるだけで心躍る可憐さでもない。ひどく現実味が乏しい幻想的な美しさだった。

少女は甲冑を身に纏っている——間違いなく、サーヴァント。〝黒〟か〝赤〟のどちら

かにせよ自分は関わり合いになってはならない少女のはずだ。
敵か味方かを問えば、間違いなく敵であろう。なのに、ここを離れることがひどく惜しくてたまらない。
芸術品に目を奪われた状態、とでも言おうか。ジークは我知らず、少女の傍らへと歩み寄っていた。屈み込んで少女の頬に手を触れようとした瞬間、腰に吊した剣が警告するように音を鳴らした。
互いに沈黙。視線が絡み、ジークは混乱する。よく考えてみれば、自分は何をやろうとしていたのか。
蹲る少女に手を伸ばして触れるなど、何とも下卑た行為だ。慌てて手を戻そうとすると、少女がさっとジークの手を握り締めた。
「良かった……会えました！」
微笑んだ少女が告げた瞬間、ジークは思った。仮令、彼女が敵だったとしても——あるいは、この場で首を打たれたとしても。この笑顔を見ることができたのだから、後悔はないと。

§§§

此度の聖杯大戦においてルーラーとして召喚された聖処女ジャンヌ・ダルク。彼女は第二戦にあたる〝赤〟のバーサーカーと〝黒〟のランサー、ライダーとの戦闘と、〝赤〟のライダーとアーチャー、〝黒〟のセイバー、バーサーカー、アーチャーとの戦いの舞台となった森林を念入りに検分して、ほっと胸を撫で下ろした。
破壊されたのは戦闘の際に薙ぎ倒された樹木程度だ。それにしたって、森の広範囲という訳ではない。〝赤〟のランサー——太陽を纏う大英雄カルナが加わっていれば、森が焦土と化していたかもしれないが。
ミレニア城塞に籠もっている〝黒〟はともかくとして、攻め込むべき〝赤〟のマスターの姿は見受けられなかった。だが、この戦争が序盤であることを考えると決して不思議ではない。聖杯戦争のマスターは大概が魔術師であり、戦いそのものに慣れている訳ではないのだから。
「……ともかく、普通の戦いでしたね」
そう。サーヴァントの数こそ多かったが、その戦いは常道だった。長距離から狙うアーチャー、突貫するバーサーカー、魔術によってゴーレムを統べるキャスター、杭を召喚して串刺しにするランサー——ライダーやセイバーも、決して英霊の枠から抜け出すような

非常識的な存在ではない。それは、〝黒〟も〝赤〟も同じことだ。

……もちろん、サーヴァントである以上その力は凄まじい。中でも、〝赤〟のライダーは図抜けていた。ルーラーの見立てでは、あの〝赤〟のランサーに匹敵する力量を誇っている。

無理もない。何しろ彼は名にし負う大英雄。彼が存在するだけで、戦況は一変する。ライダーとランサーがいるという時点で、サーヴァントの『質』という点では〝赤〟の側が優位に立っている。

無論、それはただ単純に力を比較しただけのことだ。サーヴァントの相性、宝具の能力、戦術、場所、考慮すべきものはいくらでもある。未だ姿を見せぬ〝黒〟のアサシン、〝赤〟のセイバー、キャスター、アサシンが如何なるサーヴァントかで、また状況は変化するだろうが……。

ともあれ現状は通常の聖杯戦争の域に落ち着いている。サーヴァント十四騎による全面戦争状態に陥ったとしても、トゥリファスという都市は人口二万で外部とも孤立している。ルーラーとしての特権を使用すれば、被害を最小限に抑え込むことも可能だろう。

怪しい部分は全くない。全くないのだが――。

やはり、どうしても正体の摑めぬ疑念が胸を渦巻いている。こうやって夜も粘って戦闘の跡を調査してみたが、結果的には得られた手がかりはなかった。やはり、〝赤〟のサーヴァントが自分を狙ってきたことだけが、唯一の手がかりだ。〝赤〟のランサーが高潔な人物であることは、ルーラーもよく分かる。だからこそ、マスターの命令であるならばとルーラーの命を狙いもしたのだろう。

……やはり、どうにかして〝赤〟のマスターとコンタクトを取らねばならないようだ。

ともかくこれで今夜の戦いは終了。……そう思った途端、少し力が抜けた。……どうやら、自分は〝眠い〟らしい。より正確に記するとルーラーであるジャンヌが眠たい訳ではない。眠りを要求しているのは、あくまでレティシアの肉体だ。とはいえ、そもそも眠るという行為がサーヴァントには欠落している。そのギャップによるものか、どこか新鮮な衝動だった。

「う、駄目……まだ……」

この眠気ばかりは、彼女の意志でどうにかなるものではない。街に戻り、教会に戻り、屋根裏部屋のベッドまで戻らなくてはならない。だが、軀はあまりに急速な眠りを欲している。

大木の幹に手を伸ばして軀を支え、それでも足りなくて仕方なく頬を抓った。痛みでどうにか意識は鮮明になった。……実に不便な肉体だ。中途半端な召喚のせいで、長時間耐えられることは耐えられるのだが、限界を超えると、恐らくスイッチを切ったかのように意識を喪失するだろう。

この問題にどう対処するかは後々考えることにして、ひとまず聖水を使って、再びサーヴァントの居場所を探知する。これで問題がなければ、終了ということにしておこう。

〝黒〟の五騎と、〝赤〟の一騎が城塞に位置している。〝赤〟の一騎は、バーサーカーのはずだ。大捕物だったが、無事にマスター替えに成功したようだ。これはルール違反ではない、マスター替えやサーヴァント替えはあって当然の出来事だ——いや、待て。

「一騎足りない……？」

城塞に駐留していたのは六騎のはずだ。残りの一騎はどうしたのだろう。捜索範囲を広げるだけ広げてみたが、見当たらない。

……嫌な予感がする。死んだ——訳ではない。十四騎の内、誰が脱落したとしてもルーラーは必ずそれを感覚的に察知できる。現在、脱落したサーヴァントは存在しない。

だが、何かがおかしい。サーヴァント、ルーラーとしての感覚ではなく、ジャンヌ・ダルクとしての直感が自分が知らぬ間に何かが起きたと囁いている。

捜し出さなくてはならない。残りの一騎を一刻でも早く。だが、どうやって捜す？　当てもなく捜して見つかるものか？

見つからない、とルーラーは確信を抱いた。神は自ら助くる者を助く、闇雲に捜すという選択は、ただの思考停止である。

ならば——と、彼女は五騎が留まっている城塞を見た。彼らに疑問を投げかける方がまだ建設的だろう。

少なくとも〝黒〟の側は搦め手を使おうとした、〝赤〟の側と違って問答無用で殺しに来ることはないだろう。

やや希望的観測ではあるが、動かなければ始まらない。ルーラーは真正面から堂々と、城塞に赴くことにした。

トゥリファスを睥睨する小高い丘に、その城塞は屹立していた。夜闇に薄ぼんやりと浮かび上がるシルエットは、亡者が蠢く地獄の巨大釜を連想させる。人口二万の小さな街にはあまりに不釣り合いな雄壮さであるが、街の住人はそれを観光の名所にしようとすら考えない。この城は公共の建築物ではなく、あくまで私有地に建つ個人の物件であるということもあるのだが……何よりも街の住人は誰も彼もがこの城を恐れているからだ。

呪われている、どころではない。トゥリファスを支配しているのは、この城である。住人の認識はおおむねそのようなもので、実際にそれは正しい。

ルーラーは城門の前に立つと、首が軋みそうになるほど上を見た。芸術性の欠片もない、実質一点張りの造りで、攻めるに難く守るに易い。だが、この城塞の真の特性はそこにはない。

彼女はそっと城壁に触れた。瞬間、わずかな痺れが走る。強烈な妨害と探知を兼ねた魔術だろう。敷き詰められた無数の魔術防御のせいで、サーヴァントでも陥落すには、相当の破壊力が必要になるだろう。

ルーラーが城門の前に立つと、名乗りを上げるまでもなく自動的に開き始めた。地を震わせながら開いた扉の先には、ステッキを手にした一人の〝老人〟が立っている。

「貴方はユグドミレニアの魔術師ですね？　私は――」

「此度の聖杯大戦裁定者、ジャンヌ・ダルク様ですね。いと名高き聖女を出迎えられるとは、光栄の至りです。我が名はダーニック・プレストーン・ユグドミレニア。このミレニア城塞に逗留する魔術師たちの長を務めています」

先回りするように、ダーニックは大仰に一礼した。彼女の真名を告げたのは、親しみを籠めてというよりは警告だろうか。もっとも、彼女は真名を知られたところでどうということもない。というより、真名を明らかにしなければ各マスターやサーヴァントたちが信頼を置くことは難しいだろう。だから、教会でも敢えてジャンヌと名乗っている。

「……念のために伝えておきますが、私はこの聖杯大戦において〝黒〟と〝赤〟どちらに荷担することもありません。此処に参ったのも二、三尋ねたいことがあっただけです」

冷淡にも聞こえるジャンヌの言葉にも、ダーニックは笑みを崩さず応じる。

「無論、承知しておりますとも。ですが、まずはともかく我が領王にお会い下さい。貴女が来た、との報せを受け取ってから上機嫌でして」

「領王……？」

ダーニックは頷き、ルーラーに警戒心を抱かせるに足る笑みを浮かべて告げた。

「ワラキアの王、ヴラド三世が私のサーヴァント、〝黒〟のランサーです」

ダーニックに先導されて石畳の廊下を歩くと、行き交う使用人たちが次々と頭を下げていく。あまりに統一された顔立ちと所作、体内の魔術回路からルーラーは彼らがホムンクルスであることに気付いた。

「人間を巻き込むのは、最低限の方がいいと思いまして」

こつこつと歩きながら、ダーニックはそう呟いた。それは無関係の人間を巻き込むことを極力避けるべき、という聖杯戦争の基本に則っている。だが――。

「ホムンクルスとて、無関係な生命であることに変わりはありませんよ」

ルーラーは素っ気なくそう返答した。

聖杯戦争は本来、世界最小にして最大の戦争だ。七人のマスターと七騎のサーヴァント、それで事足りる状況であるべきだ。……もっとも、今回はあまりに事情が異なるが。

「ほう。聖女ともなると、人造の生命にも心を砕くのですか。我々は貴女のルールに反しておりますか？」

皮肉げな笑みを投げかけられ、ルーラーはやや表情を硬くして告げた。

「――そこまでは言いませんが」

……だが、現状の戦闘規模を考えれば仕方ないこととも言える。ルール違反で処断する、という余地がないことも確かだ。強制はしていない、彼らは子供であるとも言い難い。ただ、そういう風に鋳造されたというだけだ。

「我々は相手側である魔術協会と違って、一族の存亡が懸かっているのです。どうぞ、その点についてはご考慮頂きたい」

王の間へと続く扉が開く。

「む」

ルーラーは微かに呟きを漏らしたものの、躊躇うことなく王の間へと踏み込む。玉座には〝黒〟のランサー――ヴラド三世。そして、彼に付き従う形となっている〝黒〟の側のサーヴァントであるアーチャー、バーサーカー、キャスターの三人が傍らに控えていた。

さらには彼らだけではなく、ゴーレムと戦斧（ハルバード）を手にしたホムンクルスたちまでもが勢揃いしている。

……脅威という意味では極小だが、それでも集団の敵意というものには、それなりの威圧感がある。とはいえ、周囲に居る者全てが敵、などという状況はルーラーも生前に経験している。

特に気負うこともなく、ルーラーは平然と王の下まで進み出た。臣下ではないため、頭（こうべ）を垂れたりはしないが、王は眉一つ動かさない。

「此度の聖杯大戦において、裁定者として召喚されたルーラー、ジャンヌ・ダルクと申します」

「――ふむ。同じ神を信じる者が、裁定者とは心強い」

「……神を信じるが故に、公平さを旨とすることが伝わることを祈ります」

ルーラーの決然とした眼差しに、〝黒〟（ヴラド三世）のランサーは口元を緩ませる。他愛もない、田舎娘の戯言とでも考えたのだろうか。

「さて、夜明けも近い。まずは何用かな、裁定者よ」

「深夜、〝赤〟のサーヴァントたちとの戦闘がありましたね？　相手はライダー、アーチャー、そしてバーサーカーのはず」

「ああ、それがどうかしたかね？」

「結果、ライダーとアーチャーは撤退、バーサーカーは捕縛という形に収まったようですが――その後、一体何が起きたのですか？」

「……」

〝黒〟のアーチャー（ケイローン）が、ルーラーの問い掛けにほんの少し反応した。いや、彼だけではない。戦斧を握るホムンクルスたちにも、わずかな動揺が見られた。

だが誰より劇的な反応を見せたのは、〝黒〟のランサーだ。

「……不愉快な」

ただそう伝えただけで、王の間に殺意が充満した。子供の癇癪に等しい理不尽だが、その力たるや、一つの広域制圧兵器に等しい。意志ある兵器が叩きつける殺意を、ルーラーは涼しい顔で受け止める。

村娘の身でありながらシノン城で王太子であるシャルルに謁見を求めたときや、虜囚の身となって異端審問された際の悪意ほどには酷くない。一挙手一投足にわずかでも不明な点があれば、誅殺されて終わっていたあの時よりは。

「お答え戴けないというのであれば仕方ありません。話は終わりです、こちらで調査することにします」

背を向けようとした途端、たちまちランサーの殺意が和らいだ。

「――失礼。些かからかいが過ぎたようだ」

今の殺意を、からかいと言い切る〝黒〟のランサーに、さすがのルーラーも呆れ返る。いや、あるいは本心だったのかもしれない。王にとって、喜怒哀楽はこれ全て政の一つ。悲しくもないのに臣下のために泣き、嬉しくもないのに貢ぎ物を受け取るようなもの。怒りもまた、彼にとっては単なるパフォーマンスでしかないのかもしれない。

「セイバーが自決した」

「なっ……」

淡々と告げられた言葉に、さすがのルーラーも絶句した。悲しげに〝黒〟のランサーは首を振って嘆く。

そんなはずは、と言い掛けた口を咄嗟に噤む。……どうやら、〝黒〟のセイバーが命を絶ったというのは本当らしい。だが、矛盾が一つ出てくる。〝黒〟のセイバーは、瀕死ではあるがまだ生きている。

……まさか、サーヴァントの生死をマスターが感じ取れぬはずはない。もし、感じ取れないというのならば、それは恐らく因果線が切れている。

だが、ルーラーには『霊器盤』を上回る知覚力がある。確かにか細くはあるが、〝黒〟のセイバーはまだ、この世界と完全に断線されてはいないと彼女は断言できる。何処にいるかまでは、不明だが――ともかく、生きているはずだ。

「状況を具体的に説明できる者はどなたかいらっしゃいますか？」

「報告をしたのは、〝黒〟のライダーだ。……あやつが唆したらしく、罰として地下牢に幽閉させているが」

「……そうですか」

「――さて。ルーラー、単刀直入に言おう。我々にとっては、まさに要とも言える剣兵を無意味に失ったのだ。ならば、セイバーに負けず劣らずの戦力を補充したい。そう思うのは自然ではないかね？」

何やら話がきな臭くなってきた、とルーラーは顔をしかめた。
「先にも言いましたように、私はルーラー。聖杯に召喚された、この戦争の絶対裁定者です。……私には私の目的があり、それは貴方たちと共にあることではない」
「望みは無いのかね？　聖杯に召喚された以上、お前の希望があるはずだ」
「――ルーラーはこれもまた例外。裁定者として召喚されるためには、現世に何の望みも持たないことが資格の一つとなります」
その言葉に、サーヴァントたちがわずかに動揺した。
「……ルーラー、お前には望みがないのか？」
「ええ、ありません」
どん、とランサーが肘掛けを苛立たしげに拳で打った。立ち上がり、かつての狂気も露わに怒気を籠めて叫ぶ。
「ジャンヌ・ダルク。お前の最期は知っている！　何もかもに裏切られ、奪われ、非業の最期を遂げたお前に望みがないはずなかろう！　答えよ、虚偽は許さん！」
先ほどの殺意が広域制圧兵器ならば、今度の言葉には杭のような鋭さがあった。虚偽、あるいはランサーが認めぬ回答を告げた瞬間、串刺しにされるという予感がある。
ルーラーはしばしランサーを見つめ、彼が気圧されるほどに静かな声で告げた。
「ないのです。誰もが皆、私の最期を無念だという。復讐を望んでいるだろうと、あるいは救われることを望んでいるだろうと言われます。ですが――私が走り抜けた生涯は、私だけが知る充足がある。誰もに共感を得られるものではないですが、少なくとも私は己の生に一片の後悔もなく、聖杯に懸ける望みもありません。あるとすれば、この聖杯戦争が正しく調律されることのみです」
「神にすら見捨てられたお前に？」
「――それこそ愚かです。主は我々を見捨ててなどいませんよ。いや、そもそも主は誰一人として見捨てていらっしゃらない。ただ、何もできないだけです」
「何……？」
「祈ることも、供物を捧げることも、全ては己の為ではなく主の為の行いでしょう。主の嘆きを、主の悲しみを癒やすために我々は祈るのです。そう、私は確かに――」

〝主の嘆きを、聞いたのです〟

悲鳴があった。嘆きがあった。嗚咽があり、悲しみがあった。
世界は地獄に向けて一直線に転がり、誰にもそれを止められない。いや、それともあれは――地獄そのものだったのか。
悲しい、と主は嘆いていた。人々は素朴に生きることすらも許されず、獣になるか餌に

なるかの選択を迫られた。

争いに終わりはなく、血は絶え間なく降り注いで大地を濡らし続ける。

だから主は嘆き――その声を、私（ジャンヌ）は聞き届けた。誰もが聞き逃してしまう、か細い小さな囁きを受け止めてしまったのだ。

分かりきったことだった。その声に耳を傾け、呼応するということはつまり、己の今までの全てを捨ててしまうということ。

素朴な村人としての生き方も、誰かに愛し愛されるという喜びも捨てなければならない。その上、見返りはない。私はきっと、敵にも味方にも――多くの人間に嘲笑われることになるだろう。

それは、とても恐ろしいことだった。田舎の村娘がただ一人で、人の殺意が渦巻く戦場へ飛び込むなど正気の沙汰ではない。

――でも、主は泣いていたのだ。

ああ、きっと私は……それに耐えられない。背を向けることなどできはしない。

主の涙を止めるために、慰撫するために。この世の地獄に立ち向かおう。鎧を身につけ、剣を腰に吊し、旗を持って――我が命を捧げよう。

そう、私が主から受けた啓示は栄光と勝利ではなく、義務でも使命感でもない。主はただ嘆き、ただ悲しんでいただけだ。

――だから。せめてその啓示を受けた自分は、主の嘆きを止めようと思ったのだ。

〝黒〟のランサー（ヴラド三世）はしばしの間ルーラーを睨み据えていたが、やがて頭（かぶり）を振って、座った。

「――同じ神を信じながらも、相容れぬようだな」

「同じ神を信じながらも、私を火刑に処した者がいますので。当然でしょう」

澄まし顔でルーラーは告げた。その余りに諧謔的な言葉に〝黒〟のランサーは愉快そうに笑った。

「……仕方あるまい。だが、〝赤〟のサーヴァントがお前の命を狙ったことは事実。我々はお前を取り込みたいだけだが、向こうはどうやら違うようだな」

「そうですね。私としても、〝赤〟の側が何を考えているのかは調べなければならない。彼らと敵対する気はありませんが――」

「襲ってくれば話は別だな」

「……そうなりますね」

「〝赤〟の側が、お前の命を狙う愚か者たちであることを祈るとしよう」

〝黒〟のランサーはそう言って、もう一度笑った。

ルーラーは王の間を退出すると、真っ直ぐ地下牢へと進んでいった。ここには、戦いで

捕らえられた〝赤〟のバーサーカー（スパルタクス）と、もう一騎〝黒〟のサーヴァントがいる。ランサーの話によれば、それは〝黒〟のライダーらしい。

地下牢は久しく使われていなかったであろう雰囲気を漂わせていた。八つほどある牢のほとんどは朽ちた木と藁、そして蜘蛛の巣くらいしか見当たらない。

牢の一つでは〝赤〟のバーサーカーが蠟のようなドロドロとした流体に軀を完全に封じられていた。マスター替えが終わったとはいえ、〝黒〟の側も彼を野放しにする訳にはいかないのだろう。……この状況でも、笑顔が変わらないのは何とも不気味だが。

さて、問題は残る一つの牢に封印されているサーヴァントだ。

「――あれ？　君はどちらさん？」

きょとんとした表情で、少年が首を傾げた。何気ない仕草だが、今の彼は先のバーサーカー以上に厳重に封じられている。杭に手足を貫かれている様は、何とも痛々しい。

「貴女が〝黒〟のライダーですね。私はサーヴァント、ルーラーのジャンヌ・ダルクと申します。此度の聖杯大戦の管理を行うために、聖杯より召喚されました」

ルーラーがそう告げると、ライダーは「ああ」と納得したように頷いた。

「そう言えばそんなの召喚されたって言ってたっけ。でも本当？　〝赤〟のサーヴァントじゃないの？」

疑わしげな視線と面白くなってきた、という微笑みにルーラーはしばし考え込み、籠手を外してから袖を捲り上げて〝それ〟を見せた。

「わ……」

「これで証明になりますか？」

「……なった。うん、君は確かにルーラーだ。なるほどね、それがルーラーの〝特権〟ってやつか。いいなぁ、欲しい！」

ライダーは納得したように幾度も頷いた。

「分かって下さって幸いです。さて、ライダー。申し訳ありませんが、質問したいことがあります」

「ほいほい。答えられることなら何でもどうぞどうぞ」

あくまで軽いノリで、ライダーは答える。

「……〝黒〟（ジャンヌ）のセイバー（クフリート）が、脱落したと聞きました」

「ああ、そだよ」

……だが、そんなはずはないのだ。セイバーであれ誰であれ、サーヴァントは十四騎全て揃っている。感覚として〝生きている〟と分かるのだ。ルーラーは知っている。彼は未だ、この地上に留まっていると。

「申し訳ありません、もう少し詳しくお話を聞かせて戴けませんか？」

「ああ。ちょうど暇で暇で仕方なかったんだ」

ライダーは笑いながら、セイバーについて語り始めた。それは英雄譚とは程遠く、まるで聖人のようなエピソードだった。そして、その英雄に救われた名も無き少年（ホムンクルス）。彼は自由を求めて、旅立ったという。

「まあ、そんなこんなでボクもこんな場所で独り寂しく牢に繋がれている訳さ。いや、隣に〝赤〟のバーサーカーが居るけど、アイツ話通じないしなァ……。元気ー？」

〝黒〟（アストルフォ）のライダーが呼び掛けると、隣の牢から応じる声がした。

「権力の走狗に阿る気は毛頭（おもね）ない。とはいえ、質問には答えよう。元気だとも。あとは、この拘束を外してくれれば完璧なのだが――」

「それはまた今度ね」

衝撃的な展開であったが、同時にルーラーはようやく納得した。

「……セイバーは確かに消えた。ですが、そのホムンクルスに『心臓』を分け与えたという訳ですか」

魔力で編み上げられただの剣や鎧、あるいは髪の毛のようなものではない。人間にとって脳と並んで重要な臓器である心臓。サーヴァントにとっても、心臓と脳には霊核が存在する。これを手ずから抉り、他者に与えるなど過去に前例のない振る舞いだ。

まして、その心臓を与えたのは〝黒〟のセイバー……即ち竜の血を浴びて竜種に近い肉体を持つようになった不死の英雄ジークフリート。ホムンクルスの軀に何らかの影響があったとしてもおかしくはない。

「うん。ボクはそこで彼と別れた。そのまま、彼は山道へと向かったよ。前にヒポグリフの試し乗りをしたとき、あそこに村が見えたから今居るとすればそこかな？」

「なるほど。よく分かりました、ありがとう」

ルーラーが礼を言うと、〝黒〟のライダーは何とも複雑な表情を浮かべて尋ねた。

「……彼に会いに行くのかい？」

「ええ。貴女の言葉が正しいのであれば、サーヴァントの気配を漂わせているのは彼以外に存在しない」

「それなんだけどさ、彼をこの戦いに巻き込むのだけは勘弁して欲しいかな」

楽天的な笑顔を浮かべていたライダーは、不意にわずかな敵意と強い決意を秘めた眼差しでルーラーを睨み据えた。そこには、あまりにも強い決意が垣間見える。

「……気持ちは分かります。貴女の言葉が正しければ、彼はまさしく被害者でしかない。彼が望まぬ限り、過度な干渉は持たないつもりです」

ライダーが女堵の息をつくと、敵意がたちまち雲散霧消した。

「それを聞いて安心した。うん、アイツが生きてくれるなら、こうなった甲斐がある」

そう呟くライダーに、ルーラーは一つだけ不明な点を尋ねた。

「ライダー。どうして、セイバーはそのホムンクルスを助けたのでしょうか？　貴女がセ

イバーの立場だったならば、話は分かるのです。シャルルマーニュ十二勇士が一人、アストルフォならば――」

騎士道に殉じ、尚且つ底抜けのお人好しであるアストルフォならば、まだしも納得がいく行為。だが、〝黒〟のセイバーはジークフリート。王族の一人であり、ネーデルラントの王子。なるほど嘆く弱者を庇い、驕れる強者を討つというのは英霊として相応しい行為だ。しかし、それにしても限度がある。聖杯戦争に召喚されたサーヴァントである以上、彼には聖杯に懸ける望みがあったはずだ。少なくとも、マスターですらないただ一人を救うために己の命を投げ出すという行為までには至らない。

サーヴァントにとって、聖杯戦争に参加するということは第二の生であり、万分の一に等しい奇跡だ。それを、こうも容易く――見知らぬホムンクルスのために投げ出すなど、尋常ではない。

「サーヴァントだからって、生前と同じことを繰り返す訳じゃないさ。むしろ、生前の悔いを払拭するために、違ったことをしようとする奴も多いんじゃない。……まあ、きっと、大抵そういうのは失敗に終わるんだろうけどね」

英雄は生前に為したことで英雄と為ったのだ。生前に為せなかったことを、誰も求めてはいない。

「……色々とありがとう。この戦争において貴女が勝利者であるよう、祈ります」

「え？　贔屓してくれんの？」

その言葉にルーラーはクスクス笑って首を振った。

「しません。私は、全参加者が勝利者であるよう祈るのみですから」

「おいおい、無茶言うなよルーラー。勝利者はただ一組、ってのが聖杯戦争の原則だろ？」

「そうですね。――それでも、私は勝利者であるよう祈るのです」

ルーラーは静かに、地下牢から抜け出ていった。取り残された〝黒〟のライダーは、不意にセイバーの最期を思い出した。

ホムンクルスを救うために躊躇うことなく己が身を投げ出し、満足そうに微笑んでいたあの男は、〝勝利者〟だったのだろうか？

そうであるといい――いや、そうでなくてはならない。ライダーはそう心から想った。

帰りはダーニックの先導ではなく、ホムンクルスの使用人が先導した。無言のまま、静々と正確な歩幅で進むホムンクルスは、やはりどこか人形じみていた。

「一つ尋ねたいことがあるのですが、よろしいですか？」

ルーラーの問い掛けに、ホムンクルスは足を止めることも頷くこともなく応じた。

「構いません、どうぞ」

「貴方がたホムンクルスは、聖杯大戦に望んで参戦しているのですか？」
「無論です。それが、我々を鋳造した主の望みですから」
淡々としていて、そして澱みなき回答だった。そうですか、とルーラーは応じた。……少なくとも、聖杯戦争におけるルールの逸脱はない。彼らもゴーレムも、主に従うという意志がある。仮令、作られたものだとしても——そこには、意志がある。
ならば、それを尊重しなくてはならない。
「ここまでで構いません、ありがとうございます」
城門に辿り着くと、ルーラーは丁重に礼を述べた。透き通った瞳で彼女を見据えるホムンクルスは、深々と頭を下げる。そしてルーラーが背を向けて立ち去ろうとした瞬間、わずかに躊躇うような咳払いと共に、ホムンクルスが声を掛けてきた。
「彼は、何か咎を受けますか？」
振り返ったルーラーは、思いも寄らない質問に首を傾げた。
「彼とは？」
「彼とは、〝彼〟です。我が主のサーヴァント、セイバーを死に至らしめたホムンクルス」
瞳に動揺はなく、感情もない……と思ったが、ルーラーが注意深く観察すると、その瞳にはどこか、その〝彼〟を案じるような色が垣間見えた。
「いいえ。話を聞く限り、〝生きたい〟と願う彼にセイバーが応じただけに過ぎません。生きたいと願うことが、罪であるはずない」
ルーラーとしてではなく、一人の人間として彼女はそう断じる。どれほどの悪性であれ、生きようと願うことそのものは悪ではない。生きて、悪を為すことの罪とはまた別だが。
「……ありがとうございます」
ほんの少し、彼女の表情が緩んだ。ああ、やはり彼らは〝生きている〟——ルーラーは嘆息する。彼らの運命はほぼ定められている。急造された生命であることの代償は、著しい短命だ。
だが、ルーラーである彼女にはルーラーだからこそ、どうすることもできない。救いを求めない者の腕を引っ張る権利は、彼女に与えられていないのだ。
気を取り直して、ルーラーは先ほどライダーから伝えられた山の方向へと向かって歩き出した。
〝黒〟のライダーにはああ言ったものの、先ほどから嫌な予感が粘ついて離れない。聖杯戦争において、サーヴァントが自滅するというのは決して稀なことではない。状況は様々だがバーサーカーのクラスならば、魔力切れによって自滅するケースは多い。強力な宝具を使って、マスター諸共滅ぶサーヴァントもいた。
少ない例ではあるが、マスターのために自害を選んだサーヴァントもいたし、無辜の民を守るために、宝具を展開したお人好しのサーヴァントもいた。

だがこれは、何かが違う。自ら心臓を抉り出したから、生前にそういう逸話がなかったから——そういう要素が理由ではなく、根本的に何かが違う。だってそうだろう、それならばサーヴァントは十三騎になっていて当然なのだ。

それが何故、十四騎のままなのか。何故、未だ〝黒〟（ジークフリート）のセイバーが『生きている』と自分は考えるのか。やはり、この聖杯大戦は何かがおかしかった。何かが狂っていた。その一端を担っているのがあのホムンクルスではないだろうか？

いや、それは推測に過ぎない。分からない。分からないから、ともかく追いついて話を聞くしかない。

「この山に向かった、と聞きましたが……」

結界が敷き詰められた夜の森は耳が痛くなるほどの静寂だった。ホムンクルスはサーヴァントとしての気配を発している訳ではない。つまり、この森を抜けようとして歩き続けている『誰か』を捜さねばならなかった。

しかし……それは意外に難しいことではないか、と思い始めた。というのも、ホムンクルスはユグドミレニアから逃げているのだ。魔術師やサーヴァントの気配には人一倍敏感だろう。

声で呼び掛けても、出てくるはずはない。怯えて逃げてしまう可能性が高い。

止めようか、という考えがちらりと脳裏に浮かぶ。元々、そのホムンクルスはこの戦争に関わりたくないが故に逃げ出したのだ。彼にとっては、自分など戦いに連れ戻そうとする悪夢にしか思えないだろう。

けれど——。

魔力を絞り、結界をかろうじて無効化できる程度に抑え込んだ。これならば、サーヴァントとして知覚されることなく、視認できる距離まで近付くことはできるだろう。

だが、この状態だと身体機能も並の人間とそう変わりはない。月が出ているとはいえ、その朧（おぼろ）な光を頼りに山道を歩くのは、途方もなく体力を消耗する行為だ。

荒くなる呼吸を整えながら、少女は追いつくことを願ってひたすら山道を登っていく。

目眩がする——だが、気に掛けている余裕はない。

一歩前へと進むだけで、ひどく体力を消耗している——もう少しの辛抱だ、と思うことにする。

何故こんな苦労をしなくてはならないのか——それは、会ってみたいからだ。〝黒〟のライダーが助け、〝黒〟のセイバーが躊躇いなく命を投げ出したホムンクルスに。

それだけだろうか？　……それだけ、それだけでいいはずだ。では、この切羽詰まるような使命感は一体何なのか。

いや、それは考えない方がいい。会おうとするのは、ひとまず己の意志だということにしておこう。

……なのに、精神とは裏腹に軀が徐々にそのコントロールを失っていく。人間の肉体故だろう。活動限界はとうに突破しており、今はルーラーの気力のみで歩いている状態だ。切羽詰まった状況に、内心の焦燥を押し殺す。夜の山を歩いているのに、油断していい訳がない。

休みたくなる誘惑を堪えて、ただひたすらに登っていく。魔力による補助を切っているせいか、甲冑の重さがやや辛い。

永遠とも思える道のりを歩きに歩き続け——森を抜けた向こう側、山の頂上付近に至った場所で、茫と佇む人影をついに捉えた。

「あ——」

ほっと安堵する……が、どうやらそれが致命的だったらしい。視界がたちまちの内に暗くなって、世界が揺れる。

駄目だ、まだ——まだ、耐えなくては。

「止まって！」

反射的に、彼へ向けて声を出す。しくじった、という思いが脳裏を掠める。怯えさせないために、これだけ苦労したのに、最後の最後で声を掛けてしまった。

完全に体力が尽きた。何か対策を施すより先に、意識が途切れかかる。傍らの大木に背を預けて蹲る。

動けない。だからといって死ぬ訳ではないが、現時点での行動は最早不可能だ。眠りに身を委ねなくてはならない。だが——今しがたの声に、恐らくホムンクルスは追跡を受けたのだと判断するだろう。ここで追わなければ、二度と会う機会は訪れない。

それはもしかすると、致命的な失敗かもしれない。そう悔やむルーラーの耳に、微かに草を踏みしめる足音が届いた。

まさか、と思いつつ顔を上げる。意識がわずかばかり明瞭になる。細い、優美な顔立ちをした少年が、恐る恐るという様子で彼女に手を伸ばしていた。

咄嗟にその腕を摑み、安堵の吐息をついて囁く。

〝良かった……会えました！〟

——かくして。二人は出会った。

サーヴァントでありながらマスターを持たず、ただただこの聖杯大戦の運営に殉ずる少女。人間でもサーヴァントでもなく、もしかするとホムンクルスですらない少年。どちらも、聖杯戦争という儀式における異分子だった。

「あ、その、ええと。私は、敵ではありません」

申し訳なさそうな少女の呟きに、少年は邪気の無い頷きで応じた。

「……何となくだが、分かる」
少女はよろめきながらも立ち上がり、居住まいを正して己の名を告げた。
「私は此度の聖杯大戦において裁定者のクラス――ルーラーとして召喚されたジャンヌ・ダルクと申します。ミレニア城塞のホムンクルスであった貴方にお聞きしたいことがあるのですが、構わないでしょうか？」
「ああ、問題ない」
「私はルーラーというクラスの特性として、此度の聖杯大戦に参加している全サーヴァントが脱落したかしていないかが知覚できます。現在、私は全サーヴァントが揃っていると認識しています。ところが――」
「……いや、違う。つい先ほど〝黒〟のセイバーが脱落した」
「ライダーもそう言っていました。セイバーは脱落したと。ですが、そんなはずはない。私の感覚からすれば、サーヴァントは十四騎で変わっていないのです。そして、貴方からはサーヴァントの気配がします。ですが、こうして相対すると分かった。貴方はやはりサーヴァントではありません」
ルーラーは籠手を外すと、そっと彼の胸に手を当てた。困惑する彼を他所に、その心音を確かめる。
「――力強い音がします。普通の心臓と変わりなく機能しているようですね。良かった。やはり彼はただ、無意味な死を選んだのではなかった」
彼女はほぅ、と安堵の息を零した。それから、状況に気付いたようで慌ててその手を引っ込めると、申し訳なさそうに謝罪した。
「申し訳ありません、つい――」
「いや、別に構わない。……俺は、問題ないのか？」
少し不安そうに尋ねる少年に、ルーラーは首を振って「大丈夫です」と請け合った。正直、信じ難いくらいにきちんとした『心臓』として機能している。魔術回路があり、魔術を行使可能であるという点を除けばただの人間と変わりはない。
「〝黒〟のライダーの言う通り。貴方は自由です」
そう言うと、ホムンクルスは我知らず表情を曇らせた。それを見て、訝しげにルーラーが問い掛ける。
「どうしました？」
「いや。『自由』という単語が持つ意味は無論理解しているつもりだ。だが……何をやればいいのか、分からないんだ」
ジークは素直に己の悩みを吐き出した。ルーラーは不思議そうに首を傾げる。彼女は、あの城塞で〝黒〟のライダーが嬉しそうに少年の未来を語っていたのを知っているからだ。

〝きっと彼は村に行って、それからそこを足がかりにして街に行くんじゃないかな。色んな人間に触れて、癒やされたり傷ついたりしながら前に進んで、それから誰かを愛したりするんだよ。ああ、何て素晴らしい！〟

ルーラーがそう言うと、彼は首を横に振ってその未来を否定した。

「ああ、確かに『自由』ならば――そういうことも可能なのだろう。だが、何故だかそうする意欲が、俺には全く湧いてこない」

ライダーに申し訳ない、と暗澹とした表情で顔を伏せる。慰めるように、ルーラーが声を掛けた。

「昨日の今日ですし、そうそう簡単に切り替えられるものでは無いと思いますが……。でも、もしかすると、貴方には何か他の望みがあるのでは？」

「他の、望み……」

ライダーに与えられた未来は、疑いようもなく魅力的だ。だが、どうしてかそれには心惹かれない。ならば、他に望むこと……望む未来が、あるのか。

「夢が何もない、というのであれば。まずは自由を味わって、そこから夢を探すのも良いでしょう。けれど、もし夢を持っているのだとしたら――それを、正しいカタチとして口に出してみるのが良い、と私は思います」

夢、己の夢。果たしてそれは、何だろう。瞼を閉じ――ジークは、己の生を振り返った。

生存を求めて脱出し、助けを乞い、生きるために逃げようとして失敗し、一度は死に至ったものの、こうして蘇って自由を得た。

あまりに短い生ではあるが、幾つもの幸運に恵まれた。他のホムンクルスたちと、何の違いもないというのに。……そう、他のホムンクルスと自分は違ってしまった。彼らは一人残らず死に絶え、己は生きる。

仕方がない、と一言で済ますのは簡単だ。その一言で、自分は彼らを簡単に切り捨てられる。だが、仕方がないなどと絶対に言ってはならない。かつて、仲間のホムンクルスたちは捜索を命令されたにも拘わらず、見逃してくれた。

後からライダーにそう聞かされたときの、あの嬉しさは何だったのか。主命をも超える、仲間としての絆を感じたからではなかったか。

ならば。

ならば、願いなど分かりやすいほどに分かりやすい。

俺は自由になった。だから、皆も自由にしたい。ライダーが、セイバーが、そしてアーチャーが、俺にそれを与えてくれたように。

〝望み、俺の望み、俺の夢は……救うこと。このままでは死ぬはずの、かつての俺を……

仲間を、救うこと〟

〝腐汁に浸かり、ただ怯えるしかない。未来の確定事項として死が存在しているのは万物に共通であるが、そこに至るまでに何を為すこともできないことが確定しているのは、あまりに理不尽で、あまりに悲しい〟

〝俺がライダーに救われたように、彼らを救う。そうすれば、俺はライダーに再会しても胸を張れる気がする。俺は自由を求めた皆を助けたのだと――〟

〝助けて欲しい、と彼らは願っている。その声を聞いてしまった。聞かなかったふりをすることも、逃げ出すことも、俺にはできない。英雄から託された、この心臓に懸けて、それだけは決して〟

「……救いたい、と思う」

「誰を、ですか？」

「俺の仲間、俺と同種の存在たち。助けを乞い願っているのに、声すら出せない者たちと。助けられることを想定もしておらず、ただ死ぬために生きている者たちを」

「……**あの城塞にいるホムンクルスたちを、救うと言うのですね？**」

ルーラーの問い掛けに、そうだとジークは頷いた。

「ですが……それはライダーが望んだことではないでしょう」

その通り、あのサーヴァントはただただホムンクルスの幸福を願っていたはずだ。戦いのない、平和な人生を。

「分かっている。……でも、あの平和な日常は。あの夢は……俺の、夢ではない」

ライダーの気持ちは本当に嬉しかった。それでも、自分はそうしたい。

「聞いたのだ、助けて欲しいという〝誰か〟への願いを聞いてしまった。そこから目を背けて生きていくことなど、俺にはできない」

それは、彼にとっての鎖のようなものだった。数多の幸運に助けられたホムンクルスは、その喜びをよく理解しているのだ。……伸ばした手を、誰かが摑んでくれるという歓喜。他のホムンクルスたちには、生涯縁のないはずの感情。

……奇妙な罪悪感が、彼の全身を這い回っている。どうしようもないけれど、どうかしたいと願う心。

ジークの言葉に、ルーラーは息を呑んだ。

声の対象こそ違えど、彼は彼女と同じ決意を秘めていた。少女は主の嘆きに応じ、少年は仲間の嘆きに応じようとしている。ルーラーに、彼らの助けを求める声は聞こえなくと

も、少年はその声を聞いてしまったのだろう。
ならば――。
「……止めることは、できませんか」
「うん？　……貴女なら、いくらでも俺を止める手段はあると思うが」
「いえ、こちらの話です。つまり貴方は今から城塞へと戻り、ホムンクルスたちに逃亡するように説得する、というのですね？」
「……様々なアプローチを考えてはいるが、基本的にはそうなるだろうな」
「貴方の考える成功率は、どの程度です？」
「このままでは、零に等しい。だが、逃げる訳にはいかない」
「無謀な突貫だけは止めて下さい。それは、ライダーの好意を踏みにじるも同義です」
無論、そのつもりではある。だが……ジークには今のところ、策らしい策が浮かばない。
「聖杯戦争の裁定者としての貴女に一つ質問がある。〝黒〟の側は、俺たちのようなホムンクルスを魔力の供給源としている。それは、この聖杯戦争に於て反則と呼べるものだろうか？」
ルーラーの表情が微かに翳る。そう、ホムンクルスの救出が彼の目的だ。だが、その前途はあまりに多難過ぎる。目下最大の問題は、これがルールに厳密に照らし合わせて反則と呼べるものかどうかが微妙な点だろう。

「……ホムンクルスたちは、己の意志で聖杯戦争に参加していると見なさざるを得ません。少なくとも、私があるホムンクルスに質問した際、彼女はそう切り返しました」
主の命令であるから、戦いに赴く。それはホムンクルスではなくとも、多くの人間に見られる行為だ。そもそもサーヴァントは基本的にその形式を以て参戦している。
「俺たちの意志は極めて薄弱だ。ただ命令に従うだけの存在だ」
「ですが、貴方は自我を持って行動しています」
「そうだが――」
「もしも、自分の意志で聖杯戦争に参加しているのならば、私からは口を出すべきではないと思います。ホムンクルスに参戦の意志があるかないか、問い質して答えが得られるのでしょうか？」
ホムンクルスは言葉を詰まらせた。問い質して理想的な答えが得られるかどうかは微妙だ。彼らは産まれながらにして誰かの命令に応じることが全てだ。抵抗の意志など、皆無に等しい。
「ですが、見過ごせない状況なのは確かです。魔力供給は原則、マスターとサーヴァントとの間で行われなければならない。これほど大規模に、そして公然とそのルールを無視されているとなると……少し問題かもしれません。ですが、こちらが是正命令を下したとしてもそれに従う義務は彼らにはない」

「裁定者ならば、そういう権力があるのでは？」
「ありますが……回数が限定されています。より具体的に言いますと、私には各サーヴァントに二回ずつ、命令執行権が付与されています」
「それは――」
彼の驚愕した表情に、ルーラーは頷いた。そう、これこそがルーラーとしての最大特権。それぞれのマスターたちが三回まで保有する、サーヴァントへの絶対命令執行権――即ち、『令呪』だ。
「ただし、裁定者の身として令呪を使用するというのは、余程のことがない限りはできません。……いえ、無論これは己が規範に過ぎませんが」
それはもちろん、令呪を使用すれば極端な話、誰が聖杯を獲るかというレベルまでコントロールすることが可能だ。獲らせたくないサーヴァントには、自害を命令すればいいのだから。
しかし、だからこそ己の内側に律法（ロウ）が必要だった。それを無くせば、自分はルーラーではなく、ただの独裁者に過ぎなくなる。
肩を落とすホムンクルスに、ルーラーの心は締め付けられる。確かに彼の言う通り、ホムンクルスに『意志』を求めるのは酷（こく）すぎるだろう。
「……私からも一つお尋ねします。貴方が話しかけた場合、ホムンクルスは心を開くと思いますか？　**支配する側には見せられないものを、見せてくれますか？**」
「それは……」
む、む、む、と少年は考え込み始めた。同種である彼にならば、その窮状を訴え出るかもしれない。ならば、少しはルーラーも動くことは可能だ。助けを求め、戦争からの離脱を選んだホムンクルスを城塞から脱出させるくらいならば――。
「仲間が救われるなら、やってみようと思う」
「そうですか……なら」
これは、正直に言ってルーラーの管轄領域の境界線に存在する行為だ。あまりに、このホムンクルスに肩入れしすぎている。
だが……仮にここで、自分が協力しないことを告げたとしても恐らく彼は止まるまい。〝黒〟のライダー（アストルフォ）が居る以上、間違いなく彼は〝黒〟の陣営に混乱を引き起こす。ただでさえ、〝赤〟の側が自分を狙うことでややこしいのに、これ以上の秩序崩壊を許すわけにはいかない。
こほん、と軽い咳払い。胸を張り、意識的につんけんした態度で告げた。
「――仕方ありません。やむを得ない事態ですので、これから先、貴方の行動は私が管理させていただきます。心配せずとも、貴方の意志は最大限汲むつもりです。ただ、無闇で無謀な行動だけは控えて下さい。分かりましたか？」

「む……」
「今は貴方一人で、どうにかなる状況ではないでしょう？」
「それはそうだが……しかし」
「何より！　今、貴方があの城塞に一人で戻れば〝黒〟のライダー……アストルフォが何をするか分かりません。私はそれが不安で不安で……」
心底不安そうに、ルーラーがぶつぶつと呟く。
「……それは確かに」
何しろ理性が月まで吹っ飛んでいる英霊である。下手をすると、ホムンクルス（じぶん）のために城塞で暴れ出しかねない。
「ですから、どうか私に従って下さい。よろしいですか？　よろしいですね？　さあ！」
ぐいっと詰め寄るルーラーに気圧された少年は、慌てて頷く。
「わ、分かった。……貴女に従おう」
籠手を外していた手を差し出そうとしたルーラーはふと気付いた。彼の名前を、まだ聞いていない。
「すいません、貴方に名前は――」
「〝ジーク〟と呼んで欲しい。もっともこれは俺の名ではなく、彼の名だが」
少年はどこか誇るように、胸に手を置いて言った。

「彼がいなければ、自分は生きていられなかった。そのことを考えると、この名が妥当だろう……そう思っているのだが、どうだろうか？」
「分かりました。ジークフリートですね」
「いや、そうじゃない。ジークだけでいい。俺にその英雄の名は重たすぎると思う。ああいう風には、きっと生きられない」
躊躇いなく、己が命を捧げることなど。自分には、きっとできない――。
彼はそう、どこか悔しさを滲ませて呟いた。
「それは当たり前です。貴方はやっと何かをやれる立場になったばかり。彼のように為すべきことを成し遂げた英雄ではないのですから」
無限の未来が広がる少年に、己の命を捧げよと迫るのはおぞましい傲慢でしかない。いくら彼が見た目分別のつく大人びた姿であったとしても、彼は――やはり、まだ幼いのだ。
「そうか。……うん、分かった」
こくんと、ジークは素直に頷いた。良い子だ、とルーラーはどこか微笑ましく思った。
それから、改めて手を差し出す。おっかなびっくり、というようにジークはその手を握り返した。
「では、早速ですが城塞に戻りましょう。……もしライダーに出会ったら、揉め事にならぬよう、貴方から上手く言い訳して下さい」

「分かった。では、行こう」
「ええ、行きましょう！」
ルーラーは麓にある村からくるりと背を向けた。そして一歩、二歩、三歩と歩いたところでへなへなと膝から頽れる。
「ど、どうした？」
慌てて駆け寄ってきたジークに、ルーラーは心底申し訳なさそうな顔で口を開いた。
「あの……申し訳ありませんが、麓の村に行きましょう」
「何故だ？」
その問い掛けに、言葉よりなお雄弁な音がした。胃の蠕動音、いわゆる腹の虫が鳴る音である。
「まさか、とは思うのだが――」
「すいません、ついでに背負って下さい。お腹が空いて、一歩も動けません……」
そのまさか。ガス欠であった。思い返せば、夕飯を食べてから夜明け近くになるまで飲まず食わずであっちへ走りこっちへ走り、聖水を使って探索してと息つく間もなかった。先ほどなど、一瞬ではあるが意識が飛びかかったのだ。
サーヴァントならば一向に問題なくとも、人間としてはあまりにエネルギーを消費しすぎた。魔力を大量に消費すれば、動くことは可能だが――いつまでも、この絶望的な空腹**感に耐えなければならなくなる。**
「……前途が不安だな」
ルーラーは返す言葉もなかった。

§§§

「ランサーはどうしました？」
「領王は霊体化することもなく、玉座に座って何かを考えているようだ。あのルーラーとの会談に、何か思うことがあったらしい」
城塞の一室に籠もったユグドミレニア一族の長ダーニックと、アーチャーは顔を突き合わせて、今後の策を練り始めていた。
「まさか、セイバーが早々に脱落するとはな……」
ダーニックの表情は冴えない。無理もないだろう、七騎中最優と謳われるセイバーは終盤まで残すべき逸材だ。キャスターやアサシンといった搦め手を得意とする者、あるいはライダーのように豊富な宝具で圧倒する者――セイバーが突出して有利という訳ではない

が、相性の問題がある彼らと違い、どのタイプの敵と戦ったとしても万能に対抗できる。まして〝黒〟のセイバー（ジークフリート）はネーデルラントの大英雄ジークフリートだった。例の〝赤〟のライダーを除けば、どのサーヴァントと相対しても優位に戦うことができたはずだ。

「過ぎたことを悔やんでも仕方ありません。〝赤〟の側は遅かれ早かれセイバーの脱落を感知するでしょう。そうなった場合、一気呵成に攻めてくる可能性は決して低くない」

〝赤〟の側も、バーサーカーを強奪されて六騎になっている。自分が〝赤〟の指揮官であれば、セイバーを失ったことへの対策を取られる前に攻めたい。態勢が整ってないであろう今が勝機なのだ。

「キャスターの宝具が必要だ」

「……宝具に必要な素材が、未だ揃っていないと聞いていますが」

宝具はサーヴァントが召喚される際、こちらの世界に持ち込んでくるものであり、当然ながら魔力で編み上げられている。発動する際に必要な条件ならばともかく、宝具そのものに必要な素材など、通常は存在しない。

有り得るとすれば、その宝具が現存して今もなお世に残っている場合だろうか。ただし、この場合も必要なのは宝具そのものであり、素材ではない。

宝具は未知の兵器ではない。その英霊にまつわる伝説が昇華された貴き幻想（ノウブル・ファンタズム）に他ならない。従って、宝具は既にして完成した存在だ……本来ならば。

もし、この条理から外れる宝具があるとするならば。単体の英霊が所有するには、あまりに巨大なものか、あるいは——未完成であるが故に、伝説に刻まれた代物か。

「素材はあと一つ。それさえ揃えば発動する」

「その素材とは？」

「……一級の魔術師だ」

ダーニックは険しい表情で口を開いた。アーチャーはその言葉を聞いて、ようやく諸々の事情を理解した。

「……なるほど。それでキャスターはあのホムンクルスを欲していたのですか」

「そうだ。キャスターの宝具は『炉心』の性能が、そのまま宝具の力に反映されるという。我々の血族で、それほどの才を持つ者となると——」

「マスターとなった七人。それに例のホムンクルスだった訳だ」

「二流、三流の魔術師ならば素体として幾らでも揃えられる。だが、百年級の魔術刻印を継承している程度の魔術師となると、さすがにそうそう用意できん」

「ホムンクルスが刻印を持っているとは思えませんが——」

「だが、あのホムンクルスはアインツベルンの技術を流用したものだ。製造過程で突然変異の怪物が産まれないとも限らない。キャスターはそこを見抜いたのだろう」

確かに、とアーチャーは内心で頷いた。彼の魔術回路は一級品だった。それ故に、虚弱

な肉体が回路の駆動に耐えられなかった程だ。
「だが、この様子だとホムンクルスの捕縛は望み薄だ。つまり……」
「誰かを素体として献上しなければならない、ということですか」
「ああ。その場合、該当するのは一人しかいない」
ダーニックが苦笑交じりに呟いた。
それは恐らくゴルド・ムジーク・ユグドミレニアだろう、とアーチャーは見当をつけた。
セイバーが自らの死を選んだことに、あのマスターは決して無関係ではないはずだ。
目覚めたゴルドはランサーの詰問に哀れを抱くほどに動揺し、セイバーとライダーを痛罵した。それはサーヴァントであるアーチャーからしても、決して気持ちの良いものではなかった。
ゴルドはセイバーが自身のサーヴァントであると同時に、古今無双にして不死の英雄ジークフリートであるということを忘れている。……忘れている、というよりは目を逸らしているという方が正しいか。
彼がマスターの指示に従わないとすれば、それが自身の信念に基づくものだったからだろう。それを高圧的な態度で乗り切ろうとするなど、あまりに論外だ。実のところ、ゴルドの不遜な態度が原因でライダーに対するランサーの怒りが静まったのではないか、という気もアーチャーはしていた。

「〝赤〟のバーサーカーのマスターはキャスターでいいのですか？」
ゴルドはセイバーを失ったものの、令呪はまだ一画残っており、マスターとしての権限も存在する。再契約するならば、当然〝赤〟のバーサーカーということになるが――。
既にキャスターが代理のマスターとして契約を終了させている。
「バーサーカーのマスターに期待することなど何もないからな。ゴルドの令呪をキャスターに転写し、令呪で暴走を誘導して役割は終わりだ」
「……なるほど」
ダーニックはやれやれと空を仰いだ。
「アサシンのマスターから、未だ連絡は届かないのですか？」
「ああ。『霊器盤』によるとアサシンが脱落していないのは確かだが――」
最悪の想像が二人の頭を過ぎる。ユグドミレニア一族である相良豹馬は、わざわざ自身の故郷である極東まで出向いて、万全の態勢でサーヴァントの召喚を行った。
召喚そのものは成功したことが『霊器盤』によって記録されている。だが、マスターが相良豹馬であるかどうかまでは、見極めることができない。
つまり、相良以外の誰かがマスターになっている可能性が高い。〝黒〟のアサシン――ジャック・ザ・リッパーは歴史も浅く、おおよそ英霊とは程遠い連続殺人鬼であるが、そのクラスの特性上、マスター殺しを得意とすることは間違いない。

そういう意味では、アサシンこそ敵に回すのがもっとも恐ろしいサーヴァントともいえるのだ。

「〝赤〟の側にアサシンが二騎存在する、というのが最悪の展開ですが……」

アーチャーの言葉に、ダーニックが考えたくもないというように首を振った。そこへ突然ドアが開き、二人は同時にそちらへと顔を向けた。

「おじ様、アーチャー。少々よろしいでしょうか？」

飛び込んできたのは〝黒（ケイロー）〟のアーチャーのマスターであるフィオレ・フォルヴェッジ・ユグドミレニアだった。普段、何事にも優雅な態度で対処する彼女にしては珍しく、やや困惑したような表情を浮かべた。

「どうしたフィオレ。ノックもせずに――」

フィオレはそれに答えず、無言でテーブルに新聞紙を広げた。ダーニックとアーチャーの視線が、一面記事に集中する。

「これは……」

「ルーマニア首都ブカレストに連続殺人鬼が現れたみたいです。ブカレストから北上してシギショアラへと被害が広がっています」

ダーニックは慌てて新聞を注視した。殺人そのものの詳細は省かれているものの、既に三十名以上の犠牲者が発生しているらしく、ルーマニア全土でパニック状態らしい。

「偶然かと思ったのですが、ここを御覧になってください。犠牲者の一覧――」

フィオレが指差したのは、女性の写真だった。粒子の粗い写真でも、整った容姿は見て取れる。写真のキャプションには「身元不明」とだけ書かれていた。

「彼女の名はペメトレキス。――私と同じ学科にいた魔術師です」

その言葉に、ダーニックも事態の深刻さを認識した。これが、ただの連続殺人鬼であれば偶然で片付けることができたかもしれない。だが、魔術師が犠牲者のリストに加わっているとなると、それは有り得ない。まして、彼女は恐らくトゥリファスに派遣された魔術師の一人なのだ。

「彼女は連続殺人鬼に殺されるような魔術師かね？」

「……いいえ。ペメトレキスは諜報に特化した魔術師です。使い魔たちの戦闘能力も含めれば、並の魔術師では太刀打ちできないでしょう」

「――つまり。この連続殺人鬼は、魔術師を殺害するだけの能力があるという訳か」

もし、連続殺人鬼が単に彼女を上回る魔術師であったのならばまだ話は楽だ。だが、彼らの脳裏に浮かぶのは、魔術師を遥かに凌駕する名高き怪物（えいれい）だ。

アサシンのサーヴァント――ジャック・ザ・リッパー。彼はこのルーマニアに到着したのだろうか。ならば、彼のマスターは一体何を考えているのだろうか。少なくとも、新聞に掲載されるほどの異常事態を看過している時点で、正気の沙汰とは思えない。魔術師全

ての原則である神秘の秘匿を大きく踏み外しているからだ。
「はい。どうしましょう、おじ様？　捨て置く訳にもいかないかと」
ダーニックはしばし考えてトゥリファスに待機させている血族の魔術師を数人、派遣することに決めた。
「……もし、本当に〝黒〟のアサシン（ジャック・ザ・リッパー）なら。魔術師ではとても太刀打ちできないでしょう」
どれほど弱いサーヴァントであろうとも、彼らは英霊。究極ともいえる神秘の領域に到達しているのだ。まして相手はマスター殺しに特化した技能を持つ暗殺者（アサシン）だ。
「私たちが出向くべきではないでしょうか？」
フィオレの提案は、確かに頷けるものだった。だが、トゥリファスから離れてシギショアラまで向かうとなると、話は別だ。この状況下でサーヴァントを派遣し、城塞の防備を弱めるのは――。
ダーニックが考えあぐねていた所に、キャスターからの念話が舞い込んできた。

〝報告。〝赤〟のセイバーとそのマスターがトゥリファスから移動したようだ〟
〝移動……何処に向かったか分かるか？〟
〝シギショアラに向かったようだ。あの都市を遠見で監視すると、こちらの方が若干手薄になるが……どうする？〟

〝そのまま、トゥリファスを見張っておいてくれ。だがシギショアラもある程度の情報は欲しい。余力があれば、そこに割り振ってくれ〟

シギショアラに〝赤〟のセイバーとそのマスター――賞金稼ぎの死霊魔術師（ネクロマンサー）である獅子劫界離（ししごうかいり）が向かったとするならばその理由は一つしかない。
〝黒〟のアサシンを仕留めにいったか、あるいはマスターと手を組みに行ったか。いずれにせよ、傍観して良い状況ではない。
現在六騎のサーヴァントと六人のマスターが手駒として存在するが、斥候（せっこう）として使えそうなのはただ一騎だ。防備の点から鑑みても、二騎出す訳にはいくまい。
「アーチャー。そしてアーチャーのマスター、フィオレよ。シギショアラに向かってくれ。そこに〝黒〟のアサシンと……〝赤〟のセイバーがいる」
〝赤〟のセイバー、という言葉にフィオレの表情が微かな強張りを見せた。この聖杯大戦における屈指の難敵であろうサーヴァントとの激突。そのマスターである獅子劫界離とも刃（やいば）を交えなければならないことが推測される。それ故の強張りであろう。
「……承りました。準備が整い次第出発します。行きましょう、アーチャー」
だが、頷いたフィオレに緊張こそあっても恐怖はない。それはサーヴァントへの信頼ももちろん存在するが、もう一点――自身の技量においても、彼女は絶対の誇りを抱いてい

るからだ。
「了解しました、マスター。では、ダーニック殿。これにて失礼」
フィオレがアーチャーと共に部屋から退室すると、ダーニックはふぅ、と息をついた。
「やはり世の中はままならぬものだ。だがいい、元より命を懸けて魔術協会への離反を決めたのだ。この程度は想定内の出来事だ」
ダーニックは自身が敗北し、血族が殲滅される可能性も当然考慮に入れている。だが、それがどうしたというのだろう。過去、数多の一族が根源に到達する機会すら与えられず、ただただ陰々滅々に没したことを、ダーニックはよく覚えている。
自分たちには機会が与えられた。それだけでも望外の幸運だ。そしてもちろん、ダーニックは敗北する気などさらさらない。

SSS

――私のせいではない。
私室でゴルドは一人、屈辱と恐怖に押し潰されていた。

「私のせいではない、あれは」
ゴルドはそう呟くと震えながらグラスの酒を一息で飲み干し、自分の失策を認めまいとする。ナイトテーブルに置いてある価格が高いだけの酒の味は、あまり良いものではない。舌を刺すような苦い味だ。味も悪いのに、酔いしれることもできない――まったく詐欺のような代物だ。
「そう、詐欺だ。あの英雄め……あれがジークフリートなものか」
酔えない――訳ではない。酔ってはいる、酔ってはいるのだが――頭が痛い、思い出すのは忌々しい剣士の眼差しだ。
それを思い出すだけで。思考が、精神が、冷静さを取り戻してしまう。
醜い、とか美しいとかではない。冷たい、あるいは殺意に満ちていた、という訳でもない。あれはただ、待っていただけだ。

「どうする？」
自分の返答に期待を抱いていたならば、思考の余地はあったかもしれない。冷たい、あるいは怒気を含んだ視線ならば、怯えて承知していただろう――マスターだったとしても。
穏やかな、何かのメリットデメリットを含めての提案ならば――拒否したかもしれない

が、あれほど激昂はしなかった。

そういうものではなかった。ただあれは、無機質に待っていた。自分がイエス、ノーどちらを選ぶかを待っていた。

そこにはマスターとサーヴァント、という絆はなかった。一個の知能体と知能体という認識すらもなかった。自分は、石ころだった——と、ゴルドは思う。

彼からすれば、自分は目標達成の道にあった石ころだ。邪魔だから、脇に退けた。その程度の認識しかなかったのだろう。

「英雄なものか、あれは」

無論、そう愚痴を零しながらも理解している——そこから目を逸らす。ひたすらに逸らし続ける。何故って、それには自己の愚かさにも向き合わなければならなかったからだ。

お前は何も分かっていない。

サーヴァントにそう認識されていたという恐ろしさ、恥辱、悲しさ。元を正せば、自分がそう仕向けた。彼と喋らず、喋らせない。ゴルドが彼を道具（サーヴァント）という認識で扱おうとしたように、セイバーもまたゴルドを道具（マスター）として扱うしかなかったのだ。

それはそうだろう。ゴルドにとって、己以外の全てがそういう認識だ。彼の目的は、誇り高き錬金術師であるムジーク家の再興。ユグドミレニアという血族に連なったのも、そのための踏み台に過ぎない。そう教わった。父と母はそう言っていた、祖父と祖母もそう言っていた。

……それが、正しくないことは分かっている。分かっているが、変革を起こそうなどとは考えなかった。敷かれたレールに乗って走るのは、心が安らぐ。いつか見返してやる、という復讐は祖父も祖母も父も母も後進に押しつけた。

自分ももちろん、息子に押しつけるつもりだった。この戦いが終われば、魔術刻印の段階的な移植に入る予定だ。

息子もまた、自分を道具と見ている。隠そうとしても捻くれたような、醒めきった瞳を見ていればすぐに分かるものだ。……何しろ、あれは鏡に映った自分のモノとそっくりだ。

もしも、とふと思う。

フォルヴェッジ家の姉弟のように、サーヴァントを道具ではなく人格を持った一人の英雄として認識していれば。

セイバーの無機質な目は、何か変化があったのだろうか。違う未来があったのだろうか。

ふん、とゴルドは己の考えを鼻で笑って、グラスに酒を注いだ。

「馬鹿馬鹿しい。今更考えて何になる」

酒を呷り、それでも——ゴルドは考えてしまう。もしもあの時、セイバーの提案に応じていれば——いや、馬鹿馬鹿しい。馬鹿馬鹿しいので考えるのはもう止めよう。自分は敗北者であり、脱落者であり、後は誰かに任せるしかないのだ。

そう結論付けて、ようやくゴルドの頭に酔いが回り始めた。

——まったく、忌々しい。

セレニケは怜悧な美貌を怒りに歪ませながら、足音も荒く廊下を歩いていた。いくら自分のサーヴァントをいたぶっても、へらへらとした笑顔を浮かべられてはどうにも気が晴れない。

目の前にある最高のご馳走に、手が届かない。食べさせて貰えないばかりか、フォークを突き立てても硬くて噛めない。

黒魔術師の老婆たちに溺愛されて育てられたセレニケにとって、我慢というのは拷問と同義である。彼女が唯一我慢できるのは、魔術に関わることだけだ。

もしもあの端正な顔を歪ませられるとすれば、それは恐らくライダーが庇ったホムンクルスを連れてくることだろう。眼前で目を抉り、腕を切り落とし、舌を引き抜き、自分の腸を自分自身で食わせてやれば、さすがにあのライダーも嘆き、絶望するだろう。

その表情を見たい。何が何でも見たい。いとも名高きシャルルマーニュ十二勇士の中で、もっとも可憐なアストルフォの表情が絶望に歪む様を見ることができたならば、死んでも構わない。

——と同時に。ライダーの心をここまで奪ったホムンクルスが、ひどく憎たらしい。

〝黒〟のライダーとして召喚されて以来、セレニケがいくら望んでも得られなかったものがある。

それは恐らく、愛情などと呼ばれるものなのだろう。愛おしみ、慈しみ、それを以て喜びとするという、セレニケにとっておおよそ理解し難い感情だ。

何故それを自分に向けてくれなかったのか？　忌々しい、どうせ蜉蝣のように儚い生命しか持っていないくせに。

本当ならば、とことんまで捜したかった。セレニケは魔術の腕もさることながら、ユグドミレニア一族の誰より執念深いという資質があった。既に彼女にとって、ホムンクルスは害虫以外の何物でもない。それも草の根分けて捜し出し、根絶せねばならない類の蟲。

だが、さすがにホムンクルス一人を捜すことに手間を掛けていられない。セレニケの使用する黒魔術ならば、発見も不可能ではない。だが、その為にはそれなりの準備が必要である上に、行方知れずになったホムンクルスも優れた魔術使いであることがネックとなっていた。

下手に突っついて窮鼠に噛まれてしまえば何にもならない。ホムンクルスに関しては、この戦争が終わるまで諦めるより他ない。

ライダーの苦悶する顔を見て、更に滅茶苦茶にしたくなる。蹂躙したい、陵辱したい、絶望に染め上げたい——邪な衝動を、セレニケはどうにか抑え込んだ。この戦争が終われ

ば、この戦争に勝てば、問題ないのだ。

〝赤〟の側に勝利すれば、自分は願いと戦いを放棄しよう。三画の令呪でライダーを死ぬまで犯してやる。

あまりに苛立たしげに歩いていたせいだろうか。どん、と肩にホムンクルスがぶつかった。食事の配膳を担当していた少年は虚ろな目のまま、申し訳ありませんと頭を下げる。

彼にしよう、とセレニケは決めた。

「貴方、ちょっと来なさい」

ホムンクルスに拒否する権利などない。そして、セレニケに人造生命（ホムンクルス）である使用人への情など一欠片もない。更に言うなら、消費とは魔術師の美徳である。

魔術師ですら軽蔑する悪趣味な娯楽で、セレニケはひとまず溜まりに溜まったストレスを発散させることにした。

――妙なこともあったもんだ。

ロシェ・フレイン・ユグドミレニアはほぅ、と溜息をついた。癖っ毛の強い髪をもしゃもしゃと掻き乱し、混乱した思考を纏めようとする。

こちらのセイバーが脱落してしまった。しかも自決という形でだ。英霊というのは、もう少し理性ある者かと思っていたが、どうやらそうでもないらしい。

「馬鹿馬鹿しいなぁ、もう」

余裕ある戦いのはずだったのだ。

〝黒〟のランサー、ヴラド三世（ジークフリート）、〝黒〟のセイバー、〝黒〟のアーチャー、イロー（ケーン）、そして自分とキャスターのコンビであれば、どのような敵でも打ち倒せる自信があった。より正確に言うと、対処できるだけのゴーレムを造る自信があった。

〝黒〟のマスターたちは、あまりにもゴーレムを低く評価している。確かに、〝赤〟のセイバーには一刀のもとに斬り伏せられた。だが、あれは見張り用に拵（こしら）えたゴーレムだ。別に他のものより劣っている訳ではないが、あくまで戦闘ではなく、探知と報告が目的だ。本来の戦闘スペックを発揮したゴーレムならば、ああも一方的にはならない。

無論、最終的には打ち倒されるだろうが、何しろゴーレムは百体から存在するのだ。十体二十体ならば、セイバーも傷は負わないかもしれない。だが、百体以上のゴーレムに次から次へと波状攻撃を受けたならば、どうだろうか。

……机上の空論であることは百も承知だが。そういう可能性も決して低くはない。

けれど実のところ、戦闘用ゴーレムにセイバーを獲れというのはさすがに過剰な期待であることは分かっている。

問題は、キャスターの対軍宝具『王冠（ゴーレム・ケテルマルクト）・叡智の光』である。当然、キャスターのこの宝具もゴーレムであることは予測がつく。だが、その具体的な姿となると何故かキャスター

はお茶を濁した。

……それは、自分がまだ未熟だからだ。そうであって欲しいと思う。ただ、時折零す言葉から推測すると巨体であることはまず間違いないようだ。それから、〝黒〟（アヴィケブロン）のキャスターはこうも教えてくれた。

――そのゴーレムは、決して無敵という訳ではない。

――むしろ、如何なる方法で死すのかを刻み込まなければならない。

――僕が作るゴーレムは生を獲得する。だからこそ、死ぬ。

――ゴーレムとは、ただ単に土人形を動かすだけの術式ではない。ゴーレムとは、生命の創造……即ち、原初の人間（アダム）の模倣である。

それが、キャスターが目指す存在（もの）。ただ有能なゴーレムを造ればいいと考えていたロシェにとって、キャスターの考えはあまりに衝撃的だった。

手伝いたい、それが叶わぬならせめて傍で見ていたい。正直な話、ロシェにとって聖杯大戦は邪魔なイベント以外の何物でもない。だが、聖杯を巡る争いがなければ英霊の召喚という奇跡に立ち会うこともできず、当然〝黒〟のキャスター――アヴィケブロンと出会うこともなかった。

だから、戦うのは仕方のないことだ。けれど、まだ教えて欲しいことが沢山あるのに、聖杯大戦はあまりに月日が短すぎる。……その為に、ロシェは願い事を決めていた。

〝黒〟のキャスターの受肉、それが彼の願いだ。彼もまた、現世で叶えるべき望みがある。ならば、少しでもその助力になればいい。

〝黒〟のキャスターは、ロシェの願いを聞くと「ありがとう」と告げた。淡々とした態度は変わらず、それでキャスターの教え方が甘くなるという訳でもない。

ただ、心だけは通い合っている。それが分かっただけでもロシェにとっては収穫だった。

これほどまでに、他者と交わるということが面白いとは思わなかった。ましてそれが、心より尊敬できる人間であれば尚更のこと。ロシェの両親は彼に関心を払っていない。いや、フレイン家の伝統としてゴーレムに育てさせるのは仕方ないこととはいえ、それ以外でも愛情を感じたことなど一度もない。

それは、魔術師にとって必要な事柄かもしれない。家族への愛は、ときに魔導の探求に重荷となる。ならば、最初から愛など与えない方がいい。少なくとも、フレイン家ではそういう方針だ。

まして、ロシェは一族がユグドミレニアに組み込まれて以来最高傑作と呼べる子供だ。

ロシェ自身もそれを認識している。先祖が血の滲むような想いで残した数々の秘伝書を読み解き、どうしてこんな簡単な――分かりきっていることを、長々と説明しているのか

と首を捻ったものだ。

そこに、天才が召喚された。最初は打ちのめされ、次に憧れた。自分と同レベル……否、もしかするとレベルを下げて自分に合わせてくれているのかとさえ思う傑物に。

彼を使役するなどとんでもない。自分こそが、彼に教導されなければならないのだ。そうしていつか、彼が夢を叶えるその光景を自分は傍らで見守るのだ。

その為ならば何でもしよう。人の命が必要ならば、幾らでも刈り取ろう。一族の利益にならぬことでも引き受けよう。

だって仕方がない。先生の、僕たちの夢を叶えるためなんだから――。

――ああ、怖かった。

ユグドミレニア一族フォルヴェッジ家の長男、カウレス・フォルヴェッジ・ユグドミレニアは廊下を歩きながら、先ほどの光景を思い出してぶるりと震えた。

背後にぴたりと付き従うは、彼のサーヴァントである〝黒〟のバーサーカー（アヴィケブロン）だ。……まるで背後霊のようで、些か距離が近すぎると思わなくもないのだが。

彼が恐怖を抱いたのは、敵ではない。味方のサーヴァント、〝黒〟のランサーである。

一体何が起きたのか、未だにカウレスは把握しきれていないのだが、どうもマスターであるゴルドと〝黒〟のセイバーとの間に、何かトラブルがあったらしい。

ともあれ結果として、戦ってもいないのにセイバーが敗退した。まさに悪夢のような展開だ。〝赤〟のバーサーカー（バルタス）を捕縛し、マスター替えを行ったことでこちらのサーヴァントは七騎。アサシンが未だ合流しないものの、少なくとも戦力上は優位となった――と思った矢先に、この有様である。

当然ながら〝黒〟のランサーはその報せに激怒した。まさに、怒り狂ったのだ。その迫力たるや、冷血の黒魔術師であるセレニケが色を失うほどのものだった。正直な話、今こうして自分が生きているのが奇跡のように思われる。

あれが英霊、あれがサーヴァントだ。ましてや、ランサーは苛烈な執政と串刺しで世界に名を知らしめたヴラド三世、身内であるはずの貴族すら躊躇いなく串刺しにしてのける男だ。

そして一方、集められたサーヴァントたちは彼に大した恐怖を抱いていなかったのも、また驚嘆に値する。第三者であるアーチャー、バーサーカー、キャスターが平然としているのは分からなくもない。だが、当事者であるはずの〝黒〟のライダー（アストルフォ）は、どれほどランサーが激怒していても平然と……というより、楽しそうに笑ってさえいた。

あの状況で恐怖を微塵も感じずに笑える異常さが、〝黒〟のライダーたる所以か。当事者であるゴルドは必死になって言い繕っていたが、カウレスからするとどう考えても自業自得と言わざるを得ない。

残念なことに自分たち（ユグドミレニア）は〝黒〟のセイバーを失った。

だがこの一件そのものに、カウレスは然程（さほど）悲観していない。どうやら〝黒〟のセイバーはネーデルラントの大英雄ジークフリートだったとか。竜の血を浴びたまさに無敵の存在であると同時、彼の背に貼りついた菩提樹（ぼだいじゅ）の葉が原因で背中を貫かれ、悲劇的な死を迎えたことで名高い。

そして、例の一件――錯乱したゴルドが、令呪の強制で宝具を解放させようとしたせいで、真名が露呈した可能性があること。もし、〝赤〟の側がジークフリートという真名を知ったならば、当然ながら幾つもの対策が取れる。ただ単純に背中を狙うだけではない。

まず、竜殺しであるために竜種の血を引く英雄を当たらせることは避けるだろう。逆に、竜殺しでありながら竜の血を浴びたジークフリートは、竜に絶大な効果を持つ宝具に致命的なダメージを受けるかもしれない。

無論、そうそう上手くいく訳ではない。だが……ともかく、相手が分かればそれだけ対策は練れるということだ。当初の予定では〝黒〟のセイバーが軸となった戦術を構築していたが、真名が看破されていたならばそれも見直す必要があった。しかし――一方で、真名が露呈していない可能性も充分にあったのだ。

結局、そのあやふやな状態が戦場における混乱を招く。それは最悪だ。元々、戦場とは混沌（カオス）が支配する状態が標準なのだ。そこへ混乱すべき要素がさらに組み込まれれば、どう

いう結果が招かれるか分からない。カウレスは、そういう賭け事は好まない。セイバーは死んだ、それならそれで、新たな秩序を形作ればいいだけのことだ。

元々地の利はこちらにある。聖杯戦争のシステム上、長期戦を睨んだ戦いは不可能だ。さらに、このトゥリファスでの戦いは世界に散る魔術師たちにも知られている。

……そう、名誉を重んじる魔術協会からすればこのミレニア城塞が一日一時間存在することすら耐えられまい。

だったらいっそのこと、クラスター爆弾でも落とせばいいのだが――魔術協会としては、やはりそれも取れない作戦である。

名誉と伝統、そして因習……世の中にはままならないことが山ほどある。魔術協会も、ユグドミレニア一族もそれに縛られている。

下らない、と切り捨てるのは簡単だが――カウレス自身、縛られている身としてはどうしようもないのだ、ということが身に染みて理解できてしまう。世界とは、人生とは、そういうものなのだ。

「まあいいか」

自分は、やるべきことをやるだけだ。道途中で死んでしまえば、それまでのこと――カウレスはそう結論付けている。

「？」

突然独りごちた彼が気になったのか、バーサーカーがひょいと顔を覗き込んだ。
「ああ、すまん。何でもない」
嘆息。もっとも、やるべきことをやると言っても――このバーサーカーでは、どうにもならないのだ。理性を失っている彼女は、戦場に出ればひたすら眼前の敵を押し破るだけ。
つまり、カウレスの指示など全く必要がない。
それでも。このバーサーカーはカウレスにとっては類い希なるありがたいタイプなのだ。何しろ、魔力をこちらが供給する必要がほとんどない。戦場に存在する残存魔力を吸収し、永久機関の如く戦い続けることができる。
ホムンクルスたちの供給がある限りは魔力の枯渇を恐れないで済むのは確かなのだが、彼らとて有限なのだ。何より、セイバーを除いたとしても残り七騎の魔力を彼らで賄いきれるかどうかが、カウレスには疑問だった。
バーサーカー召喚からしばらくして、カウレスは彼女の宝具『乙女の貞節』で魔力を吸収することなく、かつホムンクルスの魔力供給もカットした上で、戦闘シミュレーションを行った。
結果、彼女が動いて戦鎚を数度振るっただけで軽い目眩が襲った。この状況が五分も続けば立つこともままならなくなるだろう。
これが、バーサーカー本来の魔力消費なのだ。自他共に認める三流魔術師であるカウレスには、**あまりに荷が重い。**
けれど『乙女の貞節』がある以上、その不安は解消される。無論、宝具を失えば危機に陥るのは間違いないが――そもそも、そんな状況ならばとっくに詰んでいる。
もちろん、彼女に問題があるかないかと言えば、大いにあるのだが……。
きぃきぃ、という聞き慣れた車椅子の音。考え込むのを止めて前を向くと、実姉であるフィオレ・フォルヴェッジ・ユグドミレニアがいた。車椅子を押しているのは、彼女のサーヴァントである〝黒〟のアーチャー、ケイローンだ。
「……姉さん？」
怪訝に思って、カウレスはふと立ち止まる。別にサーヴァントに車椅子を押させているのが異常という訳ではない。問題なのは、彼女が膝に抱えている黒のスーツケースだ。
「あら、カウレス」
「姉さん、そんな物騒なもの持ってどこかにお出掛け？」
どうやらそのようだ、彼女は厳粛な様子で頷いた。
「ええ。〝黒〟のアサシンとそのマスターにコンタクトを取りに行くつもりです」
「コンタクト？　……その割にはかなり物騒だと思うんだけど」
フィオレがスーツケースに収めているのは、彼女自身が独自に考案した接続強化型魔術礼装だ。

「パソコンもいいけど、地元の新聞くらいちゃんと見ておきなさい、カウレス」
フィオレは顔を顰めて、カウレスに小言を述べる。へいへい、と実にいい加減な返事をするカウレスに、フィオレは更に眉を吊り上げかけたが、アーチャーがそっと車椅子を押してそれ以上の説教を中止させた。
「……もう。帰ってきたら話をするわよ」
「分かった分かった。戻ってきたらちゃんと話を聞くさ」
「そう？　それじゃ、行ってきます。留守番よろしくね」
フィオレはそう言い残して、アーチャーと共に立ち去った。それを見送ったカウレスが嘆息すると、くいくいと袖をバーサーカーに引っ張られた。
振り向けば、長い前髪を通してちらちらと見え隠れする銀灰色と黄金色の瞳が焔に揺らめいているように見える。
「何だ。何か怒ってる？」
頷き二回。
どうやら、バーサーカーはご立腹のようだった。誰に？　無論、カウレスにである。が、生憎と言語によるコミュニケーションが不可能なので、彼女が何に憤っているのかが、よく分からない。
「姉さんのことか？」

ひとまず当てずっぽうでカウレスがそう言うと、バーサーカーは肯定した。首を捻りつつ、カウレスは彼女の肯定と否定でどうにか答えを見出した。
自室に戻り、二人して向かい合う。椅子に座るカウレスに対し、バーサーカーは床にぺたりと座り込んでいた。ところでカウレスの部屋は、恐らくこのミレニア城塞では一番奇妙だと断言していい。本棚には幾つかの魔術書、机には水晶玉、結界を張るためか、部屋の隅にチェスの駒が置いてある。そこまではいいが、問題は机の上に鎮座しているコンピュータだ。
ダーニックは顔を顰め、ゴルドは嘲り、フィオレは嘆息するが、なかなかどうして科学技術も捨てたものではない。そもそも、十年前とは違ってこの情報技術に魔術師も対応せねばならない時代である。意外にも、この技術にそれなりな対応を行っているのは黒魔術師のセレニケだ。コンピュータのネットワークを通じて行う呪術研究を行っているとか。
「……つまり、あれか。いずれ雌雄を決するかもしれない相手なのに、俺が気圧されてるのが気に食わなかった？」
肯定。なるほど、バーサーカーの不安も決して杞憂とは言い難い。
「まあ……サーヴァントにこういうコトを言っても説得力無いんだが、うちの姉は怪物だからなぁ」
嘆息するカウレスの目が、どこか郷愁を帯びたものに変わる。怪物だ、と愚痴りながら

そこには、どこか誇りのようなものが垣間見えた。
「ま。敗北覚悟で特攻するほど馬鹿じゃないさ。それよりも、まずは〝赤〟との戦いだ。アーチャーが言った通りなら、向こうのライダーは反則過ぎる」
そもそも、神の血を引かなければ倒せぬ英霊など規格外にも程がある。幸い、〝黒〟の陣営にはアーチャーがいる。英霊として召喚されるためにランクダウンされているとはいえ、神の血を引く者に違いはない。
もし、彼を召喚していなければその時点でこちらの敗北が決定していた。無論、サーヴァントが倒せずとも、マスターを殺すという手もないではない。しかし、バーサーカーと三流魔術師では望み薄な作戦だ。
「お前も分かっていると思うけど、あのライダーとは絶対に戦うなよ。いいな？」
ぶんぶん、と勢いよく首を縦に振った。さすがに一度戦って懲りたらしい。攻撃が最初から通用しない、というのはどうしようもない。
チーム戦で良かった、とカウレスは心から思う。もし通常の聖杯戦争だったら、正直どう転んでも勝てる気がしなかった。『乙女の貞節（ブライダル・チェスト）』は使い勝手が良い常時展開型の宝具だが、もう一つの全リミッターを解除した状態で放つ『磔刑の雷樹（ブラスティド・ツリー）』……こちらは尋常ならぬ威力を誇る分、代償が大きすぎる。
その代償とは、死。〝黒〟のバーサーカー、フランケンシュタインは全リミッターを解除し、宝具を最大威力で解放した場合、その機能を停止するのだ。他ならぬ、かのフランケンシュタイン博士が遺した設計図にそう書かれている以上、信じない訳にもいくまい。
当然ながら、リミッターを解除せぬまま放つことも可能だ。だが、それでは威力が落ちる。カウレスはまぎれを極力避けるため、リミッターを解除せずに宝具を発動した場合の威力測定も行っていた。
昼間の森に人払いの結界を張り、安全と思える状態まで後退してからの宝具発動。
その威力は良くてC、悪くてDランク相当というところだった。ロシェに頼み込んで譲り受けたゴーレムを威力測定の目安として使用したが、バーサーカーから離れれば離れるほどに雷撃の威力は弱まり、逆に彼女の至近距離にあったゴーレムは文字通りの塵芥に変わり果てていた。
至近距離からリミッター解除して撃ち放ったならば、大抵のサーヴァントを討ち果たせる威力だと、カウレスは推測した。……しかし、その代償はあまりに大きい。一騎倒して一騎減るでは、あまりに割が合わない。
「……バーサーカー、言うまでもないと思うが。『磔刑の雷樹（ブラスティド・ツリー）』のリミッターは基本的に解除するなよ？」
カウレスの警告に、バーサーカーは不思議そうに首を傾げた。やはり幾ら知能が高いと言っても、バーサーカーはバーサーカーということらしい——カウレスは嘆息した。

とにかく、三流魔術師である自分と宝具が扱いにくいバーサーカーの組み合わせでは、知恵を振り絞るより他ないのだ。魔術師としては三流であっても、マスターとしてできる限りの手は尽くさなくては。

「……と、そう言えば姉さんが新聞読めって言ってたっけ」

ふと、先ほどフィオレが告げた言葉を思い出し、ホムンクルスに地元の新聞を持ってこさせた。礼を言って新聞を広げ、フィオレが注目したと思しき記事を読む。

……なるほど、彼女の言うことも一理あった。殺人鬼に関する記事を読み終えると、カウレスは立ち上がった。

「さてと。バーサーカー、悪いがちょいと留守番していてくれ」

「？」

カウレスは机に仕舞い込んでいた低級の悪霊や獣を召喚するための魔道具を幾つか取り出し、それを自身の軀に装着した。手首に獣の名を刻んだ腕輪を嵌め、靴の爪先に黒い蟲の卵を仕込んだ。

サーヴァント相手には一秒も保(も)たぬであろう雑魚であるが、豹の使い魔と、体内に潜り込んで激痛を発するミミズの群れは、魔術師相手にはそこそこの嫌がらせになるだろう。

くいくいと、またもカウレスは服を引っ張られる。バーサーカーの瞳が、説明しろと訴えていた。

「……何、ちょっと姉さんを手伝いに行くだけだ」

そう言って、カウレスはちらりとパソコンに目を移した。受信した電子メールには、シギショアラに詰めていた魔術協会の魔術師たちが、次々と殺害されているという情報(タレコミ)が記されていた。

この情報が意味するものは二つ。一つ、その魔術師たちを手に掛けた者は、少なくともユグドミレニア一族ではないということ。二つ、フィオレが向かったということは、サーヴァントである確率が高いということ。

そして、これは推測だが。〝黒〟のアサシンとそのマスターが、ユグドミレニア一族に敵対する一方で、〝赤〟の側とも敵対していた場合……〝黒〟(ケイ)のアーチャー(ロー)とアサシン、〝赤〟のサーヴァントの激突が考えられるということ。いわゆる三つ巴の状態だ。

これは――極めてマズい状況だ。

「今、万が一にでもアーチャーを失う訳にはいかない。一対一なら相手の魔術師は挑むだろう。それがプロだ。だが、二対一になれば――俺が如何に弱くとも逃げるだろうさ。やはりプロだからな。ただ、この要塞を守らなきゃならんのも確かだ。だからお前は留守役だ。ま、いざってときは、令呪でお前を呼ぶから」

〝黒〟(フラン)のバーサーカー(シュタイン)は、マスターであるカウレスを守るため、できれば共に行くべきだと思ったが、要塞を守れという命令も合理的だった。

「安心しろ。相手と殺し合いになるまで戦う気はない。二対一になっても戦うような奴は、余程強いか、単なる莫迦だ」

カウレスの言葉は虚偽ではない。彼は本当に戦うつもりはない。とにかく、姉は強い。並の魔術師はおろか、一流と呼ばれる魔術師相手でもそうそう負けはすまい。ダーニックに次ぐと言われる変質型魔術刻印は、精密機械並みの緻密さだ。

彼女のサーヴァントである〝黒〟のアーチャーも一流の英霊。こちらの陣営からすれば、〝黒〟のランサー（ヴラド三世）は旗印であり、〝黒〟のアーチャーは要なのだ。

それだけに、万が一が恐ろしい。例えば〝黒〟のアサシン（ジャック・ザ・リッパー）と〝黒〟のアーチャー（ユグドミレーニア）が激突し、そこを狙って〝赤〟のサーヴァントがアーチャーを打ち倒したら、その時点で敗北だ。

だが、ここにカウレスが加わるだけで〝赤〟の魔術師は撤退を選択するだろう。必然、〝赤〟のサーヴァントも撤退する。己の力でなく、己が存在するだけでそうなるのだから、まあ楽な方だろう。

カウレスが部屋を出るのを見送ったあと、バーサーカーはふとつけっぱなしのパソコンに目を留めた。どうやら、消すのを忘れてしまったらしい。だらしないマスターだ、電気は大切――とバーサーカーは嘆息して、パソコンのコンセントを躊躇いなく引き抜いた。

サーヴァントとしての行き届いた心遣い。マスターも褒めてくれるだろう。

§§§

かくして。史上最大規模の聖杯戦争――『聖杯大戦』は終わりを告げた。〝黒〟の側は敗北し、〝赤〟の勝利と認定された。残念なことに大聖杯の機能が停止したため、願いが叶うことはなかったが、魔術協会からの莫大な報酬がそれを慰めてくれた。大聖杯が停止した状況で、今更相争うこともない。

〝赤〟のマスターたちは思い思いにくつろぎ、戦争の疲れを癒やしていた。

「皆様、本当にお疲れ様でした」

最初に出会ったときのように、シロウ・コトミネが紅茶を差し出した。

「戴こう」

含んだ途端、清涼な香りが胸の内側に飛び込んでくる。肺といわず内臓全てに染み渡るような心地よさ。滞りなく仕事が片付いたこともあってか、これほどに落ち着いた気分は魔術師になって以来、久しぶりだった。

「良いお茶だ」

「ありがとうございます」
「シロウ。君は飲まないのか？」
「いえ。淹れるのは得意ですが、紅茶は飲み慣れてないので――」
苦笑して、彼は白湯を自分のカップに注いだ。日本人とはそういうものか、と魔術師はぼんやりとした思考で考えた。
「ああ、そうそう思い出しました。令呪の引き渡しをお願いせねば」
「令呪の？　何故だ？」
令呪は――とても、大切な――もので――戦争に――勝利するために――必要――。
「嫌だなぁ、皆さん。聖杯大戦は終わったじゃないですか」
「……そう言えば、そうだったっけ」
「……そう言えば、そうだったな」
そう、聖杯大戦は終わった。途中、ユグドミレニアの側にルーラーがついたと聞いたときは肝を冷やしたものだが、それも彼の機転でどうにかなった。実に苦労した戦いだった。戦闘前の準備から――そう、準備から大変だった。
「私は監督官です。皆様の令呪を回収し、次の聖杯戦争に備えなければならないのです。申し訳ありませんが、こればかりは」
「仕方あるまい。どうせ持っていても仕方のないものだ」

「……それも、そうか」
「何でしたら、教会の方に費用を請求してはどうです？　こちらがお金を出して令呪を引き取った、という形にすれば――」
「ならば納得するが……それでいいのか？」
「請求されるのは、教会であって私ではありませんから。これは、若輩者の私に大任を押しつけて送り出した彼らへの意趣返し、ということで」
悪戯好きな少年そのものといった表情に、一同からも笑みが零れた。開戦当初は、教会からの刺客ということで警戒していたものの、終わってみれば実によく働いてくれた。
「監督役の大任、ご苦労だった。我々も君に報いたいところだが――」
「ああ、それならどうぞお気遣いなく。私も貴方がたからきちんとした形で戴くものがありますので」
誰かが、それは何かと問うた。シロウはいつものように薄く捉え所のない笑みを浮かべて告げた。
「貴方がたのマスター権です。そら、報酬としては相応しいでしょう？」
なるほど、と誰かが頷いた。
「そんなものでいいのかな？」
「ええ、もちろん。では、移譲のための儀式を行う準備を整えますので。しばしご歓談を

お楽しみ下さいませ」

「そうしよう」

――遂に、最後の最後までその不自然さに気付くことはなく。魔術師たちは、時に命よりも大切なものとなるはずの〝それ〟を、微笑む少年に無償で譲り渡すことにした。

「それよりも。報酬をどう使おうか？」

「我々はしばらく、遊んで暮らそうと思う。このところ、仕事がキツかったしな」

「時計塔で魔術書のオークションが開かれるそうだ。この報酬なら、長年欲しかった書物が最低三冊から買える」

「学部への私的寄付に使用する。予算が締め上げられていてね」

「魔術協会に所属するのも楽ではないな。私は……」

戦争は終わった。後は、報酬を受け取るだけ。ところで、彼らは一つだけどうにも分からないことがあった。

自分たちは、どうやって勝利したのだろう。

絶対に覚えていなければならないことなのに、何故か誰もそれについて答えられない。

けれど、紅茶を飲んでいる内にどうでも良くなった。

安寧と堕落の日々ばかりが記憶を占めていて、何もかもが輝いて見える。栄光はなく、名誉もなく、けれど穏やかな時間がただただ、無為に過ぎていく――。

第二章

第二章

聖杯戦争の参加者は、夢を視ることがある。マスターとサーヴァントの結びつきが、深い精神的な部分で繋がっているせいだろうか。

彼らは互いの過去を夢という形で閲覧する。第三次聖杯戦争及び亜種聖杯戦争においても広く伝わっている現象だ。

――だから、獅子劫界離は自身が遥か旧き時代のブリテンに居ても全く驚いていない。

「……まぁ、そんなコトもあるだろうさ」

これは自身のサーヴァントであるモードレッドの過去だろう。気付けば彼女が傍らに居た。握る剣は、この聖杯戦争でも彼女が愛用している武器――『燦然と輝く王剣』だ。

元々、この武器は彼女のものではない。アーサー王が手に入れ、武器庫に保管していた王位の象徴とでもいうべき剣だ。

モードレッドはこれを奪い、自身を〝王〟と称して大規模な叛逆を引き起こした。そして、アーサー王を前に彼女はこの剣を握り締め一騎討ちを挑むのだ。

「……つまり、ここはカムランか」

そう、ここはカムランの丘。モードレッド率いる叛逆軍と、アーサー王率いる正規軍との最終決戦が行われた戦場だ。アーサー王伝説の華々しき騎士物語は、この陰惨な戦争で遂に幕を閉じる。

打ち放たれた矢が、軽装鎧の雑兵たちに突き刺さる。だが全身を鋼で覆ったモードレッドは、あらゆる攻撃を物ともせずに突き進む。

絶大なるカリスマを誇ったアーサー王、遂に果たしたブリテンの統一。にも拘わらず、モードレッドの叛逆にこれほど多くの兵が賛同したのは、何故なのか。

統一を間近にして、国内では厭戦気分がはびこっていたこと——それもある。

完璧と謳われながら、道ならぬ恋に堕ちた湖の騎士（ランスロット）と王妃（ギネヴィア）の醜聞によって王の権威が失墜していたこと——それもある。

清廉であり過ぎるほどに清廉であり、一片の私情も挟まぬ王に騎士たちもまた奇妙な恐れと侮蔑すら抱いていた——それもある。

だが、もう一つ。

戦場にて、モードレッドを見ている獅子劫にはよく理解できる。彼女の戦い方は、野蛮だった。騎士たちが誇る華麗にして雄壮な剣術など、これの前では脆弱な枯枝の如くだ。本能の赴くままのように、その癖最も効率的で最適化したような殺し方。

その背後を追う兵士たちの士気は高い。それは、人間の本能に訴えかけるようなリズムだった。踏み込む足は、まるで大太鼓のように豪壮な音を立てる。

——まるで、竜巻のような自然災害（カラミティ）。

モードレッドは、名高き騎士だった。そうであろうと努力し、実際にそうであったらしい。それでも、もしも彼女が『騎士』のまま戦場に赴いていたならば、十万もの兵はついてこなかっただろう。

彼女の強さは本物で、彼女の強さはどこかに狂気を孕（はら）んでいた。だが、戦場ではそういう狂気こそが最も賞賛されて然るべき存在だ。

怪物の如く強く、突風の如く敵を蹴散らす彼女の背を、やはり狂気に突き動かされるように兵たちは追い続ける。

——この狂乱の戦士が、どこまで行くのか見てみたい。

熱狂という名の信仰。兵士たちの動機は、突き詰めれば多分それだけだった。だが、士気高い彼らとて有限だ。一人減り、二人減り、百人、千人とその数を散らせていく。

モードレッドは顧みない。兵たち、いや人間など勝利した後で勝手に増えるもの。そういう認識らしい。

彼女は敵兵の分厚い陣を優先して狙って突撃していく。木っ端の如く蹴散らせば、また分厚い陣を見定めて疾駆する。怯む相手、抵抗する相手、逃げる相手すらも悉（ことごと）く討ち果た

し、屍の山を積み上げる。

そしてやはり、モードレッドは雑兵のことなど気にも留めない。彼女がその関心を向けるのは、他ならぬ己の父――アーサー王、ただ一人だ。

「アーサー王は何処ッ!!　騎士王は何処に居るかッ!!」

声高らかに叫び、二重三重に取り囲む敵兵を斬り裂いていく。分厚い陣に挑むのは、そこに王がいる可能性が高いと踏んでのこと。しかし、まるで運命が拒絶するかのように、二人はどこまでいっても戦場で遭遇しない。

だが――壁が無くなれば、運命もまた成就する。アーサー王の軍も、モードレッドの叛乱軍も、共にほとんどが死に絶え骸を晒した。剣を杖にして休むモードレッドの前に、遂にアーサー王が現れた。

その表情はどこまでも静謐で、相手への憐憫や憎悪はない。その感情の無い貌に、モードレッドは明らかに苛立っていた。

ともあれ二人は対峙した。邪魔立てする生命は最早残されていない。

モードレッドは両腕を広げ、激情のまま叫んだ。怒りと、歓喜と、どうしようもない感情をありったけ籠めて、叫んだ。

「どうだ！　どうだ、アーサー王よ！　貴方の国はこれで終わりだ！　終わってしまったぞ！　私が勝とうと貴方が勝とうと――最早、何もかも滅び去った！」

その言葉を受け止めるは、モードレッドとよく似た顔立ちをした、まるで少年のような王だった。

モードレッドの激情を意にも介さず、言葉に応じることすらもなく。まるで、機械か何かのように剣を構えた。

それは、モードレッドにとって一番許せぬ返答だったろう。咆吼して、モードレッドは斬りかかった。

応じるアーサー王。二振りの聖剣が火花を散らす。共に疲弊しきっているが、共に負けられぬと奮戦していた。だが、その結果に変わりはない。モードレッドの言う通り、どちらが勝ったとしてもこの国は速やかに滅び去る。

「こうなる事は分かっていたはずだ！　こうなる事を知っていたはずだ！　私に王位を譲りさえすれば、こうならなかった事くらい……！」

だが、それでもモードレッドの剣先が緩むことはない。

不貞の息子として産まれ、父に憧れを抱き、拒絶され、憎悪し――そして、こうして戦場で殺し合っている。

――貴方が憎い、貴方が憎い。完璧な王である貴方が憎い。私の存在を認めなかった貴方が憎い。私は、貴方の影で良かったのに。貴方は一度も、背後を振り返らなかった。

――だからこれは当然の罰だ、アーサー王。お前の、貴様の、貴方の、何もかも、何もかもを破滅させてやったぞ！

「憎いか!?　そんなに私が憎いのか!?　モルガンの子であるオレが憎かったのか!?　答えろ……答えろ、アーサーッ!!」

その叫びに、斬り結んでいたアーサーがようやく応じた。冷ややかな、何の感情も窺わせない声で、王は宣告した。

「私は貴公を憎んだことなど一度もない。貴公に王位を譲らなかったのは――」

〝貴公には、王としての器がないからだ〟

それは、『無関心』という一つの回答。ただモードレッドの機能だけを理解し、一片の情もなく器ではないと暴き立てた。

直後、激昂して斬りかかるモードレッドの胸を、アーサー王の持つ聖槍ロンゴミアントが貫いた。どれほど硬い鋼であろうとも、その槍の前では何の意味もない。

――だがしかし。

致命傷を負いながらも、モードレッドは死力を振り絞ってとうとうアーサー王に決定的な一撃を与えた。モードレッドの兜が二つに割れ、獅子劫には見慣れた少女の顔が剝き出しとなった。

唇から血を滴らせながら、モードレッドは眼前にいるアーサー王に手を伸ばす。

「――父、上」

モードレッドは、父に触れることなく崩れ落ちる。アーサー王はそれを認めると、この戦いに勝利したことを理解し、無言で背を向けて立ち去った。

……この後、アーサー王は生き残った騎士ベディヴィエールに連れられて湖に剣を投げ返す。死んだとも、妖精郷（アヴァロン）で傷を癒やしているとも言われている。

それがアーサー王伝説の閉幕である。

獅子劫は、歩き出したアーサー王には目もくれずに、頽れたモードレッドを眺めていた。

はぁ、と嘆息して呟く。

「……くそ、嫌な夢だな」

何たるリアルさか。血臭まで伝わってくるほどに、この夢は真に迫っていた。モードレッドは虚ろな目をしたまま、まさに魂の抜けた顔で座り込んでいる。

そう、今のモードレッドは完全な屍骸だった。彼女はやがて身ぐるみを剝がされ、腐り落ちて蟲に食い荒らされていくのだろう。

アーサー王は伝説となり、モードレッドはその伝説に唾を吐いた騎士として刻まれた。

付き従っていた兵たちが悉く討ち果たされた以上、彼女を顧みる者は誰もいない。当然だ、ここは戦場……敗北し骸を晒した者は用済みの存在だ。

彼女の激情、彼女の痛切な願いはどこにも刻まれることなく、ただ消えた。本当に。最後の最後まで。自分の親にすらも顧みられず朽ち果てた。

「――ああ、まったく。厄介なサーヴァントを引き当てちまったもんだ」

相性にも限度があるだろう、と獅子劫は思う。サーヴァントは所詮、賓人（まれびと）に過ぎない。心を繋ぐことは重要だが、深みに嵌まり過ぎるのも論外だ。聖杯を手に入れれば、それで終わる関係性でしかないのだから。

だから、全くもってこの夢は嫌がらせだ。父の愛を求める子など、獅子劫にとっては最悪の厄ネタだった。

夢が覚めるのを待ちながら、獅子劫はモードレッドの屍体の傍で腰を下ろす。そして、ただぼんやりと滅びた国の、滅びた人々を眺めていた。

いつの世も、どんな国でも、最期の光景は変わりなく――。

そうして朝が来て、獅子劫は不機嫌そうに開口一番〝赤〟のセイバーに告げた。

「まったく、変な夢見せんじゃねえよ」

「……よく分からんが、それオレのせいか？」

理不尽な文句に、さしもの〝赤〟のセイバーも目を丸くしていた。

二人が目覚めたのは、トゥリファスの地下墓地（カタコンベ）ではない。シギショアラの小さなホテルの一室だ。念のため、借り受けた部屋ではなく別の人間が借りた部屋を暗示で占拠している。

魔術協会から連絡を受けた獅子劫は、潜んでいたトゥリファスからシギショアラへと一旦退却していた。歴史的な建築物で有名なこの都市は、突如出現した連続殺人鬼による恐怖に支配されている、らしい。

「……で。何でオレたちが？」

「ここでバックアップのために待機していた魔術師連中が皆殺しにされちまってな」

晴れ渡る秋の空、オープンテラスのカフェに些か不釣り合いな二人組が朝のコーヒーを飲んでいた。〝赤〟のセイバーは不機嫌そうにそっぽを向き、獅子劫は黙々と地元のローカル紙を読んでいる。

「魔術師が皆殺し……ねぇ」

トゥリファスに魔術協会の魔術師たちが入り込む隙は皆無だが、近隣都市であるシギショアラは別だ。バックアップ要員として、ここには多数の魔術師が駐屯していた。〝赤〟のマスターとして雇われた者より戦闘面での力量は劣るものの、監視や使い魔の派遣な

ど、やるべきことは幾らでもある。

トゥリファスの外で行われた〝黒〟のセイバーと、〝赤〟のランサーの戦闘も、彼らはしっかりと監視していて、獅子劫に貴重な情報を提供してくれた。

ところが突然彼らと連絡がつかなくなったらしい。魔術協会は彼らに定期的な報告を義務づけている。異常があったと考えるのは当然だろう。

「サーヴァントが関わっている可能性がある。という訳で、自由に動ける俺たちが呼び出されたって訳だ」

「魂喰いか……。でも何でトゥリファスじゃなくて、こっちなんだ？」

サーヴァントがこの現世に繋ぎ止められる為には、膨大なまでの魔力が必要になる。その魔力を分け与えるのがマスターの役割であるが、二流三流の魔術師、あるいは単なる一般人がマスターだと、それすらも果たせない。そこで、彼らは無関係の人間を襲って魂を補充しなければならなくなる。

常道ではあるが、英霊の性質次第ではその方法に異を唱える者もいる。また、魔術師としてもこの手段を取るということは自分が追い詰められている、あるいは己が二流であると宣言するに等しい屈辱的な状況であり、好んで行う者はそれほど多くはない。

「それも調査内容の一つだな。トゥリファスで騒ぎを起こすことを好まなかったか、あるいは――」

獅子劫は新聞を広げて、簡易的に描かれた地図を指差した。最初、ブカレストから始まった殺人は、次第に北上している。セイバーはそれを見て納得したように頷いた。

「トゥリファスに向かいつつ、魂喰いを行っているのか」

「その通り。〝赤〟のサーヴァントはシロウ曰く全員揃っていて、魂喰いもやっていないと宣っている。その言葉を信用するなら、コイツは間違いなく〝黒〟のサーヴァントの中で唯一存在が確認されていない――アサシンだ」

シロウ・コトミネの言葉を信用するというのは多少危険な気もするが、さすがにこの程度のことで嘘はつくまい。そして〝黒〟のサーヴァントの内、脱落したセイバーとミレニア城塞に籠もっているであろうランサー、更にライダー、アーチャー、バーサーカーとは既に一度〝赤〟のサーヴァントのいずれかが刃を交えている。戦ったゴーレムの質から察するにゴーレム使いと推測されているキャスターもトゥリファスに合流済みだろう。

唯一、アサシンだけがその姿を確認されていないのだ。無論、アサシンのクラス別スキルである『気配遮断』がある以上、ミレニア城塞で密かに待機しているという線も捨てきれないのだが……。

ともかく、確認せねばならなかった。連続殺人鬼がサーヴァントならば、セイバーに戦わせる。それ以外だったとしても、協会が派遣した魔術師を殺害している時点で敵だ。後顧の憂いは出来得るだけ無くしてしまった方がいい。

「サーヴァントならいいんだがなぁ。……で、どうすんだ？」
「夜まで待つ。その間に、死体安置所（モルグ）で魔術師の死体を見ておくつもりだ」
「ふぅん。オレは？」
「行動を共にしてくれた方がもちろんありがたいがね。昼間だし、強制はしない。もったいないが危険な状況だと判断したら、令呪で緊急招集を掛ける」
とはいえ、獅子劫はまず令呪は使うことがあるまい、と思っていた。事件はいずれも夜起こっている。昼間に活動しない、という最低限の原則を守っているのか、あるいは単純に夜でなければならない理由があるのか。いずれにせよ、昼間からの襲撃は無視できる程度に可能性が低い。ここは実質、自由時間とするつもりだった。
「死体安置所なんて陰気くさいところに誰が行くかよ。オレは何をするかなぁ……」
セイバーは街をぶらつくことにしたようだ。幸いにも、ここシギショアラは数百年の歴史を誇るような建築物が未だその姿を保存しており、ルーマニアの観光スポットの一つだ。飽きることは——いや、待て。
彼女と別れて死体安置所へと向かう途中、獅子劫は肝心の点に気付いた。彼女はサーヴァントであり、古代に生きた人間である。
「よく考えてみれば、そんなモノをアイツが見たところでどうしようもなかった」
中世の面影が残ると言っても、彼が生きていたのはそういう時代そのものだったのだ。

獅子劫が予想するに、セイバーは最初の方こそ物珍しいものを期待して街をうろついていたものの、次第に「あれ、オレが生きていた時代とあまり変わりないぞ？」ということに気付いてしまい、すぐに不機嫌になってふて腐れたまま時間を潰すだろう——。

「退屈だった……」
陽が沈み始めた頃、獅子劫とセイバーは合流した。セイバーはいかにも落胆した表情で、露店で購入したらしい大量の焼き菓子を半ば自棄（やけ）のように食べまくっている。
「……だろうな」
「高層ビルとか見たかったのに、全然無いし。観光客が集まってる建物は、珍しくも何ともなかったし……くそ、浮かれて損した」
「……だろうなあ」
「こうなったらサーヴァントと戦わなきゃ収まらない！　で、そっちはどうだった？」
「喜べセイバー。そんなお前さんに朗報だ。死体を確認してみたが、実に惨（むご）い有様だった」
嬉しそうに言う獅子劫に、セイバーが訝しげに目を細める。
「どういうコトだ？」
「使われたのは刃物と鈍器……あるいは、拳か蹴りだ。犠牲者の何人かは銃や魔術を使用した形跡があったな。そしてほぼ全員が、心臓を抉り出されていた」

「心臓？」
「サーヴァントにとっては霊核のある場所であり、人間にとっては生命の源とも言える臓器だ。これを儀式的に喰らうことで魔力をつけているのかもしれない」
セイバーはしばし考えてから、ポツリと呟いた。
「……生でかな」
「嫌なこと聞くなお前は……焼いて喰ってたらそっちの方が怖いぞ、俺」
生で喰らうなら儀式だが、調理して食べるとなると趣味である。どちらかと言えば、後者の方が恐ろしい。
「ともかく、サーヴァントであることを期待するぜ。これで違ってたら容赦はしない」
「俺の方はマスターを相手にする。そいつも魔術師の原則である神秘の秘匿を思いっきり破ってくれてるからな……」
既に新聞では「ジャック・ザ・リッパー、ルーマニアで復活」などと派手に書き立てられ、ルーマニア全土を恐怖に陥れている。こんな状態を放置する魔術師など、獅子劫にはどう考えても、頭のネジが全て吹き飛んでいるとしか思えない。
ここシギショアラも夜になったばかりだというに、既に観光客も地元の住民も安全な住居に避難している。
「適当にぶらついたら見つかるものか？」

獅子劫は頷いた。犠牲となった者たちは、最初はチンピラやギャングといった類であり、彼らがたむろしていた建物に押し入って惨殺していたと推測される。ところがその後――丁度シギショアラに後方援護のために魔術師たちが派遣されてからは、狙いが彼らのみに絞られているようだった。
つまり、今このシギショアラにいる唯一の魔術師である獅子劫界離に、高確率で狙いを定めると考えていいだろう。
「セイバー、念のため鎧に換装しておけ。相手はアサシンだ。奇襲を喰らったら着替える暇はないかもしれん」
彼女はその言葉に頷き、全身を鋼鉄の鎧で覆った。幸い、事件の影響で夜の通りを歩いているのは彼らだけだ。警戒中の警官たちとすれ違うかもしれないが、その時は暗示で誤魔化せばいいだろう。
「よし。……歩くぞ」
そうして、魔術師とサーヴァントは歩き出した。自身を囮にするように、堂々と通りの真中を。

§§§

「すっかり人がいなくなっちゃったわねぇ」
六導玲霞（りくどうれいか）は溜息をついて、三階の窓から人の気配がない死んだ街を見下ろしていた。ここ最近はいつもこうだ。夜になると、街は完全に静まり返ってしまう。
「おかあさん（マスター）、もうそろそろ違う街に移動しようか？」
玲霞のサーヴァント――〝黒〟（ジャック・ザ・リッパー）のアサシンが、くいくいと服の袖を引っ張った。
「そうね。次はトゥリファスだっけ？」
こくんと、アサシンは首を縦に振る。だが、すぐにその表情は曇っていく。
「でも、そこはちょっと危険かも。だって、まだみんな生きてるもの」
「みんな？」
「わたしたちと同じ、サーヴァント」
「……ああ。そう言えばジャック以外にもいたのね。そうなると、ちょっと怖いわね」
のんびりとした口調の玲霞に、アサシンも同意する。
「うん。わたしたちはアサシンだから。奇襲は得意だけど、複数の敵を相手にするのは不可能。まず間違いなく死んじゃう」
アサシンは幼い少女のような声で、冷徹な事実を平然と口にする。

「でも、殺し合っているのよね？」
「そう。魔術師とサーヴァントが赤組と黒組に分かれて殺し合ってるはず」
「なら、とりあえず様子見がてら向こうに行ってみない？　機会があれば食べてしまえばいいし、危険になったら逃げちゃえばいいの」
玲霞の提案に、〝黒〟のアサシンはしばし思考する。玲霞とアサシンは契約こそ結んでいるものの、魔術に関しては完全な素人である玲霞からは魔力がほぼ補充されない。その為に、こうして人の魂を喰らうことで魔力を補給している。
当然、これはサーヴァントにとって多大なデメリットだ。だが、わずかながらメリットも存在する。彼女からは魔術の気配が一切しない、従ってマスターと露見する可能性は極めて低い。『気配遮断』さえ活用すれば、六導玲霞はありきたりの人間として見逃されるだろう。
何より、現状アサシンの手で倒し得ないサーヴァントがどれほど残っているか、それを見極めておきたいところだった。
「そうだね、行こっか。――でも、また魔術師が来てくれたみたいだよ」
トゥリファスに向かうべきか迷っていた二人は、それでひとまずの結論を得た。
「あら、そうなの。それじゃ、シギショアラでの最後の食事にする？」
「……うん、そうしよう。でもおかあさん（マスター）、今日は見に来ちゃ駄目。いつもより危険かも

しれないから」
「分かった。それなら、ここで待ってるわ。いってらっしゃい」
「うん。行ってきます。ね、ね。帰ったら、またハンバーグ食べたい。……いい？」
「もちろんよ。材料は買ってあるから、キッチンを貸して貰うわね」
その言葉にアサシンは嬉しそうにはにかむと、三階の窓からその身を躍らせた。玲霞は笑顔で手を振って、それを見送る。
さてさて。いつ戻ってくるかは定かではないが、何はともあれ愛しい少女のために、美味しい食事の用意をしなくては――。

§§§

ルーマニアだけでなく、ヨーロッパ全土を考慮してもシギショアラほど特異な街はない。それの意味するところは「不変」だ。人口三万人と小規模な街だが、観光に訪れた人間たちは世界遺産として登録されている歴史地区を歩くだけで、中世時代にタイムスリップしたような感覚すら抱くという。

凹凸の激しい石畳の坂道を歩けば十六世紀から変わらぬたたずまいの民家が軒を連ね、かつて魔女裁判が行われた広場も残っている。
他、観光名所としてはヴラド三世の生家（現在はレストラン）や、ランドマークである時計塔、旧市街の一番上にある山上教会。いずれにせよ、外国の人間が「かつてのヨーロッパ」を体験するには最適の観光地だ。
そしてシギショアラは今、連続殺人鬼によって恐怖に包まれていた。訪れた観光客たちを次々と殺害し、死体はいずれも心臓が引き抜かれているという凄惨な状況だ。
死体以外の証拠はなく、被害者たちの関連性も全く見つからない。だが、極少数の者のみがその真実を知っている。犠牲者はいずれも魔術師――即ち、シギショアラで何かとてつもない〝異常〟が発生しているのだと。

獅子劫と〝赤〟のセイバーは一時間ほどナトリウム灯がぼんやりと輝く街をそぞろ歩いた。ガチャガチャという鎧の音が響くが、幸運にも見咎める者は皆無だった。ワイン瓶を片手に酔っぱらったホームレスがポカンとした表情で獅子劫とセイバーを見ている。暗示を掛けるまでもないと獅子劫が手を振ると、彼は自分の頭をごつごつと殴って、また飲み始めた。
数度警官に遭遇したものの、獅子劫の暗示ですぐに追い払った。警官たちとて、殺人鬼

の警戒任務などしたくもないのだろう。強制するまでもなく、簡単に追い払えた。
それよりも、今はセイバーの方が深刻だった。つい先ほどまで退屈だ、つまらない、まだか、とローテーションの愚痴を繰り返していた彼女が、無言になっている。
「セイバー、どうした？」
「……悪い、集中させてくれ。嫌な予感がしてならない」
その言葉に獅子劫の顔も緊張で引き締まる。彼女がこれほどの警戒態勢を取るのなら、間違いなくサーヴァントだ。
いつしか二人の歩調は遅く、慎重なものへと切り替わっていった。周囲を見回す——街灯の薄暗い光が、逆に二人の視界を混乱させている。凍えた空気が、獅子劫の首筋を舐めるように通り過ぎた。
「……霧が出てきたな」
セイバーの言葉通り、二人の周囲にはいつのまにか霧が発生していた。これでは、ますます視界を遮られてしまう——いや、待て。
「霧……？」
つい先ほどまで晴れ渡っていたはずなのに、視界に障害を覚えるほどの霧が、唐突に発生するものだろうか？　……有り得ない。
獅子劫とセイバーはほぼ同時に足を止めた。既にセイバーは剣を引き抜き、獅子劫も愛

用のショットガンのホルスターに手を掛けている。
「この霧は……」
獅子劫が何かを呟こうとした瞬間、鼻の奥で火花が散るほどの痛みに襲われた。反射的に咳き込み、口を押さえ込む。
「マスター!?」
「毒だ！　吸うな、セイバー！」
口元と鼻を押さえ、獅子劫は蹲る。わずかな呼吸だけでも、激痛が鼻の奥で爆発し、視界が澱み始める。
「おい、しっかりしろマスター！」
咄嗟の判断で獅子劫は自身のジャケットを脱ぐと、口と鼻を覆い隠した。魔獣の皮を剝ぎ取って作られたジャケットは、一工程（シングルアクション）程度の魔術ならばほぼ無効化できる。ジャケット越しに息をすると、わずかだが痛みが和らいだ。やはり、魔力で生成された霧らしい。
「……くそ、ともかくこの霧から逃げるぞ」
「ああ、逃げることができたらな！　引っ張るぞ、ついてこい！」
セイバーは右手に剣を、左手に獅子劫の手を握り締めて走り出した。幸いにも、対魔力ランクが高い故なのか、セイバーの方は霧によるダメージをほとんど受けておらず、視界の悪さもまるで気にならないようだ。彼女の鋭敏な『直感』は、霧の妨害をものともして

いない。
だが、セイバーも獅子劫も共に確信している。これがただの霧ではない以上、当然ながら〝次〟があるはずだ。問題は、それがいつやってくるかなのだが……。走り、霧から脱出しようとしながらも、セイバーはそのタイミングを慎重に見計らっていた。
脱出経路を的確に選択できたせいか、霧は次第に薄れ始めていた。

――人はいつだって、安心を求めている。危機的状況下に陥ったとき、どれほど冷静に事態を処理しようとも、そこから抜け出した直後に精神は弛緩する。
――待ち構えていた死の顎から逃れるほんの少し後。如何なる人間であろうとも、止めていた息を吐き出すであろう心の隙間。
――連続殺人鬼は、その弛緩を見逃さない。数多の人血啜りし刃を手にして、そっと背後へと忍び寄る。

「よし、抜けた……！」
セイバーと獅子劫の二人は、霧からの脱出に成功した。この瞬間、獅子劫は新鮮な空気を吸い込むことだけしか頭になかった。死の恐怖から抜け出し、精神がほんのわずか弛緩する。その背後から、殺人鬼が喉を掻き切ろうと忍び寄る――。

だが、獅子劫の前に立っていたセイバーは振り返りざまに右手の剣を薙ぎ払い、更に獅子劫の足を軽く払うことで彼を地面に転がした。
一閃。
石畳の地面に甲高い音が響く。セイバーの斬撃が、アサシンの握っていたナイフを斬り落としていた。
「……あ」
「――生憎と、そいつはオレのマスターでね。お前と戦うのは、オレの方だ」
獅子劫が振り返ると、自分のほぼ真後ろに誰かが立ち尽くしていた。気付かなかった、これほど接近されていたにも拘わらず――まるで、分からなかった。
そして驚嘆すべき事柄がもう一つ。
獅子劫の背後に立っているのは少女だった。歳は彼のサーヴァントである〝赤〟のセイバーよりも二、三ほど若く見える。短く乱雑に纏められた銀色の髪、アイスブルーの瞳はわずかな驚きに見開かれている。腰のあたりに複数の鞘を吊り下げているが、肝心のスカートを穿いていない。上に着ている革製の服も相まって、幼い容姿ながらにまるで娼婦のような扇情的な雰囲気を漂わせていた。
「斬られちゃった。ひどいことするね」
ぽつりと、そう呟いて真っ直ぐセイバーの顔を見る。

「――何が酷い、だ。サーヴァントの癖に、魂喰いをやってるテメェなんぞに言われたかねぇな！」

不愉快さを隠そうともせずに、セイバーは剣を突きつける。アサシンは剣を恐れる様子もなく、何ともあどけない表情で首を傾げて答えた。

「別に、いいじゃない……ねぇ？」

次の瞬間、セイバーは自身の顔面に放たれた刃物を籠手で弾いた。アサシンは語りかけながら、手首から先を微動だにせず、ごくごく自然な動作で刃物を投擲したのだ。

突然の奇襲に対応できたのは、セイバーの直感と技の冴え故だろう。だが、籠手で刃物を弾いた一瞬の隙を衝いて、アサシンは後方へと跳躍していた。そこにはまだ霧が色濃く漂っており、たちまち彼女を覆い隠す。

「ここで待ってろマスター！」

そう言い残すと、セイバーは再び霧の中へと飛び込んだ。霧を吸い込むと、多少軀が重く感じられる。だが、この程度ならば支障はないとセイバーは判断した。

微かな音に耳を澄ませ、本能の趣くままに剣を振るう。先ほどと同じ音――投擲された医療用メスカルペルを叩き落とした。

「わあ。なかなかやるね」

少女の声に、セイバーは舌打ちした。声が四方八方から聞こえ、音の起点がまるで分からない。

「吐かせ。英霊ですらない〝掃除屋〟が何をほざく。いや、お前は掃除屋ですらない。ただの人殺し、ただの殺人鬼だろうが！」

「あれ？　何で分かったの？」

「なに――？」

セイバーの精神が、一瞬驚嘆で凝固した。

「わたしたちの真名は、切り裂きジャック。ねえねえねえねえ、あなたのお名前、教えてちょうだい？」

耳元で囁かれた。セイバーは即座にその方向を剣で両断したが、彼女が振り払ったのは霧だけで手応えはない。そんなことよりも、今は真名を知った方が重要だ。

――それは、現在より百二十年ほど前の出来事。英国、霧の都の人間は恐怖で震え上がっていた。ソレが狙った相手はいずれもイーストエンドのしがない娼婦。確実にソレが殺害したとされるのはたったの五名。にも拘わらず、数多の伝説のみを残して消え去った世界最初の連続殺人鬼。

新聞に投函された署名から、人は彼を切り裂きジャックと呼称した。

たった百二十年前。神秘はより古いほどに強固な概念を持つという観点からすれば、このサーヴァントは恐らく此度の聖杯大戦では図抜けて脆いだろう。

彼のアーサー王は、幾たびも遠征に出て華々しい功績を挙げた。モードレッド自身も、叛逆の騎士として名を歴史に刻んでいる。他のサーヴァントも概ね似たり寄ったりだろう。時代と世界は異なれど、名誉ある戦いに打ち勝ってその名を遺したはずだ。

比較すると彼女は英雄ではない。娼婦を数人殺害しただけの薄汚い殺人鬼でしかない。

だが――と、セイバーは剣の柄を握り直し、精神を集中させる。

そんな殺人鬼程度が、サーヴァントとして召喚されるまでに至ったのは何故か？

……それは、殺人鬼の生涯があまりに謎に包まれ、あまりに人々を恐怖させたからに他ならない。人は英雄の戦いを見て奮い立つかもしれない。勇気を抱き、我も我もとその拳を掲げるかもしれない。だが、彼女は違う。

彼女は一方的に、徹底的に、絶望的な殺戮で世界に名を刻んだ。もし彼女を信仰している者がいるならば、それはきっと殺人鬼たちに違いない。

なるほど、彼女は暗殺者に相応しい。音もなく、気配もなく、ただ標的を殺す。これほどにマスター殺しに特化した存在はそうそうあるまい。

セイバーにとって、この霧はさほどの障害ではない。しかし、アサシンのスキル『気配遮断』故か、一向に存在を摑めない。周囲で声がする以上、間違いなく近くに存在するはずなのだが――。

「ああ、やっぱり！　あなた、おんなのひとなんだ」

その言葉に、セイバーがわずかに歯軋りした。

「それなら――」

「うん。それなら――」

「そうしよう」

――誰かと語り合うような声。久しく抱いたことのない、蛞蝓のように薄気味悪い感情がわずかにセイバーの胸を過ぎった。

これは、恐怖だ。闇に潜む正体不明の殺人鬼。相対するのではなく、常に奇襲、常に先手を取られる。その手を読み間違えれば即、死に至るだろう。

ならば――どうする？

「……ハッ。舐めるなよ、クソガキがッ!!」

即断。セイバーはこびりついた恐怖をそこにある皮膚ごと引き剝がすように、兜を鎧へと格納した。その端正な顔を露わにすると同時、手にした剣を構えて咆吼した。

「……赤雷よ！」

「――――!?」

薄気味悪い闇ならば、それは己という名の光で吹き飛ばすまで。剣に魔力をありったけ

叩き込み、赤い雷（いかずち）を周囲に噴出させた。

まさに雲散霧消――アサシンはぽかんとした表情で、セイバーを眺めている。

「終わりだ、アサシン。思う存分泣き叫ぶなら、今がチャンスだぞ。首を刎ねられりゃあ、悲鳴も上げられなくなるってもんだ」

「やだよ。まだ、お腹空いてるんだもん」

子供のような口振りで、彼女は二挺の肉切り包丁を両手に構えた。諦めて逃げられるよりはいい、とセイバーは不敵な笑みを浮かべつつ『魔力放出』のタイミングを計る。

霧が消えたせいで、軀の重みも既に無い。ならば、最優たるセイバーが闇に潜まぬ殺人鬼如きに遅れを取るはずがない。

二人の戦いを見守る獅子劫は、その点において全幅の信頼を置いている。ただし、不安要素が一つだけ存在する。彼は霧から脱出するなり、ジャケットの内ポケットから一つの祭具を取り出した。

死蠟化した魔猿の手首である。やむを得ずその場を動けない場合に限り、彼はこの手首で素早く人払いの結界を構築する。それも、生半可な広さではない。自立する手首は鼠のように這い回りながら、まるでその空間を切り取ったかのように徹底的な閉鎖空間を出現させる。

試したことはないが。夜のニューヨークや東京渋谷の交差点であったとしても、これなら人を完全に払う自信があった。もっとも、そういう繁華街には監視カメラなど人以外の目が幾らでも存在するので、行うことはまずないが。

――不安要素とは。

つまり、自分と彼女たち以外が払われた空間に何者かが侵入してくるというのは、非常に不味い事態だということだ。

掌を縫い針で突き刺されたような痛み。獅子劫は結界への侵入者を感知した。

「セイバー！」

彼の言葉は一触即発だった空気を爆発させた。〝赤〟のセイバーと〝黒〟のアサシン（ジャック・ザ・リッパー）、双方が相手目掛けて突貫する。

セイバーが狙うは上段からの振り下ろし、波濤の如き勢いで一刀両断だ。一方のアサシンも、またひどく不気味なほどに滑らかな動きで接近戦を挑んだ。狙うは急所の首筋。セイバーが人の領域を超越した超人的な突撃ならば、アサシンの方はどこまでも人間性を捨て去った人ならざる怪物（ケモノ）の領域に達していた。

――勝てる。

飛び出した瞬間、セイバーは確信した。この一撃はアサシンに致命傷を与えることに疑念なし。タイミングも、速度も、力も、全てが噛み合っていた。

――だが。

同時にセイバーは、獅子劫の呼びかけが頭に引っ掛かっていた。今の呼びかけには、確実に意味がある。そうでなければ、彼は自分の名を呼びなどしない。そこまで考えたところで悪寒と共に悟った。

何処から到達するかは分からない。だが確実に狙われている。

遠距離からの投擲、もしくは射撃。相手はランサーかアーチャーか。いずれにせよ、このままでは喰い殺される……！

論理的思考より先に軀が動いた。猛烈な突進にわずかながら制動をかけ、強引に軀を螺旋する。今の自分に可能な行動は、これだけだ。軀を傾けた先に、この都市の名所の一つである時計塔が見えた。

瞠目する。時計塔の尖塔に、二人の人影。淡い月光に照らされ、こちらに弓を向けているのはまさしくサーヴァント――！

瞬間、爆風と轟音がセイバーの全身に叩き込まれた。

§§§

射った矢は、ほぼ狙い通りに着弾した。だが、標的は狙い通りに動いてはくれなかった。

アーチャーは弓を下ろすことなく、次の弾を装填する。

「成功ですか？」

マスターであるフィオレの問い掛けに、アーチャーは首を横に振った。

「いえ。残念ながら、セイバーは今しがたの一撃を躱しきりました。やはり最優と評されるだけのことはある」

「アサシンの方は――」

「アサシンも仕留められませんでした。手傷は負わせましたが」

シギショアラの名所である時計塔は高さ六十四メートルと都市随一の高さを誇っており、街のほぼ全てを見渡せると同時、街のあらゆる場所から視認できる。

四つの小塔に取り囲まれている中央の尖塔。その最上部回廊のさらに上、細いわずかな足場とも呼べない場所に、二人は立っている。

並の人間ならば数秒も耐えられない場所に平然と立つのは、アーチャーが天性のバランス感覚を有している為だろう。彼の技量ならば、驚くには当たらない。

問題は、マスターであるフィオレだ。彼女は変質した魔術回路の影響で両足が不自由だ。普通ならば立つことはできず、車椅子が載るほどの広さもない。にも拘わらず、彼女はその足場に存在している。ただし、立ってはいない。

彼女の両足は浮遊していた。背中から金属製の長い腕が伸びており、それが細い足場で彼女の軀を支えていた。

「――マスター。〝黒〟のアサシンは撤退を決めたようです」

「では、予定通り〝赤〟のセイバーとの戦いに移行しましょう。アーチャー、貴方にはセイバーの相手をお願いします。私はマスターである獅子劫界離と戦います」

できれば、今の一撃で〝黒〟のアサシン諸共に〝赤〟のセイバーを仕留めておきたかった。〝黒〟のアサシンと〝赤〟のセイバー、どちらを優先すべきかと問われれば無論セイバーだ。こちらのセイバーを失った今、絶対にここで討ち果たしたいサーヴァントだ。

「マスター。決して無理はなさらぬように」

「ええ……分かっています」

アーチャーの見立てでは、セイバーのマスターである獅子劫界離と己のマスターであるフィオレとでは、ほぼ互角だ。経験では獅子劫が勝り、センスではフィオレが勝る。後は、どれほど冷静にこの戦況に対処できるかどうかだ。

セイバーからの憤怒の視線がアーチャーに突き刺さる。露わになった素顔は、驚くほどに若く、美しかった。だが数多の英雄を見てきたアーチャーには分かる。彼女は紛れもない英傑の相を持っていた。

胃の底が熱くなるような高揚感――アーチャーは苦笑する。どうやら、やはり己もまだ

まだ青二才ということらしい。あるいは、全盛期の姿で召喚されたが故だろうか。自分でも驚くほどに、今のアーチャーは無謀を好んでいる。

セイバーはマスターである獅子劫と一瞬視線を交錯させてから、即座にアーチャー目掛けて突撃。彼女が時計台に到達するまで十秒と掛かるまい。

フィオレはそれに合わせ、セイバーを迂回しつつ獅子劫のもとへと向かう。

セイバーの視線が一瞬、フィオレに向けられた。瞬間、させぬとばかりにアーチャーが番えていた矢を射ち放つ。

その矢を、セイバーは一刀のもとに叩き落とした。それでセイバーの心は決まったらしい。最早フィオレには目もくれず、一直線にアーチャーへと襲いかかる――。

§§§

セイバーがアーチャーの一撃から立ち直るには、五秒の猶予が必要だった。だが、その五秒が過ぎたとき、既にアサシンは撤退していた。

舌打ち――仕留めきれなかった悔悟と、結果的にそれを邪魔したアーチャーへの憎悪

が、セイバーの顔を怒りに歪ませる。
「マスター。逃げたアサシンと、あそこにいるアーチャー。どっちを討つべきだ？　オレとしては時計塔でいい気になってるアーチャーの方がお勧めだ」
剣を時計塔に向けて突きつけ問い掛けるセイバーに、獅子劫はやれやれと頭を掻いた。既にどう答えようが、結果は決まっている。付け加えるに、逃げるアサシンを追うというのはかなりの困難だろう。何しろ『気配遮断』スキルがあるせいで、目視できなければどうしようもない。
「……お前もうアーチャーと戦う気満々じゃねえか。ま、それが正解だな。マスターの方はこっちで何とかする」
「悪いな、マスター。それじゃあ、アーチャーを潰しに行ってくるぜ」
喜色満面。セイバーの目にも、アーチャーが次の矢を番えていることくらいは分かる。全力疾走程度では全く速さが足りぬ。だがしかし――。
セイバーには『魔力放出』スキルがある。宝具である兜を外したことで、更なる魔力をその身に纏い、それを一気に噴射することで爆発的に加速する。
「よし……セイバー、行ってこい！」
「応ッ!!」
獅子劫の声に気合一閃。その一歩を力強く踏み込んだ。それは、人の形をした砲弾に等

しい。遥か彼方に居るはずの弓兵目掛けて飛んでいく。
アーチャーは動かない。セイバーはちらりと、自身を迂回するように獅子劫のもとへと向かうアーチャーのマスターを見た。だが、それを許さぬとばかりに矢が放たれる。剣でそれを叩き落とし、セイバーは笑う。
――何、安心しろアーチャー。オレはお前を叩き潰したいのさ。
アーチャーのマスターは、自身のマスターである獅子劫が相手をする。まず敗北することはあるまい。そう確信している自分に気付いて少し驚く。これまで自分が魔術師という存在を信頼することなど、まず無かった。魔術師という連中は誰も彼も性格が拗れに拗れた引き籠もりのような存在ばかりだと思っていたのだ。いや、実際にこれまで会った魔術師は大概そうだった。
だが、ああいった自分と馬が合う魔術師もいたのだ。猪突猛進、攻撃九割防御一割で思考するタイプというか。
そう言えば自分が召喚された触媒は、円卓の欠片だった。それはつまり、円卓の騎士の内、誰が出てきても――それこそ父を侮辱したランスロットや忌々しい優等生のガウェインであったとしても――おかしくはなかったはずだ。
なのに、召喚されたのは自分だった。その意味を彼女は考える。いつかはきちんと考えなければならないと思う。聖杯をこの手にするために。

セイバーはそこで余分な思考を打ち切った。六十メートルの高さがある時計塔へと向かう。必要な歩数は十二歩、両手両足を使って登るのではなく、九十度の外壁を二本の足で疾駆する。

既にアーチャーは目の前。姿はもちろんのこと、その表情すら観察できる。革鎧を身に纏った優男だった。なるほど、いかにも弓兵らしいスタイルだ。だが、ここまで接近されてしまえば、最早アーチャーに打つ手はない。

弓術はこと遠距離からの狙撃としては最高に優秀だ。現在の銃火器と比較しても、ほぼ無音で放つことができるという、大きなアドバンテージを残している。無論、矢を狙ったところに中てる為には、想像を絶するほどに苛酷な訓練と天賦の才が必要だ。だが、仮にもアーチャーとして召喚された英霊が、それらを持ち合わせていないはずはなく、遠距離に存在する限り、アーチャーというクラスはほぼ無敵だ。

だが、遠距離から一気に近距離まで接近するような速度を持つサーヴァントが存在する場合、状況はガラリと変化する。

弓術にも当然ながら幾つもの欠点がある。一つ、連続しての射撃がほぼ不可能に等しい。二つ、矢の軌道で居場所が容易く露呈する。三つ、近距離での弓はあまりに脆弱。

セイバーが勝利を確信するのも無理からぬこと。ここまで接近した以上、弓兵に為す術はない。——そのはずだった。

アーチャーはセイバーの猛烈な突撃にも全く慌てることなく、滑らかに次弾を装填する。引き絞られた矢は真下からやってくるセイバーの顔目掛けて放たれるが、彼女は両手に握った剣でそれを弾いた。

「獲ったぞ、アーチャー……!!」

既に次の矢を番える暇はない。先ほどのアサシンと同じく、一撃で仕留められる確信がセイバーにはあった。

だが、アーチャーとて歴戦の英霊。彼はこのとき、セイバーの直感すら上回る予想外の行動に出た。細く頼りない足場から、躊躇いもなく——宙空へとその身を投げ出したのだ。

唖然とするセイバー目掛けて、アーチャーは落下しながら次の矢を番えて射ち放った。狙われたのは、もっとも装甲が厚いはずの胸板。だがしかし、アーチャー——射手座のケイローンが放つ矢は、是全て必殺の領域。

星の光を纏った矢は、セイバーの鎧を強引に打ち破った。肩口に冷たい何かが忍び込み、続けざまに目が眩むような痛みが全身に走った。だが重装甲が幸いしたのだろう、胸を狙ったはずの矢は軌道がズレて肩に突き刺さったようだ。

だが、そんなものは勝利を確信していたセイバーにとって何の慰めにもならない。

「テ、メェ……!!」

肩から全身へと波紋のように広がる激痛を、セイバーはその怒気のみで打ち消した。落下するアーチャー目掛けて、躊躇いもなく『魔力放出』を使用しての銃弾落下（バレットタイプ）――！

墜ちる星のようだ、とアーチャーは思った。決して優美ではないが、あまりに強烈であまりに激烈、そしてそれ故に魅せられる光だった。

なるほど、セイバーは素晴らしい英霊だ。あの一撃を喰らって即座の反撃に転じるには、その痛みや衝撃をものともしない強烈な意思を持たねばならない。

コンマ数秒後――自分が着地すると同時、セイバーは今度こそ自分を一刀の下に斬り伏せるだろう。さて、それを防ぐためにはどうするべきか。

弓術ではない。如何に高速を誇っていても、既に振り下ろすだけで動作が終わる剣相手ではさすがに分が悪い。剣もなく、槍もなく、弓は使えず、騎乗すべきものもなく、狂う訳にもいかず、魔術や短剣（ダーク）ではこの勢いを止められない。

――ならば。最後に残った武器で戦うしかあるまい。

六十メートルを落下、そして着地――寸前、片足を勢いよく地面に叩きつけてわずかに横へと軀をズラした。

両腕が伸ばされる。吼（ほ）えるセイバーは、彼の不可思議な動作に気付いてはいたが、今はそれを考慮に入れている場合ではなかった。

振りかぶっての一撃、加えて『魔力放出』による爆発的な加速、宝具の解放を除いた通常状態の場合、これに勝る一撃は存在しないといえる。

だが。喰らえば間違いなく致命傷になるであろうソレに対して、アーチャーは恐るべき――というよりは、セイバー曰く〝イカれている〟行動に出た。

両腕を伸ばし、突貫してきたセイバーが剣を振り下ろすより先にその腕に絡みついたのである。手首を押さえられた瞬間、神経が警報を鳴らした。斬撃は肩口に食い込んだあたりで強制的に停止、アーチャーは突撃の勢いを殺すことなく巧みに体重を移動させ――。

（投げ技……!?）

それが何なのかセイバーが気付いた瞬間、彼女を逆しまに宙へ舞わせていた。柔道の一本背負いにも似ていたが、手首の関節を押さえ込んでいた分、徹底的に容赦がない。

アーチャー……ケイローンはケンタウロス族随一の賢者であり、太陽神アポロンに医学や音楽を学び、女神アルテミスからは狩猟を学ぶなど、神々から教えを授かっていた。それ故に彼の下には幼い英雄たちが集い、様々な学問や武術を学んだのだ。

剣や槍、そして弓――それ以外に、徒手空拳で戦う技もケイローンは当然のごとく獲得していた。それは拳闘（ボクシング）と組技（レスリング）を複合させた完全なる格闘術。

即ち古代ギリシャ語でパンクラチオン（全ての力）――世界最古の総合格闘技である。

「ガッ……!!」

大地という名の兇器に叩きつけられ、セイバーは臓腑に響くような衝撃に目を見開いた。全身がほんの数秒、鎖に縛り付けられたように凝固する。あまりに致命的な状況――だがしかし、セイバーが倒れ伏したにも拘わらず、アーチャーは止めを刺すこともなく苦悶しながら膝を突いていた。肩口に食い込んだ刃は、致命傷には至らずともそれに極めて近い一撃だった。

本来ならば柄に近い部分では力が入らない。その為、革鎧を斬られる程度で済むだろうとアーチャーは判断していたのだ。だが、それは余りに読みが甘かった。セイバーの一撃を、恐らく最善の状態で受けたにも拘わらず、肩口の傷はあまりに深かった。

恐らく、治癒魔術で修復するまで右腕は動くまい。つまり、弓が使えないという訳だ。アーチャーは苦笑する。追い詰めたつもりが、逆に追い詰められた状態となっている。自分に与えられた決定的なチャンスは、そのまま致命的な状況へと引っ繰り返っている。

彼は躊躇なく決断した。どう動いても、どう戦っても、この状態で止めを刺せる手段が思い浮かばない。セイバーが起き上がるまで、というわずか三秒にも満たない時間の猶予を有効活用するなら、撤退が最善策であろう。

アーチャーは激闘を繰り広げているフィオレに状況を報告、撤退を具申することにした。

§§§

死霊魔術師（ネクロマンサー）はまず、己の死を見つめるところから修練を開始する。自分自身に幻覚をかけ、肉体が腐乱していく様を幾度も幾度も観察する。鏡越しに見ていた自分が、おぞましく朽ち果てていく――それに、慣れる。死を見つめ、死を抱え、命が死と共に在ることを知る。

そして死霊魔術（ネクロマンシー）とは、その死を統べる術式である。

獅子劫界離は、煙草を吸いつつ彼女を待った。探知用の結界も、防御用の結界も張らず、あまりに無防備な姿を晒している。

もっとも相手をするのが彼女であれば、そんなものはまるで意味がないことも獅子劫はよく理解していた。事此処に至っての結界など、単なる魔力と道具の浪費に過ぎない。

獅子劫は風向きが少し変わったことに気付くと、火の点いたままの煙草を放り捨てた。空を見上げ、そこに浮遊する少女に呼び掛ける。

「さて、と。自己紹介は互いに省いて構わないよな？」

男が嗤（わら）い、少女は微笑む。



二つの建物に挟まれたやや狭い路地。フィオレ・フォルヴェッジ・ユグドミレニアは建物の外壁に、背部から伸びた二本の『腕』を突き刺していた。どこか滑らかで硬質的な印象があり、蜘蛛の肢にも似ている――獅子劫はそう思った。

「……そうでしょうね。お互いに名を知らないはずはありませんし。ただ、一応警告させて戴けないでしょうか？」

「どうぞ」

「――立ち去りなさい、死霊魔術師。此処は遍く全て我ら千界樹の大地。踏み入った無礼は不問に処します。この警告を看過するようであれば、死という等価を以て、愚行の代償を支払っていただきます」

「へぇ。……で、俺が聞くと思ってンのか？」

獅子劫の言葉に、フィオレは満面の笑みを浮かべて告げた。

「いいえ。でも、こう宣言しておかないと、私の内側で覚悟が決まらないので」

なるほど、と獅子劫は苦笑する。翻って言うならば、宣言した以上――殺すことに、躊躇はないということか。

そしてもちろん、獅子劫はそんな警告に従う意志はない。ホルスターの散弾銃に手を伸ばしたのが、その回答だ。途端、周囲一帯の魔力密度が濃くなった。

最早互いに軽口を飛ばす余裕はない。フィオレは獅子劫界離がフリーランスの魔術師で

あり、戦闘経験に秀でていることを知っている。獅子劫はフィオレ・フォルヴェッジ・ユグドミレニアが、ユグドミレニア一族の次代を担う逸材であることを知っている。

――この人が使う魔術は死霊魔術。だけど、死者を食屍鬼（グール）に変えて使役するような単純なものじゃない。例えば、彼が手にしている銃器……。

――この嬢ちゃんが使う魔術は降霊術（ユリフィス）と人体工学……確か、接続強化型魔術礼装（ブロンズリンク・マニピュレーター）とか言ったか。

両者の凍りついた空気を吹き飛ばしたのは、近くにあったゴミ箱の金属蓋だった。風にでも吹かれたのか派手な音を立てて落ちたそれが、互いの緊張を爆発させた。獅子劫は滑らかな動作で切り詰め型（ソードオフ）ショットガンを引き抜き、フィオレは猛然果敢に空から舞った。

銃爪（ひきがね）を引く――切り落とした魔術師の指を加工して製造された銃弾が、魔術師の気配を嗅ぎつけ、脳天に喰らいつくべく襲いかかる。

「――守護の錫腕（ユーピター）、迎撃命令」

過（あやま）つことなく敵の頭を狙い、決して避けられぬ必滅の魔弾。脳天に食い込む以外の結末無きその魔弾を、彼女の背後から伸びた腕が躊躇いなく摘（つま）んだ。

獅子劫が愕然としたのは、ほんの一瞬。機敏な動きで後退しつつ、通りに停車していた乗用車の陰に隠れた。背から伸びた二本の義手がそれぞれ二つに分割。計四本となった彼女の『腕』、その内二本が彼女の代理足となって石畳に突き刺さっている。そしてもう二

本が、獅子劫に向かって真っ直ぐ、威嚇する蛇のように顎を開いていた。

「――戦火の鉄腕（マルス）、射撃命令」

銃弾にも似た音と共に、その開口部から『光弾』が射出された。銃弾に負けず劣らずの勢いで放たれたそれは、獅子劫の足元にあった石畳を粉砕する。

「ええい、くそ。何でも有りかよ、あの腕……！」

自身のことを棚上げしつつ獅子劫は乗用車を盾にして、機関銃の如き呪弾の掃射に耐えた。空薬莢を放り捨て、腰のポケットから弾を選び再装填（リロード）。

牽制の銃弾を一発放ったあと、加工した梟（ふくろう）の眼球を取り出して車の隙間から投擲した。

右目を接続（リンク）し、彼女を観察する。まず、彼女が装着している魔術礼装を改めて視認した。

獅子劫が予め手に入れたプロフィールによると、彼女の身体的特徴として魔術回路の変質のために足が動かない、というハンデを背負っていたはずだった。

が、あの礼装の前ではそんなものがまるで問題にならない。彼女にとって、魔術礼装は極めて優れた手足そのものだ。亜音速とはいえ、放たれた魔弾を全く問題なく摘む点から、精密動作という部分でも群を抜いている。

――その自律防御の反応速度も、ほぼ完璧（パーフェクト）だ。恐らく、エルメロイの〝姫君〟が連れている自律型女中ゴーレムである月霊髄液（ヴォールメン・ハイドラグラム）に匹敵（メイド）している。

とはいえ片や水銀、片や金属腕という性質上、点ではなく面で攻めるクレイモア地雷な

どの対処は難しいだろう。

「……つまり、こっちだな」

獅子劫は内ポケットから魔術師の心臓を取り出した。内部に魔術師の歯や爪を埋め込んだこの臓器は、対魔術師用としてはもっとも適している。散らばる歯や爪には、怨念じみた魔力が籠められており、軀に食い込めば一種の『ガンド』にも似た作用を及ぼす。だが、こちらの方が死んでいるせいか、ずっと強力な効果がある。

平たく説明すると、歯や爪が皮膚に食い込むと腐って溶ける。

ピンにも似た筋繊維を引き抜くと、停止していた心臓が瞬く間に脈動を始めた。梟の目で彼女の位置は把握している。乗用車の陰に隠れたまま、獅子劫は急激な気流操作を使用して、絶妙な場所に手榴弾を投擲した。

「く、ッ――――!!」

唯一、獅子劫に過ちがあったとすれば一度この手榴弾を、ホムンクルスとの小競り合いにおいて使用し、フィオレたちに見せていたことであろう。回収されたホムンクルスの死体を調べ、その腐乱した様子から威力と効果を推定していた彼女は、これが致命的なものであることを識っていた。

「――轟然の鉛腕、圧潰！」

彼女の右脚を代行していた金属腕が、へらのように平べったく変形したかと思うと、転

がってきた心臓を上から押し潰した。爆破の衝撃で周囲に散らばるはずだった歯や爪は押し込まれ、フィオレの軀を傷つけることはなかった。

だが、獅子劫としてはほんのわずかでも時間を稼いだことが重要だった。盾にしていた乗用車に乗り込んだ彼は、サンバイザーからスペアキーを取って素早くエンジンをスタートさせた。

けたたましいエンジン音に慌ててフィオレが振り返ったその瞬間――アクセルを踏み込まれた車の猛烈な突進で、彼女は正面から轢かれた。

――もう！　何て滅茶苦茶なの、この人！

ボンネットに絡みついたフィオレは大した負傷もない。咄嗟に四本の義手が彼女を守りきったのだ。

だが、このままでは壁か何かに押し潰されかねない。彼女は義手をボンネットに食い込ませ、自分の軀を引き上げた。運転席の獅子劫と視線が交錯する――振り落とそうとして、彼はハンドルを勢いよく左に切った。

だがフィオレの義手が二本、ボンネットを貫いて軀を完全に固定化させた。更に、残りの義手によって車のフロントガラスを屋根ごと引き剝がした。

無防備になった獅子劫だが、彼は何時の間にか切り詰め型ショットガンを手にしていた。会心の笑い――ブレーキを押し込んだ。どうにかボンネットに喰らいついていたフィ

オレは不意の反動に吹き飛ぶ。

四本の義手が危機的状況を察知し、クッションとなるべく石畳に突き刺さった。瞬間、フィオレは理解した。この状態だと、自分は義手で迎撃できない。

運転席にいた獅子劫がショットガンを引き抜いた。死の気配に総毛立つ——銃爪が引かれ、亜音速の魔弾が襲いかかる。フィオレは対抗策が思い浮かばない。

〝しまっ……!?〟

そこに素早く割り込んでくる獣の影があった。

「何!?」

魔弾は獣の脳を打ち砕き、その使命を終えた。呆気に取られたフィオレに建物の陰に隠れた何者かから声が掛かる。

「姉さん、ボケッとしてないで！」

「あ。う、うん！」

慌ててフィオレが立ち上がる。義手は既に彼女を守るために万全の態勢を取り戻している。命令された義手が、乗用車ごと吹き飛ばそうと光弾を一斉掃射する。

獅子劫は舌打ちしつつ、再び乗用車の後ろに隠れた。今しがたの呼び掛けから、正体を摑もうとする。

「姉、姉、姉……お前、カウレス・フォルヴェッジ・ユグドミレニアか!?」

「そうだ！」

建物の陰から応じる叫び。厄介なことになった、と獅子劫は思った。魔術師とは出来得るだけ一対一かそれ以上に有利な状況を作り出さなければならない。一人で二人の魔術師と戦うのは、愚行にも程がある。

戦争前に渡されたプロフィールで、この弟が姉とは比較にならないほど魔術面で劣っているということを踏まえてもなお、やはり愚かしい。魔術で劣っているから戦闘においても弱いとは決して限らない。

むしろ、劣った魔術を補強するために『何でもやる』タイプの魔術師の方が遥かに難敵であることを、獅子劫はよく知っている。そもそもこれは魔術合戦ではない、戦争——殺し合いなのだ。どれだけ魔術が優れていようと、死ねば敗北だ。

「表に出ろ！　魔術師らしく、正々堂々と名乗りを上げたらどうだ!?」

獅子劫の挑発に対し、律儀にカウレスが返答した。

「断る！　自己紹介は他所でやれ、この筋肉ダルマ！」

すげない拒絶にさて、どうしたものか——と獅子劫は考える。先ほどから一転、膠着状態に陥ってしまった。不用意に攻めに出れば、まず間違いなくフィオレと接近戦ということになる。正直、接近戦で彼女に勝利する自信はない。いくら人間として多少鍛えてある

と言っても、あの恐るべき義手――接続強化型魔術礼装（ブロンズリンク・マニピュレーター）には手も足も出ない。その上、カウレスが最大の障害だ。一対一として戦闘に集中できない。フィオレと戦いながら、カウレスに気を配る？　却下、不可能だ。

……つまり、フィオレを一撃で仕留めるに足る何かが必要だ。

「虎の子を持ったまま死ぬ訳にはいかねぇか」

彼は内ポケットから慎重に、それを取り出した。細く、実用性に富むとは言い難い奇妙な刃を持つナイフだった。こちらの方は先ほどまで使っていた魔術師の指のように、自動的に頭を狙う訳ではない。だが、当たれば死ぬ。否、触れれば死ぬ。

獅子劫がこの聖杯大戦に参戦する際に、前報酬として求めた子ヒュドラのホルマリン漬け。獅子劫は九つの頭をそれぞれ武器、あるいは補助道具として適切な形に加工していた。

獅子劫が魔術師として戦う上で、恐らくはとっておきとなるべき魔毒礼装。

だが――どの道このままでは手詰まりだ。覚悟を決めてのるかそるかのギャンブルに身を任せようとする寸前――不意に掃射が止んだ。

「……？」

不思議に思いつつ、そっとフィオレの様子を窺う。彼女は戦闘を繰り広げている真っ最中とは思えぬほどに穏やかな表情で、軽く頷いた。そして、獅子劫に向かって告げる。

「どうやら、ここまでのようです」

「俺はまだ戦えるぞ！」

ナイフを握り締めつつ、獅子劫はそう応じた。だが、彼女は緩やかな仕草で首を横に振ってそれを拒絶する。それを見て、獅子劫も虎の子を出す機会が失われたことを悟った。

「次はトゥリファス、我々の城塞でお待ちしております。獅子劫様、次こそはそちらで決着をつけましょう」

フィオレはそう告げて、あっさりと撤退した。その様はいっそ見事なもので、ここで仕留めたいなどという未練は欠片も残していなかった。

獅子劫は追跡を早々に放棄した。戦闘において追撃側が有利なのは自明の理であるが、人数の不利さは解消されていないのだ。追撃の有利さと、人数の不利さ。どちらを選ぶかは、天秤に二つを載せるまでもない。

「……サーヴァントに何かあったか」

ならば、引き分けという程でもない。獅子劫はほぅ、と息をついてセイバーが戻ってくるまで待つことにしようと、内ポケットから煙草を取り出した。

戦いの後の煙草は、普通は美味いものと相場が決まっているのだが――。

「駄目だ、やっぱこれ不味い」

顔をしかめつつ、獅子劫は世界の無常感を肺で味わった。

アーチャーの提案を、フィオレは承諾した。どうやら向こう側の戦闘も些か膠着状態というところだったらしい。

〝では、所定の位置で合流しましょう。元々、偵察のつもりだったのです。ここで決着をつけることに拘る必要はありません〟

〝了解しました。ありがとう、マスター〟

セイバーが起き上がると同時、アーチャーは逃げるに充分な距離を取った。

「逃げるか、アーチャー!?」

その様子を見て、怒りを隠さずセイバーが叫ぶ。

「ええ、このままではまずこちらが敗北しますから。互いに痛み分けということで」

アーチャーはそう言い残し、するりと路地裏の闇へと消えていった。アサシンの『気配遮断』とまではいかずとも、姿を消す術もある程度の心得があったらしい。

セイバーは一瞬、追うべきかどうか迷った——今、彼は弓が使えない。追いつきさえすれば、必ず斬り伏せる自信がある。しかし、追いつくかどうかが問題だ。その上、先ほどの投げ技のように、隠している『何か』が無いとも限らない。

無論、屈辱はある。相手を八つ裂きにしても飽き足らぬほどの屈辱だ。だが、堪えた。

「……さて、マスターはどうしてるかね」

あまり心配はしていない。マスターが危機的状況に陥っていれば令呪を通じて、即座にセイバーへ伝えられる。陥る寸前であれば、彼は令呪を使用して自分を呼び戻すだろう。

立ち上がって歩くこと十分、見事に破壊された年代物の建築物に獅子劫が気の抜けた様子でもたれかかっていた。

「アーチャーが撤退したか」

獅子劫はやはり、取り立てて目立った傷は負ってはいない。顔や腹部から血が流れているが、掠り傷だろう。

「まあな」

「初戦は引き分けか。セイバー、サーヴァントとの戦いはどうだった?」

セイバーはそれに答えず、ただ無言で空を見た。肌寒い秋風も、臓腑が煮えるような熱い感情のせいで、全く気にならない。冴え渡る蒼い月光が、これほどに眩いと感じるのは何故だろうか——。

獅子劫は納得したような笑みを浮かべ、頷いた。

「どうやらお互い、聖杯戦争の醍醐味を存分に味わったようだな」
「む。オレは何も言ってないぞ」
「顔見りゃ分かるわそんなモン。さて、一度撤退を決め込んだアサシンを追うのは難しい。いつまでもシギショアラで足止めされる訳にもいかねぇからなァ……。アーチャーが一撃喰らわせたってことは、どうやら〝黒〟の側でもないらしい、また仕留める機会もあるだろうさ」
あるいは、他のサーヴァントが仕留める可能性もある。恐らく第三者が本来のマスターを殺害し、アサシンを奪い取ったのだろう。上手く立ち回って聖杯を手に入れるつもりなのだろうか？　あるいは――この連続殺人から察するに、何も考えていないのか。
前者であって欲しいと獅子劫は思う。それならいい、それなら理詰めで戦える。だが、全く何の頓着もなく、ただ殺したいがままに殺していたとすれば――間違いなく、此度の聖杯大戦における随一の難敵になってしまうだろう。
もっとも、トゥリファスを含めたルーマニアは、フィオレが言った通りユグドミレニアが管理すべき場所だ。でなくば管理者（セカンドオーナー）の名が泣くというもの。
「という訳でトゥリファスに帰還するぞ、セイバー」
「あいよ。……で、どうやって帰るんだ？　行きに使ったバスはもう出てないだろ」
「そりゃお前――借りるんだよ」

獅子劫はすたすたと大通りに出ると、停車されていた乗用車の窓ガラスを叩き割り、ドアのロックを解除した。ちなみに返す気があまりないので、どちらかというと窃盗である。
「ほら乗れ」
「……警察に捕まって聖杯大戦から脱落という結末は避けてくれよ、マスター」
セイバーは呆れたように嘆息した。

SSS

〝黒〟のアサシン（ジャック・ザ・リッパー）が千切れかけた右腕をぶら下げて住処としている場所へ戻ってきたのは、出て行ってから一時間も過ぎた頃だった。
「……痛いぅ」
涙目で彼女は自身の右手をマスターである六導玲霞に見せる。骨の断面が見え、筋繊維はズタズタだった。普通の人間であれば、二度と使い物にならないだろう。
「あら、まあ！」
顔面を蒼白にして、彼女は慌てて救急箱を探そうとしたがすぐ意味のないことに気付い

た。アサシンはこの世界のものでないサーヴァントだ。治療するには魔術がなければ意味がない。そして、素人である玲霞には魔術が使用できなかった。

仕方なく、清潔なハンカチを使って傷口を縛るだけに留める。他には何もするべきことがなかった。

「まだ痛い？」

不安そうに声を掛ける玲霞に、アサシンはふるふると首を横に振って、心配ないというように笑った。

「んー……もうだいじょうぶ。それよりおかあさん（マスター）、お腹へった」

「分かったわ。ちょっと待っててね、今ハンバーグを温め直してくるわ」

アサシンは右腕が使えないため、温め直したハンバーグは玲霞がフォークで切って一つ一つ、口元に運んで食べさせることにした。

ハンバーグをせがむアサシンは小鳥のように口を開けていた。右手のことも忘れたらしく、心から幸せそうな笑みを浮かべている。

「美味しい？」

「うん！」

良かった、と胸を撫で下ろしつつも右手のことを思ってか玲霞の表情は冴えない。

「それでジャック。その怪我は一体どうしたの？」

「あ、うん。サーヴァントと戦っちゃった」

「あら……サーヴァントってジャックと同じような人たちだっけ？」

アサシンは首肯した。玲霞は彼女なりに聖杯戦争についての知識をジャックから得ていたので、相手取った彼らが相当に強かったこと程度は理解できる。

「負けちゃったの？」

「ううん。……乱入されてうやむやになっちゃった。ヒキョーだよね、戦ってるところにしかけてくるなんて」

「そうね。戦争だから、みんなズルもありって考えているんでしょう。良くないわね」

ねー、とジャックは笑って再び口を開く。そこにハンバーグを運びつつ、玲霞は尋ねた。

「ねえ、ジャック。どうしたらいいかしら？」

「右手？」

「ええ。痛々しいし、綺麗な手だったもの」

「えへへー……そうだね、やっぱり『食事』が一番かな」

照れ笑いながら、アサシンは答えた。玲霞はアサシンと契約を結んではいるが、魔力を供給できる訳ではない。必然、彼女は魔力供給を『食事』に頼らなければならなくなる。

「ああ、だったら残ってた魔術師さんの心臓、食べちゃいましょうか」

「うん。そうする」

玲霞は冷蔵庫から白い皿に載せられ、ラップに包まれた赤黒い心臓を取り出した。アサシンは矢も楯もたまらずという感じでラップごとそれを摘み上げ、一呑みに呑み込んだ。

魔術師の心臓は、さすがにただの人間よりも遥かに魔力が潤沢だ。枯渇しつつあった魔力が補給されたことで、彼女はひとまず息を吹き返した。千切れかけていた右手も、既に再生している。

「ふぅ。一安心ね」

「うん。……でも、もう心臓無いね。おかあさん、どうしよっか？」

「そうねぇ。此処にいたら、また狙われるかもね。それに、さすがに警察が五月蠅くなってきたし。思い切ってトゥリファスに行ってみる？」

アサシンは腕組みをすると、うんうんと唸り始めた。……セイバーは難敵であったが、聖杯戦争の特質上、あれより上位のサーヴァントはそうそう存在しない。無論、宝具を使われてしまえば、敗北は決定的だろう。だが、こちらにもまた必殺の宝具があり、今回はそれを発動させてはいないのだ。

セイバーは恐らく、あの強さでサーヴァントたちを蹴散らすだろう。だが、さすがに宝具を使わずに済むはずはない。そこを狙えば――食べられる。

「んー……そうだね。行ってみよっか」

「そうね。あなたも疲れたでしょうし、仮眠を取ってから行きましょう。ね、ジャック？」

「うん！」

アサシンは軽い足取りでベッドに跳躍すると、シーツを引き剥がし、ぐるぐるとみのむしのように丸まった。

「あらあら」

笑いつつ、玲霞は皿を重ねて台所に運んだ。起床次第出発するのだが、後片付けはきちんとしておくのがマナーというものだろう。

もっとも、この家に住んでいた男たちは少し前に心臓を抉り出された上に解体され、地下室に埋められたため、皿を使う機会は永遠に無いのだが。

「おかあさん、はやくー」

ベッドの上で、みのむしと化したアサシンが足をじたばたさせていた。はいはい、と苦笑しつつ玲霞は皿洗いを手早く済ませてベッドへと向かった。

服を脱いだ玲霞がベッドに寝転がった途端、アサシンは巻いていたシーツを彼女に被せた。無邪気に笑いつつ、アサシンは玲霞の素肌に縋り付き、腹部に顔を埋めた。

「お――――か――――あ――――さ、ん」

どこか間延びした、怯えるような囁き。玲霞は安心させるように彼女を抱き締めて頭を撫でた。

「よしよし」

子供のように甘える彼女をしかし、玲霞は異常だと思わない。彼女は聖杯戦争を知らず、マスターを知らず、サーヴァントを知らない。サーヴァントは英霊であり、信仰されるべき存在であり、常に全盛期の姿で召喚される。

故に子供が召喚されることはまずない。〝黒〟のアサシン――ジャック・ザ・リッパーは精神が破綻しているのではなく、純粋なまでに子供だった。

……そもそも、ジャックは生前の時点で『人間』だった訳ではない。

一八八八年のロンドンには、数万人の娼婦がいた。当時の堕胎技術はあまりに稚拙で、乱暴であり、産まれるはずだった子供たちはゴミのように扱われた。死体は娼婦たちが住むイーストエンド地区を流れる川に捨てられ、怨念は澱んだ川に堆積していった。

数万の産まれることすら拒まれた子供たちの怨念は、次第に人の形を取り始めた。やがて娼婦とも云えぬ幼い少女は、ただ訳も分からずイーストエンドを放浪した。何故生きているのか、何故悲しいのか、何故冷たいのか――何も、分からなかった。分からなかったが、何かを欲しいということだけは理解していた。

そんな折、一人の女性に出会った。

彼女に向かって思わず『おかあさん』と呼び掛けたジャックは酷く罵倒された。罵られるのは辛く、痛く、ただただ悲しかった。だから殺した。

殺すことは意外に簡単だった。解体（バラバラに）して引き出した臓器は、まるで愛情のように温かかった。

翌日、死体が発見されて大騒ぎになった。

二人目を殺し、三人目を殺す。そしてその内、彼女には人々によって名前がついていた。〝ジャック・ザ・リッパー（切り裂きジャック）〟――彼女は喜んだ。自分の名前も分からなかったからだ。

その解剖技術からジャックは医者に違いない、という噂が流れると彼女はやはり喜んだ。彼女が世界で一番嫌いなものは医者なのだ――彼らは彼女たちを殺し続けたので。

何人かの娼婦を殺した後、彼女は死んだ。大した理由があった訳ではない、猟奇的な殺人が魔性の者による犯行だと気付いたとある魔術師が、早々に彼女を始末しただけである。

以後犯行は止まり、切り裂きジャックは闇に消えた。……だが、その犯行はあまりに猟奇的で、理解不能で、謎（ミステリ）が多すぎた。

それは何とも奇妙な逆転現象だった。犯行が途絶えてからも、ジャック・ザ・リッパーの名は残った。ロンドン市民に拭い去れぬ恐怖を刻みつけ、百年経とうともその名が消えることはなかった。

死後も与え続けた恐怖により生誕した、連続殺人鬼（シリアルキラー）の反英霊――。それが、この少女だった。

幾度か歌を繰り返している内に、ジャックは完全に寝入ったようだった。それを見た六

導玲霞も、安心して瞼を閉じる。

六導玲霞はユグドミレニアの魔術師だった相良Ｎ馬に召喚儀式の生贄として捧げられるところを、アサシンの裏切りによってマスターとなった。それまでの彼女はただひたすらに流されるだけの生き方だった。

いや、今もそうかもしれない。非現実的な状況に流され、何となく聖杯を求めているのかもしれない。幸せになりたい。彼女が聖杯に求めるものは、ただそれだけだった。だが、それだけならば生きていれば幾らでも探し出せるはずだ。それを拒み、わざわざ戦争に赴いたのは……人を殺してまで、糧にし続けたのは何故だろう？

「きっと、退屈していたからかしら」

惨い女だ、と自嘲する。だが、彼女は決して殺害を止めるつもりはない。何故なら、目の前で眠る少女の食料がどうしても必要だから。生きるために必要だから。

玲霞にとって、ジャックは自分の娘そのものだった。故に、ありとあらゆる倫理的な意見は却下される。我が子のためならば、母は望んで夜叉（ハリティ）にもなるのだ。

§§§

背負った少女が意外に軽かったことにも驚いたが、彼女が明かした自身の状態にももっと驚いた。今、彼女は鎧兜を解除して私服の状態となっている。さすがに、あの衣装では田舎の村といえども怪しすぎる。

「……ああ、恥ずかしい」

「気にするな。そういう事情があるのならば仕方ない」

ジークはそう言って、力強く大地を踏む。彼女が告白した『人間に憑依しての召喚』というのが真実ならば、倒れかけるのも無理はない。

「つまり、サーヴァントとしての身体能力を持ってはいるが、無意識の領域で人間の肉体と接続しているため、人としての生活も営まざるを得ないと」

「そういうことになります。霊体化はできず、お腹いっぱいに食べてぐっすり休まないと体調を崩します。しかも、サーヴァントとして活動している間はやたらとカロリーを消費するらしく」

「不便だな、それは……」

ただの人間の肉体を、殻で覆ったからといって酷使することに変わりはない。神経や筋肉組織といった部分はコーティングされているため、想像を絶する状況にも耐え得ることが可能だが、それに伴う激しいカロリー消費は避けられない。

無論、それで死ぬ訳ではない。ないのだが――。

「お腹が空くことが、これほど辛いとは思いませんでした。あの、そろそろ食べられるなら木の根を齧ってもいいとすら思えてきたのですが、どうしましょう」

声色から、かなりの本気が伝わってきた。ジークは心持ち足を早めながら応じる。

「……もう少しだけ我慢してくれ」

さすがに木の根はどうか、とジークは思ったが「はい……」とルーラーは力無く答えただけだ。このままだと、恐らく三十分もしない内に木の根を齧り始める。

既に夜はすっかりと明けており、朝早いらしい村人たちの姿もちらほらと見え始めていた。ジークは山から一番近かった農家に駆け込むと、年老いた男にこの村に食料を提供してくれる店があるかどうかを尋ねた。

「行き倒れかね？」

その男は早朝の労働から一息ついたらしく、汗を首にかけたタオルで拭きながら心配そうに尋ねた。

「いえ、空腹で一歩も動けないらしく」

「そりゃいかん。……朝食を食おうと思っていたんだが、一緒にどうかね？」

「……ありがとう、では遠慮なくお願いする」

ジークはいざとなれば暗示を使おうと思ったが、思いの外上手く話が進んでしまったため、タイミングを全く見出せなかった。老人がさっさと自分の家へと戻ったので、彼もその跡を追う。

「う。良い匂い……」

気絶しかけていたジャンヌが目を覚ました。ジークは背負っていた彼女をダイニングの椅子に座らせる。すぐに老人が彼女の目の前に皿とスプーンを置いた。どろりとした茶褐色の粥だ。

「これは……」

「蕎麦の実の粥だ。まあ、食ってみぃ」

息も絶え絶え、という様子でルーラーはスプーンで粥を掬い、口に運んだ。直後、たちまち復活した彼女は粥をあっという間に飲み干し、目に涙を溜めてお代わりを要求した。

仕方なく、隣にいたジークが差し出すとそれもまたほぼ一気に飲み干した。

「良く食うのぅ、あんた」

「は、はい！　いや、その、何と言いますか。……申し訳ありません」

胃袋が落ち着き、思考に力を回せるようになったらしい。彼女は頬を真っ赤に染めて、深々と頭を下げた。

「いやいや、そらもっと食いなさい。そこのアンタも」

再びジークとルーラーに皿が差し出された。ジークは戸惑いつつ、ルーラーは喜んでそ

の好意に甘えることにした。

老人はセルジュと名乗った。この村で生まれ、子を育て、それを見送り、畑を耕して今を生きていると語った。取り立てて目立つこともないありきたりの人生だ、と。

「この村に若者がやってくるのは、久しぶりでな」

食後のコーヒーまでご馳走され、二人は恐縮しつつ大量の砂糖とミルクで甘くなったそれを戴いた。

「何があったのか、と尋ねないのですか？」

ルーラーの問い掛けに、セルジュはやんわりとした様子で首を横に振った。

「……まあ。若い二人がこんな田舎の何もねえところを、着の身着のままでうろついてんだから、何があったのかは分からんでもないがね」

ジークはぎょっとして身を硬くした。

「まあ、二人とも若いから仕方ねぇとは思うけどよ。今度からはちゃんと準備してから、逃げた方がええぞ？」

どうやらこのセルジュは何もかもを見透かしているらしい、とジークは思った。横目でルーラーを見ると、彼女はどこか困惑した表情でジークを見ていた。

「分かった、今度からはそうする」

「あらら？」

ルーラーがジークの返答に妙に驚いていたことが、彼には不思議だった。

「で、これからどうするんかね？」

「無論、戻る。……待っている人たちがいるから」

その答えに、セルジュは少し驚いたようだった。しばらくして、彼は納得したように何度も頷き、美味そうにコーヒーを啜った。

「……そうかい。そりゃ、いいな。やはり、皆に祝福されるのが大切っつぅこっちゃな」

「？」

彼の言っていることが分からず、ちらりと隣を見ると、何故かルーラーの目が泳ぎ始めていた。よく分からないが、ジークはひとまずコーヒーに集中することにした。

……結局、ジークの方が疲れ果てていたこともあってか、昼を過ぎる頃までセルジュの家で休ませて貰うことにした。息子さんが村を出て以来、使われていなかったという部屋を、セルジュは快く二人に貸し与えた。

「許可が下りたとはいえ、いいのだろうか」

「そ、そうですね。ですが、好意を快く受け取らないのも悪い気がします……」

何ということのない会話であるが、ジークは訝しげにルーラーを眺める。ジークはホム

ンクルスであり、コミュニケーションの経験はあのライダーを除けばほぼ零に等しい。
ただ、それでも人と人が話す際の距離くらいは理解しているつもりだ。ルーラーは意識的にジークから遠ざかっている。その距離、約三メートル。というか、部屋の扉の陰に隠れて出てこようとしない。
「何故遠いのか？」
「あ、その。どうも私の内側であるところのレティシアさんが、男性が苦手らしく、この距離でないとしっくり来ないと――」
申し訳なさそうにルーラーは告げる……が、軀は扉に隠れたままである。
「いやしかし、最初に会ったときはそこまで警戒されていなかったようだが」
「……夜でしたし。貴方が何者か分からず、私としてはそちらを見極める方が重要でしたし。こうして落ち着いた状態になると、レティシアの内面が少し強く出てしまうのです」
「憑依された側が貴女に影響を及ぼしているのか？」
「はい。……と言っても、私もこれは初めての経験です。自分は確かにルーラー、ジャンヌ・ダルクであるという自覚はあります。ただ、同時にレティシアでもあるという認識が残っているのです。特に聖杯戦争以外の知識に関しては、彼女がベースになっています」
「何か不便なことはないのか？」
「先ほど言ったように、食事と睡眠の必要があること以外は……あ、」

ルーラーは抱えていた鞄から、一冊の本を取り出した。どうやら、数学の教科書か何からしい。
「数学がさっぱり分からなかったのは、多少不便でした」
たはは、と苦笑いを浮かべてぼやく。
「……聖杯戦争に高等数学は必要なのか？」
ジークの至極もっともな指摘にルーラーは両手の指を絡ませ、やや拗ねた表情で答えた。
「いえ、無いと言えば無いのですが……問題がどうしても頭から離れなくて、ちょっと落ち着かないと言いますか……」
なるほど、確かにそれは落ち着かない。わずかでも自分が役立てるなら、手伝ってもいいだろう。
「……教科書を少し貸してくれ。解けるかもしれない」
「え、ホントですか!?」
うん、とジークが頷くとぱぁっと少女の表情が輝いた。
「それでは、ええと。少々近付かせて戴きます」
こほん、と咳払いを一つ。ルーラーはややぎくしゃくした足取りでジークに接近する。
椅子に座り、小さなダイニングテーブルを挟んで向かい合った。
「こ、こちらをどうぞ」

ルーラーが頭を下げつつ、教科書と鉛筆を差し出した。ジークはそれを受け取り、指定されたページを開くとしばし黙読して、さらさらと教科書の余白に解答を記入した。
「これで正解だと思う」
「……か、感服致しました」
解答を読み終わった少女が深々と頭を下げる。そこまで大したことではない、とジークは思う。元々、そういう知識があったというだけの話だ。
「……」
「……」
不意に沈黙。ジークは紅い瞳で、じっとルーラーを見つめている。見つめられる側の彼女は落ち着かない様子で、部屋を見回した。
セルジュから提供された部屋にはベッドと小さな二人がけのテーブルにしっかりした作りの椅子が二脚。隅にクローゼットがあるだけで他には何もない。恐らく、使用していた息子が村を出た際に私物は大方持って行ったのだろう。だが、掃除は行き届いている。
「……大事にされていたのでしょうね」
「何がだ？」
ぽつりと呟いたルーラーの言葉を、ジークは問い質す。
「え。息子さんがですけれど」

「……？」
首を傾げるジークに、ルーラーはなるほどと少し悲しげに目を伏せた。確かに、彼に知識は備わっている。論理的であり、理知的である。しかし、同時に分かっていないことも多い。無知というよりは、無垢と呼ぶべきか。
ホムンクルスだから、というだけではない。魔力の供給用として鋳造された彼には、欠落したものも多いのだろう。
「よろしいですか、この部屋は恐らく息子さんが村を出立してから使用されていません。セルジュさんは一人暮らしですし、備品の乏しさからもそれが窺えます」
「ふむ、論理的だ」
「ですから、本来ならばこの部屋は清潔でなくても良い部屋です。いえ、むしろ埃に塗れても問題ないはずの部屋。なのに、この部屋は綺麗に埃が拭き取られています。誰が拭いているのかと言うと――」
「セルジュ殿だな」
論理的帰結、というものだ。彼は一人暮らしで、メイドを雇う財力はない。
「綺麗好き、という線もありますが一階の方はやや雑然としていました。無論、不衛生と呼ばれないほどですが」
確かにルーラーの言う通り、彼は服や農作業用の道具など、本来片付けるべきものを散

らかしたままだったが、気にも留めていないようだった。
「ですから、彼にとってはこの部屋が清潔であることが主な生活を営んでいる一階を整頓するよりも重要なことが窺えます。それはつまり、愛情でしか為せぬ業です」
ジークはしばし考え、首を横に振って否定した。
「……いや、そうとは限らない。この家の息子が悪逆非道で、父であるセルジュ殿を完全に隷属させており、出立してからも部屋の掃除を毎日行うよう強制労働させているという可能性は――」
「ありません」
「確かに、極僅かかもしれないが……」
「ありませんって」
ジークは多少納得いかないものを感じないでもなかったが、大人しく頷いた。自分は無知で、彼女は英霊とはいえ現代の知識をきちんと持ち合わせた人間だ。恐らく、彼女の論理が正しいのだろう。
「……ふむ。まあ、ジーク君は生まれたてですし。仕方ないと思いますが。人間関係の機微……心について学ぶことも重要です。不明な点があれば、私ができるだけ教えましょう」
ルーラーが胸を張る。こういうのを先輩風と言うらしい、とジークは思い出した。だがそれよりも気になることが一つ。

「ちょっと待った」
「はい、何でしょうか？　ジーク君」
「……いや、何故『君』付けなのだろうかと」
「だって、ジーク君は年下じゃないですか。ですから『君』で問題ないかと思いまして。嫌ですか？」
「ああ、別に――嫌ではない、と、思うのだが」
思うのだけど、何か違う……とジークは主張したかったが、その何かが薄ぼんやりとしか定まっていないために、反論できなかった。
「では、これからはジーク君と呼びます。私のことはルーラーでもジャンヌでも、お好きなようにお呼び下さい」
「分かった、分かったよ。では、ルーラー。一つ質問があるのだが……いいだろうか？」
「はい、どうぞ」
「そもそも、ルーラーとは何だ？　聖杯戦争の管理を行うクラス、と言うことだが……」
ジークにも聖杯戦争の知識はある程度備わっている。だが、肝心の『ルーラー』というクラスについては、そういうものがあるとだけ理解していて後は不明だ。
彼女（ルーラー）にはどういう目的があり、どういうものを優先するのか、それくらいは聞いておくべきだと彼は判断した。

「……そうですね。基本的に、ルーラーは通常の聖杯戦争で召喚されることはまず有り得ません。私のようにルーラーが召喚される事態は大きく分けて二つ。一つは、その聖杯戦争が非常に特殊な形式で、結果が未知数な為に召喚されるケース。それはつまり、儀式の中枢である聖杯がこの儀式には人の手が及ばぬサーヴァント・ルーラーが必要であると、そう判断した場合です。今回のように、七騎と七騎――史上最大規模の聖杯大戦がそうですね。そしてもう一つは、聖杯戦争の影響で世界に歪みが出る可能性がある場合です」

「世界に……歪み？」

「ええ、マスターとなった者たちが英霊をサーヴァントとして使役し、聖杯を取り合うというのが現在の聖杯戦争ですが、マスターとなるのは秘匿を旨とする魔術師が多数です。なので、世に混乱を招くという事態は滅多にありませんし、あったとしても――その多くは災害として処理されるからです」

「災害……か」

「ええ。あってはならないことですが、そうせざるを得ないこともまた確かです。聖杯の多くは本来の物とは掛け離れた贋物です。ですが、機能は別。万能の願望機として機能するものも少なくありません。それが世界に公的情報として広まることがあってはならない」

「確かにそうだろうな。……願いを叶える者が、聖人であるとは限らない」

ルーラーは沈痛な面持ちで頷く。

「無論聖人でなく、我欲を求めたとしても構いません。それが世界の崩壊を招くものでない限り、尊重されて然るべきでしょう。ですが、稀に聖杯戦争を利用して、世界そのものの崩壊を目論む者がいます。魔術師か、あるいはそれ以外の誰かか……。ルーラーは聖杯戦争によってその崩壊が理論的に成立すると見なされた時点で召喚され、聖杯戦争の枠組を守護する役割を与えられます」

「……理論的に成立すると見なされた時点？　ということはこの聖杯大戦も、世界崩壊を企む者がいる可能性がある、ということか？」

そうであるならば一大事だ。何しろ今回は、七騎それぞれの殺し合いではなく、七騎と七騎の対決なのだ。

「どうでしょうね。今回、どうもルーラーとしての機能が幾つか正しく起動していないのは確かです。それが聖杯戦争の異変によるものなのか、あるいは全く別の何かなのか、それはまだ分かりませんが……。それに、誰かが何かを企んでいるというにせよ、果たしてそれが〝黒〟なのか、〝赤〟なのか。あるいは全く別の勢力という可能性もあります。特に今回はジーク君もご存じの通り、聖杯大戦――規模が大きすぎるのです。七騎と七騎の全面対決は過去に例がない。しかも、彼らが求める聖杯は現在、亜種聖杯戦争全ての基盤となっている『冬木』の大聖杯。三人の魔術師が創り上げた、神域の芸術品です。だから未だ召喚された原因も定かではないとも言えます」

ただ、〝黒〟があくまでルーラーを取り込もうとしたのに対して、〝赤〟はランサーという陣営の中でも最強を誇るサーヴァントで暗殺を謀った。状況的には、限りなく〝赤〟の側が怪しい。

「……大変だな、にも拘わらずの助力、感謝する」

「ふふ、いいんですよ。貴方は生まれついて、この聖杯大戦に関わっている存在。ならば、私は貴方の意志を尊重したいと思います。それに――」

そこで、ルーラーは気まずげに言葉を切った。ジークが首を傾げると、柔らかな仕草で首を横に振る。

「申し訳ありません。今は何でもない、と考えて貰った方がいいと思います。どうもその、私が口に出す言葉は色々と、アレで、アレで、アレでして……」

「何が言いたいのかさっぱりなんだが」

「その、まだ確証がある訳ではないので……どうか、今はご勘弁を」

それでジークは納得することにした。元より頼りになる者など、あのライダーを除けば今は彼女しか居ないのだ。

「聖女である貴女を信じない理由はない。俺は気にせず、確証が持てたら話してくれればそれで良い」

ジークがそうきっぱりと口に出すと、少女は頬を染めて頷いた。

「そう言って戴けると、面映ゆいやら嬉しいやら。でも、頑張ります」

声はか細いが、その中には確かな決意があった。何があろうと揺るがぬ金剛石のような意志が。

「……さて、落ち着いたところで一つの問題を解決したいのだが」

「あ、偶然ですね。私もそう思っていたところです」

ジークとルーラーは揃って、気まずげにベッドを見た。一人用（シングル）のベッドはいかにも狭苦しい。ジークは真夜中の逃亡から一睡もせずに朝を迎えており、レティシアの肉体も、そろそろ限界だ。

だが、ベッドは人間一人がどうにか眠れるレベルである。もし、二人揃って眠るとすれば、愛し合う恋人のように密着せざるを得ない。セルジュはもちろん、そうするだろうと考えてのことのようだ。

「私が床で眠りますから、貴方が――」

「俺は床でも構わないが」

「で、でもですね。お話を聞く限り、ジーク君は昨晩からずっと眠っていないのでは？」

「確かに。だが、この心臓のお陰かそれほど疲れはない」

「嘘です。疲労困憊というようにしか見えません。私は英霊ですから、問題ありません」

「いや、だが先ほど食事をして眠らねばならないと言った。貴女の肉体である少女の為に

もベッドで眠るべきだ」
「ぐ、レティシアのことを言われると何とも――。では、せめて一緒に眠りませんか？」
「ベッドが狭い。密着するしかない。彼女は男嫌いなのだろう」
「いえ、大丈夫です。彼女は男に慣れていませんが、非道無情を善しとしない少女でもあります。共に眠ることに、異論はありません」
「……羞恥を感じはしないのか？」
その言葉にルーラーは沈黙し、頬を染めて目を逸らす。
「……私は、大丈夫ですから」
大丈夫、と言うからには大丈夫なのだろう。ジークはようやく納得し、二人は狭いベッドにどうにかこうにか互いの軀を収めた。窮屈ではあったが、何しろ疲労が泥のように沈殿している、眠たくて仕方がない。
目の前にはルーラーの顔。軀を横にするだけで、眼が閉じかかっているあたり、相当限界まで来ていたらしい。ジークも疲れ切っている、こうしている間にも瞼を閉じてしまいそうだ……が、胸に巣食った恐怖がそれを押し止めていた。
この現実が全て夢で、眠った瞬間に何もかもが元通りになる――自分はあの魔力供給槽で目覚めるのではないか。ここに居るのは、数多の慈悲と幸運のお陰。もしかすると、世界はそんなに甘いものではなく――。

「おやすみなさい、ジーク君」
下らぬ思考は目の前の囁きと、慈母の如き微笑みに打ち消された。ああ、どうやらこれはやはり現実だ。何もかもが夢だとしたら、彼女は想像の産物ということになるが。自分には、こんな微笑みを――想像すらも、できない。
「おやすみ」
そう告げて瞼を閉じた瞬間、ジークの意識は断絶した。夢を見る余裕すらなく、まさに墜落するような気分で眠る。それでも、そこに恐怖はなかった。

……次に気付くと、両者とも床に転がっていた。ひとまず泥のような疲労は軽減されたが、硬い床で眠ったせいか、軀の節々が痛んだ。
「……やっぱり無理がありましたね」
「だな」
互いに苦笑いを浮かべ、立ち上がった。それからセルジュにお暇を告げると、彼は「ちょっと待っていろ」と言って台所から山のような荷物を抱えてきた。
「そら、持っていけ持っていけ」
どさどさ、と保存食用の干し肉やらパンやらを手渡された。コーヒーを入れた水筒まで渡され、困惑のままにジークは受け取った。

「あの、ここまでして貰うのはありがたいのだけど。残念ながら、返せるあてがない」
「要らん。……だが、そうだな。そこのお嬢さんを護ってやれ」
「え？」
きょとんとした表情でジークが首を傾げると、老人は笑いながら力強く肩を叩いた。
「それくらいの甲斐性は持っておくもんだ」
「は、はい！　さ、行きましょうかジーク君！」
頭に疑問符を抱いたまま、ジークはルーラーに背中を押されて行く。だが、ジークにはセルジュに訊かなければならないことが一つあった。強引に足を止めて、振り返る。
「一つ質問があるのだが！」
「何じゃ？」
「貴方は、息子さんを愛しているのだろうか？」
突拍子もない質問にセルジュは目を瞬かせたが、すぐに日焼けしてごつごつとした顔でにんまりと笑って答えた。
「そりゃそうさ！　アイツはワシの誇りだ。他所の国で頑張っとるからな」
その笑みは、巣立った息子の幸福を祈り、成功を喜ぶ心からのものだと、ジークにも理解できた。
ルーラーがくいくいと袖を引っ張り「言ったでしょう？」と笑う。ジークも頷き、セルジュにありがとう、と叫んだ。
「元気でなー！」
そんな別れの言葉に手を振って応じて、二人は再び山へと戻った。すっかり元気を取り戻したルーラーと共に歩きながら、ジークは未だ不思議そうに首を捻っていた。
「貴女を護れとは、どういう意味だったのだろう……」
「ジーク君、あれはただの勘違いです。深く考えない方がいいと思いますよ」
「そうだな。貴女の方が強いのだから」
「……ええ、まあそうなんですが」
ジークの断言にルーラーは妙にふて腐れたようにそっぽを向き、彼はますます混乱する。
ともあれルーラーとその随伴者は再び山へと戻り、ミレニア城塞を目指す。夜までには、あの城塞へ辿り着けるだろう。
「……どうやって、説得すべきだろうか」
首を捻るジークに、ルーラーは優しく諭す。
「そればかりは、貴方が自分で考えねばなりません。ただ、貴方は『助けて』という訴えを聞いたのでしょう？」
「ああ、それは確かだ。……あの声は、他のホムンクルスたちも聞いているはず」
「でしたら、そう訴えればいいのでは？　――大丈夫、貴方の声なら彼らもきっと耳を傾(そばだ)

てくれます」

彼女の言葉には、不思議なほどの説得力がある。彼女がただ「大丈夫」と一言告げるだけで、成功への道が約束されたような気すら起こしてしまう。

「……ありがとう。頑張ってみる」

「ええ、どうか貴方の祈りが通じますように」

だが少年の想いとは裏腹に、二人は城塞への道程半ばで思いもよらぬものを見てしまうことになる。

そしてそれこそが、ジャンヌ・ダルクがルーラーとして召喚された『意味』であった。

§§§

――脳が軋むような、戦いの夢を見る。

その世界は、そもそもが死に瀕していた。支配者の悪意はその土地を覆い、弱者は抵抗することもできぬままにその肉を貪られた。

ただただ絶望しかない。搾取され続けた彼らは、やがて一つの縋るものを得る。それは愛に満ちた、救いの言葉だった。

餓えにも、貧困にも、絶望にも負けぬ美しい言葉。……だが、支配者はそれすら奪おうとした。それは最早搾取ではなく、殺人だった。

だから、立ち上がった。戦って死ぬことよりも、生存権利を奪われる恐れが勝った。

そこに少年が居たのは、偶然だったのか神の意志だったのかは分からない。ただ、気付けば少年は彼らを率いていた。

――そこに敗北はなく。そして勝利もないはずだった。

何故なら、彼らは立ち上がった時点で敗者であると同時に勝者だった。なるほど彼らに振るう拳はなく、ただ立ち上がるだけの力しか残されていない。だが、立ち上がったということ自体が、必要な行為。自分たちが信じるもののために立ち上がること――それこそが重要で求められていたことだ。犠牲は最小限、自分を含む幾人かは犠牲になったとしても、世界は死ぬことなく蘇る。

……そのはずだった。

神とて、時には善意による悪意を行使してしまう。神が少年に与えた奇跡の力は、彼ら

にあるはずない勝利の可能性を手繰り寄せた。

だが奇跡は所詮、稀にしか起きないもの。天と地と人の全てが噛み合い、それでもなお賽子に全てを託さなければならないからこその現象だ。

不幸なことに、少年は勝利を摑んでしまった。

誰もがその勝利に熱狂した。勝つはずのない戦いに勝った少年を奇跡の子と綴った。その愚かなまでの純粋さに、少年は苦悩した。

勝利してはいけなかった。勝利しては駄目だった。目先の命を救うことに囚われ、大局から目を逸らしてしまった。

窮鼠猫を噛む——だが、噛んだ後は怒り狂った猫に惨殺されるがこの世の道理だ。

——私は、甘かったのだ。

切断された老人たちの首、実験動物のように切り刻まれる男たち、槍に突き刺された赤子、欲望の赴くままに蹂躙され、終わった後は放り捨てられる少女たち。まさに地獄と呼ぶに相応しい場所だ。そして、この場に集いし数万の命。それを奪ったのは敵ではなく、自分だ。少年はそう確信している——なのに、少年はなおも膝を屈してはいなかった。

少年はこの結末を顔色一つ変えずに鋼鉄の意志で受け入れる。眼前の滅びゆく様をただ眺める。諦観や悲哀を露わにすることなく、切り落とされた両腕の激痛すらも乗り越えて。

失敗した、それは認めよう。

己は死ぬ、それも認めよう。

彼らの死の責は全て己にある、それも認めよう。

このまま朽ち果てる——それだけは、断じて認めない。認められない。これだけの命を浪費してなお、得たものが何もないなど絶対に認めない。

だから、神よ。次の機会を我に与えよ。次は大局を見失わない、道程のあらゆる障害、敵、艱難辛苦を排除してみせる。次こそはこの世全ての善を手に入れてみせる。万人が幸福であり、万人が善性であり、万人が完璧である世界。あらゆる悪が駆逐された、真なる世界を創造してみせるとも。

——脳が痺れるように幸福な、祈りの夢を見た。



……気怠い夢から、シロウ・コトミネは目を覚ました。眠っていた、というよりは薄ぼんやりとした懐かしい記憶を引っ張り出してきただけだろう。仮眠のつもりだったが、随分と寝入っていたようだ。

「目覚めたか、マスター。ライダーとアーチャーが帰還したぞ」

眠る彼を、〝赤〟（セミラミス）のアサシンは膝に乗せて見守っていたらしい。何とも女帝（かのじょ）らしからぬ行為である。

「む。何故、貴女の膝の上に？」

そんな記憶はない。長椅子に寝転んだことくらいは覚えているが、そのとき周囲には誰もいなかったはずだ。

「我はアサシン故、な」

くつくつと、愉しそうな笑みを零す。生前、男たちの身を蕩（とろ）かさんばかりに熱狂させたであろう笑みを、シロウは困ったような表情で受け取った。

「誰かが見ていたらどうするんですか……」

「何、誰も見てはおらぬ。ううむ、せっかく気紛れで従僕（サーヴァント）らしいことをしてやったというに、何が不満か」

女の表情が、たちまちふて腐れたものに変わる。

「恥ずかしいでしょう。でも、ありがとうございます」

シロウは苦笑しつつ、その身を起き上がらせた。アサシンは満足げに頷く。
「良きに計らえ。……それはそれとして時間だ、全員揃ったぞ。もっともバーサーカーは失ったがな」
「……失って困るサーヴァント、という訳でもないですが。敵に回ったとなると、少しばかり厄介ですね」
「ああ、あやつの宝具――『疵獣の咆吼（クライング・ウォーモンガー）』か」
揃って嘆息。赤のバーサーカー（バルタクス）を失ったこと自体は、さほど致命的という訳ではない。もちろん、その比類なき戦闘力は高く評価できる。だが、あまりに操縦が難しい。使い方としては、戦闘が始まった途端に前線へ送り込んで彼が死ぬまで放置するくらいだ。
彼の『疵獣の咆吼』はバーサーカーに与えられたダメージを全て魔力に変換し、解き放つ宝具である。相手ではなく、自分自身に作用する能力であるため、この宝具は一応カテゴリ的に対人宝具という扱いになっているが、実質的には対軍宝具であって大量破壊も可能な逸品だ。
問題はその範囲があまりに膨大過ぎることだ。使い所を誤れば、自陣の方が犠牲が大きいという情けない結果を招きかねない。
「幸い、我々は彼の宝具を知っています。……どの程度で発動するかまでは不明ですが、サーヴァントならば、それを察知できるでしょう」

そのときはもう、何が何でも逃げるしかない。いかなサーヴァントとて、爆弾の上で戦う趣味はないし、その必要もない。
「いずれにせよ、向こうにセイバーが居ないのは幸いじゃな。この戦いで聖杯大戦の趨勢はほぼ決まると考えてよい。……あのランサー（カルナ）の攻撃を受けきることができるサーヴァントなど、存在しないに越したことはないわ」
アサシンの満足げな呟きにシロウはわずかに眉を顰（ひそ）め、顔を曇らせた。
「どうした？」
「ええ、確かに貴女の言う通りなんですが……」
シロウ・コトミネは聖堂教会から派遣された神父であり、今回の聖杯大戦の監督官も務めている。従って監督官に渡される『霊器盤』を所有しており、十四騎のサーヴァントが如何なる状況かを完全に把握していた。
ちなみにユグドミレニア側も、伝手を頼って『霊器盤』を手に入れている。亜種聖杯戦争のお陰だろう、購入経路には事欠かない。
「『霊器盤』では死んでいることが確定しているのですが、完全に因果線（ライン）を断たれている訳ではないようです」
――と、シロウは断言した。アサシンは顔をしかめて、その言葉を受け入れる。
「ほう、生きているのか？」

「いいえ、これは瀕死です。消滅寸前というところでしょう、少なくとも戦力たり得る訳がない。……だけど、昨夜からずっとこのままというのは些か解せない」
加えてミレニア城塞のホムンクルスの体内に潜ませた使い魔を通じ、ユグドミレニアのマスターたちがセイバーを失ったことをひどく嘆いている会話も盗み聞きしている。
「ならば、単なる故障か？」
「そうであればいいんですが。……ともあれ、万が一セイバーが蘇っていた場合は、もう一度ランサーをぶつけます」
前回〝黒〟のセイバーと戦って帰還したランサーは珍しく、わずかに感情を滲ませて「あれとは、もう一度戦いたいものだ」と呟いた。シロウはその意思を尊重してやることにした。元々、難敵であるそのセイバーと互角以上に戦うことができるのは、ランサーかライダーくらいのものだ。
ところが、ライダーの方は〝黒〟のアーチャーにご執心らしい。
もっとも、〝黒〟のセイバーが生きている訳はないだろうし、生きていたとしてもこのように瀕死の状態なら、戦うまでもないのだが――。
「ですが、セイバーの件はランサーに話さないでおいて下さい。戦場でセイバーを捜し回られても困りますので」

玉座の間に到着すると、ライダーとアーチャーが自由な格好でくつろいでいた。ライダーは寝転んで天井を見上げ、アーチャーは床にぺたりと座って自分で仕留めたと思しき動物を焼いた肉を串に刺して食べていた。
「おや、お待たせしたようで申し訳ありません」
シロウの謝罪に、やれやれとアサシンが肩を竦めて嘆息する。
「何を言うマスター。この様子じゃ、自堕落に過ごしていただけじゃろうに」
ライダーとアーチャーはほぼ同時にフン、とそっぽを向いた。やはり、女帝セミラミスであるアサシンに対して二人は敬意を払う気はないようだ。
「まあ良い」
鷹揚に頷き、彼女は玉座に座った。その傍らに、腹心のようにシロウが寄り添う。
「ランサー、そしてキャスターはどうした？」
ライダーが寝転んだままその問い掛けに応じる。
「あー……ランサーはさっきボケッと外を見ていたぜ。キャスターは工房に籠もってた」
「呼んできましょうか？」
「ははは、マスター。お主が呼び掛けに行けば、まるで使い走りにさせているみたいではないか。我が念話で呼ぶさ」
二本の指を軽く振ると、しばらくしてから玉座の間の重苦しい扉が開いた。

「ランサー、呼び立てて申し訳ありませんね」
その言葉に、ランサーはゆるゆると首を横に振った。変わらず白い能面のような顔。表情は凍結したように、些かたりとも揺らぐことはない。
「……構わない。何かあったのか？」
「申し訳ありません、もう一人が到着してからお話しします」
――――五分後、最後の一人が全員の苛立ちを一身に受けつつ登場した。開けっ放しだった扉をくぐるなり大仰に両手を広げ、声高らかに叫ぶ。
「おお、『地獄のように黒く、闇の夜の如き貴女を！』(For I have sworn thee fair and more than fair, Black as hell, as dark as night.)『私は美しいと想い、輝いているとすら感じる始末！』(Who art as black as hell, as dark as night.)」
アサシンははぁ、と嘆息して尋ねた。
「それは我のことと考えて良いのか？」
問われた男――〝赤〟のキャスター、文学の怪物シェイクスピアは頷いた。
「他に誰がおりますか、アッシリアの女帝よ！　……いえいえ、申し訳ありません。ついはしゃぎ過ぎてしまいました。久しぶりに執筆に興が乗ったもので。ああ、ところでシロウ神父。唐突ですが、欲しいものがあるのですが」
「はい？」
「与えられた知識によれば、この世界にはキーを叩いただけで一文字打てる機械があるそうですね？」
シロウはしばし考えて、ぽんと手を叩いた。
「……ああ、パソコンですか」
「ええ。一台都合して貰えないでしょうか？」
「ふむ、構いませんよ。明後日までには都合をつけましょう」
シェイクスピアは満足げに頷いた。これにはアサシンたちも、呆れかえるしかない。
「キャスター……お主、聖杯大戦を忘れるでないぞ」
「もちろんですとも、女帝よ。こうして我々に集合を掛けたからには、理由は一つしかない。戦争なのでしょう？　英雄たちが覇を競い、野蛮極まる殺し合いを始めるのでしょう？　このキャスター、精一杯――――見守らせて戴きますとも！」
「汝、戦わんのか？」
「ええ、実は吾輩戦いだの魔術だのは滅法苦手でして。『しかし神々は我々を人間にする(But your gods, well, Zeus)ために、適当な欠点を与えてくるものです(Some faults to make us men.)』」
お前キャスターだろう、とライダーやアーチャーは指摘したくなったが我慢した。実際に彼の言う通り、シェイクスピアはおおよそ〝戦争〟という行為に向いていない英霊だった。彼の役割は聖杯戦争の記録と、それに伴う主人公（マスター）の苦難と絶望、希望と暴力の物語を紡ぐことだ。語り手は前に出ない、前に出る者を支援するだけだ。

……もし彼が通常の聖杯戦争に召喚されたならば、マスターが近接戦闘に天賦の才を持ってでもいない限り、早々に敗退する運命にあっただろう。

だが幸いにも今回の聖杯大戦に限って言うならば、活躍する状況は充分に作り出せる。彼の持つ非常に特異な『スキル』によって。

「――ともあれ、皆揃うたな。〝黒〟のセイバーが脱落し、我々の準備が整った今、打って出る時期だ。小競り合いを繰り返す戦争など、面白くもなかろう？」

アサシンの言葉に、ライダーやアーチャーは不承不承という感じで頷く。確かに彼女の言う通り、小競り合いだけでは飽きる。

「せっかくの戦争だ。派手に行こうではないか、のう？」

アサシンが艶然とした笑みを浮かべてそう言った。

「――いやまあ、そりゃそうなんだけどよ。わざわざ城を作って立て籠もる準備を整えたアンタが言うことか？」

呆れた表情でライダーが言うと、アサシンはくつくつと笑って答えた。

「立て籠もる？　ライダー、お主は前提が間違っているぞ。我の宝具『虚栄の空中庭園（ハンギングガーデンズ・オブ・バビロン）』はな、守るために存在する訳ではない。攻め込むための宝具よ」

ライダーとアーチャーが揃って首を傾げた。この宝具を知っているキャスターは二人の反応にニヤニヤとした笑みを浮かべ、ランサーは変わらず泰然自若としている。この場にいる唯一のマスターであるシロウは苦笑して、アサシンを窘めた。

「アサシン、そうもったいぶらずに私たちにも体感させて下さい」

「応。……マスター、お主も割と心が湧き立っておるな」

「男ですからね」

なるほどな、とセミラミスは納得すると玉座の肘掛けに埋め込まれた大きな宝石に手を乗せた。途端、大地が微かに震え始めた。

地震か、とサーヴァントたちは顔を見合わせた。だが、その震えは徐々に激しさを増していき……不意に停止した。

「ふふ、外を見てくるがいい」

アサシンの言葉に、彼女を除いた全員が玉座の間を抜けて外へと飛び出していく。今の地震は、明らかにアサシンが意図的に起こしたものだ。だが一体何の理由があって――。

「な――!?」

絶句したのは二人、ライダーとアーチャー。キャスターは感激のあまり歓喜の表情を浮かべ、普段努めて穏やかな表情を保っているシロウも珍しく目を輝かせていた。ランサーですら、やや目を見開き、下に見入っている。

彼らが足場とする石畳の床――その下には、だだっ広い空間が広がっているだけだ。

つまり、浮遊している。この虚栄の庭園はまさにその名の通り、空中に浮かんでいるの

だ……！

「驚いたであろう？　……ま、速度は決して褒められたものではないがな」

アサシンは、微かな誇りをその言葉に滲ませていた。

アッシリアの女帝、セミラミス。その宝具『虚栄の空中庭園（ハンギングガーデンズ・オブバビロン）』は、空中要塞そのものだ。ただし、魔力による顕現は不可能だ。まず特定地域の石材や木材といった材料を集めなければならない。

それを集積させた上でアサシンによって長時間の儀式が執り行われ、ようやく宝具として完成する。……これは、そもそも歴史上、セミラミスという女帝が空中庭園を建造した訳ではないという点に端を発している。

彼女は実際に空中庭園を見たことなど一度もない。だが、それが自身の幻想として刻みつけられていることは知っているし、体感している。後付けの神秘であるが、世界最古の暗殺者、伝説の女帝が建てた空中庭園というイメージは、余程に強烈だったのだろう。

材料が必要だった。この現実の世界に根ざしている物質が、まず必要だった。彼女がかつて生きていた土地の木材、石材、鉱物、そして植物と水。

掻き集めたそれらを組み立て、儀式を以て彼女は幻想を真実へと到達させる。それは偽物の真実であり、本来ならば絶対に有り得ぬ宝具。

故に、それは『虚栄』と名付けられた。真実を知る者にとっては、嘲笑の種にしか過ぎぬ。彼女は空中庭園（ハンギングガーデンズ）など造ってはいないのだ、と。だがしかし、虚栄が脆弱であるとは限らない。否、素材を集めて完成させた時点で、少なくともこの時代では虚栄は真実へと変わる。

そして、幻想を纏ったこの庭園は――真実よりも遥かに、馬鹿馬鹿しいほどに出鱈目だ。

「それでは皆さん、戦闘準備を。この速度であれば、ミレニア城塞に籠もる彼らが我々を視認できる距離に至るまで、あと一時間というところでしょう」

沈黙する。無論、気後れした訳ではない。あと一時間という具体的な数字の提示によって、彼らの内側（こころ）に、酔いしれる程の闘志が産み出されただけだ。

「キャスター。少し前に預けた私の刀は、どうなってますか？」

「ええ。こちらです」

霊体化していたそれを、キャスターは恭しく差し出した。

「……おい、シロウ？」

「その剣を、何に使うのだ？　まさかとは思うが――」

ライダーとアーチャーが揃って不審な表情を浮かべている。シロウは微笑みつつ、手渡された刀を鞘から抜いた。日本刀は基本的な形状こそ同じでも、刀鍛冶の魂によって様々な側面が産み出される。優美、可憐、まさに芸術と呼ぶに相応しい輝きを持つ刀もあれば、シロウの持つソレのように豪放磊落（らいらく）、何かを斬ることに特化された兇器もある。

古今東西、あらゆる武器に精通しているサーヴァントたちから見ても、その刀は一級品と呼ぶに相応しい大業物であった。

「私が、キャスターの代わりを務めます。心配せずとも、戦闘に関してはそれなりに心得はありますので」

だが、武器があるからと言ってイコール戦争に参戦するとは、あまりに短絡的だ。

「いやいや、いやいやいや。悪いこた言わんから、マスターらしく此処に留まっておいた方がいいぜ？」

「ライダーの言う通りだぞ？　汝、どうやらそれなりに修練を積んだようだが、所詮は人の範疇に留まりし者。相手のサーヴァントに出くわしたら、それで終わりだ」

ライダーとアーチャーは慌てて制止する。無理もない、普通マスターは間違っても前線に出すべきではない。サーヴァントがサーヴァントを狙い続けるとは限らない。敵マスターが合理的な人物であれば、のこのこ戦場に出てきたマスターをサーヴァントに殺害させるはずだ。マスターが死ねば、サーヴァントは死へのカウントダウンが始まる。少なくとも、全力で戦うことは不可能に等しい。

まして、次の戦いは間違いなく一大決戦。サーヴァントがサーヴァントとぶつかり合うだけでなく、こちらの手駒である竜牙兵も総動員しての大戦争だ。

そんな状況に、ただの人間である彼が耐えられるとは――。そこに、キャスターがライダーとアーチャーを抑えるように真ん中に割って入り、二人に告げた。

「お二人とも。かつて吾輩、こう書きました。『もっとも優れた勇気とは、分別である』と。そして吾輩が見る限り、このシロウ神父ほど分別がついている方はなかなかお見受けできません。さらに！」

芝居がかった仕草で、彼はシロウが握る刀に注目を集めさせた。

「この刀には、吾輩がちょっとした魔術を付与しておりましてね。ぶっちゃけ申し上げますと、Cランクの宝具に相当します」

アサシンを含め、シロウ以外の全員が硬直する。宝具、と確かに彼は告げた。サーヴァントたちがそれぞれ所有する、伝説に刻まれた必殺の聖遺物――それが宝具のはずだ。

「――は？」

「……つまり何か？　汝は宝具を創り出したのか？」

「お主の固有スキル……確か、『エンチャント』だったか。もしや、あれの力か？」

アサシンの問いにキャスターは「然様」と得意げに胸を張った。

厳密に言うと、〝赤〟のキャスター――シェイクスピアのこれは正式な魔術という訳ではない。いかな強化魔術でも、宝具に相当するレベルまで強化できるはずがない。

そもそも、彼は刀に魔術を付与させた訳ではない。ただ手渡された刀を見ながら、その刀が如何に素晴らしい切れ味で、血に塗れた産物なのかを書き留めただけである。

だが、その執筆をこの世界に名高き文豪が行ったならば、話は別だ。
概念武装――世界には物理的な力ではなく、その物品が持つ概念によって効果を発揮する武装が存在する。シェイクスピアが魂を籠めて書いた文章（テキスト）ならば、たとえ対象が道端の小石だろうと必殺の概念を所有するに足るのである。
「……一つ、いいか？　何故、それでお前が戦わない？」
沈黙を守っていたランサーが、キャスターに尋ねる。彼の質問はもっともだった。ただの剣を宝具に変化させられるならば、それを持って戦えば良い。
「――吾輩は、自分自身のことは書かないのですよ。それはエッセイというやつでして。今の吾輩は他人の物語を紡ぐしか能がなく、それ以外に書きたいものがないのです」
キャスターは断固とした口調でそう答えた。ランサーはその言葉を理解し、眉を顰（ひそ）めて告げる。
「それはつまり、面倒ということか」
「ま、そんな感じです」
ふむ、とランサーは納得したように頷いた。
「……ならば、仕方ないか。お前はお前でない誰かの物語を描くことを目的としている。その結末が滅びであれ、悲劇であれ、最後まで書かずにはいられない。故に、最後まで生き残ることそのものがお前の目的だろう。前線で戦うなど論外か」

冷たく凍えるような言葉――キャスターは嬉しそうに、我が意を得たりとばかりに笑う。
「そう、その通り！　吾輩は、この聖杯大戦の結末（エンディング）を目撃したい！　しなければならない！　幸福であれ不幸であれ、あるいは絶望的な真実であれ、皆様がたの物語を最後まで傍観することこそが、吾輩に課せられた使命です！」
それは、おおよそ聖杯戦争に召喚されたサーヴァントとして有り得ない言葉だった。最後まで傍観すると、彼は断言したのだ。
アーチャーやライダーは呆れればいいのか、怒ればいいのかも分からなかった。
「いずれにせよ、我輩の戦闘力など無いに等しい。という訳でここは一つ、マスターの中で随一の戦闘力を誇るシロウ神父にお任せしたいのですよ」
「構いませんよ。……この刀があれば、あたら戦場で遅れを取ることはないでしょう」
シロウの言う通り、少なくともCランクの宝具に匹敵するというならば、ホムンクルスやゴーレムなど問題にもならないだろう。
「いえいえ。吾輩の力など、取るに足りません。その刀がおぞましいほどの名刀だっただけでしょう。そうでなくては、さすがにCランクに届く宝具には至りません」
「……かつて、とある剣豪が愛用していた刀ですからね」
シロウはぽつりと呟いた。その表情はわずかに緩み、悪戯な笑顔を浮かべている。
「――仕方あるまい。マスター、我はこの庭園の操縦を行わなければならない為、直接戦

場に赴くことはできん。出来得るだけの援護はするが、あまり深入りするなよ？」

「分かっていますよ、私も自分の実力はよく理解していますから」

そう言いつつも、シロウはこの戦争において一切の手を抜くつもりはない。全力で以て戦い、全力で以て大聖杯を奪い取る。その為ならば命を懸けるし、仮令正義とは程遠い行いでも全く躊躇せずに断行する。

「さて。だが、将の数は揃っていても兵が零では締まりがないな。たかがホムンクルスやゴーレムでも寄せ集まれば、多少は鬱陶しいであろう」

アサシンの言う通り、彼らには兵が存在しなかった。マスターたちが使い魔を総動員しても十名に満たないだろう。だが、ここに居るのはアッシリアの女帝セミラミス。消費するべき駒など、無尽蔵に産み出せる。

「竜牙兵を適当に見繕っておく。三千体もあれば充分か？」

竜の歯を用いて造られる竜牙兵は、使い捨ての雑兵だ。……だが、如何に使い捨てといえども単純に三千体という数は異常だ。

「そりゃ数が多いに越したことはないだろうが……アサシン、いくら何でも無理だろソレ」

「普通ならば無理だろうがな。この空中庭園に居る限り、我に不可能など無い」

ライダーの言葉にアサシンは自信も露わに笑う。そう、この空中庭園は仮令どこの国に赴こうとも、常に彼女の領域として扱われる。ステータス全てが強化され、魔法の領域に踏み込んだ魔術すらも行使可能になる。

無論、代償はある。何しろこの宝具自体がほとんど反則に近いのだ。〝赤〟のアサシンは、この庭園から離れればほぼ無力化する。だが、この庭園は移動する要塞である。庭園から出ることが、そもそも有り得ない話だ。

「では、どなたが先陣を切りますか？」

シロウの問い掛けに、アーチャーとライダー、そしてランサーが顔を見合わせた。参加するつもりのないキャスターは、素知らぬ顔である。

ランサーは無言で首を横に振った。お先にどうぞ、ということらしい。そうしてアーチャーとライダーが睨み合い始めた。お互い先陣を切りたくて仕方ないらしい。アサシンは呆れたように肩を竦め、キャスターは先陣を切った方に詩を捧げようと告げて、火に油を注いだ。

「……平和的に話し合って下さいね？」

その言葉に従った訳でもないだろうが、結局双方は妥協案に同意した。

「先陣は俺が切る」

ライダーが先陣と決まったらしい。だが、アーチャーは自身の武器である弓を召喚してそれを空へ掲げた。

「ただし、先制攻撃は私が放つ。元より、宝具を解放するつもりだったからな」

「分かりました。では、そのように」
「初めての二人の共同作業、というやつですな。愛の詩にしましょうか？」
キャスターの提案に、ライダーは顔を喜びに輝かせて答えた。
「応、是非頼む」
そしてアーチャーは嫌そうにしかめっ面をした。
「否、やめて欲しい」
双方のリクエストをキャスターはまとめ上げ、失恋する男の切ない詩を作ることにした。
そのやりとりを苦笑と共に見ていたシロウは、暗闇の遥か彼方に見え始めたミレニア城塞に視線を移した。
――心臓が、一際大きく高鳴った。
ああ、分かる。分かってしまう。確かにある、あの城塞に、あの場所に、求めて求めて求め続けたものがある。
高揚感に震えが止まらない、緩みかける口元を必死になって抑えつける。
「――お前ほどの男でも、さすがに目の前にあっては興奮を隠しきれぬか。そこら辺は、まだまだ子供よの」
震えと笑いが同時に止まる。シロウは隣のアサシンに無言で、やや拗ねたような視線を送った。

「何、はしゃぎたてるのを我慢できるだけ良い。それよりもマスター、お前が死ぬと我が死ぬ、そして我が死ぬと計画の何もかもが台無しだ。それは分かっておるな？」
「ええ、もちろんです」
平然と応じるマスターに、アサシンは露骨な溜息をついた。
「――にも拘わらず、戦場に出ようとする。我には理解できん。今のお前はサーヴァントを使役するマスターだ。本来ならば、間違っても戦場に踏み込んではならん立場の存在だ。なのに、何故命を懸けて戦場へと赴くのだ？」
アサシンはサーヴァントだけあって、シロウ・コトミネの実力をよく理解している。ひとまず、ホムンクルスやゴーレムなどに遅れは取らないだろう――サーヴァントと戦えばどうなるかは未知数だが。
ともあれ注意を払えば問題ない、問題ないが……万が一ということがある。アサシンとしては、シロウを戦場に出すなど絶対に御免蒙りたいことだった。だが、幾度説得してもシロウは頑としてそれを聞き入れなかった。
アサシンは動機などに関心はなかったし、いざとなれば前言を翻すかもしれぬとも考えていた。だがしかし、この期に及んでも意志が変わらないとあっては、何故こんな無謀な真似をしなければならないのか、問い詰めたくもなった。
シロウはわずかに躊躇ったが、観念したのか穏やかな声で答えた。

「もしも、私の計画が神に背くモノであれば。私はこの戦場で必ずや討ち果たされるでしょう。不幸にもサーヴァントと戦って死ぬか、あるいは油断してゴーレムやホムンクルスに殺される。ひょっとすると、味方の宝具に巻き込まれるかもしれない」

人は死ぬ。そしてサーヴァントとて死ぬ。善良な誰かが不合理な何かに巻き込まれ、陰惨たる結末を迎えることなど、当たり前のような日常の出来事だ。

もしも、自分が正しくないならば必ずやそうなる。

「もし、そうなら粛々と死を受け入れましょう。神は私を許さなかった。それはそれで、致し方のないことです。ですが、もし――もし、何もかもが上手くいったのであれば」

アサシンはわずかに気圧された。別にシロウが何かをしたという訳ではない、いつもの微笑みを止めて、ただアサシンと真正面から向かい合っただけである。

その瞳には禍々(まがまが)しさ、狂気、憤怒、憎悪といったものは見当たらない。むしろ、澱みなき湖のような穏やかさがある。これから戦いに赴く人間とは思えないほどに――ただただ静かだった。

「それは神が俺の行いを赦されるということだ。全ての人間を慈しみ……そして、癒すために、あの大聖杯を欲するという俺の願いが正しいということ。それさえ分かれば、もう迷うことはない。決して裏切ってはならぬモノまで裏切った甲斐があったというものだ」

決然とした態度でシロウは告げる。自身の目的が正しいかどうか、それを確かめるために、戦場へと赴くという。アサシンからすれば、それは蛮勇であり愚行に他ならない。

だが――恐らく、シロウはこうしなければならないのだろう。他者には理解できない、尋常でない強迫観念。迷わぬという意志を固めるために、どうしても必要な儀式だ。

「――ふむ、率直に言って我には理解できんな」

「そうでしょうね」

シロウは苦笑する。彼女の言う通り、他者には恐らく理解できないだろう。己が正しいかどうかの裁定を行うために、死が跳梁跋扈(ちょうりょうばっこ)する戦場へと赴こうというのだから。

反対されるか、と思いきやアサシンは臣下に命じるような仕草で宣言した。

「しかし、それをせねばお主は前に進めない。ならば仕方ない、許す。存分に戦い、そして生き残るがいい」

ありがとう、とシロウは礼を言った。直後、空中庭園が緩やかに停止する。ミレニア城塞はまだ先だ。空中庭園と城塞の間には両サイドに森林、中央には草原が広がっている。

つまりはここが、合戦場(バトルド)である。〝赤〟のサーヴァントと、マスターであるシロウ・コトミネは、空中庭園の船首部分へと集結した。

「今頃向こうは慌てふためいているでしょうなぁ」

キャスターの言葉に、アーチャーが頷いた。彼女の弓兵として鍛え上げられた視覚は、数キロ離れている夜闇に包まれた城塞の様子を、ある程度把握できる。

「ああ、迎撃するべきサーヴァントたちが出てこない。突然現れたこちらに、混乱しているようだな……そういう気配が伝わってくる」

獣としての本能か、アーチャーはそれがたとえ城塞であったとしても、中にいる人間たちの気配を、知覚できているらしい。

「ならば、今の内に〝雑兵〟どもを整列させておく」

アサシンが手を掲げると、直径三メートルはあるかと思われる巨大な大釜が宙に浮かんだ状態で出現した。大釜は浮遊してアーチャーのいる庭園の舳先部分を越えると、くるりと引っ繰り返る。

たちまち、そこからやや黄ばんだ骨片が雨のように大地へ降り注いだ。それらは大地に埋もれるなり植物のように成長し、やがてトカゲのような顎を頭部とする骸骨兵が次々と誕生した。

「……脆そうだな」

アーチャーが下を見て呟く。

「ああその通り。脆いぞ、ひどく脆い。だがまあ、数は多い。サーヴァント相手ならともかく、ホムンクルスを相手にするなら充分だろうし、向こうのキャスターがこちらのキャスターのように雑魚であったら、倒せる可能性はある」

「ははは、これは手厳しい。しかし世のキャスターが皆、吾輩のように優れた文筆家というわけではないでしょうな！」

キャスターは平然とそう切り返す。アサシンはもう何も言わないことに決めた。

「……む、〝黒〟の連中もようやく出てきたぞ」

アーチャー以外の者には、未だ見通せぬ暗闇の向こう側。ユグドミレニア一族とそのサーヴァントたちも、ようやく動き始めたらしい。

これまでの小競り合いなどとは訳が違う。戦場があり、兵があり、兵器があり、将があり、獲るべき領地があり、何より討ち果たすべき『王』がいた。

完全殲滅を最終目標とする決戦まで、後わずか。〝赤〟のサーヴァントたちは、じっとその瞬間を待つ――。

SSSS

ユグドミレニアは、魔術協会のマスターたち……即ち、〝赤〟の側がどこから攻めてくるかをあらゆる方面から予測し、迎撃計画を練り上げていた。

トゥリファスの街から一気に強襲を仕掛けてくる、あるいは東側から大軍を以て攻めて

くる。空から奇襲する、という可能性も決して低くはなかった。だが――。
「……領土ごと攻め込んでくるとは、さすがに予想外でした」
〝黒〟のアーチャー――ケイローンが嘆息した。視線の先には、〝赤〟のアサシンが誇る宝具『虚栄の空中庭園（ハンギングガーデンズオブバビロン）』が浮遊している。
「アーチャー、あれは今どうなっていますか？」
傍らのフィオレが、細い声で尋ねた。その声には微かに震えが感じ取れるが、それはアーチャーがサーヴァントであるが故だ。普通の人間が聞けば、そこには些かたりとも動揺を感じ取れはすまい。努めて冷静であろうとするマスターに、アーチャーは微笑んだ。
「停止しました。……これは私の推測ですが、どうやら〝赤（エリュトロン）〟の側はこの草原を合戦場とする意向のようですね」
「全面対決という訳ですか」
「ええ。マスターたちは安全な場所へ。恐らく向こうもサーヴァントと使い魔で陣を敷くつもりでしょう」
「――そうらしいな。連中、竜牙兵を召喚したようだ。こちらのホムンクルスとゴーレムに対抗するためだろう」
とん、と城壁の上にダーニックが着地した。どうやら、大胆にもあの浮遊する要塞を見て回っていたらしい。

「おじ様……」
「中に入るぞ、フィオレ。最早、我々は勝負を彼らに預けるしかない」
「その通りだ、ダーニック。ここから先は、我らサーヴァントの領分だ」
粒子が収束し、人のカタチを取り戻す。〝黒〟のランサー――ヴラド三世が凄絶な笑みを浮かべて、浮遊要塞を見つめていた。
いや、ランサーだけではない。〝黒〟のバーサーカー、フランケンシュタインと〝黒〟のキャスター、アヴィケブロンも城壁に立って、浮遊する要塞を睨み据えていた。
「我が領土にあのような醜悪な代物で踏み込んだ挙げ句、穢らわしい骸骨兵どもを撒き散らすとはな」
ランサーは不愉快さを露わにする。領土に侵入されたという時点で、彼らは敵であり、征服者であり、オスマントルコである。鏖殺せねばならないという、強烈な義務感が彼の全身を縛り付ける。
「領土（ロード）よ。我々は城内へと避難します。ですがあの草原が合戦場ならば、我々は街を背後に戦える。思う存分、力を振るいなさいませ」
ダーニックが恭しく一礼し、ランサーは鷹揚に頷いた。
「ああ。それからライダーと〝赤（スパルタクス）〟のバーサーカーを解放せよ。彼らも戦線に加わって貰うぞ」

「よろしいのですか？　バーサーカーはともかくとして、ライダーは――」
「構わん。ここまで全面的な対決を望んできたのだ。こちらも全兵力を投入するのが礼儀というものだろう」
「……分かりました、すぐに」
ダーニックが姿を消した。フィオレもそれを追うように、城内へ避難する。
「アーチャー。ライダーと共に編制したホムンクルスの指揮を執れ」
「了解しました、ランサー。ただ〝赤〟のライダーがやってきた場合、私が抑えに掛からねばなりませんが……」
「構わぬ。指揮は最初の方だけでいい。いずれにせよ混戦となって、ゴーレム共々消費されるだけだ」
アーチャーは頷いた。ランサーの言う通りだろう、序盤の一撃が終わればすぐにサーヴァント同士が殺し合う状況に変化する。
「それからキャスター、お前はここで待機だ。〝赤〟のバーサーカーの枷を解くタイミングは、そちらで判断して良い」
「了解した。ああ、そうだ。ランサー、まさか王たる君が徒歩で戦う訳にもいくまい。馬を用意させた」
その言葉にほう、とランサーは興味深げな眼差しをキャスターに注いだ。

「無論、造り物だが――」
「大いに結構。ただの馬では、この戦争についていけぬ」
キャスターが連れて来たのはなるほど、巨大な銅鉄馬だった。鉄と青銅が組み合わされ、斑模様となっている。紅いルビーと蒼のサファイアの眼球が、妖しい輝きを帯びていた。
「大いに結構」
満足げに微笑むと、ランサーは馬に飛び乗った。馬は吼えることもなく、大人しくその場に直立している。
「あっれぇ、ランサーって馬に乗るんだ。ボクの立場がないなー」
やや高い声に、その場の雰囲気が緊張したものへと変わる。先ほど釈放された〝黒〟のライダー――アストルフォだ。彼は屈託のない笑顔を浮かべて、自分を虜囚の身に貶めたランサーに平気な態度で声を掛けていた。
「ライダー。今更反省したかどうかなど問わぬ。お前の力、今こそ余に見せてみよ。シャルルマーニュ十二勇士としての力量をな」
ライダーは胸を力強く叩いた。
「うん、任せてよ！　それはそれこれはこれ。この戦争はボクの使命だからね！」
「その認識があれば問題ない。ライダー、アーチャーと共にホムンクルスの指揮に加われ」
「ラジャー！」

最後に、ランサーはじっと浮遊する要塞を睨み続けているバーサーカーに目をやった。
「バーサーカー。お前は自由だ。果てるまで戦い、狂い踊るがいい」
「ウ……ウウウウイ……」
バーサーカーは一度だけ、軽く頷いた。城壁の縁に両手を置き、今にも飛び出していきそうだ。
「――さて、諸君。セイバーは消え、アサシンはおらぬ。代わりに〝赤〟のバーサーカーが手に入ったが、あれはただの使い捨てる『兵器』でしかない。つまり我々が全戦力という訳だ」
「一方、向こうは恐らくバーサーカーを除いた六騎全てを揃えている。〝赤〟のランサーはセイバーと互角に戦い、〝赤〟のライダーはそのセイバーの攻撃に傷一つつかなかった。未だ姿を見せぬキャスターやアサシンも、恐るべき敵であることは間違いない」
それは、自陣の不利を認める言葉であった。単純に数で劣っている、質は不明だが少なくともセイバーがいない、というのはやはり辛い。
そう、圧倒的とまではいかずとも――普通にぶつかれば、まず敗北する程度の戦力差があった。
「さて。それでは質問だ、諸君。敗北を受け入れる気はあるかな？」
全員が言葉と仕草でそれを拒絶する。

戦力差が圧倒的すぎる、敗北する確率が高い――その事実に対し、ランサーや他のサーヴァントたちは全く動じた様子もない。英霊とはそういうものなのだ。圧倒的不利、絶望的状況、そういうものを笑って覆してこそ、英雄と呼ばれるに相応しい存在だ。
「そう、その通り。我々は勝利する！　この程度の戦力差、この程度の絶望、喰らいつくせずして誰が英雄を名乗れるものか！」
その言葉は正しい。何しろランサーの真名はヴラド三世。迫り来るオスマントルコの兵から、幾度も幾度も国土を守りきった大英雄だ。
決定的だったのは一四六二年のオスマントルコによる侵攻だろう。オスマントルコ十五万に対し、ヴラド三世率いるワラキア軍はわずか一万。だが、彼は徹底的なゲリラ戦と焦土戦術によってオスマントルコを疲弊させ、更には民衆を避難させた上で、首都を空にして迎え撃った。
オスマントルコを率いるは、〝征服者〟と呼称され、あの三重防壁のコンスタンティノープルを落としたメフメト二世。剛勇で知られたさしもの彼も、首都ブカレストに到着したときに顔色を失った。
城塞周囲に立てられた無数の杭。そこに突き刺されているのは、自分たちの仲間であり、部下であり、隊長であり――二万人のトルコ軍であった。それを見た瞬間、仲間を殺されたことへの憎悪などどこかへ吹き飛んだ。恐ろしかった、ただただこんなコトを考えつい

て、実行する存在が恐ろしかった。彼らがやってのけた略奪も、蹂躙も、虐殺も、それは欲望が加速しただけの結果に過ぎない。これは違う、発想からして違いすぎる。

まさに人を人とも思わないやり口だ。何しろ彼らはただ、見せつけるためだけに串刺しにされたのだ……！

軍の士気はほぼ零に等しくなり、やむなくメフメト二世も引き上げざるを得なかったという。この時、メフメト二世はこう漏らした。

――どんな人間も私は恐れまい。だが、悪魔（ドラグル）だけは別だ。

「あれは蛮族だ。我が領土を穢し、傲岸不遜に下劣に高笑いする死ぬしかない愚者どもだ。笑いながら連中を殺すがいい。恐怖という知識が欠けている彼奴らには、牛革の鞭で徹底的に躾（しつ）け直してやらねばならぬ」

ランサーの言葉は過激だったが、実に分かりやすい。

生かして帰すな。彼が言いたいのは、徹頭徹尾ただそれだけだ。そして、それは他のサーヴァントたちも望むことである。

「では、先陣を切らせて貰おう」

ランサーは馬の手綱を握ると、城塞から馬と共に飛び降りた。城壁と切り立った崖で高さは百メートル以上はあるが、〝黒〟（アヴィケブロン）のキャスターが造り出した銅鉄馬はその程度の高さでは破損もしない。

たった一人の将、たった一人の軍のように――ランサーは馬と共に相手の陣に向けて馬を歩かせる。長閑（のどか）な草原だが、この戦いが終わった後は焦土と化しているだろう。

部下を得て、現代に蘇った苛烈なる王は、またも不利な戦いに挑もうとしている。だがいつもの通りだと、恐れはしない。

やがて、サーヴァント二人に率いられたホムンクルスとゴーレムたちが次第に集結し始めた。アーチャーとライダーの指揮は見事なもので、瞬く間に彼らは整然と列を形成する。

その軍勢の脇に、封じられた〝赤〟のバーサーカーを引き連れたキャスターがいた。タイミングを見計らって、解放する予定だ。このバーサーカーは完全に精神が破綻しているが、敵と味方の区別をつけるくらいの僅かな理性は残っている。

マスター替えさせた今、彼にとっての敵は〝赤〟の側だ。そしてただ一人、ホムンクルスやゴーレムからも外れた位置に立つは、理性ある狂戦士――〝黒〟（フランケンシュタイン）のバーサーカーだ。

戦力としてカウントしていいのは、キャスターが作成した中でも、特に優れたものを選び出したという十体のゴーレムと、キャスターを除いたサーヴァントたちだろう。

キャスターは仮面の奥で思考する――現状は、さほど不利とは云えない。それはアーチャーの実力、見識が優れているのもあるし、自身の宝具が既に『炉心』さえ手に入れれば

即、稼働可能な状態というのもある。

だが、決定的な理由は唯一つ。

〝黒〟のランサーが、ヴラド三世であることだ。ここルーマニア、ましてトランシルヴァニア地方であれば、彼の知名度はほぼ最高値（マックス）だ。知名度による実力の変動はそれほど大きいものではないが、ここにはヴラド三世という存在に対する信仰心までもが存在する。そう、故国を救った大英雄。そして恐怖の存在。この国の礎となりつつも、裏切られて何もかもを失った悲劇の男――子供から老人まで、誰もが知るこの国の王。

彼は今、限りなく全盛期に近い存在となっている。おまけに、この草原を含めた周囲一帯をスキルである『護国の鬼将』によって、自国の〝領土〟としている。

なるほど、昨日アーチャーから聞かされた〝赤〟のライダーの正体は、確かに衝撃的であった。全世界クラスの知名度を誇る、考え得る限りトップクラスのサーヴァントだ。

だが、それでも。それでもなお、ヴラド三世に幾分のアドバンテージがあるだろう。

互いの〝軍〟が少しずつ前へ前へと進んでいく。相手側にも、誰かしらサーヴァントがいるかと思えば、前面にいるのは竜牙兵だけだ。

訝しげにランサーは軍を停止させた。同時に、竜牙兵たちも動きを止める。

竜牙兵に話しかけても無駄だということは分かっているので、ランサーは浮遊要塞に視線を移した。

「――ふむ。どうする気だ？」

その呟きが聞こえた訳ではないだろうが、それに応じるように――〝赤〟のアーチャーの矢が、最初の一矢（ファーストコンタクト）を射ち放った。

§§§

〝赤〟のアーチャー――アタランテは、二本の矢を愛用の弓であるタウロポロスに番えた。狙うは眼下に広がる大地ではなく、朧な月光に照らされる夜の空だ。

晩秋独特の冷え切って乾いた風がふわりと彼女の髪を揺らし、獣の耳がぴくりと動いた。

頃合いだ。

「我が弓と矢を以て太陽神（アポロン）と月女神（アルテミス）の加護を願い奉る（たてまつる）」

矢が妖しく輝き出す。彼女の宝具は弓ではない、弓で放つ矢でもない。その二つはあくまで触媒に過ぎない。弓に矢を番え、放つという術理そのものが宝具である。

「この災厄を捧がん――『訴状の矢文（ゲヴァルシュリフェ）』！」

空へと放たれし二本の矢は、輝く軌跡を残しながら雲を突き抜け消えていく。これこそが開戦の狼煙であり、始まりの一矢。

……それは、神への訴えだった。太陽神アポロンと、月女神アルテミス。それぞれが太陽と月に関わりの深い神であり、アポロンは弓矢の神、アルテミスは狩猟の神でもある。彼らはアーチャーが加護を求めた代償として、災厄を求める。加護とは即ち——敵方への災厄だ。

夜空に淡い光が満ちる。風を切る雨のような密やかな音。だが、慈雨のように生易しいものではない。荒ぶる神々は生贄を求め、災厄という名の豪雨を撒き散らす。

空から光の矢が降り注ぎ、ホムンクルスたちが次々と矢に突き刺さって倒れていく。頑丈なはずのゴーレムですら、その身に無数の矢を受けて次々と砕け散っていった。さすがにサーヴァントたちは躱し、受け止め、弾き返していくが戦列は乱れに乱れた。

冷徹極まる表情でその陰惨たる光景を見つめながら、〝赤〟のアーチャーは振り返って告げる。

「——これで露払いは終わったぞ。交代だ、ライダー」

「応！」

ぱんと膝を叩き、心底嬉しそうな顔でライダーが走り出し、そのまま空中庭園から飛び降りた。口笛を吹くと、空を引き裂いて軍馬三頭立ての戦車が出現。落下するライダーを掬い上げる。

御者台にて手綱を握り、鞭を一つ。筋骨逞しい馬たちの嘶きが、戦場の空に轟いた。

「さあ、開戦だ！　〝赤〟のライダー、いざ先陣を切らせて戴こう！」

言うなり、ライダーは戦車を地上へ降下させた。ホムンクルスとゴーレムたちが、彼の前方に立ちはだかる。だが戦闘に特化したホムンクルスはもちろん、重さ一トンを超えるゴーレムすらも、海神より賜った不死の神馬の前では造作もなく轢殺粉砕されていく。

巨大なミキサーが銃弾のような速度で、地面ごと世界を削り取っていくのだ。ただ疾駆するだけで、〝赤〟のライダー操る戦車は戦場を蹂躙する。

「さあ、〝黒〟のサーヴァント！　我らにその力を見せてみろ！　このライダーの戦車を止められるものなら、止めてみせるがいい！」

彼の挑発に乗ったのは、何とサーヴァントではなくゴーレムだった。

三体のゴーレムが猛然と走る戦車の前に進み出る。舌打ちした〝赤〟のライダーは、当然の如く轢殺を選択した。

「退け、雑魚が！」

その言葉に、遥か彼方から戦場を俯瞰する〝黒〟のキャスターがぼそりと応じた。

「——さて。それはどうかな、〝赤〟のライダー」

激突する瞬間、三体のゴーレムが弾けた。驚くライダーを他所に、ゴーレムたちはそれ

ぞれが軍馬の足に絡まると瞬時に硬質化した。
「ぐっ……!!」
猛進撃を続けていた〝赤〟のライダーの戦車が、ようやく停止した。それを見たホムンクルスたちが、手に戦斧（ハルバード）を振り上げ、一斉に跳躍する。
「しゃらくせぇ！」
〝赤〟のライダーは手綱から手を放し、腰の剣を鞘から抜き、もう一方の手で英傑殺しの槍を握って御者台から跳躍した。
交錯は一瞬。その一瞬で、襲い掛かってきたホムンクルスたちの命を、ライダーは一つ残らず奪い去った。噴出した血が、雨のように大地へと降り注ぐ。
〝隙有り〟
それを隙と見て取ったサーヴァントが一人。叩きつけられた殺意に、ライダーの軀が反応する。しかしホムンクルスたちの血が彼の視界を塞いでいた。
死体の隙間をくぐり抜けるように、ライダーの首筋目掛けて矢が襲い掛かる。
「……ッ!!」
反応が一瞬遅れたとはいえ、剣で矢を叩き落とせたのは〝赤〟のライダーの俊敏さ故だろう。とはいえ完全に打ち落とすまでにはいたらず、軌道を変えた矢は首筋を掠めた。
つぅっと、色鮮やかな血が滴る。傷つけられた、という驚きはライダーにとって屈辱ではなく歓喜に変わる。
そう、〝黒〟の側で自分を傷つけられるサーヴァント――アーチャー！
御者台に立つライダーは威風堂々とした態度で、声高らかに叫ぶ。
「〝黒〟のアーチャーは何処（いずこ）や！　預けた勝負、取り戻しに来たぞ！　今宵は心ゆくまで殺し合おう！」
返礼の代わりとばかりに、再び矢が放たれる。だが視界を塞ぐものがなければ矢を打ち落とすことなど、ライダーにとっては容易いこと。
「どこだ！　〝黒〟のアーチャー」
「――君が思っているより近くですよ」
振り返った瞬間、ゴーレムの背面に隠れていたアーチャーが弓と矢以外の部分を巧みに隠蔽しながら矢を放った。魔力を上乗せされているせいで、先ほど放たれた矢より遥かに速い――！
「ぐっ……!?」
狙われたのは顔面――より正確に言うと、右眼だ。振り上げた剣の刀身で、矢を弾き飛ばした。だが、そのせいで視界が一瞬塞がれた。その隙に、アーチャーは走り、別のゴーレムの背面に飛び乗ると再度、矢を放った。
「野郎……！」

アーチャーは決して姿を見せず、走るゴーレムの背面に隠れながらライダーに次々と矢を射ち込んでいく。

――誘ってやがるな。

ゴーレムは少しずつ戦場の只中から離れていく。なるほど、とライダーは納得した。戦場に〝赤〟のライダーとその戦車が居座ってしまえば、〝黒〟の側としてはどうにも戦い難いだろう。

無論、アーチャーを無視することもできる。森の中は、弓兵にとって絶好のフィールドだ。そこかしこに隠れ潜み、矢を放つ。翻ってライダーにとっては森の中での戦いなど、致命的だ。何しろ、肝心の戦車が使えない。

……だが、それは真っ当なライダークラスのサーヴァントに限る。少なくとも、〝赤〟のライダーに限って言えば、それは明白な誤りである。

確かに戦車に乗ったライダーは破格の強さを誇る。頑丈、かつ稲妻のように疾駆する戦車を止めることは非常に難しい。三頭の馬の内、一頭は単なる名馬だが二頭は海神から賜った神馬だ。

故に。戦場で敵を屠り、勝利するためならばアーチャーの挑発に乗らずに、絡んだゴーレムたちを断ち切り、ここで戦列を蹂躙し続けるのが正しい判断なのだろう。

だが、その論理的な提案には一つだけ瑕疵があった。仮にも英雄を称する者が、ここで

逃げの選択をすることが正しいといえるのだろうか？

否、断じて否だ。偉大なる英雄であった父と、女神である母、そして人生の苦楽を分かち合った永遠なる友の名誉の為に。断じて逃げる訳にはいかない。

待てっ、と叫びながらライダーは戦場から離脱。戦車を霊体化させると、自らの足で森へと向かう。ライダーは〝黒〟のアーチャーがほくそ笑んでいるだろう、と思った。自分の有利な領域に誘い込み、ライダーの有利な点を打ち消したのだから。

……そう、未だライダーはアーチャーを知らない。知らないと思っている。ほんの少し注意深くなって、そして乏しい可能性でも考慮すべきだったか。

無駄だったろう。先に迷うか、後から迷うか、些細な違いでしかない。

ライダーは矢を放つ際の弦を引き絞る音も聞き逃すまいと、全身全霊で以て周囲を索敵する。サーヴァントの気配はある、確実にある。だが、具体的な場所までは分からない。ただ、アーチャーの攻撃範囲に自分がいることだけは理解できる。

前回のような無様は晒さない、ライダーはそう誓っている。ふと、歩き回る内に枯枝を踏み締めた。静寂すぎる森にピシッ、という音が響いた瞬間――矢が放たれた。

――そんなモン、読んでるさ。

槍の石突で矢を叩き落とす。ライダーは既に、アーチャーの矢の軌道をある程度読み切っている。前回の戦いを頭で冷静に繰り返し、自分の動きにどうやって合わせていたのか

を考えた結果だ。

「二度も三度も通じると思うなよ、弓兵！　今度はこちらから……行かせて貰う！」

一瞬だった。跳躍し、手近にあった木の幹を蹴り飛ばして移動する。尋常ではない身体能力であるが、サーヴァントならば決して不可能ではない。だが、サーヴァントであることを考慮しても、あまりに図抜けて迅かった。

最早瞬間移動に等しい、障害物など全く意に介さないような速度で矢の放たれた方向へと疾駆する。

ざっ、という微かな音。どうやら、相手も移動したらしい。相変わらず、木々に隠れながら飛んでいるため、微かな影しか見えない。これがもし〝赤〟のアーチャーであれば、臭跡も手掛かりの一つとするのだろうが、ライダーはそこまで鼻が利かない。

次々と矢が放たれる……軌道はあまりに分かりやすい、ただ手当たり次第に狙っただけ。鼻で笑って、槍で弾く。躱すのも、避けるのもあまりに容易かった。追い詰めている、という実感が湧いた。

次の矢だ、次の矢を放った直後、自分は彼に――あるいは彼女に追いつく。

――射て、射て、射て、さっさと射ってしまえ！

ライダーの願いは叶えられた。放たれた直後の矢を摑み取り、顔を近付けて笑う。

「捉えたぞ」

〝黒〟のアーチャーは驚いて良いはずだった。否、驚かなければならなかった。弓兵は徹底的に追い詰められ、あらゆる攻撃を封殺され、遂には弓兵にとって致命的な距離まで接近を許してしまったのだから。

にも拘わらず、その男は空恐ろしいほどに穏やかだった。接近してきたライダーに微笑みかけさえした。

――いや、待て。

――この、男は、見たことが、

――違う、語ったことが、教えられたことが、寝食を共にしたことが、

「あ――なた、は」

「そう、それが君の欠点です」

〝黒〟のアーチャーは穏やかな声音でそう告げると、目の前にいた男の鳩尾を蹴り飛ばした。ライダーの軀が、強烈な打撃で宙を舞った。着地したアーチャーは流れるような動作で、弓に矢を番え――射ち放った。

「……ッ!!」

狙われた場所が、自身の〝急所〟であることを理解して全身の神経がささくれ立った。軀を螺旋り関節を限界まで曲げて、ともかく矢の軌道から外れようとする。

――外れた。

矢は急所ではなく、脇腹に突き刺さった。鮮烈な痛みがライダーの全身を駆け抜けるが、彼は気にも留めない。それよりも、眼下で佇んでいる男の方が問題だった。

〝黒〟のアーチャーに関する、全ての謎が解けた。〝赤〟のアーチャー――アタランテと並ぶ弓の腕を持っていたのは当然だ。何しろ彼は、自分も含めた英雄たちの教師なのだ。

脇腹の矢を引き抜き、矢を放り捨てて立ち上がる。アーチャーは弓を持ったまま、ライダーが口を開くのを待っているかのように、身じろぎ一つしない。

「――どうして、貴方が」

「愚問ですよ。此度の聖杯大戦において、私は〝黒〟のアーチャーとして顕現した。そして君は〝赤〟のライダーとして顕現した。互いに懸ける望みがあり、未練があった。だから此処に居るのでしょう。私も、そして君も」

「……」

ライダーは俯き、沈黙する。アーチャーは嘆息して、窘める。

「全く甘い。生前からそこだけは直りませんでしたか。貴方は自身が敵と認めた者にはとことんまで苛烈だが、一旦味方ないし『良い奴』と認めた者にはただただ甘い。それは英雄として愛すべき性質かもしれない。ですが、これは聖杯大戦――情けなど掛けている余裕はないのです。仮令、英雄と言われる君であってもですよ？」

――分かりましたか？　アキレウス。

アーチャーはそう、〝赤〟のライダーに真名で呼び掛けた。アキレウス、と呼ばれた青年は教えを受けた生徒のように厳粛な態度で、首を一度縦に振った。

§§§

〝黒〟のランサー（グラド三世）は、無手であった。扱うべき槍はなく、ただ馬を走らせている。

竜牙兵たちが接近するランサーを感知して一斉に蠢き始めた。その数、百や二百ではない。総勢五百体以上の竜牙兵たちが彼に群がろうとしていた。

無論、サーヴァントたる彼にとって一山いくらの雑兵など、全く問題ではない。だが、それでも真っ只中に飛び込むのは蛮勇である。

ランサーは銅鉄馬（ブゾムト）に大地を蹴らせ、高々と空を舞う。両腕を広げた彼は声も高らかに宣言する。

「さあ、我が国土を踏み荒らす蛮族たちよ！　懲罰の刻だ！　慈悲と憤怒は灼熱の杭とな

って、貴様たちを刺し貫く！　そしてこの杭の群れに限度はなく、真実無限であると絶望し――己の血で喉を潤すが良い！『極刑王（カズィクル・ベイ）』！」

大地が微かに揺れる。反射的に竜牙兵たちが下を見た。瞬間、周囲一帯に細長い杭が召喚、天を衝くように伸びて彼らを次々貫いていった。ざくざくと、草原に樹木が生える。杭は細い幹で、葉と枝は骨だ。

宝具発動から三秒。五百体の竜牙兵たちは全滅した。

ランサーはそれらを一切合切無視し、ただ真っ直ぐ空中庭園へと向かう。

……無論、それを察知した者たちは直ちに迎撃に打って出た。

「来たか」

猛烈なスピードでこちらへ向かってくるサーヴァントをランサーは視認した。一騎は弓、もう一騎は槍――即ち、〝赤〟のアーチャーと〝赤〟のランサー。

同クラスの対決、という点に奇妙な愉悦を抱きつつ、〝黒〟のランサーは彼らに狙いを定めて杭を一斉召喚。彼らが疾走する草原に、次々と杭が立ち上がる。馬より速く軽快に駆けていた〝赤〟のアーチャーの速度が鈍り始めた。

彼女の眼前に杭が出現する。杭を摑んで、猿のように絡みつくと騎乗するランサーに向けて矢を放った。

だが、ランサーの前に突き上がった杭が矢を防いだ。ランサーは馬に乗ったまま、その場に悠然と佇んでいる。〝赤〟のアーチャーは更に矢を射たが、いずれも突き出す杭に防がれた。

このサーヴァントは、杭に守られている――〝赤〟のアーチャーはそれを認めざるを得なかった。どうやら、この杭が彼にとっての宝具らしい。とするなら、シロウ神父の言っていた通り、彼こそが〝黒〟のランサーであり、その真名は――。

「〝黒〟のランサー、ヴラド三世とお見受けする」

〝赤〟のランサー――カルナが告げた通り、ルーマニアの大英雄ヴラド三世なのだろう。

「ほう。余を真名で呼ぶ貴様は〝赤〟のランサーか」

「そうだ。理由（わけ）あって、お前を討つ。悪く思うな」

「いやいや、悪く思う必要はないさ。お前たちは余を殺さねばならず、余はお前たちを殺さねばならない。痛ましいが、当然ではある。それに我が国を侵略する輩（やから）を打ち倒すのは、王としての役割だからね。だから、嘆く必要はない」

〝赤〟のランサーの眼前で、地面から杭が突き上がった。

「――ふむ」

だが、〝赤〟のランサーが持つ神槍はあっさりと杭を打ち砕く。

「なるほど。やはり、この杭が宝具か――しかし、この数は異常だ」

高々と掲げられた周囲の杭には、無数の竜牙兵たちが突き刺さっている。まるで白骨になるまで捨て置かれた人間たちのようだ。

そう、杭そのものが宝具であるというのはまだ良い。単体ならばさほどの破壊力もなく、速度も遅い。……だがこの数はあまりに多い、既に千を超えている。さらに地面から唐突に突き上げてくるので、躱すことも難しい。

数量――それがこの宝具の最たる特徴である。彼が展開可能な杭は、おおよそ二万。既にこの時点で破格だ。対軍宝具、対城宝具で百人千人を仕留める宝具は確かに存在する。だが、万を超えるとなるとさすがにそうそう存在しない。

これは彼の宝具が聖剣神槍の類でなく、歴史的に起きた『出来事』――即ち、二万のオスマントルコ兵を串刺しにした伝説の再現を行うものであるためだ。

確かに、一本一本の杭は宝具未満の取るに足らぬものかもしれない。

だが――二万という圧倒的な数は剛胆な英霊たちですら威圧する。狂気の沙汰でありながら、これ以上ないほどに緻密な軍事的示威行為。それは最早、人間であっては成し得ないことだ。

故にこの宝具は『極刑王（カズィクル・ベイ）』。所有者と同じ名をつけられた、最恐宝具である。

「ランサー！」

〝赤〟のアーチャーは、〝赤〟のランサーに呼び掛けた。無論、ランサーにもよく分かっている。眼前に佇む〝黒〟のランサーから魔力が渦巻き収束していく……！

「さあ、我が故国に無断で踏み入った咎人たちよ。処断の刻だ、あの竜牙兵（ガラクタ）共々屍（かばね）を晒すがいい」

〝黒〟のランサーの指先がわずかに動いた――瞬間。

杭が一気に〝赤〟の二騎に向けて突き出てきた。アーチャーは咄嗟に宙空に避けたが、そこへ狙い定めたかのように後から後から杭が湧いて出てくる。

〝赤〟のランサーもまた、反射的に跳躍した。地面を足で踏んでいれば、そこを狙われると睨んでのことだ。だが、杭が一斉に落下する彼の軀を突き刺そうと飛び出してくる。

再び神槍で一閃――何と破壊された杭に割り込むように、新しい杭が現れた。

「――破壊は無意味か」

咄嗟に片手で杭を摑んだ〝赤〟のランサーに、更に杭が襲いかかる。それは、さながら杭の濁流だった。それでも〝赤〟のランサーは一向に慌てることなく事態に対処する。

そもそも、彼の纏う鎧『日輪よ、具足となれ（カヴァーチャ＆クンダーラ）』は神から与えられた太陽の輝きを持つ絶対防御宝具。王の杭など、容易く弾き返す。

だが――。

「素晴らしい鎧だな」

声は思っていた以上に接近していた。何時の間に装備したのか、片手に槍を持ちながら

〝黒〟のランサーは〝赤〟の傍らまで辿り着いていた。
そう。彼は鋼鉄馬で杭を駆け上ったのだ。そして杭に搦め捕られ、身動き取れぬ〝赤〟のランサーの首筋に槍を突きつける。
「だが、ここまで近付けば意味を成さん」
「ランサー……!!」
〝赤〟のアーチャーが矢を放つが、杭が防壁の如く立ちはだかって矢を防ぐ。助けは求められず、動くこともできず、槍の穂先は喉に突きつけられた状態――なのに、〝赤〟のランサーの表情は、どこまでも冷静だった。
〝黒〟のランサーが槍を突き立てようとした瞬間、〝赤〟のランサーの軀は夜を切り裂くが如く、眩く輝いた。
英霊カルナが持つスキル『魔力放出』。〝赤〟のセイバーが持つスキルと同じ名前を持っているが、彼の場合はそれが『炎』に特化している。
搦んだ杭が、軀を束縛していた杭が、悉く焼け落ちていく。その様は地上に降臨した炎神のようだった。地上を灼き尽くすような勢いの焔はしかし、彼の髪の毛一本たりとて冒しはしない。
優雅とすら思える動作で〝赤〟のランサーは着地した。その様子を見て〝赤〟のアーチャーは呆れたように息をつく。

「最初から、そうすれば良かっただろうに」
「そうは上手くいかん。サーヴァントとしてのオレはひどく燃費が悪くてな。あんな真似をすれば十秒も保たぬ」
困ったものだ、と〝赤〟のランサーは嘆息する。英霊カルナは紛れもなく超一流である。だが常時展開している黄金の鎧、手にした豪壮たる神槍、そして今しがたの『魔力放出』と、尋常ではないほどの魔力喰らいでもあるのだ。並の魔術師であれば指先一本動かせない状態だろう。一流の魔術師であっても、自身の魔術を行使できないほどに疲弊する。
そのことについて、マスターから一言も文句が出ないのは有り難いが、甘える訳にもいかない。その点、〝赤〟のランサーは自分をよく律していたといえる。
「――どうやら、ただの英霊ではないか」
煤を払いつつ、〝黒〟のランサーは冷えた声で呟いた。そこには些かの精神的動揺も見受けられず、怒りすらもない。
「降伏するか？」
「冗談とも本気ともつかぬ言葉を吐くな、〝赤〟のランサーよ。聖杯に懸ける望みがある以上、降伏だけはない。それに――」
右手を掲げると、周囲の地面から殺意が滲み出た。まだまだ杭は有り余るほど存在し、二騎の英霊を付け狙っている。更に、遥か後方からもっと空恐ろしい『何か』が動き出し

たことも、〝赤〟の側は感じ取った。

「降伏すべきは君たちではないかね？　もっとも異教徒の上に侵略者である君たちに容赦はしないが」

なるほど炎と神槍は杭を灰にし、打ち砕くだろう。しかし、圧倒的な物量に抗することが可能かどうかは、五分五分というところだ。二万という数は、万夫不当の英雄ですら手に余る。それでも生前ならば問題なかっただろうが、今の彼らはサーヴァントだ。魔力を大量に消費すればするほど、死に近付く。

「――そうだな、戯れ言は忘れてくれ。行くぞ、アーチャー」

「来い」

〝赤〟のランサー（カルナ）は両手で神槍を握り、〝赤〟のアーチャーは再び矢を番えた。二騎の前に立ち塞がるは、この国を支配する〝悪魔（ドラクル）〟の王。

銅鉄馬が嘶くと同時、三騎は再びの激突を開始した。

§§§

〝黒〟（アストルフォ）のライダーは多少迷ったものの、愛馬（ヒポグリフ）を駆って浮遊要塞へと向かった。空を翔ぶことが可能なのは自分だけであり、ならばまずはそこを押さえるべきだと、無い知恵を振り絞って考えたのだ。

ただし、それには懸念が一つある。ヒポグリフを召喚、騎乗して使役する。この段階までなら、魔力消費は然程でもない。ホムンクルス一人で充分に賄える範囲内だ。問題は、真名を唱えて、その力を発揮させた場合である。

その魔力消費は、Aランク宝具の全力解放に匹敵する。しかも、一撃放てばそれで消費し尽くすという訳ではない。ヒポグリフを展開し続ける限り、魔力を消費し続けるという非常に燃費の悪い仕様なのだ。

……脳裏に、否応なく吸い尽くされるホムンクルスたちの姿が蘇る。ジークの、あまりにもか細い懇願を思い出す。

少しだけ迷った末に、〝黒〟のライダーは真名の解放を封印することにした。結局、今の自分はやりたくないのだ。ならば、やらないという選択肢を選ぶしかない。

ああ、実に莫迦だ。愚かな考えだ。そして、弱い。魔力電池（カルデアス）のことなど気にせずに、真名を解放するべきだ。ジークとて、ライダーを責めることはない。戦うために、勝つために召喚されたサーヴァントにそこまで願えない。

だが。アストルフォとは、そういう英霊なのだ。やりたくないのだから、誰に何と言わ

れようとやらない。
「……よし、行くか！」
浮遊する要塞を前に、ライダーは変わらず軽い調子でヒポグリフの首筋を軽く叩いた。甲高い、鳥のような啼き声で応じたヒポグリフは翼を強くはためかせる。飛翔――吹き荒ぶ風と共に翼から零れた魔力の粒子が、無数の蛍のように一瞬灯ってすぐに消えていく。
空中庭園に向かって、ライダーは飛んでいく。……無論、彼の能天気な行動を要塞の主が、許すはずもないのだが。

「――ほう、向こうのライダーも天を翔る馬を持っているか。ならば、用意したこいつも無駄にはなるまい」
浮遊要塞――『虚栄の空中庭園』にただ一人残った〝赤〟のアサシンは薄ら笑って、彼らを空へと解き放った。
「行け。醜悪なる翼者ども。せいぜい食い散らかしてやれ」
その言葉と共に、人間大の『何か』が一斉に庭園から飛び立った。

ライダーは戦場の空を縦断する。眼下では、既に二勢力の激突が開始したのが見て取れる。竜牙兵とホムンクルス、ゴーレム。あるいはサーヴァント同士が激突し合い、死闘を

繰り広げている。
「よーし。ボクも頑張らなきゃ……！」
気合を入れ直したライダーに、タイミング良く迎撃に出た怪物たちが襲いかかってきた。上半身は竜牙兵だがその背には翼が生えており、下半身は明らかに鳥類のそれだった。
「妖鳥……？　いや、竜牙兵の改良版？」
空飛ぶ慾獣である妖鳥は、いかんせん食欲に惑わされやすく、残酷な癖にやたらと臆病で兵士には向いていない。そこで、〝赤〟のアサシンは彼らを竜牙兵と融合させた。竜牙兵ならぬ竜翼兵とでも呼称すべきか。いずれにせよ、竜の名を冠するにしては随分と貧相で醜悪な兵士たちだ。
だがやはり数が多い。百羽あまりの竜翼兵が襲いかかる様はさながら鳥葬だ。彼らは鋼鉄より鋭く硬い鉤爪で、庭園に侵入しようとする不埒者を排除すべく一斉に襲いかかる。
――けれども、彼らの相手は最悪だった。
何しろ彼らの相手は幻想種に数えられるヒポグリフだ。さすがに雑兵程度に遅れを取ることなどない。そして、その騎乗している相手というのがまた最悪だ。
〝黒〟のライダー、シャルルマーニュ十二勇士のアストルフォ。数多の冒険を繰り広げた彼には、限定条件下で効果を発揮する様々な宝具がある。相手を転がすという部分に特化した槍、あらゆる魔術を打破する書物、ある一点において特筆すべき力を持つ幻馬。

そして、今しがた彼が手にした角笛はその最たる物だろう。
「それじゃ一列並んでぇ。はーい――『恐慌呼び起こせし魔笛（ラ・ブラック・ルナ）』！」
おおよそ気の抜ける掛け声と共に、腰にぶら下げていた角笛が巨大化した。
「散れッ！」
大きく息を吸い込み――角笛に向けて一気に吐き出す。甲高い角笛の音が戦場に響き渡った。一瞬、ホムンクルスや竜牙兵たちも揃って空を見た。
竜の咆吼、巨鳥の雄叫び、神馬の嘶き――それらと比肩するほどの魔音は、百羽以上居たはずの竜翼兵を一瞬で霧消させた。文字通り、消し飛ばしたのである。伝説に謳われた「音を聞いた妖鳥たちは恐怖で逃げ出した」などという生易しいものではない。純粋な広域破壊兵器だ。
「ようし、真っ直ぐ真っ直ぐ。行くぞーっ！」
縮小した角笛を腰に吊り下げ、〝黒〟のライダーは再び手綱を両手で握り――。

――そうは上手くいかんよ。可憐な戦乙女よ。

庭園の先頭に立つ、黒衣の女に気付いた。見間違うはずもない、サーヴァントだ。その服装で、〝黒〟のライダーは彼女のクラスを判断した。

「……〝赤〟のキャスターとお見受けする!!　どうか、お覚悟を！」
〝黒〟のライダーの叫びに、黒衣のサーヴァントは苦笑した。
「外れだ。我は〝赤〟のアサシン。しかし――お主の予想通り、魔術の腕にも少々心得があってな。この『庭園』にお主が入る資格があるかどうか、試させて貰おう」
指鳴りの音が一つ。瞬間、彼女の周囲に魔力が展開した。術式は既に組み立てられていたのか、深紫に輝く魔法陣は装填済みの大砲を思わせる。
「ああ、上にも下にもあるぞ。気をつけろ」
反射的に〝黒〟のライダーは空を見て、唖然とした。彼女の周囲に展開した四つの魔法陣だけではない。上空にも四つ、自分より下側の空にも四つ。全てに膨大な魔力が充填され、彼女の命令（アサシン・ことば）を今か今かと待ち構えている――！
「――失墜（おち）ろ」
解放命令、巨砲の一斉射出。獰猛な唸り声にも似た光柱の音、空気の壁をあっさりと突き破り、ライダー目掛けて襲いかかる。
「やってやるさっ……!!」
〝黒〟のライダーは常時発動型の宝具『魔術万能攻略書（ルナ・ブレイク・マニュアル）』――仮初の名だが――あり、Aランクの対魔力スキルを保有する。これは事実上、現在の魔術師では彼を傷つけられないことを示している。

だからこその選択だ。さすがに本がなければ、彼も突撃は怯んだだろう。

だが、〝黒〟のライダーは知らない。目の前のアサシンは事実上、キャスターとしてのクラスも兼ねる掟破りの二重（ダブル）クラス。そして、キャスターのクラス別スキル『陣地作成』で最も高度な『神殿』を上回る大宝具、『虚栄の空中庭園（ハンギングガーデンズ・オブ・バビロン）』にその身を置いているのだ。

即ち、今の彼女は凶悪な大量破壊兵器を配備した堅牢な城塞に立て籠もっているようなもの。近付けば、それは殺せと己が身を投げ出すと同義である。

躱しきれずに全身に規格外（EX）の魔力が叩きつけられ、それだけでは飽き足らないとばかりに体内を掻き回され、執拗なまでに徹底的に陵辱された。

「く、あああああああああああああああああああああっ!!」

絶叫と共にヒポグリフが消え去り、〝黒〟のライダーは墜落していく。それを見ながら、醒めた瞳で〝赤〟のアサシンは呟いた。

「何だ。確かに失墜（おち）ろと言ったが早いにも限度があろうて。つまらん、竜翼兵を瞬殺したときは、少しは見所があると思ったのだが――」

眼下の争いに視点を切り替える。空から見た状況は一進一退、こちらのライダーは〝黒〟のアーチャーと、ランサーとアーチャーは〝黒〟のランサー（ヴラド三世）と対峙している。そして我がマスター、シロウは――。

「……ほう」

その光景を見て、笑みが零れた。惜しむらくは相手がバーサーカーというところか、戸惑う表情が見られない。

「まあ良い。見せて貰おうか、シロウ。我がマスターの晴れやかなる初陣をな」

§§§

〝黒〟のバーサーカー、フランケンシュタイン（フランケンシュタイン）は表情にこそ表れないが、困惑していた。

彼女は最初に与えられた命令通り、サーヴァントを求めて戦場を彷徨い、人影を見つけて森林へと飛び込んだのだが、そこに居たのはサーヴァントではなく――。

「どうやら、私の相手は貴女のようですね。フランケンシュタイン。人間（ヒト）が理想を追い求めて創った悲しき怪物（クリーチャー）。君はある意味で転換点であり、目指すべき中途の存在だ」

微妙に現状をはき違えているような、奇妙な台詞を呟いているのは人間だ。サーヴァントではないように思える。だが、果たして眼前の彼は人間なのだろうか？

〝黒〟のバーサーカー（フランケンシュタイン）の知覚力では、どうもその部分が曖昧だった。

「ウ――――」

竜牙兵たちが襲いかかってくるが、彼女は苦もなくそれをあしらう。一方、眼前の男にはまるで手を出さないところから、やはり相手側であろうことは理解できる。

だがそれなのに。何故、彼は自分の真名を知っているのだ？

自身のマスターであるカウレスが驚いていたように、フランケンシュタインは一般的に男性、それも雲を衝くような大男などと伝わっている。だから、外見で当てられるはずはないのだ。

……生前に出会っていた？

それもないだろう、自分は幻想が幻想として成立し得るギリギリの時代に誕生した若い英霊だ。その同時代に生きた人間で英雄になっている者は数少なく、居たとしても自分とは邂逅していない。

ならば。誰かが自分の真名を晒したか……？

「ああ、やはり君は明晰だ。バーサーカーでありながら、ある程度高次の思考回路を保っているとは、何とも近代的な英霊です」

屈託のない笑みを浮かべながら、男はバーサーカーに手を差し出す。

「私は貴女をよく知っている、よく理解している。どうです？〝赤〟（スカーレット）のバーサーカー（バルタクス）の代わりに、こちら側に来る気はありませんか？」

その言葉に、バーサーカーは警戒を籠めて威嚇した。苦笑しつつ、男は手を下げる。

「そりゃ無理でしょうよ、我がマスターよ」

バーサーカーの警戒が更に強まる。男の背後に、今度は明らかにサーヴァントと思しき者が現れた。魔力は薄い——そして、戦闘に向いているとは言い難い服装。キャスターだろうか？

「おっと失礼。吾輩、戦う気は毛頭ありません。戦うのは、このマスターです。吾輩は見守り、応援するだけ」

そう言って、サーヴァントとしてはあるまじきことに——マスターを盾にするように、一歩後ろへ退がった。魔術を行使する気配は皆無。信じ難いことに、本当に……こちらが戦うつもりらしい。

「そう。戦うのはこの私、シロウ・コトミネです」

ゆらりと両腕が垂れ下がった瞬間、彼の両手指の間に『柄』が挟み込まれていた。バーサーカーの乏しい知識では、何の武器かまでは理解できない。

だが、見る者が見ればすぐにそれと理解できるだろう。浄化を摂理とし、魔力で編んだ刃を投擲する概念武装『黒鍵（こっけん）』である。

「——もしもこちらにつく気がありましたら、いつでも申し出て下さい」

にこやかにそう告げるなり、シロウは黒鍵を射ち放った。

「……ッ!?」

バーサーカーは後方へ飛び退きつつ、武器である『乙女の貞節（プライダル・チェスト）』で黒鍵を弾いた。

「――ナ――――――――――――――オゥゥゥゥ!!」

それで腹は決まった。どうあれマスターが敵として出てきてくれたのだ。罠があるにせよ、無いにせよ、現状からマイナスになるとは思えない。もちろん、実体化したキャスターには常に注意を怠らないようにする。その状態でも、自分が遅れを取るとは思えない。

バーサーカーは一転、前方へと驀地（まっしぐら）に突き進む。黒鍵が更に四本、彼の手から投擲された。人間にしては見事な速度であり、虚を衝かれれば自分も串刺しになるだろう。

だが、真っ正面から芸もなく射ち出されたのでは何の意味もない。再び弾き返し、更に前へと迫る。

「――さすが」

余裕の表情で賞賛する。微かにバーサーカーの頭に苛立ちが湧いた。その顔面を叩き潰された後でも、果たしてそうやって余裕の態度を続けられるか、試してみるか――！

「――告げる（セット）」

瞬間、自身の周囲に落雷めいた衝撃が走る。咄嗟に自身諸共『乙女の貞節』を三百六十度回転させた――弾いたはずの黒鍵が、自分を狙って戻ってきた。予めそういう術式を柄に仕込んでいたらしい。

「惜しい惜しい」

シロウの呟きは、果たして自分に向けてだったのか。あるいは――惜しいところで弾き飛ばした、彼女へ向けた言葉だったのか。

関係ない、とバーサーカーは即座に切り捨てる。元より自分は複雑な思考に長時間耐えられないのだ。徹底的に、ひたすら愚直に、ただ前へ進む……！

「さて、それでは。キャスター、使わせて貰いますよ」

シロウがそう言って、手を宙空に差し出した。たちまち、迸（ほとばし）る魔力と共にその得物が召喚される。鉄鞘に収められた日本刀に、突貫するバーサーカーの視線が集中する。同時に驚愕、信じられない。膨大な魔力が収束したその刀は明らかに――宝具だ！

「ええ、ええ。どうぞどうぞ！　ご存分にお使いなされい！　烈火を伴う嵐のように！　稲妻を伴う豪雨のように！　永劫醒めぬ物語が、これより始まる！」

キャスターの興奮した叫びと共に、シロウが疾（はし）走り出した。左手の鉄鞘から一気に刀を引き抜き、深く体勢を沈み込ませて刺突（つき）を放った。

「ウ――――ゥゥゥゥゥッ!!」

突進に虚を衝かれ、バーサーカーは皮一枚引き裂かれた。その事実が、この刀が只の代物ではないことを実感させる。サーヴァントの軀に傷をつける武器など、そうそう有りはしない。

バーサーカーは戦鎚（メイス）を振るう。斬撃と殴打が乱舞する。まともに受ければ、恐らくは折

れるか曲がるであろう刀だが、何合打ち合っても刃毀(こぼ)れ一つとてない。
技量による芸術的な捌き――ではない。シロウの剣術は、ほぼ並だった。雑兵とまではいかないが、達人と呼ぶにはやや遠い。だが、それならば何故彼とバーサーカーは互角に打ち合えるのか。
……バーサーカーとて、確かに武の体現者として名を馳せた英霊という訳ではない。その凶暴性や残虐性、出自によって英霊として昇華された存在だ。だが、それでも元々からの機能(スペック)は破格なのだ。
無限循環、第二種永久機関を擬似的に再現している彼女はいつ如何なる状況でも全力で動き続ける。息を切らす、力が切れる、そんな人間らしい状態はない。相手が斃れるまで無呼吸のまま永久に殴り続ける――それ故の狂戦士(バーサーカー)の称号である。
そう、その永久機関と真っ向から打ち合う〝人間〟というあってはならぬ存在。無論、聖堂教会の代行者であったならば人ならざる修練を積んでいて当然と言えよう。
しかし、それにしてはあまりに図抜けている。バーサーカーは胃の底に沈殿するような不快感を抱きつつあった。
大きく振りかぶった戦鎚を一気に振り下ろす――躱された。それはいい、それだけならばいい。人間とて、魔人の領域に達した者ならば躱せぬものではない。問題はその躱し方だ。文字通りの紙一重、頭を握り潰したトマトのように弾き飛ばせる鉄球が、鼻の数ミリ先を通過したにも拘わらず、薄笑いを浮かべるような人間はいない。
笑いが気に入らない、とバーサーカーは思う。その瞳が気に入らない、とバーサーカーは思う。だが、何よりも――ここに存在することが気に食わない！
シロウが一足飛びで距離を開いた。片手で刀を握り、もう片手で黒鍵を構える。
狂乱する人造人間は、黒鍵の投擲にも何の躊躇いもなく突き進む。

§§§

〝黒〟(ヴラド二世)のランサーに〝赤〟側から二騎のサーヴァントが相対したのを見計らって、キャスターは〝赤〟のバーサーカー(バルタクス)を解放した。現状、〝黒〟のランサーがこちらの要になっている。死なすわけにはいかない、というのが〝黒〟のキャスター(アヴィケブロン)の判断だった。
「バーサーカー。お前のマスターは僕だ。分かるな？」
「ああ、分かる。どうやら、君の力無しで私は存在できないらしい。許し難い隷属だ」
「……なら、僕を殺すかね？」
「だが君を殺すことはできない。何故なら、私には少しでも長くこの現世に残らねばなら

ない使命があるからだ。圧制者を打ち倒し、絶望の果てにある希望を摑まねばならないからだ。そして最後に、聖杯を求めて集った欲深い権力者たちを鏖殺しなければ」

「――なるほど。だが、その為にはまず相手方を殲滅しなければ話になるまい。行け、バーサーカー。お前の相手は侵略者であり、権力者の走狗だ。動機としては充分だろう」

バーサーカーの封印が解かれていく。我慢しきれぬとばかりに、バーサーカーはもがきにもがき、とうとうその一歩を踏み出した。

彼は自由を得た途端、凪いだ海のように穏やかな笑みを湛えたまま、キャスターの方へと顔を向けた。だが、キャスターはその一切に反応しない。仮面を被っているせいで、怯えているかどうかすらも分からない。

「……ふむ」

〝赤〟のバーサーカーはキャスターに関心を無くしたようで、戦場へと顔を向けた。嬉しそうに深呼吸しながら、小剣（グラディウス）というには、あまりに規格外の大きさの剣を手に戦場へと歩き出した。

それを見送り、やれやれとキャスターは溜息をついた。下手に居丈高に出れば、前言を撤回して（バーサーカーほど気紛れなサーヴァントは存在しない）、自分を殺しただろう。

「僕は弱いからな……あれなら、一撃だ」

青白い、屍人（しびと）のような肌ながら、その男はどこまでも筋肉（マッスル）である。あれは戦場を蹂躙し

混沌に叩き込む悪鬼であり、一切合切を無に還（かえ）すだろう。

「さて、後は――」

キャスターの残る役割は一つ。頃合いを見計らって魔術師を生贄に捧げ、自身の宝具を起動させる。ダーニックの許可は得ている、問題ない。……自信はあるが、果たして選りすぐりの英霊たちにどこまで通じるかの不安はある。けれど、それを乗り越えなければ己が願望は繋ぎ止められない。

〝黒〟のキャスター、アヴィケブロンが聖杯に託した望みは複雑だ。普通、聖杯戦争は望みを叶えるために英霊たちと殺し合い、勝ち進む。だが、彼の場合は些か事情が異なっている。

彼の願望は、己の宝具である『王冠・叡智の光（ゴーレム・ケテルマルクト）』の完成にある。では、宝具を起動させれば望みは叶えられるのだろうか？

否、だ。そもそもゴーレムとはカバラの術の一つであり、名は〝胎児〟や〝形作られざるもの〟などを意味している。それは即ち、神が人間（アダム）を創造した際の秘術を再現しようとする試みに他ならない。

つまり宝具として成立した段階では未完成なのだ。比類なき力を振るうことはできても、それは決して完成された存在ではない。

苦難に満ちた我々を、再びエデンの園へと導く偉大なる王――それが、至高のゴーレム

に求められる役割だ。
材料はほぼ揃った。残ったのは最後の『炉心』、即ち魔術師。せめてホムンクルスを捕縛できれば良かったのだが、贅沢は言うまい。
〝――先生！〟
遥か遠くから声がした。振り返って見上げれば、城壁に自身のマスターであるロシェがいて、無邪気に手を振っていた。見えはするが会話にはさすがに遠すぎるせいだろう、念話を使っている。
〝危ないと思うが〟
〝はい！　あの、戻ってきたら……僕のゴーレムを見て貰えませんか!?　今度は、上手くできたと思うんです！〟
ほう、とキャスターは感心したように頷いた。彼のゴーレムに対する情熱はなかなかのものがあった。アドバイスすればすぐにそこを修正し、よりよいものを目指そうとする。生前であれば、弟子として傍に置いていたかもしれない逸材だった。
何より、自分や祖が編み出したゴーレムの秘術を、未だ伝え続けている家系であるというのは好感を持てた。
〝時間があれば見せて貰う〟
〝は……はい！〟

ロシェはまだ言い足りないようだったが、やがて照れたように俯いて顔を引っ込めた。
「とはいえ、子供は苦手だ」
そもそも、生前のキャスターは多々の病を患っていたこともあり、ほとんど人間たちとは没交渉で過ごしてきた。家事に関しては、わざわざメイド用のゴーレムを造ったほどだ。それだけに、子供とはまるで縁がなかったし、まして自分を慕うなどという状況は困惑するだけだ。
何て皮肉だろう。神の奇跡、その再現を目指して原初の人間を創造しようとする自分が、どうにも人間を嫌っているとは。
「――やれやれ」
魔術師を『炉心』とするのに躊躇いが無いと言えば嘘になる。それでも、キャスターにとって宝具の完成は悲願そのものだ。結局のところ、勝利のためには全てを犠牲にする覚悟が必要なのだ。
それにまあ、ダーニックから許可は得ている。彼――ゴルド・ムジーク・ユグドミレニアならば、『炉心』としてはまあ及第点だろう。キャスターとしてはよりよい宝具を目指したいが、彼以外に選択肢が無い。
それが、彼には少しだけ残念だった。

〝赤〟のバーサーカーは喰らいつく竜牙兵を一切無視して、猛然と〝赤〟のランサー（ルー・ナー）とアーチャーへと襲いかかった。脇目も振らずここにやってきたのは、恐らく〝黒〟のランサーのせいだろう。

マスター替えで陣営が変わっていた上に、キャスターの令呪による束縛がなければ間違いなく〝黒〟のランサーへと襲いかかっていたに違いない。その無意識の願望が、彼をこの戦場におけるもっとも激しい修羅場へ導いた。

まさしく爆弾のような〝赤〟のバーサーカーだが、その力はサーヴァントたちに怖気を走らせる程に強大だ。

「ちっ。やはりあの時、腱を射貫いておくべきだったか……!!」

〝赤〟のアーチャー（アタランテ）はそう言って、立て続けに矢を掃射した。機関銃の如き速度で放たれた矢は、全弾命中。彼の膝を針鼠の如く変えた。

ぼこりと音を立てて、膝はまるで熟し過ぎた柿のような薄気味悪い色に変わるが〝赤〟のバーサーカーは斃れない。

「――アーチャー。バーサーカーを頼む。こちらはこの串刺し公（カズィクル・ベイ）を引き受けよう」

〝赤〟のランサーは、〝黒〟（ヴラド三世）のランサーと槍を交えつつそうアーチャーに告げた。

「了解した。フン……思えば哀れな生き物よな、汝は！」

この聖杯大戦に参戦した以上、誰かの下に隷属せねばならない。時には圧制者の走狗となって戦わなければならない状況があったかもしれない。……もし、真っ当な剣士（セイバー）として召喚されていれば、果たしてその屈辱に耐え切れたかどうか。

だから、彼が聖杯を賭して戦うならばリスクの大きい狂戦士（バーサーカー）以外にない。そして彼の狂化は救いようがない方向へ事態を悪化させていく。恐らく、どの聖杯戦争に召喚されても、聖杯を得ることは永遠に叶うまい。

だが、それでも彼は微笑みながら悪を誅する。痛めつけられながら、逆転の道を探る。被虐の求道者にして絶望の破壊者。それこそがスパルタクスの人生そのものだ。

〝赤〟のアーチャーは故に哀れと彼を断じ、矢を放つ。彼女にとって、バーサーカーは図体の大きい的に過ぎない。彼の剛腕から繰り出される小剣の一撃も、突進も、彼女の獣のような速度の前では無為に等しい。だが、バーサーカーの鋼鉄のような筋肉は幾ら矢が突き刺さってもビクともしない。

「硬いな……ならば、こうするか！」

アーチャーは間合いを取るのを止めて、勢いよく走り出した。迎撃の横薙ぎを躱しざま

に地面を滑る。彼女を追うように、『極刑王（カズィクル・ベイ）』が矢継ぎ早に杭を突き立てたが、全力で疾走したアーチャーに届くはずもない。

バーサーカーの両足の間を潜り抜けながら、アーチャーは一瞬で下顎、喉笛、鳩尾、腹部を矢で貫いた。

「ははははは！　まだだ！　まだだ！　まあああああだあああああだぁぁぁ!!」

だが、振り返ったバーサーカーは力任せにアーチャーの腹部を蹴り上げた。砲弾の直撃を喰らったに等しい衝撃に、アーチャーは竜牙兵やホムンクルスを巻き込んで二十メートルは吹き飛んだ。

「ぐ、ぅっ……！」

間一髪、蹴りを喰らう直前に後方へ逃れていたのが幸いした。そうでなくては、上半身が引き千切れていてもおかしくないほどの衝撃だった。

迂闊だったとアーチャーは苦悶しつつ、こちらに迫るバーサーカーを見る。あれだけ矢を射たにも拘わらず、その猛進はまるで変わらない。

〝矢は通っているはずだが……？〟

高位の英霊、たとえば神に愛された〝赤〟のライダー（アキレウス）のような英霊ともなると、スキルや宝具で攻撃を無効化することが可能だ。一定水準未満の攻撃を完全無効化する宝具、などという反則に程近いものを持つ英雄も、彼女は一人知っている。

だが、シロウに聞かされた〝赤〟のバーサーカー（バルタクス）の宝具やスキルには、そういったものは見当たらなかった。無論、教えて貰っていないという可能性もある。だが、敵対していることが明瞭なこの状況で、情報を隠す動機などまずない。

それに何より、矢は確かに突き刺さっている。そういう手応えはある。鬱陶しいのか、バーサーカーは時折刺さった矢を引き抜いているのだが、全身傷だらけであることは間違いない。

そう、血も流れている。間違いなく傷ついている。ならば、ただ単に耐えているだけ。その途方もない耐久力に甘えているだけか。

〝いや……何か、おかしい〟

戦いと狩りに明け暮れた少女である。矢を番えつつも、遠目からバーサーカーの姿を観察してようやく気付いた。

傷口が修復している。修復というよりは、過剰な再生のようだ。穿たれた部分が、腫瘍のように盛り上がっている。アーチャーの矢は体中に孔（あな）を穿ったはずだ。ということはつまり――。

「まさか、こいつ……巨大化しているのか!?」

それぱかりではない。先ほど以上の魔力の奔流を感じる。全身に濃厚な魔力を纏いつつ、バーサーカーは先ほど以上の威力と速度で剣を振り上げる――！

「ちぃっ……!!」

アーチャーは紙一重で、振り下ろしを躱しつつ跳躍。バーサーカーの腕に飛び乗ると、顔面目掛けて駆け上った。

「――ならば、汝の素っ首戴こう！」

バーサーカーの肩に乗ったアーチャーは、その首筋に矢を立て続けに射ち込んだ。天性のバランス感覚か、彼女はいくら振り回されても落ちることなく、背中を這い回り、突き刺した矢を摑んでひたすら首を斬り続けた。

ごぼごぼと、血の噴き出る音がし始めたところで止めとばかりに弓を仕舞い、バーサーカーの肩を両足で踏み締め、渾身の力で首を引っ張り上げた。みちみちと肉の千切れかかる音に、更にバーサーカーは暴れ狂う。

噴き出す血に足を取られ、アーチャーは地面に落下した。転がって体勢を立て直し、バーサーカーの骸を確認しようとして――さすがに唖然とした。

「……悪夢よな」

アーチャーの呟きは無理もない。千切れかかっていたはずの首は、泡でも噴き出るかのように肉が盛り上がっていく。あまりにもおぞましく、わずかな滑稽さすら垣間見えた。

そして、彼の内側に流れる魔力がまた増大したのをアーチャーは知覚した。

〝赤〟のバーサーカー、スパルタクスの宝具『疵獣の咆吼（クライング・ウォーモンガー）』――ダメージの一部を魔力

変換し、蓄積して能力を推進（ブースト）させる自身に向けられた対人宝具。

「だが、姿形まで異形になるとは聞いておらん、ぞ……っと！」

亀のような首になったバーサーカーが、白目を剝いたままニタリと笑った。鞭のような腕から振るわれる斬撃をしゃがんで躱しつつ、今度は剣を握っていた手を手首部分から引き千切るように射った。おおよそ三本の矢が手首を穿ったせいだろう、さすがに手から小剣が離れた。

アーチャーは猛然と疾駆して、その剣を拾い上げるともがいていたバーサーカーの手の甲へ両手で振り下ろして突き立てた。

悲鳴は上げなかったが、深く深く刺し込んだせいで動きは停止した。いっそ手首を千切れば脱出できるだろうが、生憎と過剰なまでの再生能力のせいで、既に手首は癒着していた。

「よし、しばし動くな」

アーチャーは周囲一帯に竜牙兵とホムンクルス、ゴーレムくらいしかいないのを確認して、再び二本の矢を番えて空を狙う。

領域（エリア）を極度に限定させ、その矢を一点に集中させる。二度目の宝具使用になるが、自分の持つ攻撃手段の中で現状最適なものがこれだから仕方ない。

……幸い、マスターは一言たりとも文句を言わない。

「この災厄を捧ぐ――『訴状の矢文（ボイボス・カタストロフェ）』！」

〝赤〟のバーサーカーが空を睨み、笑う。光り輝く雨が、彼を浄化せんとばかりに降り注いだ。

全身を余すところなくずたずたに切り裂き、まさに一寸刻みに刻んだ。筋肉組織、表皮、血管、神経、その他あらゆるものを損傷させた。普通のサーヴァントであれば、間違いなく死んでいる。優秀なサーヴァントといえども、瀕死状態は免れまい。即座の快復など、マスターが一級の魔術師であったとしても不可能だ。

だが――しかし。

「……まさか」

唖然とした〝赤〟のアーチャー（アタランテ）の呟きに応じるように、もぞもぞと肉塊が蠢き始めた。

§§§

アキレウス。知名度という点において、ギリシャ神話のヘラクレスに匹敵する大英雄だ。恐らく世界規模で知られている英雄など、彼を含めて十人にも満たない。だがしかし、その駿足で駆け抜けた生前の物語を知る者となると途端に減るだろう。

海の女神テティスと、英雄ペレウスの間に産まれたアキレウスは、生誕から神々に祝福される恵まれた存在だった。母であるテティスはアキレウス愛しさのあまり、彼を神聖の炎で炙（あぶ）り、不死の存在にしようとした。だが、夫であるペレウスは「それでは人間としてのアキレウスが滅んでしまう」と反対し、結局アキレウスはある部分だけは、人間のまま成長していった。

やがて、トロイアとアカイアという国の間で戦争が勃発したとき、アキレウスは母テティスにこう問い掛けられた。

――人に名も知られることなく、長き平穏な人生を望むか。それとも戦で華々しい手柄を立て、英雄として短命の人生を望むか。

アキレウスの選択は言うまでもない。母はそのことを誇りに思うと同時、痛ましくも感じた。何故なら、彼は産まれついて運命を定められているからだ。英雄として生きるならば、駆け抜けるように短命である、と。

成長した彼はトロイア戦争にアカイア軍として参加し、手柄を上げ続けた。おおよそあらゆる神に祝福されたその軀は全く傷つくことなく、父から与えられた槍はあらゆる英雄

を貫いた。海神から賜った二頭の神馬と、ある都市を襲撃した際に奪った名馬で構成された三頭立ての戦車には、誰も追いすがることができなかった。

だが、トロイア戦争においてアキレウスと比肩される最大の英雄ヘクトールとの一騎討ちで勝利した際、彼は自身の欠点を露出させた。いくら親友パトロクロスの仇とはいえ、死体となった彼を戦車で引き摺り回し、侮辱したのは愚かで不寛容な行為だった。

結果的に太陽神アポロンの不興を買い、彼の再三の制止にも応じずにトロイア軍を誅戮し続けた。それに怒り狂ったアポロンは、トロイア軍の弓の名手であるパリスに加護を与え、アキレウスにとって唯一の弱点である場所――即ち踵を射貫かせた。

続けざまに心臓を矢で貫かれたアキレウスは自身の死を悟ると、もはやこれまでと周囲のトロイア軍に猛然と襲いかかり、力尽きるまで殺し続けた。予言の通り、彼は短命ながら英雄として、その伝説を世界に刻みつけたのである。

神に限りなく近い人間、無敵の軀を持つ駿足の英雄。しかして、その踵のみが――英雄の急所となる。

そして〝黒〟のアーチャー、ケイローンはアキレウスにとって師匠に当たる。アキレウスが幼い頃、父ペレウスとの不和によって母テティスは故郷である海底へと帰ってしまっていた。数多の英雄を育てたケイローンはペレウスとも旧知の仲だったので、教育係としての役割を喜んで引き受けたのである。

……そう。アキレウスが一瞬戸惑ったのも無理はない。幼い彼にとって、ケイローンは絶対的な象徴だった。温厚で厳粛、そして彼の言葉は魔法のように幼いアキレウスに染み渡っていた。

九年もの間――それももっとも多感だった少年時代を共に過ごした父であり、教師であり、兄であり、親友であったのだ。英雄の息子であり、オリンポスの神々の祝福を受け、若くして兵たちからは畏怖と敬意、憧憬の眼差しで見られていた彼にとって、友、あるいは師と呼べる者は本当に少なかった。

ケイローンは紛れもなく、その一人であった。親友パトロクロスと並び立つ、彼にとって信頼できる存在だった。

その英雄が今、聖杯を求めて彼の前に立ちはだかっている。

〝黒〟のアーチャーとして、敵として、殺し合う相手として――。

「――行きます、先生」

「そんな言葉は不要ですよ、〝赤〟のライダー」

厳しい言葉で撥ね付けられ、わずかに萎縮しつつも〝赤〟のライダーは猛然と槍を振る

う。二人は会話できる間合いから戦闘を開始している。つまり、接近を許した弓兵（アーチャー）と襲いかかる軽戦士（ライトリアー）の図式である。

多少の申し訳なさを抱きつつも、槍の穂先は鈍ることなく心臓を狙う。だがしかし、何と〝黒〟のアーチャーは恐れを知らぬ狂戦士が如き蛮勇で、槍撃に合わせて一歩を踏み込んだ。

駿足で知られるアキレウスの槍の扱いは、ランサーとして召喚されても問題のない技量である。普通ならば、アーチャーは雑作もなく心臓を抉られていただろう。

ライダーは、致命的な点を一つ失念している。

穂先は心臓を抉ることなく、アーチャーの脇を通過していた。

「な……ッ!!」

「忘れたか、ライダー。お前にこの槍を与え、基礎を教えたのは誰だった？」

アーチャーの言葉に衝撃を受けた。彼の言う通り、ライダーは我流で槍の腕を磨いた訳ではない。最初に、基礎を師であるケイローンから教わっていたのだ。ならば、その軀のあらゆる動作、クセが看破されていて当然だ。更にこの槍は元々両親の結婚祝いとしてケイローンが父ペレウスに贈ったものであり、間合いも完全に把握されている。

アーチャーは続けざまに驚嘆すべき技を見せつけた。一歩を踏み込むと同時、弓に矢を番えて構えたのだ。まさに早撃ち（クイックドロウ）。零距離射程からの、躱せぬ一撃。

「――死にますよ、ライダー？」

頭蓋に狙いを定め、アーチャーは迷わず矢を放った。ライダーは咄嗟に背を反らしてそれを躱す。信じ難い素早さと覚悟が成し得る動作で、彼は皮一枚掠める程度でその危機的状況を収めた。

そこにアーチャーの蹴りが放たれた。体勢を崩していたライダーは吹き飛ばされ、樹木に叩きつけられる。距離が離れた瞬間、再びアーチャーは矢を番えた。

ライダーの中で、何かが切り替わった。歯を食い縛り、決然とした眼差しでアーチャーを睨み据える。放たれた矢に向かって真っ直ぐ走り出す。矢を前傾姿勢で躱しざま、槍を横薙ぎに振るう――躱される。

背筋に歓喜がこみ上げる。猛り吼えつつ更に槍を打ち込む。アーチャーは銃弾の如き槍の連撃を躱し、間合いを巧みに調整しつつ矢を番えた。

弓兵に接近戦は不可能であり、槍の間合いまで到達すれば勝てる。そう考えていた己の浅はかさに腹が立つ。相手はケイローンだ、自分だけではなくヘラクレス、イアソン、カストール、アスクレピオスのような綺羅星の如き英雄たちに教えを授けた大賢者。

接近してようやく互角。ここから先、更に己の全てを振り絞って攻撃を仕掛けねば、敗北は必至……！

ライダーの槍は突き、薙ぎ払い、幻惑（フェイント）を巧みに使いつつアーチャーに襲いかかる。それ

をアーチャーは躱し、時には弓で受け止め、更に蹴りや拳と組み合わせて、隙あらば矢を番えて放つ。

零距離射程からの狙撃に、ライダーの軀がさくりと傷つく。如何に神々の祝福を受けた肉体とて、同じ『神性』を持つアーチャーの攻撃に対しては無防備だ。

攻撃は悉く読み切られ、逆に相手の攻撃はあと一歩のところで読み切れない。生来の頑丈さでどうにか均衡を保ってはいるが、このままでは追い詰められる。

ライダーは一旦、眼前の戦いから思考を切り離す。自分が技を読み切られるのは、目の前のアーチャーから基礎を教わったからだ。構えや刺突（つき）のタイミング、薙ぎ払いも何もかもだ。

――惑わされるな。

確かに基礎は教わった。だが、若くして戦いに身を投じてからは基礎だけで勝ち抜いて来た訳ではない。応用があり、死に物狂いの中の活路があった。数多の英雄と戦い、己の技量を研ぎ澄ませていったはずだ。

あらゆる戦い、あらゆる危機的状況下でどうやって自分は活路を見出した？　そう、たとえば自分は――。

ライダーの動きが変わった。ベーシックな技を使い、圧倒的な速度で押し切るのではなく、トリッキーな動きで変化をつけ始めた。

何と槍を手放したかと思えば、彼にとって致命的な弱点であろう〝踵〟を使ってアーチャーの顔面を蹴り飛ばす。

落下する槍を蹴ってから宙空で再び摑み、狙いを定め槍を突いた。アーチャーの首筋を槍が掠め、血が噴出した。

「く……!!」

たまらずアーチャーが間合いを取る。どうだ、とばかりにライダーが槍を振り回す。

視線が交錯し、互いに不敵な笑みが浮かぶ。

「――ふむ。英霊となっただけのことはありますか」

「当然。教導するだけのアンタと違って、幾多の戦場を駆け抜けたからな」

数多の英雄と刃を交え、殺し合い、魂の交歓を行った。確かに彼（ゲイロン）に基礎は学んだ。だがしかし、戦って積み重ねた屍もまた――ライダーにとっての真実だ。

「いや良かった。教え子を一方的に殺戮するのは後味が悪い」

アーチャーは笑い、ライダーも笑う。

既に恩師との戦いという躊躇いは振り捨てている。あるのはただ、強者との死闘という喜びだけだ。

ライダーは迷っていた。間合いを詰めるべきか、詰めないべきか。詰めて突っかかるの

が常道だが、その常道をこそかなぐり捨てる頃合いかもしれない。
元より、彼の持つ長槍は投擲を主目的としている。あらゆる守りを打ち破り、英雄の胸板を貫くためのものなのだ。ケイローンはその槍の恐ろしさを誰より理解している。何しろ、本人が贈ったのだから。
――さて、どうする？
互いの視線が交錯する。〝赤〟（アキレウス）のライダーも、〝黒〟のアーチャーも、互いの一挙手一投足を見定めながら、次の一手を構築する。
ライダーは笑い、アーチャーも笑う。そこには確かに、繋がりがあった。我が師と我が弟子、心から信じ合える友と友、その情を踏みにじってもなお感じる膨大な〝歓喜〟が、確かに二人の心に存在したのだ。

§§§

――〝黒〟（アストルフォ）のライダーは、決して頑丈（タフネス）な方ではない。その華奢な外見から想像される通りの耐久力しかない。

「あいたたた……」
とはいえ、墜落と魔術によるダメージは彼にそれなりの傷を負わせた程度に過ぎない。宝具『魔術万能攻略書（ルナ・ブレイク・マニュアル）（仮称）』が――その絶大な効果を発揮したのだろう。
「――参った、どうしたもんかな」
ヒポグリフは死んではいない。咄嗟に送り還したために、負傷してはいるが再起は可能だ。だが、この戦いで使うことはできまい。
振り返ってみれば、やや焦りすぎたというのは否めない。更に言うなら、ヒポグリフの力を完全解放していれば、あの魔術とて潜り抜（くぐ）けられたに違いないのだ。
それができなかったのは――やらないと、そう決めたからだ。
「あー、もー！」
ガリガリと頭を掻く。これほど迷い惑うことなど、生前でもあっただろうか。分かっている、理屈では分かっているのだ。この戦いに勝利せねばならないことなど、本当に分かっているのだ。だが、どうしても軀が言うことを聞いてくれなかった。
――ああ、ちくしょうめ。ホント参ったなぁ。
微かに浮かび上がるは、助けを求めていたあのか細い手。声は蜉蝣のように細く儚く、震えて弱々しかった。
――我らは、そんな弱者を喰らって太る大罪人であるが故に。

今更、という言葉が浮かぶ。そう、まさに今更だ。顕現しているだけで、魔力を消費する怪物。それが己の正体だ。既に、自分のために何人のホムンクルスが息絶えているかも分からない。

まさに今更、だ。だけど、どうしてもやらない。そう決めた、そう決意した。

「……ひとまず、他を探すか」

聖杯は欲しい、仲間のために力を尽くしたい——そこまではいい。だけど、そこに己の心赴くままにできているかどうかが、問題になって立ちはだかる。

これが正しい契約、正しいマスターならこれほど迷いはなかったのに——。

「む？」

キィィィィ——と、甲高い金属的な音にライダーは慌てて振り返った。竜牙兵やホムンクルスを撥ね飛ばし、ゴーレムを躱しながら、血塗れの上に赤い車体のあちこちを凹ませた伝統あるアメリカンスポーツカー、シボレー・コルベットがライダー目掛けて突っ込んできた。

「嘘ォ!?」

この古式ゆかしい戦場に、あまりに不釣り合いな闖入者に驚きつつもサーヴァントであるライダーは回避行動を取った。彼の脇を通り抜けたシボレーは無茶苦茶な勢いでハンドルを切られたらしく、巨人に振り回されたかのように回転しつつ停止した。

唖然としたままライダーが車を見つめていると、ガタガタと運転席から音がし出した。ドアを開こうとしているようだが、何かにぶつけでもしたのか完全に歪んだ状態らしい。

「ええい、鬱陶しい！」

そんな言葉と共に、ドアが吹き飛んだ。

細い足が、運転席から出てきた。顔のあちこちを黒く汚した少女が、不満も露わに車の天井を叩く。赤も鮮やかなレザージャケットにチューブトップ、下は太腿も露わにしたカットジーンズだ。助手席も同じくドアを吹き飛ばされ、男がのそりと這い出てきた。こちらは黒いブーツに黒いズボン、見るからに真っ当な生活とは縁遠い、華やかで破滅的な人生を歩んできたような大男だった。

「おいマスター、アメ車は頑丈じゃなかったのか？」

「……お前さんの運転に耐えられる車なんざ戦車しかねぇよ。というか、お前本当に騎乗スキルがBランクなんだろうな？　運転、分かってたんだろうな？　いや、いい。答える必要はない。こりゃ、お前の性質だな。うん」

疲れた表情で大男が応じる。……つまり、彼女がサーヴァントという訳か。〝黒〟のライダー（アストルフォ）は硬直する。それは決して車に驚いている訳ではない。眼前のサーヴァントの、とてつもない力量を見て取ってのことだ。

「〝赤〟の——セイバー」

ライダーの呟きに、〝赤〟のセイバーは不敵な笑みを浮かべた。
「いよぅ。〝黒〟のサーヴァント……だよな？」
「合ってるぞ、多分そいつがライダーだ。さて、セイバー。後は任せた、俺は逃げる」
「何だ、マスター。残ってオレの勇姿を見届けんのか」
「戦場の真っ只中じゃなけりゃ思う存分見てやるがなぁ……」
大男は嘆息しつつ、周囲を見回した。竜牙兵、ホムンクルス、ゴーレム、そればかりではなくあちこちでサーヴァント同士の凄まじい魔力のぶつかり合いが垣間見える。
「ちぇっ、仕方ない。そら、さっさと逃げろ！」
「あいよ。じゃ、まあ生きて戻ってこいよ」
セイバーのマスターは運転席へと移ると、外れたドアを置き去りにしたまま、無理矢理シボレー・コルベットを運転していった。
「やれやれ。オレ抜きで開戦するとは、ふざけているにも程がある。……まあいい。主役は遅れて登場する、王は戦場に悠々と参陣するが世の道理だ」
「――あれ、王様なの？」
「応。降伏するなら、楽に首斬りで済ませてやるが」
「……いやあ、そういうのはちょっと」
既に〝黒〟のライダーは衝撃から立ち直っている。槍を持ち、構えた彼を不審げな表情

で〝赤〟のセイバーは見やる。
「おいおい、ライダー。騎乗するべき馬はどうした？」
「あー、ちょっと一休みさせてるとこ」
〝赤〟のセイバーはたちまち表情が殺意に満ちる。ライダーの舐めたような態度が、我慢ならないらしい。
「ああん？　騎乗兵（ライダー）が馬に乗らずしてどうする。ただでさえの弱兵が、それじゃあアマチュアだろうが」
「――まあ、否定はしないけど」
「しろよ、否定」
「いやあ、ボクぁ正直者で通ってるから。それでも、一生懸命殺（や）らせて貰うが従僕（サーヴァント）の務めだけどね」
「ちぇっ……しょうがねぇ。ところで、ライダー。〝黒〟のセイバーが消えちまったってのはマジか？」
「マジもマジ、大マジだよ」
「原因は？」
「んー……傍目からは内輪揉め。彼からすれば己が信念を貫いた、かな？」
「うわ、ダセぇ。〝黒〟のセイバーってな田舎騎士か何かだったのか？　信念を貫いて、

くたばった？　阿呆らしい！」

その言葉に、場の雰囲気が一変した。変えたのは〝黒〟のライダーであり、それを受けた〝赤〟のセイバーも、表情を引き締めた。

「――これまた否定はしないよ？　しないけど、アイツのことを口にするな。たかだか不良風情の剣士が、アイツのことを口にするな！」

「ほう、よく吼えた。であれば――」

〝赤〟のセイバーが切り替わった。内側に秘めた膨大な魔力が解き放たれ、鎧兜として換装される。手には幅広の騎士剣。まさに剣士と呼ぶに相応しい、豪壮たる装いだった。

「――世間話はこれにて終了。剣の錆に変えてやろう、馬無しの騎乗兵めが！」

「やれやれ、怖いなーもー……」

状況は不利、力関係及び純然たる英霊としての格も圧倒的に己が下だ。だが、それでも戦闘は不可避だろう。

――あ、ヤバ。何かこれ死ぬな。

英霊として、というよりは騎士としての直感か。彼女と戦えば、雑作もなく朽ち果てる己の様が浮かび上がった。

そんな致命的な事実にも、〝黒〟のライダーは顔色一つ変えることはない。かつて騎士アルガリアからちょろまかした槍を構え、乾坤一擲の勝負に挑む。

§§§

濃い霧が、突如戦場に発生した。その場にいたホムンクルスたちは、戸惑いながら動きを止め――鼻の奥から火花が散ったような衝撃を覚えた。

次々と倒れ、蹲る彼らの頭上から妖精のように無邪気な笑い声が響く。

「いっぱいだ、いっぱいいっぱいいっぱい、みんなみんな美味しそう！」

敵だとホムンクルスたちは判断し、武器を構えようとした。だが、力が入らない。息を止めても、既に空気を取り込んだ肺が鉤か何かで引っ張り上げられているように痛い。駄目だ、逃げなくてはならない。武器を捨て、覚束ない足取りで二歩、三歩とふらふら歩く――転ぶ。いや、足に力が入らない。頭はずきずきと蟲でも湧いたかのように痛み、思考が滅茶苦茶に迷走する。

「た、す……け……」

喘ぎながら呟いた言葉は、

「うふふ、いっぱいあって迷っちゃうな。どれにしようかな～♪」

少女の無邪気な言葉で拒絶された。

目が溶けるほどに痛い。吸い込んだ空気は、肺を灼き尽くそうとしている。内臓が腐食するような感覚が恐ろしい。

ああ痛い、痛い、痛い、誰か、お願い、助けて――――――！

「それじゃ、いただきます！」

まるで砂糖みたいに甘ったるい、蕩けそうに残忍な言葉。生きるために、大切な臓器が一瞬で抉り出された。元来感情表現に乏しいはずのホムンクルスが、恐怖に絶叫していた。だがその叫びは濃霧に包まれ、誰に届くこともなく消えていく。

その霧はまさに怪物の胃袋、絶対的な殺人空間だ。ただ居るだけで死に、逃げようとしても抵抗しようとしても死ぬ。支配するは連続殺人鬼――〝切り裂きジャック（ジャック・ザ・リッパー）〟だ。

「ごちそうさま」

夜、そして霧。彼女は必ず先手を取って、誰にも見咎められることなく犠牲者たちを増やし続けていく――。

最早戦場は混沌（カオス）の神に愛されているとしか思えない状況だ。

初撃で雨の如く降り注いだ光の矢、空を駆け抜ける三頭立ての戦車、地面には後から後から湧き出る死の杭が群れを成していて、炎を纏った槍兵はそれを迎え撃つ。森と一体化したような弓兵は、戦車から降りた騎兵と近接戦を挑み、戦場を駆け回る獣の如き弓兵は、おぞましい肉塊でありながら笑い続ける狂戦士を針鼠の如き姿に変える。永久機関の如く息も切らさず暴れ続ける狂戦士と、それを相手取って平静を保つ怪物じみた代行者、石造りの巨人たち、顔色一つ変えずに破壊を繰り広げる人造人間（ホムンクルス）、砕かれても砕かれても突き進む竜牙兵、鋼鉄の塊のような剣士、それに槍で対抗する可憐な騎乗兵、堅固な城塞に立て籠もった魔術師たちに対抗するため、浮遊する要塞で奇襲を仕掛けた古の女帝（いにしえ）、そして霧に隠れる連続殺人鬼（シリアルキラー）――。

ホムンクルスたちの血液が草原を朱（あか）に染め、ゴーレムや竜牙兵の残骸は雪の如く降り積もっていく。

戦っていた、殺し合っていた、此処には最早『平和』の文字など存在しない。

聖杯大戦はますます以て本格化し、液状化して泥濘の如く近付く者たちに絡みつき、沈めさせていく。

そしてその地獄のような混沌場に現れたのは、此度の聖杯大戦の大審判――ルーラー、ジャンヌ・ダルクともう一人。

己をジークと名付けた、ホムンクルスである。

第三章



第三章

――思えば、最初から何か〝間違っている〟という感覚があった。

大人数、七騎対七騎の戦い。これはルーラーを呼ばざるを得ない非常事態であることは確かだ。

だが、ルーラーにはやはり自分が与えられた目的はそうではない、という確信があった。胸の内側で何かが自分を急き立てている。それは使命感というよりは、危機感に近い。取り返しのつかない何かが起きている。あの巨大な浮遊要塞を見た瞬間、ルーラーの焦燥は頂点に達した。

恐らく〝黒〟と〝赤〟の一大決戦がこれから始まるのだろう。どちらが勝利するにせよ、ルーラーとしては聖杯に対して正しい願いをしてくれるならば、それでいい。その点について、当初彼女は安心していた。

何故なら、両陣営共にマスターは魔術師だからだ。魔術師とは人の倫理から外れた存在であるが、同時に悪徳でしかない願いを叶えようとはしない。彼らが望むのは、ただただ

根源へと至ることだけ。あるいは、魔道に関する別の何かかもしれないが――いずれにせよ、願いとしてはほとんどが妥当なものだ。

だが、〝赤〟の側が自分に襲撃を仕掛けたことで疑念が湧いた。ルーラーを取り込もうとした〝黒〟の側はいい。それはあくまで聖杯大戦の勝利に繋げるための行動だからだ。〝赤〟が問題だ。自分の殺害を行う理由が見当たらない。メリットを上回るデメリットがあるからだ。そして今、〝赤〟は〝黒〟の側が根城としているミレニア城塞に向けて空中要塞で攻め入っていた。

ルーラーはジークと共に山を越え、城塞の外周を回り込んだ。前夜、〝赤〟のライダー（レイダウス）と〝赤〟のアーチャー（アタランテ）が侵入して激戦を繰り広げた森を抜けると、そこは戦場の只中だ。ホムンクルスとゴーレムたちが竜牙兵とぶつかり、凄惨な殺し合いを演じている。魔術が砲弾の如くあちこちで炸裂し、サーヴァントと思しき者たちの戦いは周囲をたちまち更地へと変えていく。

凄惨な戦場を眺めながら、ルーラーは恐らく〝赤〟の側であろう空中要塞を見定めた。……聖杯戦争数あれど、あれは異常過ぎる代物だ。空を飛ぶ、くらいならばサーヴァントだけでなく、魔術師ですらもこなせる簡易な魔術である。

だが、あれは――そういうものとはレベルが違う。神代の魔術ですら、あれを成し得るものはそう多くあるまい。

「いいですか、ジーク君。私は今からこの戦場を横断し、向こう側にいる〝誰か〟に会わなければなりません」

「……何故だ？」

「この戦場に私が会うべき〝誰か〟がいます。それが誰かは分かりません、サーヴァントなのか、マスターなのか、あるいはそれ以外の誰かなのか。でも、会わなければならない」

ホムンクルスは首を傾げたものの、その言葉には不思議なほどの説得力があった。確信に満ちている訳ではない、むしろ不安そうに彼女は囁いている。なのに、それでも絶対に留まることはないという強い意志も垣間見えた。

なるほど、とホムンクルスは納得する。強い意志を強い言葉で発したから彼女は兵たちに慕われたのではない。彼女の言葉は、決して人に強制するためのものではなかった。

ただ、『私が征く』という意志を伝達するためのものだ。

「危険だと思うが、それが貴女の意志ならば仕方ない」

そう言って、彼は迷わず剣の柄に手をやった。これはつまり、自分もついていくという意思表示だ。短い付き合いであっても、ルーラーには簡単に把握できたことがある。このジークという名を自らに付けたホムンクルスは、一旦物事を決めたらとことんまでやりぬける性格をしているということだ。

ついてくるな、と告げて一人で向かえば……恐らく、彼はそのまま自分の跡を追うだけ

だろう。それは危険だ。〝赤〟の陣営にとって、彼は間違いなく敵と見なされるだろう。そして、〝黒〟の陣営も彼の姿を見咎めた魔術師がどうリアクションするかが分からない。

だが、この戦場においてジークには自分と異なる目的がある。

「貴方はどうするつもりですか？」

「前線で戦闘状態の仲間はともかく、後方で待機している連中なら短い会話を行う余裕はあるかもしれない。状況次第で、会話して城塞内部の連中の解放を頼むつもりだ。それから――」

「それから？」

ジークは申し訳なさそうに俯き、呟いた。

「……いや、ライダーに会いたいとは思うが。果たして会えるかどうかは分からないな。この状況で会うなど、迷惑にも程があるだろうし」

「彼女の方は迷惑でない、と思いますが……」

いずれにせよ共に征くのが一番妥当な線だ、とルーラーは判断した。

「とにかく、ついてきてください。でも……いいですか、サーヴァントと戦うことだけは避けてくださいね？　〝黒〟の魔術師たちとトラブルがあった場合は、私の名前を出して下さい。そうすれば、即座の誅殺は避けられるかもしれませんし」

「ありがとう」

――その瞬間、彼女は己の選択がまさに神に誓って正しいと、何とはなしに感覚で理解した。それだけに疑問が胸に刻まれる。サーヴァントが闊歩する戦場において、ただのホムンクルスである彼に、一体何ができるというのだろう？　……剣を持ったところで、彼は決して剣士（セイバー）ではないというのに。だが、彼の行く末に心を砕いている余裕はない。今からルーラーは混沌へと飛び込み、致命的な何かを探らねばならないのだから。

「よし！」

自らの頬を両手で軽く叩くと、その手に召喚した旗を握り締める。生前、彼女と共に在り続けた戦旗であり、聖旗である。背後にいるジークに「遅れないように」と囁いた。

「――では、行きます！」

戦場へ向けて突貫するルーラー。その背中を追って、ホムンクルスも走り出す。

たちまち、二人のもとへ凄まじい数の竜牙兵たちが殺到した。戦っていたホムンクルスやゴーレムを無視してまで、竜牙兵たちはルーラーに狙いを絞る。

「やはり……！」

ルーラーは手にした旗を振り回して、竜牙兵たちを次々と粉砕する。ルーラーは聖杯戦争の行く末に直接関わる行動は基本的に避けることをモットーとしているが、敵対行動に出られた以上、そうは言っていられない。

戦場を切り裂くような鋭い咆吼と共に、ルーラーは目的の場へ向けて疾駆する。

ぴたり、とシロウの動きが止まった。舌打ちし、渋い表情で後方へと飛び退く。
「キャスター、撤退です。思っていた以上に、彼女の〝気付き〟が早い。これは……啓示か何かを受けていますね」
〝黒〟のバーサーカーは突如距離を空けたシロウに戸惑い、ひとまず様子見を選択した。
『公平無私な裁断を行うため、ルーラーに選ばれるのは聖人が多いとは聞いていますが。その類でしたか、彼女は』
〝赤〟のキャスターは、皮肉そうに肩を竦める。
「そのようですね。……ここが正念場だ、キャスター。彼女が私を弾劾すれば、状況は非常に混乱する。いえ、貴方風に言えば面白くなくなるというところですか」
『大して盛り上がりもしない部分を無理矢理に引っ張ろうとするのは愚作の特徴です。然らば戦場におけるマスターの物語は、ひとまずここまでということで』
「ええ、撤退しましょう。――何、逆に言えばここを乗り切れば良いだけです。もうすぐ、ルーラーでもどうにもならない状況に移行する。そして、どうやら私は正しかったようです。紙一重で、〝死〟を躱しきったのだから」
シロウはそう告げて、踏み込もうとした〝黒〟のバーサーカーの前面へ壁のように黒鍵を突き立てると、戦場から全力で離脱を開始した。
『マスター。ルーラーの奴、迷わずお主に向かって突き進んでおる。急げ！　竜牙兵では保たぬぞ！』
「分かっています！」
わずかな焦燥、シロウはそれを黙殺してさらに速度を上げる。……灯りなど一つとてない、月光すらも碌に差し込まぬ闇の森を、シロウは全く意に介することなく全力で疾駆する。その速度は、一言で言って異常に尽きる。時速六十キロを優に超えて、シロウはひた走っていた。
……だが。そんな彼を猛追する存在がいる。振り返ってそれを視認したシロウは、わずかに目を見開いた。
「〝黒〟のバーサーカー……まさか追ってくるとは」
あの黒鍵の壁を見た瞬間、バーサーカーはシロウというマスターを追跡することに決めた。それは人造人間にはおおよそ縁がないはずの、直感とでも呼ぶべき代物だった。
カウレスはマスターとサーヴァントが逃亡したなら、別の場でサーヴァントを迎撃する

§§§

ように伝えたが、唸り声で彼女はそれを拒絶した。
ともかく。本当に――彼女自身とて、何が何だか理解していないのだが。
あの男をここで逃すのは良くないと感じたのだ。あのマスターは、絶対に異常だった。
いや、そもそもの話。あれは本当にマスターだったのか？
己の肌が抱いた感覚は、どちらかというと――。
「――――ゥ!?」
思考の隙間を縫うように、眼前に四本の刃が放たれていた。逃げながら、こちらに姿を見せることなく黒鍵を投擲したらしい。
〝黒〟のバーサーカーは瞬間的に最善の選択肢を摑んだ。即ち、無視したのである。
痛みはない、あるのは数値としてのダメージだけだ。それも、大したものではない。所詮、魔力で編んだ刀身は物理的破壊力に乏しく、サーヴァントを打倒できるものではない。
それでも、直撃すればわずかな時間食い止めることは可能だろう。彼女以外だったならば、であるが。
「アァァァアアアアアアィィァァァァァッ!!」
人の心を震え上がらせるような絶叫と共に、彼女は更なる加速を許す。直撃した黒鍵など意にも介さない。その内、魔力が解れて柄が彼女の軀から滑り落ち、傷はたちまちの内に塞がった。

「――何とまあ」
振り向いたシロウは、感嘆すればいいのか呆れ返ればいいのかも分からない。打ち落とした、ならば話は分かる。踏み留まった、なら都合が良い。だが、直撃してもまるで速度が変わらないとは……！
『フランケンシュタイン博士とか言いましたか、彼女の創造主は。一体どういう設計をすれば、あんな怪物ができるのやら』
〝赤〟のキャスターの言葉に、シロウは苦笑しかけ――ふと、悪辣な企みを思いついた。
「キャスター、実体化してください。貴方の〝劇団〟が必要です」
瞬間、キャスターが一冊の本と共に実体化した。
「おお、なるほどなるほど！　それでは愛しく憎悪しているであろう彼に会わせてあげましょう！　『人間の一生は彷徨い歩く影法師。哀れな役者に過ぎぬ。己の出番のときは、舞台の上でふんぞり返って喚くだけ！』」
彼が声高らかにそう叫ぶと、闇の森に有り得ざる奇跡が現出した。それを確認すると、再び〝赤〟のキャスターは走るシロウに遅れるまいと、霊体化した。
そしてなおもシロウを追跡していた〝黒〟のバーサーカーは、そこで出会ってしまった。
「……ゥ……!?」

混乱、ただただ混乱。この場に居ないはずの男が、彼らしからぬ穏やかな表情で言葉を紡ぐ。生前、彼は一度たりともこんな微笑みを自分に向けてくれなどしなかった。

「――止まりなさい」

「……ァ、ァァ……」

黒鍵の直撃に遭ってすら、停止するどころか加速したバーサーカーの足が止まった。感情を表すことをよしとしない彼女だが、驚嘆のせいで口が開いた。

そこに居るのは、フランケンシュタイン博士だ。己を創り出した男、己の父親、己の憎むべき相手、己の――。

なぜ？　どうして？

此処に居ることに、〝黒〟のバーサーカーは驚かない。彼女が驚いているのは、ただただ彼の穏やかな微笑みだ。最初に目を開いたときから、父の表情は嫌悪に歪められていた。祝福してくれる、そう思っていた口からは、罵りの言葉しか出てこなかった。

それは十一月の、物寂しい夜の出来事――。

〝失敗だ、失敗だ、失敗だ、失敗だ！〟

〝何てこった、こいつはろくでもない木偶人形だ！〟

〝感情がない！　線が繋がらなかったのか!?　涙腺も駄目だ、これじゃ完全な乙女どころか、人間ですらない！〟

――ああ、どうやら私は失敗作だったらしい。

悲しいのは、己を失敗作と断定されたことではなく。狂乱して髪を掻き毟る父が、あまりに可哀想だったから。

〝ごめんなさい、お父様。ごめんなさい、失敗作でごめんなさい。ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい。直します。ちゃんと直します。だから、怒らないで下さい。怒らないで、怒らないで、怒らないで――〟

泣こうとしたのに、何故か泣けない。涙を流す機能も、動いていないらしい。酒に溺れる彼を慰めようとする度、突き飛ばされ、殴られ、蹴り飛ばされた。

痛くはない。ただ、殴られる度に……心臓が、酷く締め付けられるのはどうしてなのか、彼女には分からなかった。

数日が過ぎてもひたすら悔恨し続ける父を、少女は哀れに想った。どうすればいいのか首を捻った。どうすれば、父を慰めることができるのだろうか。思い切って、屋敷の外へと出てみることにした。

——そこには、色があった。

翠緑の木々、透き通る池の水、輝く太陽。これを持って行けば父も喜んでくれるかもしれない。そう考えていた彼女に、突然野犬が襲い掛かってきた。彼女の服から漂う腐臭に反応したのだろう。

腕に噛みついた犬の首を、彼女は引き千切った。瞬間、天啓を受けた。

〝ああ、綺麗。綺麗だ。これは綺麗。私にはないから、きっと綺麗なのだろう——〟

腹部を引き裂き、更に鮮やかな臓物を発見する。これも彼女にないもので。だから、綺麗なのだと思った。だから、持って行って見せることにした。

桃色の臓物は綺麗で、鮮やかに赤い血は美しくて。醜いなどと、汚らしいなどと、一つも考えられなかった。血の臭いを、不快だとも考えなかった。

……見せた瞬間、父との関係は決定的に断裂した。彼女は失敗作であるどころか、醜い怪物であることが明らかになったからだ。

血を美しいと感じ、臓物に陶酔するような生命体は——怪物と呼ぶのだ。

〝違います、違います、違います。そうじゃありません、本当です。私は正常です。ただ、父に喜んで欲しかっただけなのです〟

父は最後の最後まで、彼女に笑顔を見せることなく怯えて逃亡した。最後に彼女へ、絶対的な呪いを残して。

〝お前は怪物だ！　狂った怪物だ！〟

……だから、正常でいようと思った。理性を持とうと決めた、常識を理解しようと決めた。そして伴侶を得ようと決めた。何故って、まともな人間は家族が存在するからだ。父に拒絶された今、自分には伴侶がどうしても必要だった。

けれど、それは望んだところで手に入るものではない。奪ったところで、どうにかなるものではない。それでも、何人かの男を攫ってみたけれど。誰も伴侶とは成り得なかった。

だから、彼女は父に頼むことにした。

〝私を愛してくれる人を下さい、私を見てくれる人を下さい、私が完全な乙女だというならば。貴方は原初の人間を創造する義務があるはずだ——〟

父は拒絶し、少女は怒りと悲しみに狂った。怒りは、父の裏切り。悲しみは――己は死ぬまで、孤独（ひとり）なのだろうと悟ったから。

ただ、愛して欲しかった。ただ、愛したかった。ただ、愛を知りたかった。……いや、それすら叶わぬならば。せめて憎んで欲しいと思った。父を追跡し、弾劾し、逃げる彼に苛立って家族を殺した。それでも父は逃げて、逃げて、ただ逃げて。

最期の瞬間まで、彼はただ逃げ続けただけだった。心が折れていた、愛した者を殺した相手への復讐すら考えなかった。

〝どうして憎んでくれないのですか。どうして私を見てくれないのですか〟

……少女は父と共に業火へ身を投じた。それで、フランケンシュタインの物語は終わり。後に残されたのは、醜い怪物（フリークス）という伝説だけ。

そして今、眼前に少女を裏切った父がいる。温かな表情で少女を見ている。ずっと、夢にまで見た瞬間だった。

「――そう、それでいい。戦いなど止めるんだ、その為にお前を創った訳ではないからね」

「ゥ、ァ……」

博士が自分の頭に手を伸ばす――どうやら、親が子にやるようなことをやろうとしているらしい。つまり頭を撫でられるのだろう、それは、己が待ち望んでいたものだ。

愛されたかった。愛して欲しかった。愛したかった。

その望みが果たされようとしている。

だが。

だが、それ故に。

「ウゥゥァァァァァァァァァァァァァァァァアッ――――――!!」

バーサーカーは狂乱した。否、狂乱などという生易しいものではない。殺意も露わに、博士を自称する男の脇腹に、『乙女の貞節（ブライダル・チェスト）』を叩きつけた。

「な、にを……!?」

喋るな、喋るな喋るな喋るな

叫んだ、叫んで彼の全身に徹底的に戦鎚（メイス）を振るった。男は既に痙攣すらもできず、ただ圧倒的な暴威に身を任せるだけだ。

やがて、そこに人が居たのかすら定かではなくなってから。ようやく、〝黒〟のバーサーカー（フランケンシュタイン）は動きを停止した。

「ァ……ァァ……」

望んでいた言葉を、望んでいないタイミングで告げられた。分かっている、もう理解しているのだ。これは、恐らくキャスターあたりの魔術だろうということは。

現に、屍体は消えている。自分が微塵に粉砕したのは、単なる人形か何からしい。木屑がそこらに散らばっているのが良い証拠だ。

だけど。ああ、だけど。

私はまた、大切な人を大切に想ったままに傷つけた――！

人造の少女が両膝を突いて頽れたそのとき、冷徹極まりない言葉が耳朶（じだ）を打った。

〝――令呪を以て命じる。バーサーカー、落ち着け〟

途端、慟哭も憤怒も焦燥も絶望も何もかもが頭の中からするりと消えた。

「ァ……ァ……？」

〝おし。落ち着いたか、バーサーカー。あいつらは逃げた、それでひとまず終わりにしておけ。他に戦うべき場所は幾らでもある。分かったな？〟

〝黒〟のバーサーカーは、論理（ロジック）が己に染み渡る心地よい感覚を抱いた。

そうだ、マスターの言う通り。戦うべき場所は、まだ幾らでもある。感情を露わにしてしまった。ああ、何たる恥か。マスターは自分の評価を低下させなかっただろうか――。

〝……気にするな、お前はよくやっているさ。今のも仕方がない、あのマスターが異常なだけだ。ともかく現時点での最優先目標は〝赤〟のサーヴァントを仕留めることだ。それを忘れるな〟

どうやらマスターは自分のことを決して低く見定めていないらしい。

納得したように頷いた〝黒〟のバーサーカーは、即座に森を出て走り出した。ただ、冷静さを取り戻した今となっても、思考回路のどこかで彼女はあのマスターを取り逃がしたことへの無念さを感じていた。

それはカウレスとて同様だ。使い魔を通じて遠巻きに様子を眺めていただけだが、それでもあのマスターの異質さ……異常さは、如実に伝わった。

だが、彼はあくまでマスターでしかない。悪寒を振り払い、カウレスはバーサーカーの移動指示に専念した。

令呪を使ったのは惜しかっただろうか？　……いや、とカウレスは判断に自信を抱く。バーサーカーの錯乱は半端ではなかった。崇拝と憎悪を一心に集めていた父親（はかせ）を殺害した

のだから当然だろう。後々まで尾を引く可能性がある。それを一気に押し流すためにも、あの令呪を使用した判断は間違っていないと考える。

……少なくとも宝具を強制発動させようとして一画、それを止めるために一画使用するよりは有意義だろう、と思いたい。

§§§

爆音、悲鳴、絶叫、詠唱――戦場におけるあらゆる音が混ざり、一体化し、ルーラーの耳に飛び込んでくる。望んだ者も、望まない者も、望みという言葉を知らない者すらも黙殺し、ルーラーは更に戦場をひた走る。

「……！」

巨大な空中要塞――そこに待機するサーヴァントが一騎。此処からでもそれと知れるような、圧倒量の殺意と共に光線が放たれた。城塞を破壊するほどの破壊力を、ルーラーただ一人に集中する。

が、ルーラーは狼狽えずに旗を立てた。彼女の対魔力は規格外（EX）だ。おおよそ、神代の魔術ですら聖人である彼女を傷つけるには至らない。ただ、これはあくまで魔術を逸らすためのものだ。つまり、受け止めたり消滅させたりしている訳ではない。

「ジーク君、離れて！」

その言葉に、即座にジークは反応した。転がるようにその場を離れた彼は、ルーラーが空から降り注ぐ光に消える瞬間を直視した。

「ルーラー！」

反射的に叫んだが――途中で声にならなくなった。絶句したのだ。生まれついての魔術師である彼には分かる。今しがた空から降り注いだ光柱は、最早悪意を持った落雷だ。爆撃の一斉投下にも等しいその威力では、最高の対魔力を持つセイバーといえどもただでは済まなかっただろう。

それを、彼女は――躱したのだ。躱した、という言い方は正確ではない。点ではなく、面制圧のような魔術は彼女を傷つけることなく逸れてしまった。

意志を持ったはずの落雷が、その悪意を消失させてしまった。代わりに、その落雷は周囲に襲い掛かった。

先ほどの声がなければ、ジークもまたそれに巻き込まれていただろう。周囲にあったはゴーレムの残骸、襲い掛かろうとしていた竜牙兵たちだが……それらは皆、あっさりと消滅してしまった。

塵一つ残さず。……彼女の声がなければ、自分もそう成り果てていたかもしれない。

「これが……第八のサーヴァント」

そう呟きつつ、彼は空を眺めた。ルーラーの尋常ならぬ対魔力も驚きだが、更に驚くべきは、今の魔術行使だ。爆撃機に等しい魔術など、神代のものでしか有り得ない。

恐らく、〝赤〟のキャスターだろう。あの空中要塞は、〝赤〟のサーヴァントの宝具か何かか。少なくとも、現代の魔術師にあんな芸当は不可能だ。

いずれにせよ、それでもルーラーを仕留めるには至らない。ジークもルーラーも空中要塞から魔術を行使するサーヴァントは諦めたと考えた。

だが――。

「!?」

驚愕は二人同時。先ほど逸らされたことなど全く気にするでもなく、頭上のサーヴァントは魔術を連続的に行使する。意味もないことをする……いや、意味はあるのだ。これは、ただ単純な時間稼ぎ。それに伴う手段が、あまりに圧倒的なだけだ。

「くっ……！」

ルーラーがジークを見た。そう、このままでもルーラーは動けるがジークは常に離れていなければならない。ジークは迷わず告げる。

「……先に行ってくれ。いずれにせよ、俺は会うべき人たちに会わなくては」

「分かりました」

彼に武運を、とは告げられなかった。運があったところで、どうにかなるような戦場ではない。強いて言うのであれば、サーヴァントに出会わないようにとでも祈るべきか。

それは無理だ。何故なら、彼は会うべき人たちに会うと告げた。それはまず、ホムンクルスたちだろう。彼らを救うことが、ジークの目的の一つだからだ。

そして、会うべき人はもう一人。サーヴァント――〝黒〟のライダー、アストルフォ。このサーヴァントに会いたい、と願うのはハッキリした目的意識がある訳ではないだろう。ただ、会いたいから会うだけかもしれない。少し、微笑ましいとルーラーは思う。

ただし、ライダーに会いに行くということはつまり、サーヴァントとも出会うということだ。彼はその手に剣を持っている。その身に戦意を纏っている。

ならば彼は〝赤〟の側にとっての敵となるだろう。本来なら止めるべきだろうが、恐らく決して止まるまい。ライダーに会うという行為が無駄であることも、無意味であることも、ライダーの祈りを裏切ることすらも承知の上で、ジークは会いに行くのだから。

ルーラーは走り出す。〝何者か〟が遠く離れていくのを感じ取り、ますます速度を上げた。竜牙兵たちの斬撃を捌くことすら放棄し、ただ走る。

この戦争を止めたい訳ではない、二陣営の争いは正しく調律されているならばルーラーに全く異存はない。

だが。噛んだ歯が軋むほどの焦燥感が、彼女を戦場の縦断に駆り立てる。会わなければ、遠ざかる〝何者か〟に会わなければならない。

そして、それを意図的に妨害する〝赤〟のサーヴァント。竜牙兵を山のように積み上げ、ただただ相手を阻む壁とする。

「――邪魔、です！」

無論、ルーラーにとってこの程度などあしらう暇さえ惜しいというもの。旗の尖端で一点を狙って一気に突き崩した。

そうして、聖水を振りまいて以前のようにサーヴァントの位置を表示させる。〝黒〟のサーヴァントはこの際問題ないと認識し、〝赤〟のサーヴァントの位置のみに注意を払う。

竜牙兵ならば、時間稼ぎにはほど遠い。だが、サーヴァントならば話は別だ。まず間違いなく、追うどころの話ではなくなる。

ルーラーは素早く〝赤〟のサーヴァントと接触せぬルートを構築し、その経路を頼りに走った。悪寒は時間が過ぎるごとに膨れ上がる。

そこへ、最悪の手合いがルートを阻むように乱入した。

これでいい、とルーラーの背中を見送りつつジークは安堵の息を吐いた。彼女には彼女の目的があり、それは己が邪魔をして良いものではない。彼女の目的はもっと高尚で、大切なものだ。自分とは違う。

走れば、考えるよりもやるべきことが山ほどあった。飛来する竜牙兵、サーヴァントならば鎧袖一触であっても、自分にとっては一体一体が心して掛からねばならない相手だ。刺突の効果は低いので、軀ごとぶつかるように突進し、密着した状態で勢いよく腰の部分を両断する。あっという間に竜牙兵が崩れ落ちる。脇から進み出た竜牙兵の腕を切断し、片手でそっと触れる。

「理導（シュトラセ）／開通（ゲーエン）」

魔術回路を起動――触れた材質を調査・分析・同調――それを全て逆転（リバース）させ、破壊するために必要な理を編み出す。

瞬間、掌から放出された魔術は竜牙兵の骨を砕くに最適なものへと変質した。ジークの使う魔術は、触れた上で解析を行わなければならないので、射程距離はほぼ零に等しい。ただし、その破壊力は絶大だ。

竜牙兵は文字通りの粉微塵となった。

「ライダー！」
叫びは戦場の喧噪に溶けて消えてしまった。走りながら、慎重に戦場の状況を精査する。一際激しい魔力の衝突があるところが、恐らくサーヴァント同士の戦闘だろう。
「何をしている？」
声に振り向くと、戦闘用ホムンクルスが二人、どこか非難の色を交ぜた眼差しでこちらを見ている。何をやっている、お前も戦え――とでも言いたいのだろうか。
「よせよせ、止めろ」
ジークの言葉に、二人が戸惑いながら顔を見合わせる。
「……死にたいなら、止めはしない。だが、生きたいのならば戻れ。戻って、俺（ホムンクルス）たちを助けてくれ。魔力を搾（しぼ）り取られている奴も、そうでない奴も。お前たちは縛られている訳じゃない」
「しかし――それは、命令に反する」
「そうだ。我々が与えられた命令は、戦ってサーヴァント及びその臣下を討ち取れ、だ」
「その命令が無理なことは、お前たちにもよく分かっているだろう。そもそも、従う義務がどこにある」
ジークの言葉に、またも二人は顔を見合わせる。一体の竜牙兵が、話に割り込むようにジークへ向けて剣を振りかぶった。

素早く〝黒（アストルフォ）〟のライダーの剣を抜き放ち、脇腹から首に向けて斬り上げた。ホムンクルスたちが彼の攻撃に合わせて、竜牙兵の頭蓋と足を戦斧（ハルバード）で押し潰した。
ジークはもう一度告げる。
「死にたいか、生きたいか。……俺たちは、どちらかを決めるべきだ」
最終通告。それに一人のホムンクルスは彼の頼みに応じて、城塞へと戻っていった。もう一人は、それでも命令に従わなければと、と再び戦場へと舞い戻った。
これでいい、とジークは思う。選択肢を与えられれば、ホムンクルスたちは選ばざるを得ない。それが分からぬほど、不明瞭な思考回路ではないからだ。
生まれついての従僕である彼らには、不思議と逆らうという選択肢は浮かび上がってこない。だが、与えられれば話は別だ。
周囲にいた後方戦線のホムンクルスには、選択肢を与えるだけ与えた。彼らはそれぞれの道を選ぶだろう。そこから先まで、ジークは責任を持たない――というより、持ってはならないと思う。
後は〝黒〟のライダーを捜すだけだ。捜してどうするか、などということは考えていない。何たる愚かしさ、何たる傲慢、何たる――どれほど言葉を尽くしても、表現しきれないほどの無様さ。自由を得て最初に選択した行動がよりによってこれでは、〝黒〟のライダーは嘆くだろう。

——それでも。それでも、ただ狂おしいまでに自分を駆り立てる想いがある。何かをしたかった、忘れることなどできず、平穏な日常とやらに向かう覚悟もない。

そんな夢物語よりずっとずっと大切なものがあった。仲間たちを救いたい。〝黒〟のライダーに会い、借りを返したい。

役立たずでも構わない、そんなことは望んでいなかったとライダーが嘆き悲しむかもしれないことも承知の上で。ただ——こちらを選んでしまったのだ。

そう、選んでしまった以上は引き返すことなどできはしない。それは、最悪の行為だ。深呼吸。恐ろしい、あのとき死ぬ寸前まで陥ったときは何の恐れもなかったというのに。一旦手に入れたものを、また手放すかもしれないと思うと——たまらなく恐ろしい。

……だが。心臓の鼓動が、彼の内側にある何かを掻き立てる。

歯を食い縛る、ぞっとするほど冷たくなった手を二度三度と握り締める。やれる、と思う、願う、祈る——その一歩を踏み出す。

SSS

ランサー同士の戦いは、依然拮抗状態が続いていた。

共に槍兵（ランサー）でありながら、その型（スタイル）はまるで違う。指先一つで杭を突き立てる〝黒〟と、あくまでその手に握った槍で直接打ち砕くことを目的とする〝赤〟と。

〝黒〟は距離を保ちつつ杭を放ち、〝赤〟はその悉くを打破しながら間合いまで接近する。その繰り返しだ。

神秘はより強い神秘によって無効化される。その点、〝赤〟（カルナ）のランサーは〝黒〟（ヴラド三世）のランサーを大きく上回っている。生前の強さからしても、大英雄カルナはまさに破格だろう。

彼に土をつけるために、雷神（インドラ）が謀を巡らせなければならなかった。全ての味方に裏切られ、それでもなお地に墜ちることがなかった誇り高き最上の槍使い。

——だが。そんな彼をもってしても、〝黒〟のランサーは攻め落とせない。

実在も定かではない〝赤〟のランサーと違い、〝黒〟のランサー——ヴラド三世は、確実に世界に存在した英雄だ。

周囲の国からは恐れられ、民からも負けず劣らず恐れられつつも——それでも、尊敬と崇拝を一身に集めた救国の英雄。

彼が居なければ、我が国は存在しなかった。そう歴史に刻まれた英雄が、その国に降り立ったのだ。この国において、彼の知名度は大聖者にも等しい。

彼の宝具『極刑王（カズィクル・ベイ）』もまた、尋常ならぬ力を有している。

確かに、ただの杭なのだ。だが――問題は、この杭が〝黒〟のランサーの指示に従って自由自在に召喚できる存在であること。

もっとも、それほどの宝具をたった一人に動員しても〝赤〟のランサーは変わらず万夫不当だ。両足、右肩、左脇腹、左肘と、あらゆる部分に幾度となく杭を突き立てられたにも拘わらず、彼の動きも剛力もまるで変化がない。今のところ、宝具『日輪よ、具足となれ（カヴァーチャ・クンダーラ）』が九割方、そのダメージを無効化している。戦闘を行いながら修復できる掠り傷程度でしかない。

だが、しかし。

「――見事だ。一千の杭をその槍で砕き、八百の杭をその身に纏った炎で燃やし、二千の杭をその黄金の鎧で受け止めたか。〝赤〟のランサーよ、なるほどお前はまさしく英雄に相応しい。その鎧ならば、杭どころか破城槌ですら効果はあるまい」

〝黒〟のランサーの賞賛を、カルナは厳粛な態度で受け止める。

「恐縮だ、領王よ」

「異教徒でなくば、降伏することで許しもしよう。それだけに惜しい、神の紛い物を信じているとは」

「フム、オレの神が紛い物と何故分かる？」

「分かるとも。神とは穢れなき絶対だ。そうでなくては誰が信じる？　誰が縋れるというのだ？　人と交わり、人と嬉う神など、ただの醜悪な怪物（モンスター）に過ぎん」

「さて、それはどうかな。信仰は土地によって千変万化するが当然だ。洪水が起きる土地柄ならば、水を支配する者が神だろう。オレたちや彼らの神が怪物だとするならば。お前の信仰する神もやはり、『絶対であること』を押しつけられた怪物に過ぎん」

瞬間、〝黒〟のランサーの双眸に炎が滾った。それを見てもなお、〝赤〟のランサーは涼やかに告げる。

「――なるほど。苛烈だな、串刺し公（カズィクル・ベイ）よ。お前にとって、この杭は攻撃であり防御であり、示威であり恐怖なのか」

「……何？」

「領地を定め、城を定め、守るべき物を定め、つまりお前はただ一騎で国家を形成しようとしている。祖国への愛が為せる業か。あるいは為政者としての責任感故か」

〝赤〟のランサーは淡々と、〝黒〟のランサーを暴き立てる。軀ではなく、心をだ。

「だが、ここには従えるべき配下がいないぞ？　王とは孤高であるべきかもしれぬ。だが、供回りのおらぬ王など存在しない。……失策だったな、串刺し公。オレは英霊だ、国を相手取っても恐れはせん」

「――ほう、面白い」

〝黒〟のランサーが、笑みを浮かべた。憤怒と激情、憎悪と殺意を装填したような凄絶

極まる笑みだった。

「我が国をただ一騎で相手しても恐れぬか。さすがは英雄――その傲慢さに余は既に三度、罰を与えている。そう……都合三度、我が槍はお前に喰らいついたのだ。故に、お前はここで死ぬがいい」

「――ッ!?」

身に襲い掛かった怖気に、咄嗟に〝赤〟のランサーは後方へと跳躍しようとした――が、コトは既に遅い早いの問題ではない。これは過去、攻撃は既に終了している……！

「察しが早いな。そう、我が『極刑王（カズイクルベイ）』は杭が宝具（テリトリー）なのではない。〝突き立てられた杭〟そのものが宝具なのだ。この領域内に居る限り、どれほど身を固めても余が攻撃を仕掛けたという事実さえあれば――」

〝赤〟のランサーの内側で、猛烈な勢いで何かが膨れ上がった。硬く、鋭利で、おぞましいほどに冷たいこれは――。

「杭、か……」

カルナが身に纏う黄金の鎧は杭も、刃も、槌も、物理的魔的問わずあらゆる攻撃をほぼ防ぎきる。しかし、唯一――内側からの攻撃は例外だ。まして、この杭は突き刺さった状態で顕現する。

空を自在に舞い、獲物を貪る強靭な顎と毒針を持つ雀蜂といえども。十重二十重（とえはたえ）に織り込まれた蜘蛛の巣の内側にあれば、無力な餌に過ぎない。

突き刺さった杭から、見る見る内に血が滴り落ちていく。あの鎧を纏った状態で、損傷を受けるというのは、恐らくカルナにとっても初めての経験だろう。

間髪を容れず、〝黒〟のランサーは勝利をもぎ取るために突貫する。元より、この程度で〝赤〟のランサーを仕留められるなどとは夢にも思っていない。

故にこの一瞬を見逃さない。どれほどの英雄であろうとも、杭を突き立てられた状態で抵抗などできるものか――!!

「詰みだ、〝赤〟のランサー……！」

濁流の如く襲い掛かる無数の杭、そして槍を持って突撃を仕掛けた〝黒〟のランサー。それらは最早、宝具というより牙魚（ピラニア）に近い。何しろ、彼には魔力の切れ目というものがない。ホムンクルスたちが魔力を搾り出される限り、彼の杭は永劫に生まれ続ける。二万というのは、あくまで発動時における最大数。杭をどれだけ断ち切られようが、魔力がある限りは再生産され続ける。

つまり、この戦場は事実上彼の悪意ある杭で埋め尽くされているも同然だ。勝てるはずがない。土地を支配し、国を従えている王に単騎で挑んで勝てるはずがない。

だが――英霊カルナにとって、周囲全てが敵だなどということは、極々ありふれすぎる程にありふれた状況である。

脳天目掛けて突き出される槍を、何と〝赤〟のランサーは突き刺さった杭のダメージすらも感じさせない払いで、見事に牽制した。

「……っ!!」

さすがに〝黒〟のランサーも絶句する。そこに、〝赤〟のランサーは更に超人的な意志を発揮した。

「炎よ(アグニ)」

焔が〝赤〟のランサーの全身を包み込む。瞬間、〝黒〟のランサーは杭を燃やそうとしているのだと理解する。

噛いなど一瞬で引き攣った。焔が〝赤〟のランサーの体内に取り込まれたのだ。燃える、燃える、燃えていく――〝赤〟のランサーを蹂躙していた杭が、一つ残らず消し飛ばされていく。

そこへ間髪容れず、豪雨の如き勢いで杭が襲い掛かる。

だが、それらが打ち破ろうとするは、よりによって炎の化身。たとえ炎霊でも燃やしきれぬ、太陽の子である。

黄金の鎧、神から譲られた剛槍、母の嘆願によって授けられた黄金の鎧、そして太陽神の血を引くという血脈――それらは、カルナというサーヴァントを紹介するに当たって半分程度の情報(ステータス)でしかない。

カルナ最強の武器とは、〝意志〟だ。強い意志、強い心、あらゆる不幸を受け入れながらも誰一人として恨むことのなかった施しの英雄。誰よりも特別なものを与えられ、しかしそれを以て己を『特別』としなかった男だ。

高慢もなく、増長もなく、生まれてから撃ち落とされるまで、ただただ父の名に恥じぬ生き方を全うした英雄だ。

故に。たかだか三本の杭で臓腑を抉られ、腕の神経を断裂させられているとしても。無数の杭によって精神的な圧迫感が襲い掛かっているとしても。それをどうにかするために、体内に炎を循環させるという想像を絶する荒業に耐えていたとしても。

〝赤〟のランサー(カルナ)は決して恐れることはなく、決して膝を屈することもない――!

二騎の周囲を炎が巡る。先ほどの光景とまるで同じだ。炎が全てを無に還す。だが、それればかりではない。

「――領王、その首貰い受ける!」

炎を纏ったまま、〝赤〟のランサーは猛然と突き進み――杭や炎のダメージにも全く頓着せず、肩口へとその一撃を直撃させた。

「ぐっ……!」

隠しきれぬ苦悶の声。ここに拮抗は崩れた。〝赤〟のランサーは遂に〝黒〟のランサー(ヴラド三世)を捉えたのだ。そして〝赤〟のランサーは止めの一撃を加えるため、黄金の鎧と並ぶ宝具、

即ち『梵天よ、我を呪え（ブラフマーストラ・クンダーラ）』を解放する機会を窺い始めた。

§§§

ミレニア城塞。マスターたちは使い魔や七枝の燭台（メノラー）を通じて戦場を眺め、サーヴァントたちに指示を下すか、あるいは最早何も言うべきことはないと、息を殺して戦いを見守っていた。

そんな中、不意にダーニックが告げる。

「――外に出る。フィオレ、マスターたちの指揮は君が執れ。以降、君たちは彼女の指示に従うように」

「……おじ様？」

ダーニックはフィオレの呼びかけに応じることなく、窓からその身を躍らせた。飛行は魔術師ならばそうそう難しくはない術だ。まるで階段を上るように、空中を踏み締める。

――やはり、発動せねばなるまいか。

令呪を見つめながら、彼は慎重に自身のサーヴァント…… 〝黒〟のランサーの状況を精

査する。〝黒〟のセイバー、英雄ジークフリートと互角の戦いを演じたという〝赤〟のランサー。そして、〝黒〟のアーチャー（ケイローン）が神の血を引く英霊でなければ倒せぬと断じた〝赤〟のライダー、アキレウス。

この二騎に加え、更に〝赤〟のセイバー（モードレッド）もまた難敵だ。今も、こちらのライダーを相手に一方的な戦いを進めている。このままでは、〝黒〟のライダー（アストルフォ）はまもなく脱落してしまうだろう。

だが、ダーニックには奥の手が残されている。〝黒〟のランサーのもう一つの宝具。

ひとたび発動してしまえば〝赤〟のランサーを容易く引き裂き、神の血を引く英霊ですら仕留められる、まさに必殺の宝具だ。

無論、その代償は大きい。というよりは、絶対に使いたくない代物だ。

「『鮮血の伝承（レジェンド・オブ・ドラキュリア）』……」

使用すれば、〝黒〟のランサーは伝説のみに謳われた吸血鬼へと変貌する。英霊ではなく、文字通りの怪物へと成り果てる。

その代償は、ダーニックの〝命〟になる。何故なら、〝黒〟のランサーはヴラド三世の血で汚れた伝説――即ち、吸血鬼ドラキュラを歴史から抹消するためにサーヴァントとしての契約を結んだのだから。

「――つまり。その宝具を使わせるということは、余に唾を吐くも同然だ。仮令死ぬとし

ても余は絶対にそれを使わぬ。そして、もしお前が令呪を以て強制したならばそこから先の話は言うまでもないな？」

それが、召喚したばかりの〝黒〟のランサーが放った警告、否、命令だった。もしこの宝具を使わせた場合、死を以て贖えということだ。

「……だが、敗北すればどの道私も死ぬ」

それは真実だ。逃げれば命だけは長らえるだろうが、魔術師としてのダーニック・プレストーン・ユグドミレニアは死ぬ。それだけは、選べない選択だ。

勝利を摑む為ならば、ダーニックはあらゆる犠牲を許容する。だが、ここで問題となるのが〝黒〟のランサーのマスターは自分だということだ。

一画目の令呪を以て命じて『鮮血の伝承』を使用させ、二画目の令呪で自決をさせる。これならば、問題ない。だが、こうなるとダーニックのサーヴァントが居なくなる。

その時点で〝赤〟のサーヴァントを全滅させていたとしても、今度は身内同士での戦いだ。いくらダーニックがユグドミレニア一族の長だといっても、事は全ての願いを叶える聖杯を巡る争いだ。

一番物分かりの良いフィオレやカウレスですら、彼の命令に従うことはまず無いだろう。では、代わりのサーヴァントを誰かから譲り受けるべきか？

これもまた難問だ。サーヴァントを譲れなど、果たして誰が命令に承服しようか。それも、フィオレのサーヴァントであるケイローンに対抗しうるような英霊となると、既に消えた〝黒〟のセイバー以外にない。

どう動いても、リスクが大きい状況なのだ。

「――やれやれ」

追い詰められている。そのことを、ダーニックはよく理解している。だが、百年間でそんな事は幾度もあった。

中でも六十年前の第三次聖杯戦争、未だにこうして生を謳歌しているのが不思議なほどの激しい戦いだった。

崩落した穴から、大聖杯へと繋がる道を発見するという望外の幸運。ナチスドイツを言葉巧みに籠絡し、総統直下の命令で同盟国相手とは思えないほどの軍勢を送り込み、大聖杯を強奪した。

そしてドイツへの移送途中に意図的にここトゥリファスを経由させ、共に戦った魔術師や軍人を皆殺しにした。それからは、研究と政治の日々だ。協会に対しては、ユグドミレニアは落ちこぼれた魔術師たちの受け皿としての役割に甘んじていると見せかけた。

大聖杯をトゥリファスに馴染むように少しずつ変質させていった。その過程で純粋な英霊だけでなく〝英霊としての側面を持つだけの者〟を召喚可能になったのは、思わぬ副産物と言うべきか。

何しろ、時間だけはあったのだ。十年、二十年、三十年、四十年、五十年、六十年――。

この執念の基点となったのは、何だったか。

根源に到達するという、魔術師全ての原動力？　無論、それは大きい。魔術師として生まれた以上、それを目指すは当然だ。だが、果たしてそんな〝純粋〟な願いで、ここまで辿り着けただろうか。

……八十年ほど前の、苦い記憶が蘇る。

当時、まだ新進気鋭の魔術師として華々しいデビューを飾った彼に、一つの縁談が持ち上がった。良縁だった。ダーニックとしては、貴族（ロード）に連なる血筋の一族と繋がることになる。

だが、ここで待ったが掛かった。ユグドミレニアの血は濁っていて、五代先まで保つことがない。後は零落するだけだと、とある魔術師が忠告したのだ。

――馬鹿馬鹿しい。五代も後ならば、対策など幾らでも考えられるだろう。

そう思ったのは、ダーニックだけだったらしい。リスクを好まぬ相手の一族にとって、彼は直ちに排除せねばならない異分子となった。

笑顔で肩を叩いて友情を誓った義兄も、羞じらいながら自分に愛を囁いた伴侶となるはずだった女も、こぞって彼からそっぽを向いた。

――それは、いい。そんなこともあるだろう。

だがこの瞬間、ユグドミレニアは貴族（ロード）に至る夢を断たれた。たとえ、五代先の零落を乗り切ったとしても、一度貼られたレッテルは絶対に剝がれない。

自分はいい、だが後に続く者たちの未来すらその魔術師は奪い去った。この瞬間、ダーニックは通常のアプローチで根源に至る――つまり、魔術師として研鑽を積んで協会で一つでも上に出世し、貴族となって――などというのは、永遠に叶わぬ夢と放棄した。

故に、彼はまず一族を零落させぬ方法を考えねばならなかった。それから根源へと至る道を探さねばならなかった。

魔術協会を離脱し、世間に隠れ潜みつつ研究を続けるという手もないではなかった。だが、ダーニックはそうすることを拒んだ。

無論、協会に居ることは屈辱だった。だがダーニックは、その屈辱を一分一秒たりとも忘れず、胸に刻み――糧とした。

そんな折、彼は偶然にも冬木市の聖杯戦争について知った。隠秘術（オカルト）に関心を抱いていたナチスドイツを抱き込み、軍の力を得たマスターとして参戦。

掟破りの反則を仕掛けたアインツベルンのせいで、状況が酷く混乱したのが幸運だった。

……第三次聖杯戦争は有耶無耶（うやむや）の内に終結し、疲弊したアインツベルン、遠坂（とおさか）、マキリにはダーニックとナチスドイツを止める手立てがなかった。

風の噂によれば、アインツベルンは未だ聖杯を諦めておらず、新たな聖杯を創り出そう

としているらしい。遠坂は聖杯を諦め、冬木市で別のアプローチを探っているとか。マキリはあの時点ですら、既に衰退が始まっていた一族だ。消息は摑めていないが、恐らく第三次聖杯戦争が決定打となっただろう。

ダーニックを見捨てた一族にも、もう恨みはない。現状を考えれば、礼を言いたい程だ。もっとも彼らはとうに一族諸共に滅んでいて、歴史に名も残されていないのだが――。

彼らにはダーニックが直接手を下した訳ではない。ただ、政治的に追い詰めただけである。無駄な実験に資金を注ぎ込ませ、秘匿していた術式を流出させ、刻印を継承した子供が偶然、そして不幸にも実験中の事故で死亡しただけだ。

ダーニックに媚びて身を売るまでに落ちぶれた彼らだけは、ユグドミレニアに組み込むことなく放逐した。それから聖杯戦争の舞台となった極東、即ち日本に向かったことだけは確認されているが、以降は消息不明だ。恐らく生涯を嘆きながら暮らしたのだろう。

誰かを蹴落とし続ける人生だった。そして今、彼が蹴落とすべきは魔術協会と一族の魔術師たち。

無論、彼に躊躇いはない。一族の人間を蹴落とすことにも、自身のサーヴァントに禁忌とされた宝具を使わせることも。

ダーニックの表情は、普段の彼を知る者ならば慄然するに足るものだった。酷薄で、凍り付くように冷えていて、一片の情すらも窺えない。

こんな時、彼は酷く悪辣なことを考えている。必要ならば、あらゆる悪徳を躊躇いはすまい。わざわざ外に出たのもこの為だ。他の者に不要な警戒心を与えることはない。

「――さて。どうしたものか」

しばしの思考時間。そうして、ダーニックは一つの結論を得た。血で汚れることを厭わぬ決断が必要だが、彼にとってはまさしく今更の行為だった。

§§§

――一方的、と言わざるを得ない。

元より英霊としての格も、神秘としての刻も、何もかもが桁違いだった。

動物的直感か、〝赤〟（モードレッド）のセイバーは〝黒〟（アストルフォ）のライダーが構えた黄金色の馬上槍（ランス）を受け止めることなく、機敏に躱し続けている。

威力こそ無に等しくとも「サーヴァントの脚部を強制的に消失させる」という、極めて致命的な力を持つ槍――『触れれば転倒！』（ふらファルガ）。

けれど、それも直撃しなければ話にならない。〝黒〟のライダーとて、決して槍の扱い

に不慣れな訳ではない。むしろ、馬上試合を多数こなしたこともあって、並の騎士では太刀打ちできない域に到達している。

だがしかし、〝赤〟のセイバーは並の騎士などではない。騎士王ことアーサー・ペンドラゴンの不貞の子、彼の技を習い、盗み、己の血肉に変えた稀代の天才児モードレッドである。

「遅い！」

〝赤〟のセイバーの全身鎧は、傍目から見ても重量級だ。いくら魔力で編み上げたからといってその重みが変わる訳ではない。敏捷さに自信があった〝黒〟のライダーは、それで思い切り彼女をかき回してやるつもりだった。

だが、遅れを取っているのは他ならぬ〝黒〟のライダーだ。〝赤〟のセイバーの剣を、必死の思いで馬上槍で受ける。その際、赤雷が瞬いては消えていった。

これは、〝赤〟のセイバーの魔力だ。全身から溢れんばかりに狂気的な魔力を放出しているため、剣の刃を受け止めただけで痺れが走る。〝黒〟のライダーは慄然とする。その度に伝わってくるのだ——彼女から狂気、憎悪、戦闘への喜悦といった炎のような激情が。

「ああクソ、こっちは忙しいんだ。……さっさと死ねよ！」

舌打ちして、〝赤〟のセイバーは何とも忌々しげに呟く。〝黒〟のライダーはこんな時、生来的に相手が最も嫌がることを得意としている——笑うのである。

「いやいや、そう言わずに。もうちょっと付き合ってくれない？」

「ほざけ——!!」

そして、〝赤〟のセイバーは沸点が低い。憤怒のあまりに、歯を軋ませて更に苛烈な一撃を叩き込んだ。

恐ろしいことに。それでもなお、ギリギリのところでそれは〝剣術〟と呼べるものだ。打ち合う〝黒〟のライダーには理解できる。彼女の使う剣技は狂戦士（バーサーカー）の如き獰猛さと、剣使い（セイバー）としての技量が絶妙なまでに鬩ぎ合っている。

喩えるならば凶暴な野猿（ましら）が一匹。彼に餌を貰うには戦わねばならないと教え、千匹万人の〝敵〟と戦わせたとする。当然、彼に武を学ぶような知恵はない。だが、本能が彼を教育し、幾多の戦闘が彼の精神を研ぎ澄まし、報酬が彼の生を充足させたとしたならば。

最終的に産み出されるのは、武術でない〝何か〟を修めた極限の怪物だ。

〝赤〟のセイバーの剣術は極めてそれに近い。戦って、戦って、殺し続けた者にのみ産み出される、儀礼や騎士道といったものをかなぐり捨てた、生存と殺戮のための剣技。

彼女以外にこの技を修めるものは存在せず、彼女以外にこの術理に適合する者は存在しない。彼女が編み出し、彼女だけが使いこなす獅子の技だ。

「くっ……!!」

槍と剣が交わり、火花が舞う。戦闘が開始してから今に至るまで、〝赤〟のセイバーは〝黒〟

のライダーを圧倒している。
だが、苛立ちは〝赤〟のセイバーにある。
――クソ、攻め切れねぇ。
〝赤〟のセイバーが保有する超能力じみた直感が、黄金色に輝く馬上槍を受けてはならないと戒めている。たとえ穂先の鈍さから一撃喰らったところで、大した効果がないように思われても、直感はそれを許さない。
結果、攻撃を躱す動きがわずかに大きくなり、返す刀の攻撃に上手く繋がらない。攻めが雑になるほどではないが、甘くなっているのは確かだ。
いっそ直感を無視して、敢えて受けてみるか――？　そんな考えも浮かぶが、即座に却下する。あの槍は宝具だ。宝具である以上、どれほど威力が低くとも警戒せねばならない。突いたものの行動を不能にする、動きを鈍らせる、そういった力であれば致命的だ。いや、〝黒〟のライダーが最優クラスであるセイバー相手に何の策もなくただ突っかかるとは思えない。
焦燥を抑え込む。……この場合の焦燥とは、敗北へのそれではない。他のサーヴァントと戦う前に終わること、特に決着のつかなかったあの〝黒〟のアーチャーと戦えないのではないか、という焦りである。
それを抑え込み、〝赤〟のセイバーはひたすら〝黒〟のライダーの隙を待った。

――来た！
そして、そのチャンスが訪れた。全力で槍を上方へ弾き、無防備となった腹部に剣を叩き込んだ。鎖帷子（チェインメイル）如き、彼女の持つ剣の前では存在せぬも同然。
「がっ……！」
土壇場で、〝黒〟のライダーは軀を捻ることに全力を費やした。それが功を奏したのだろう、脇腹を貫かれただけで少なくとも即死に至りはしなかった。
だが、果たして功を奏したと言える結果だろうか。最早、〝黒〟のライダーは治癒魔術と自己治癒能力が発揮されるまでのわずかな時間を耐えるほどの力も持ち合わせていない。
「――じゃあな、楽しかったぜ」
〝赤〟のセイバーがそう言って、大剣（クラレント）を振り上げる。〝黒〟のライダーは無理矢理顔を上げて、笑って呟いた。
「……準備、完了だ」
〝黒〟のライダーが放った言葉に、〝赤〟のセイバーは訝しげに眉を顰める。
「おい、何が準備できたってんだ。ええ？」
――瞬間。まさに目にも留まらぬ速度で。令呪の援護（ブースト）を受けた〝黒〟のバーサーカー（フランケンシュタイン）による強烈な一撃が、〝赤〟のセイバーの無防備な背中に襲い掛かった。

ここが勝負所だ、とカウレスは二画目の令呪を行使した。〝黒〟のアーチャーの見立てでは、〝赤〟のセイバーには〝黒〟（ジークフリート）のセイバーや〝赤〟（アキレウス）のライダーのような概念武装に近い形の防御型の宝具は存在しない。兜はあくまで真名と能力を秘するためで、それ以外の力はないと判断した。

ならば、この一撃は少なくともそのまま通じるはずだ。特に、バーサーカーの持つ戦鎚（メイス）は斬るのではなく衝撃を与える武器だ。全身鎧を纏った相手には、特段に有用である。

それは、車をプレス機で押し潰す音に似ていた。〝黒〟のバーサーカーは、その一撃に手応えを感じた。端から見ていたライダーもまた、同じだった。

だがしかし。

「――そんな、馬鹿な」

驚嘆すべきは、狙い澄ました一撃を狙い通りに叩き込んだ〝黒〟のバーサーカーではない。その一撃を受けてなお、吹き飛ぶどころか地面に根を下ろしたように動かぬ〝赤〟のセイバーだった。

使い魔を通して見ていたカウレスも、当事者であるバーサーカーやライダーも驚愕を隠せない。

「バーサーカー……テメェ如き三下が、一匹増えたところでな……」

苦痛と怒りを押し殺したような、底冷えのする声。その剣の切先（きっさき）は、しっかりと〝黒〟のライダーに向けられている。タイミングを合わせて馬上槍で突こうとしていたライダーは、一歩も動くことができない。

「――ゥ――ゥ！」

〝マズい。距離を取れ、バーサーカー！〟

カウレスの指示とほぼ同時、猛烈な〝死〟の予感に囚われたバーサーカーは即座に後方へと跳躍した。その距離、何と二十メートル。たまたまそこに並んでいたゴーレムの群れに紛れ込んだ。

そしてその直後。〝黒〟のバーサーカーと〝黒〟のライダーは、再び〝赤〟（モードレッド）のセイバーが如何に図抜けた英霊であるかを、思い知らされた。

「――勝てると思ったのか、このオレに!?」

跳んだ。いや、それは最早跳躍ではなく射出だ。〝赤〟のセイバーは装填された銃弾であり、たった今雷管（らいかん）にハンマーが叩き込まれた。

〝赤〟のセイバーのスキル『魔力放出』――施条（ライフリング）によって回転しながら銃身（バレル）を飛び出し、目標（バーサーカー）に向けて迷わず違わず放たれる。

そして構えた大剣は弾頭だ。兜で完全に顔が覆われているにも拘わらず、バーサーカー

は確かに感じ取った。
——このサーヴァントは今、嗤っている。
周囲にいたゴーレム諸共、〝赤〟のセイバーの弧を描くような斬撃が炸裂した。炸裂、という言い方はまさしく的確だ。爆風と赤雷が巻き起こり、周囲のゴーレムはその余波だけで塵芥と成り果てた。
その光景を監視していた〝黒〟のマスターたちも、そしてたまさかその光景を観覧した一部のサーヴァントたちも、ただただ息を呑んだ。
「——何て、出鱈目な」
振り絞るような何者かの呟きは、その場にいた全員が心底同意するものだった。それほどまでに凄まじい一撃だった。なお恐ろしいことに、これは〝宝具〟ではない。英霊が全力で撃ち放ったというだけの、ただの通常攻撃だ。
〝バーサーカー……!!〟
カウレスが念話で必死に呼びかける。バーサーカーがそれに応じる気配はない。死んではいない、マスターであるカウレスにはそれが分かる。だが——今の一撃を喰らって、果たして彼女はどういう状態なのか。
〝赤〟のセイバーが、噴煙を剣で切り払う。バーサーカーを視認、その正体に気付いた彼女は憎悪に顔を歪めた。

「お前——」
〝おい、やったのか？〟
割り込むようなマスターの念話に不機嫌そうな声で、セイバーが応じた。
「やった。やったが、まだ生きてるな。無様なコトに、生き足掻いてやがる」
〝……機嫌悪いな、お前さん。で、正体は分かったのか？〟
「さあな。ただ——こいつ、人間じゃねえな。というか、生物かどうかも怪しいもんだ。ホムンクルス……に、ちと似てる気がする」
〝ホムンクルス、だと？〟
「ぶった切った腕に、血管じゃなくてケーブルが通してある。マスター、そんな英霊を聞いたことあるか？」
〝人工生命体か……。それの英霊なんて聞いたことが……あるような無いような〟
「おいどっちなんだ、マスター。……いや、まあどうでもいいさ。死にかけのサーヴァントなんぞ、真名を知ったところで無駄な知識だ」
〝待て待て……人工生命体……一応聞いておくが、全身が機械って訳じゃないんだな？〟
「肉は継ぎ接ぎだらけの欠陥品だ。機械じゃない……ま、どうでもいいことだ。今、トドメを刺すぞ」
サーヴァントを〝殺す〟には、霊核を打ち砕くことが必要だ。それには、直結している

器官である心臓か脳を破壊すればいい。

〝赤〟のセイバーは躊躇いなく、彼女の胸に剣を突き立てた。〝黒〟のバーサーカーは抵抗することなくその刃を受け入れる。差し込んだ瞬間、びくりと痙攣しただけだ。

「――終わりだ」

致命傷を与えた以上、最早彼女に構ってなどいられない。次は、〝黒〟のライダー（アストルフォ）だ。振り返れば、馬上槍を構えたまま突貫してくるライダーが目視できる。

迅い。だが、完全に快復しきれていない状態での一撃は、あくまで英霊の平均からわずかに上の程度でしかない。百度受けたとしても、捌く自信がある。

「来やがれ、雌犬！」

確信があった。ライダーの槍を剣で捌き、間髪容れずに首を刎ねる。それで終わる、彼女の直感は未来予知というランクにまでは至らないものの、それでもこの場面（シーン）での最適な回答は容易く導き出せた。

〝黒〟のライダーは九分九厘仕留められる。万が一のことなきよう、後はただ専心するのみだ。

〝赤〟のセイバーは正しい。だが、そこには一つの計算が欠けている。もしも、ただの戦闘用ホムンクルスや、ゴーレムのような雑兵ではなく――そして、サーヴァントですらもない。本来、この世界に居るはずもない〝紛れ〟が存在した場合。

あらゆる計算が、脆くも崩れ去るということになる。

「――っ!?」

まず、〝黒〟のライダーが愕然とした表情を浮かべて突貫（チャージ）を緩めた。次に、視界の隅に小さな人影が映った。

〝黒〟のバーサーカー（フランケンシュタイン）――ではない。ただの雑兵（ホムンクルス）だ。細身の剣を携え、ライダーと同じく突撃している。雑兵にしては意外なほどに速度に乗った一撃だ。

だが、そんなものはそれこそ蚊に刺される程度のもの。〝赤〟のセイバーは彼を無視して〝黒〟のライダーに注意を払う。

ぶつかってきたらそれを弾き、片手で殴り潰せばいい。それで終わりだ。そう計算した〝赤〟のセイバーだが、ほんのわずかしこりが残った。

それは予感というほどのものではない。ほんの少し、些細な違和感でしかない。故に、セイバーはそれを無視して、〝黒〟のライダーを返り討ちにしようと待ち構える。

〝黒〟のライダーは驚愕を振り切って、どこか焦燥に駆られたように更なる速度でセイバーに襲い掛かる。

先にセイバーへ到達したのは、ホムンクルスだ。だがセイバーの全身鎧はその刺突（つき）を弾き飛ばすだろう。そうでなくてはならない、少なくともホムンクルスの斬撃如きに鎧が抜かれるなど、あってはならない出来事だ。

……ところが。ホムンクルスが持つ武器は、他ならぬサーヴァントの剣である。宝具でこそないものの、その鋭さは他の雑兵たちが持つ凡庸な武器とは比較にならない。それでも、その使い手がただのホムンクルスであれば問題はなかった。だが――。

――ただ、無我夢中だった。あらゆるものを顧みず、己の命すらも放り捨てた。〝黒〟のライダーの突貫は失敗する、ジークはそれを理解していた。自分を救ってくれた英雄は、見るも無惨に討たれることになる。

それだけは絶対に我慢ならぬことだった。鼓動は力強く全身に血液を送り、大地を踏みしめる足に力を与えた。

吼える。何も要らない、と彼は思う。この一撃が決して意味のある行為ではなくとも。ほんの少し、〝黒〟のライダーの命脈を延ばすだけのものだとしても。

ライダーを見捨て、安穏とした人生を過ごすことに――ジークは、何の意味もないと断言する。

〝赤〟のセイバーにとって最後の計算違いは、彼女が纏う全身鎧だ。彼女は失念している。確かに、令呪を伴った〝黒〟のバーサーカー渾身の一撃を、セイバーは堪えた。けれど、傷がつかなかった訳ではない。戦鎚の直撃を受けた装甲は凹み、たわんでいる。ならば、その装甲部分だけは脆くなっていて当然だ。ホムンクルスの双眸は、確かにその破砕点（カタストロフィポイント）とでも呼ぶべき存在を捉えていた。

重みのある衝撃をセイバーとジークが分かち合う。肩口からぶつかるような突貫は、ジークの全身を酷く痛めつけた。だが、セイバーはそれどころではない。

「な――に？」

痛みより先に、呆然とする。彼女自慢の全身鎧を、細身の剣が貫いていた。脇腹からじくりと、血が流れ出す。憤怒は一瞬で過ぎ去り、代わりに凍るような殺意がセイバーの頭を支配した。

「――何者だ、貴様」

引き抜いた細身の剣を構えたまま、ジークは無言だった。応じないのではなく、応じられない。眼前のサーヴァントは怒りに狂わない、ただ鋼鉄の兜で顔を覆ったまま彼と向かい合い――その結果、ジークは口を開くことすらもできなかった。

「……答えぬならそれでも構わん。お前は、オレが殺すと決めた」

「――っ!!　止めろ、セイバー！」

〝黒〟のライダーが再び突貫を敢行する。低い体勢から滑るように襲い掛かってきたその一撃を。〝赤〟（モードレッド）のセイバーは剣で捌くと、甘い突貫への代償とばかりに強烈な肘打ちを叩き込んだ。

「ぐっ……!!」

先ほどの斬撃から、完全に修復できていない箇所を狙われたせいで、またも腹部から血が噴出した。倒れながらも、〝黒〟のライダーは必死の形相で〝赤〟のセイバーを睨む。

セイバーは哀れみすら滲ませた表情で、ライダーに告げた。

「残念なことに。オレはこいつを敵だと見定めた。せめて、もう少し弱ければ別の道が見つけられたものをな」

〝赤〟のセイバーはゆらりと、その意匠を凝らした白銀の剣を構えた。その剣が向けられたのは、ライダーではなくホムンクルスだ。どこか夢心地のまま、ジークは真正面からセイバーの勇姿を眺めていた。恐ろしい、と思う。死ぬだろう、とも予感している。なのに、どこか感情は麻痺していた。いや、まるで平常心に近い。

心臓の鼓動は、全く通常と変わりない。どうやらこの心臓は、恐怖で脈拍が加速することがないらしい。さすが英雄、とジークは心の内で〝黒〟（ジークフリート）のセイバーだった男、ジークフリートを賞賛した。

……勝負は一撃。

ジークがその剣を振るう暇もなく、〝赤〟のセイバーの斬撃が彼の胸を引き裂いた。肩口から埋め込まれた刃はそのまま心臓に到達する。

「――じゃあな。貴様のことは、我が心に刻んでおこう。名も無きホムンクルス」

それは紛れもない〝赤〟のセイバーの賞賛だった。色鮮やかな血が噴き出し、また一人

のホムンクルスが大地に斃れる。先ほどから幾度も幾度も繰り返された光景。

けれど、その瞬間この聖杯大戦に組み込まれた全てのホムンクルスが息を呑んだ。……彼のことは、皆が知っている。何故戻ってきたのかも、皆が理解している。

応援はできず、助力もできない。だが、彼らは共感していた。自分たちの中でただ一人、自由であることを選んだ彼に、祝福を望んでいたのだ。

戦いは終わらない。ゴーレムたちも、竜牙兵たちも、そしてホムンクルスたちもその手を休めることはない。だがこの時、ユグドミレニアが産み出したホムンクルスは、全てが終わったと感じた。

ホムンクルスたちは、同種以外は誰一人としてそれに気付かぬ陰鬱な陰を滲ませたまま――戦場でもがき続ける。

〝赤〟のセイバーは今度こそ〝黒〟（アストルフォ）のライダーと向き合う。

「――待たせたな」

「……」

〝黒〟のライダーは沈黙する。伏せた顔には、いつもの柔和な笑みなど消え失せている。

「行くぞ、〝赤〟のセイバー。君は、許さない」

「は、情を移すのも結構だがな！　此処は戦場だぞ。オレに敵対した者はそりゃ、殺すさ。

傷を付けた者なら、尚更だ！」

「ああ、そんなコトは分かっている。分かっているけどな、このアストルフォが、そんな理屈で納得するわきゃないだろうッ!!」

猛る〝黒〟のライダーに挑発染みた薄笑いを浮かべて、今度こそ迎撃しようと目論んだ〝赤〟のセイバーだが、突然の念話に攻撃を中断せざるを得なかった。

相手は無論、マスターである獅子劫だ。

〝おい。〝黒〟のバーサーカーはどうした!?〟

意味不明の問い掛けに、訝しげに思いながらも〝赤〟のセイバーは律儀に応じる。

〝何だよ、マスター。バーサーカーなら、もう――〟

〝ちゃんと肉体が消滅したか、確かめたんだろうな!?〟

〝……いや、そこまでは〟

そこまでせずとも、確実にトドメを刺したという感覚がある。〝黒〟のライダーに意識を残しつつ、彼女はわずかに首を傾けて――そこに誰も居ないことを確認した。

「何ッ……!?」

セイバーは愕然としつつも周囲を走査する。サーヴァントが消えた訳ではない。その証拠に、彼女の戦鎚が大地に突き立てられている。墓標を彼女は連想し、すぐにおかしなことに気付いた。

あの斬撃を叩き込んだ際、〝黒〟のバーサーカー（フランケンシュタイン）はあの戦鎚を握り締めていたはずだ。

なのに、いつの間にあの戦鎚は大地に突き刺さった？

それがあまりに奇妙な光景だったせいか、戦鎚に気を取られた。次の瞬間、計ったような自らを犠牲にしてでも放つ何かだ。

「ナアアアアアアアアアアアアア――――――――――オゥッ!!」

凶暴な獣のように、あるいは地獄の亡者の如く絶叫しながら、それでも〝黒〟のバーサーカーは必死になって〝赤〟のセイバーの背にしがみつく。

膨れ上がる魔力は旋風を起こし、彼女を中心として巨大な竜巻（ツイスター）を産み出し始めた。

「バーサーカー！」

〝黒〟のライダーは、片手で目に入り込もうとする土埃を遮りながら必死に叫ぶ。

だが、それにバーサーカーが応じることはない。

〝――そこまでよ、ライダー。バーサーカーが宝具を発動するわ、後退しなさい〟

どこか不快な冷たさを持つマスターの声。当然、ライダーは反駁（はんばく）する。

〝嫌だ。セイバーは……〟

〝黙りなさい。そこに居ると、貴方が死ぬわよ？　令呪を使わせたいのかしら？〟

その言葉に歯噛みしながらも、ライダーは安全と思える場まで距離を取った。頭を冷やしたところで、自分が佇む場所に愕然とする。

そこは、彼女たちが居る地点から百メートル以上離れている。つまり、そこまで距離を取らなければ危険であると、ライダーの肉体は判断したのだ。

〝黒〟のライダーは知っている。バーサーカーの宝具は二つ。一つが常時発動型の宝具である『乙女の貞節（ブライダル・チェスト）』。そしてもう一つこそが――。

「……『磔刑の雷樹（プラステ・ドゥリー）』」

それは、〝黒〟のバーサーカー自らも死に追いやる禁忌の宝具だった。

カウレスは、彼女（バーサーカー）に何を伝えればいいのかが分からない。

ただ、止めることはできなかった。それが〝赤〟のセイバーを斃すに適しているからとか、そんな理由ではない。

カウレスが命じた訳でない。他のマスター、あるいはフィオレに強制された訳でもない。ただ、何となくカウレスはバーサーカーがそうするだろうと考え、バーサーカーは令呪を使われるまでもなく、その宝具を発動しようとしていた。

〝……バーサーカー。令呪でお前のバックアップをする〟

それは保護でもなければ、撤退でもない。援護（ブースト）だ。令呪は命令範囲が狭ければ狭いほど、そして瞬間的な命令であればあるほどに効果が強い。そして、マスターの命令にサーヴァントが賛同しているならば、更なる効果を発揮する。

この場合、宝具を最大限に使用することをカウレスが命令すれば、通常の威力に上乗せできる。

そこまでやれば、〝赤〟（モードレッド）のセイバーを仕留めるに足る威力になるだろう。

〝――ウゥ〟

肯定の唸り声は、鬱陶しいほどに良く響いた。カウレスはこのとき、〝黒〟のバーサーカーがフランケンシュタインであることを、心底後悔した。

いっそ、狂っていれば良かった。マスターの顔すらも分からず、会話もできない、ただ敵を屠るだけの狂戦士であってくれれば良かった。

それならば最後に残された令呪を使うのに、これほど躊躇いはない。元より、この聖杯大戦に積極的に参加している訳でもなければ、叶える願いもない。

惜しむことなく、嘆くことなく、悲しむことすらもなくバーサーカーを手放せていたはずだ。

……だのに。脳裏に蘇るのは、虚ろというよりは茫洋とした表情で花を摘み、花弁を摘まんでは捨てていく彼女の姿。風で舞い散る花片を、ただ眺めていた彼女の姿だ。

内臓が食い破られそうな痛み――それを堪える。涙は流さない、元よりそんな権利があるはずもない。殺されるのは彼女で、殺すのは自分だ。それを、違えない。

嫌になるくらい冷徹な声と共に、その言葉を流し出す。

〝第五の〝黒〟が令呪を以て命じる〟

全ての、ささやかでわずかな思い出を切り捨てる。

〝――全拘束解除。宝具『磔刑の雷樹』を発動し、〝赤〟のセイバーを斃せ〟

空が割れる。〝黒〟のバーサーカーが集めた膨大なまでの魔力。それが、戦鎚の尾部にあるフィンを高速で回転させていく。

「テメェ……！」

焦燥で歪むような〝赤〟のセイバーの声。微かな笑みすら浮かべて、〝黒〟のバーサーカーは告げる。

「――わたしと、いっしょに、こい」

空から大地へ、あるいは大地から空へ。蒼白の光が滝のように降り注ぐ。

「――――――

平然とした様子で、〝赤〟のセイバーが呟く。

〝そう言うな。正直、消滅しなかっただけ上等だと思うぜ？〟

〝うっせぇ。マスターがもう一秒早く令呪を発動してくれれば良かったんだ〟

〝変わらねぇよ。本来なら、令呪でお前を安全圏まで転移した時点で無傷なはずだった。だが、あの雷はお前に追いすがり、あまつさえ中心点に引きずり込もうとした。……恐らく、令呪で『〝赤〟のセイバーを斃せ』と命じてあったんだろうよ。その分が、お前さんに傷を負わせた訳だ〟

令呪による援護を加えた、まさに渾身の一撃。それを凌ぐには、やはり令呪の援護が無ければならなかった。

〝赤〟のセイバーのマスターである獅子劫界離は、行使に躊躇しなかった。彼が令呪によって命じたのは安全圏までの撤退。時間の概念がほぼ零に等しい〝転移〟は、最早魔法の領域に足を踏み入れかけている。神代の魔女ですら、自身の領域でしか行使し得ないそれを、所詮は一介の魔術師でしかない獅子劫界離が行えたのは、令呪に籠められた膨大な魔力故だ。

……そして、そこまでやっても無傷という訳にはいかなかった。

カウレスの令呪もまた空間の概念、果ては因果すらもねじ曲げて『磔刑の雷樹（ブラスティッド・ツリー）』を〝赤〟のセイバーに喰らわせた。

だが令呪の膨大な魔力がそれに消費されたため、威力そのものを加算するまでには至らなかったのだ。結局、〝赤〟のセイバーは深手を負っただけに留まった。多少の時間は必要であろうが、修復するには容易いだろう。

「――くそ！」

カウレスが石壁に拳を叩きつけると、ずるりと皮が剝けて血が流れた。ひりひりするような痛みは、脳を暴れ回るような熱のせいで気にならない。彼は自身のサーヴァントが死亡したことを確認すると、無言で部屋から退出して廊下の壁に苛立ちをぶつけていた。さすがに、他の魔術師の前でそんな無様な真似をしたくはなかった。

「……あれは、ミスじゃないわ」

弟の嘆きに気付いたのか、追いかけてきたフィオレの言葉にカウレスは首を振ってそれを否定し、叫んだ。

「いいや、ミスだ！　相手方にも令呪があるのは知っていて、それでも一か八かの賭けに出てしまった俺のミスだ。向こうの令呪があと数秒遅ければ……もう数秒早く、俺が令呪での援護を決意していれば、こうはならなかった！　アイツを……バーサーカーを無駄死にさせずに済んだんだ！」

失策した、判断を誤った、とカウレスは自分を責め立てる。フィオレからすると、それは半分正しく、半分間違っていた。

その誤りは、避けようのない誤りだったこと。〝赤〟のセイバーと対決するにあたり、カウレスとバーサーカーは間違いなく最善を尽くした。その上で、相手の力が上回っていたというだけだ。

「少なくとも、手傷は負わせたでしょう？」

無駄ではない、とフィオレは思う。彼女の闘志が籠められたあの一撃が、無駄であって良いはずがない。だが、魔術師であるカウレスはそれを首を振って否定する。

「治癒魔術があれば、修復できる程度でしかないさ。……俺のことはいい、姉さんはさっさと指揮に戻れ」

「でも――」

「いいから、行ってくれ」

有無を言わさずという口調でカウレスが告げると、フィオレは指揮をするために部屋へと戻っていった。残されたカウレスは廊下の壁に背中を預けて、顔を覆って考える。

……あの一撃が決まらなかったとき、撤退させるべきだったか？

……奇襲で〝赤〟のセイバーを仕留めようというのが失策だったか？

……そもそも、バーサーカーをぶつけようとした判断が愚かだったか？

無論、一つ一つに理由めいたものはあった。あそこで〝赤〟のセイバーを仕留められなければこちらのライダーが犠牲になっていた可能性が高い。

実力的に対抗し得るランサーとアーチャーは、それぞれ別の難敵と戦っていてそれどころではなかった。

どうすれば良かったのだろう。どうすれば勝利して、どうすれば彼女を救えたのだろうか。死ぬほど考えに考えて、出た結論はどうしようもなかった、というありきたりで最悪のものだけだ。

ライダーを失う訳にはいかず、あのときいち早く駆けつけられるのはバーサーカーしか居なかった。バーサーカーも、追跡していたマスターと〝赤〟のキャスターを見失ってしまい、次の敵を探していたところだ。

いや、悔やんでも嘆いてももう仕方がない。

……〝黒〟（フンゲン）のバーサーカー（シュタイン）は、死んだのだ。カウレスの聖杯大戦も、この時点で終了してしまった。

想像以上に辛く、胸を抉るような痛みがあった。これでも、カウレスは魔術師としてそれなりに覚悟を決めていたつもりだった。死ぬかもしれない、殺されるかもしれない、あるいは殺すかもしれない、最悪姉も含めて一族皆殺しにされるかもしれない――そういう

覚悟はあった。

今、胸を抉っているのは全く別の次元の思考だった。召喚して戦争を戦うまで、想像することもなかった痛みだ。〝黒〟のバーサーカーの死が、これほど自分に傷を刻むとは思わなかった。

〝俺は、アイツに、何もしてやれなかった〟

彼女の願いは、聖杯であれば叶えられるものだった。バーサーカーというクラスにしては例外的なほど知能が高かったし、何より扱いやすいサーヴァントだった。

ほんの数日、利害を共有するだけの存在だろうと考えていた自分が呪わしい。彼女は心を通わせ、共に戦う大切な仲間だ。いや、そうなってしまった。

だからこそ悲しい。

けれど過去は永遠に変わらず――『座』に還ったものが戻ってくる訳もない。

人の外見でありながら怪物であることを強制された少女の、自分と同じ種類の――愛してくれる『誰か』が欲しいというささやかな願い。

カウレスは、それを叶えてやれなかったことがただ悔しかった。

〝赤〟のセイバーは重傷ではあるが、獅子劫界離が即座に治癒魔術を行使すれば、戦闘行動に支障がないレベルだった。つまりカウレスが言った通り、〝黒〟のバーサーカーが発動させた宝具は、攻撃という面ではこの上なく無意味であったと言える。

だが、この宝具にはもう一つ隠された力がある。カウレスですら気にも留めなかった設計図の一節。そこにはこう記されていた。

〝この雷撃はただの雷ではなく、フランケンシュタインの意思が介在する力である。それがある限り、彼女は決して滅びない〟

雷撃は周囲一帯を塵芥に還すと同時、そこにあったジークの心臓に急激なショック状態を与えた。急激な収縮と膨張。停止したはずの血液の流れが再開した。フランケンシュタインが放出した魔力が吸収され、全身に血が巡り始める。

――ジークと自身に名を与えた少年が、最初に感じたのは痛みだった。

召喚された際、あらゆるサーヴァントの知識を与えられているはずのルーラーですら、その様相に唖然とする他ない。

「な……!?」

「む。そこの汝、〝黒〟のサーヴァント――ではないな。ふん、ルーラーか」

まるで風のように涼やかな声、身の軽さも風に揺られる木の葉の如く。

宙空で軀を回転させ、ルーラーの傍らに翠緑の少女が着地した。その手には、体軀に似合わぬ大柄な弓。

「――〝赤〟のアーチャーですか」

ルーラーは当然、警戒する。〝赤〟のサーヴァントであるランサーとキャスター（恐らくは）、この二人に襲われた身としては当然だろう。

だが、〝赤〟のアーチャーはルーラーを訝しむように眺めて言った。

「何だ、汝は裁定者であろう。今、警戒すべき対象が分からんのか？」

「――いえ。当然理解していますが」

今の言葉は、心底から出たものだ。ルーラーは若干その警戒を緩めた。恐らく、〝赤〟の側も一枚岩という訳ではないのだろう。少なくとも、彼女とそのマスターはルーラーを殺害対象と考えてはいないようだ。

そう、今もっとも警戒すべきはそちらではない。

「……〝黒〟にとっては二人目のバーサーカー、スパルタクス……ですか」

〝赤〟のバーサーカーは〝黒〟のランサーによって捕縛され、マスター替えを強制された。つまり、今の彼は〝赤〟のバーサーカーでありながら〝赤〟と敵対しているのだ。

そこまでは問題ない。聖杯戦争において、味方であったサーヴァントが敵に回ることは決して有り得ないことではない。

だが――。

「雄々々々

二人の眼前には、まさに小山のような怪物が居る。ただ巨大なだけならば、ルーラーとて言葉を失うはずもない。

彼女が絶句したのは、〝赤〟のバーサーカーの状態だ。

腕が八本ある。内三つは、関節というか骨がない。まるで蛸足のようだが、振るえば鞭の如くしなって敵を打ち砕くだろう。

丸太のような足からは、昆虫のような足が複数生えている、恐らく二本の足だけでは耐えられないので、重みを分散しているようだ。

頭は首にめり込みかけているが、肩口から恐竜（ティラノ）のような上顎と下顎が突き出ていた。

――『疵獣の咆吼（クライング・ウォーモンガー）』。

最早、宝具というよりは呪具の類だろうとルーラーは思う。生きている、動いている、そして何より……未だ戦場と勝利を求めている。

ダメージの一部を魔力変換、蓄積して能力を向上させる。恐らく、それには治癒能力も含まれるのだろう。ダメージを受け、魔力に変換して能力を向上させ、自己治療を行う。そこにはマスターの介在する余地すらもない。

問題は、そのリサイクルが異常なほど回転し続けたことだ。治癒能力が暴走したことで、彼の軀は真っ当であることから抜け出した。その癖、ダメージを受けることで能力は向上し続けるものだから、軀はどんどんと異形に変貌していく。

人間の強さを推し量るに、身長と体重はもっとも簡単なものだ。英霊と呼ばれる存在すらも、そのほとんどが――基本的に人のカタチであることに変わりはないのだから。

だが、〝赤〟のバーサーカーはそれをとうに捨てている。二本の腕より八本の腕の方が強い。自重を支えきれぬほどの重みであれば、足を増やせばいい。

痛めつけられれば痛めつけられるほどに、勝利は遠のくのではなく近付くと信仰する狂戦士にとって、この程度の状況は他愛なきものなのだろう。

「そこ、か――!!」

〝赤〟のアーチャーと、ルーラーを肩と首と腹部にある五つの眼球が一斉に睨んだ。瞬間、弾かれたように二者は左右に離れた。それを意に介さず、〝赤〟のバーサーカー渾身の一撃が放たれた。

吹き飛び砕けた大地が、榴弾のようにルーラーとアーチャーに襲い掛かった。

「ぐ、ぅ――!」

「くっ……!!」

石や岩が二人の肌を切り裂き、ルーラーに至っては装甲の一部が破損した。魔力の伴わぬ攻撃であれば、サーヴァントは決して傷つかない。だが、振るわれた剣にははち切れんばかりの魔力が籠められ、それは砕かれた石や岩にまでも汚染している。

サーヴァントが短剣（ダーク）を投擲するのと同じことだ。……もっとも、剣で砕いた破片に至る

まで魔力が付着するなどという現象は、ルーラーにも未知の体験だが。
「ふむ。どうやら巻き込んだ形になったか、許せルーラー」
〝赤〟のアーチャーの謝罪に、ルーラーは緩やかに首を振った。
「いいえ、このような些事はよくあること。……ただ、立場上私は彼と敵対する訳にもいきません。現状、被害が及ぶとしたらこの戦場だけですので」
「ふうむ。私もまあ、その点については文句はないのだが――」
渋い表情で、〝赤〟のアーチャーはルーラーを見た。不意を衝く悪寒に、ルーラーの顔が強張っていく。
「……何か？」
「マスターからの命令でな。そろそろ撤退する」
「あの、まさか」
〝赤〟のアーチャーは嘆息したあと、慰めるようにルーラーの肩を叩いた。
「申し訳ないのだが、後は任せた」
「ちょっ――」
〝赤〟のアーチャー、アタランテ。ギリシャ神話において、駿足を誇る英雄たちの一人。彼女の足は、ルーラーとて追いつけるようなものではない。
あっ、とルーラーが口を開くより先。彼女の姿は森に消えていた――霊体化した訳ではなく、走って行ってしまったのだ。
沈黙のまま、ルーラーは頭上を見る。そこには、異形の英雄が一人……否、一頭。体軀から比較すると、最早針のようなサイズの小剣（グラディウス）を手に、ルーラーに狙いを定めている。
そう。〝赤〟のバーサーカー――スパルタクスは、全ての権力者に叛逆する闘士である。それは、ルーラーとて例外ではない。
「……やられた」
〝赤〟のアーチャーに敵意はなかった。だが、マスターの方は違う見解を持っていたらしい。
既に自分が会うべきだった〝誰か〟はあの空中要塞に到達している。どう追いかけるべきか……空を翔る翼があれば良かったのだが。
しかし、ここに留まるということは即ち〝赤〟のバーサーカー、スパルタクスと戦うということ。〝特権〟を発動すべきだろうか？
却下、彼は死を命令する以外では止まらない。ルーラーがサーヴァントを滅するなど、基本的にあってはならないことだ。では、撤退すべきか？　それもまた好ましい選択肢とは言い辛い。一人ならば、撤退したかもしれない。だが、この戦場には残してしまった者がいる。小さく、弱く、けれど鋼のように硬い魂を持つ少年が。
せめてその少年と合流しなければならないが、今の彼は後方に居たホムンクルスと対話

を続けているようだ。一人でも同種を救うためだろう。それが終わるまで、彼はこの戦場から離れまい。

となれば、残る選択肢はただ一つとなる。

「――時間を稼ぐ、ですか」

撤退も迎撃も選択肢から失われた今、ルーラーに可能な行動は専守防衛のみだ。守っていれば、恐らく〝黒〟のサーヴァントか〝赤〟のサーヴァントのどちらかが、彼を撃退せざるを得ないだろう。

それは希望的観測だった。最悪の展開としては、〝黒〟も〝赤〟もこちらに助けをよこさず、互いに食い合うのを待つという状況だろう。

誰も彼もが敵に回ったようなこの感覚。常人ならば背筋まで凍りつくであろう状況を、懐かしいとすらルーラーは感じる。

嘲り、憎悪、愚弄――そういったものを一身に受けてなお、揺らぐことのなかった信仰。共に戦うべきマスターさえ存在せぬルーラーにとって、孤独は常だ。

〝……いや、孤独ではないのか〟

目的は違えど、聖杯を目的とせず戦う少年がいる。自分の存在を知って、自分と共に歩いてくれた人がいる。……今は、それで充分かもしれない。

〝赤〟のバーサーカー（バルタクス）が吼える――来る、とルーラーは聖旗を構えた。

小剣が振り下ろされる直前、ルーラーの聖旗がそれを弾いた。巨大な鞭腕（ウィップアーム）が二本、彼女を狙って襲い掛かる――受ける、捌く。そこに隠れ潜んでいたもう一本――！

「う、く――!!」

直撃した。吹き飛ばされ、ごろごろと大地を転がっていく。幸運にも、彼女の殺害を命じられていた竜牙兵がクッション代わりとなった。彼女を受け止めた代償として、三体が連続して破砕されてしまったが、それがなければ戦場の端まで飛んでいただろう。信じ難いほどの筋力と、溜めに溜め込んだ魔力が為せる技であった。

いや、今のは……技、と言うべきなのだろうか。

立ち上がったルーラーは、唇の血を拭う。彼女が憑依した肉体――レティシアのバックアップは保管されている。ルーラーが目的を果たすか、あるいは道途中で斃れた場合には、その瞬間にレティシアの軀は情報通りの姿を取り戻し、状況によっては安全な場所まで強制転移を行う。その過程でいかな傷を負おうとも、直ちに再生する。

故に、幾ら傷ついても問題ないとは言えるのだが……今の一撃を無防備な状態で喰らえば死が見えてくる。

その迷いを見切ったかのように、空から光柱が降り注いだ。

「なっ……!?」

七色の、戦場でなければ美しいとすら感じる光が狙うはルーラーではなく――。

「おおおおおおおおおおおぉぉぉぉぉぉおおおおおおおおおお!?」

苦悶と喜悦の入り交じったような絶叫。〝赤〟のバーサーカーは、ダメージを負ったことで、ただちに引き裂かれた肉の治療を開始した。だが、叛逆の英雄スパルタクスといえどもそろそろ限界だろう。

……いや、限界などとうに超えている。耐えて、耐えて、ありとあらゆる責め苦にひたすら耐えて。あとは吐き出すだけ――。

瞬間、空から光柱を叩きつけた〝赤〟の狙いと、バーサーカー自身の狙いを理解した。

叫え立てる彼が狙うは、圧制者とその臣下たち。……それはつまり。

「この場の全てを、滅ぼすつもりか……!!」

無論、〝赤〟とて例外ではないが、彼らが居るのは浮遊要塞だ。バーサーカーの手が届かぬ領域に行くことも不可能ではないだろう。

竜牙兵など、彼らにとっては単なる雑兵だ。造り物の命を惜しむ気はあるまい。

一方、問題は〝黒〟の側だ。恐らく彼らにとっても、これは予想外の状況だろう。まさか、『症獣の咆吼（クライング・ウォーモンガー）』がここまで悪質な宝具だとは誰が予想し得ようか。

膨大なまでに溜め込んだ魔力とそれに伴って変質した彼の肉体は、最早契約の縛りなどものともすまい。対魔力Aランクの英霊ですら一画しか耐えられぬ令呪でさえも、恐らく不可能だ。

何故なら、令呪は上から下への束縛だ。どれほど格下であったとしても、マスターである限りサーヴァントの上位に位置する存在になる。

叛逆の英雄たるスパルタクスに対しては、通常の状態ですら令呪を二画消費せねば命令に従わせられないのだ。この状況では、恐らく三画消費しても不可能だ。

そう、つまり〝赤〟のバーサーカーは止まらない。次の一撃を渾身の力で振ると仮定した場合、被害は恐らくこの戦場全域に及ぶ。それどころか、街と戦場の間に存在するミレニア城塞も被害を免れることはできまい。

さて、どうするか――迷うルーラーに、一つの天啓が訪れた。令呪を通じて、痺れるような痛み。

愕然として、ルーラーは彼方を見やる。視覚で捉えることはできなくとも、その圧倒量の魔力で知覚することはできる。

サーヴァント・パラメータの書き換えが行われた。該当サーヴァントは二騎、一騎は健常な状態から死亡へ、もう一騎は瀕死の状態から――。

§§§

かつて、英雄がいた。竜を殺した大英雄だ。

あらゆる面で完璧で、完全で、非の打ち所のない大英雄。誰もに慕われ、その力を求められた男だ。

幸福――だったと、英雄は想う。死ぬ寸前まで、それは変わらなかった。圧倒的な力に屈することもなく、絶望に押し潰されることもない。

あるのはただただ、祝福と賞賛の言葉。生まれてから死ぬまで。それに変わりはなかったと、英雄は想う。

求められ続けた完璧なる英雄が、最後の最後に願われたものは自身の死だった。

彼が求められて行ったことが、彼への罰となって還ってきた。ある美女を愛した義兄の頼みで彼女を陥落させるため、その女を自分が代理として抱くことで解決した。それは罪ではなかったかもしれないが、褒められるべき振る舞いではない。

それが周囲に知られたことで、英雄は女の名誉を傷つけた。女の誇りを傷つけた。ただの女ではなく、一国の王女だった。それ故に、彼は醜い争いが起こることを察知し――かつて友と呼び、酒を酌み交わしたはずの男に告げた。

〝ああ、どうにもままならぬ。ハーゲン、俺は無敵故にお前に傷つけられることはない。だが、それでも俺を殺して貰わなければ〟

かつて友だった男は、英雄の願いを叶えた。執念で弱点を探し出し、卑怯な行為を百も承知で策を練り上げ、水を飲む英雄の背を狙った。それを知りながら、英雄は抵抗することを止めた。

英雄は無様な姿も間抜けさも残すことはなく、奸計によって騙し討ちされた悲劇の英雄として死に絶えた。かつての友は、英雄を卑劣な手で殺した稀代の悪党として名を馳せた。

本来なら、話はここで終わっていた。争いは収束し、一人の英雄がただ散ったというだけの物語になるはずだった。

……だが、それは英雄が予測していた以上に最悪の事態を招いた。

英雄の妻だった女は復讐の炎に身を焦がし、結果数多の男たちが死んだ。

きっと英雄は誰からも愛され、親しまれていたから。妄執的な愛情というものを真に理解できていなかったのだろう。……愛した者を殺されたならば、その倍を以て報いるような情熱的な愛を。

あるいは、求められて応じるということを繰り返していたせいだろうか。愛した者も、求めなければ応じないとでも思い込んだのか。

結局。彼の望みは、最後まで叶えられなかった。悪を討つためでなく、善を為すためでなく、ただ〝叶える〟ということに特化した英雄では、仕方のないことだったのだろう。
だが、その英雄は死の間際に朧な想いを馳せた。死に直面して、ようやく〝やりたいこと〟が明瞭に浮かび上がったらしい。

俺は英雄として生き、そして死んだ。そのこと自体に悔いはない。我が生において、不愉快なことなど一切無かったと断言できる。
それでも、想うのだ。もし我が身が王子などでなければ、我が身がただの一人の男であったとしたならば。
ひたむきに、我が志を追いかけることができたのではないだろうか。
ああ、もしも第二の生があるのならば。どうか我が夢を叶えて欲しい。
誰に認められなくともいい、誰に称賛されずとも構わぬ、自分が認めたい、ただ自分が誇りたい。そこにこそ、俺が求めているものがある。俺が望んだ何かがある。
俺は俺の信じるものの側に立ちたい。そうすればきっと——胸を張って生きていける。
誰かのために戦うのではなく。己のために戦うのでもない。
俺が信じる仁、俺が信じる義、俺が信じる忠、俺が信じる愛のために。この剣を手に取り、この肉体で立ち向かおう。

それこそが俺の夢、俺の望み。
俺は——正義の味方に、なりたい。

§§§

左手の甲に走った強烈な痛みが、意識を無理矢理覚醒させた。
「う……」
焼き鏝でも押し当てられたかのような痛みは、次第に和らぎ始めていた。生きている、のだろうか。痛みがあるということは、恐らく生きているのだろう。
だがしかし。ここは、ルーラーと共に戻ったあの戦場ではない。冷たく硬い岩肌の感触、どうやら——一度来たあの場所へと舞い戻ったらしい。
ジークは先ほどの鮮烈な痛みを気にしてか、無意識に左手に目をやった。
「な、に……？」
戦慄する。ジークは聖杯戦争の基礎知識を生まれつき獲得している。それ故に、痛みなど吹き飛ぶほどに驚愕するのは当然だった。

「馬鹿な、これは……！」

左手の甲には三画の紋様。当然の如く理解している、これは聖杯戦争におけるマスターたる証明――即ち、令呪だ。

いや、通常の令呪とは微妙に異なる。マスターによって令呪の紋様が変わるのは当たり前だが、それは赤い色を帯びたものになるはずだ。だが、これはどちらかというと黒だ。ジークの白い肌に浮かび上がった黒の紋様は、どこかおぞましさを感じさせた。

不意に、背後に巨大な生物の気配。手足の先が痺れるような恐怖に立ち竦む。振り返ってはならないと本能が告げている。しゅぅしゅぅという生臭い吐息を、努めて意識しないようにする。

だが――背後のそれには、確実な悪意が存在する。

戦わなければならない。剣を取って戦わなければならない。それも、ただの剣では駄目だ。〝黒〟のライダー（アストルフォ）から与えられたあの剣ですらも駄目だ。

必要なのは〝竜殺し〟を成し得る程の魔剣。伝説に謳われ、その名を刻まれるほどのものでなければ。

――馬鹿め。そんなものがどこにある。

――馬鹿め。お前はそれを既に握っている。

浮かび上がった考えは、囁きによってあっさりと覆される。

……右手には剣の柄。刀身は半ばまで大地に埋まっている。どうやら、これを引き抜かねばならないらしい。背後の生物を打倒するためには、この剣を抜かねばならない――。

ジークに迷いはない。柄をしっかと握り、一気に引き抜こうとした。

「くっ……！」

だが、抜けない。渾身の力を籠めても、一ミリたりとも動かない。まるで、埋もれた刃の方も誰かが握り締めている感じ。

抜かなければ死ぬ。首筋に伝わる冷ややかな恐怖。生存本能がこの剣を抜かなければ死ぬと訴えている。

恐怖だけで人は死ぬ。この世ならざるおぞましいモノを観覧したとき、肉体は滅びずとも精神が死ぬ。それに対抗する手段が一つも無ければ確実だ。

――お前に剣は引き抜けない。

――だが、お前ならできる。

左手の令呪が不気味に明滅している。……令呪には、膨大な魔力が籠められている。そ

れは森羅万象の法則すら覆し、魔術で可能なあらゆる事象はおろか魔法に近い領域までを再現する。

ならば。この剣を引き抜くに必要な力とは何だ。

――求められているのは、お前ではなく。

――求めているのは、お前ではなく。

……既に、回答は提出されていた。与えられた心臓、蘇生するに当たって獲得した膨大な魔力。そして現れた黒い令呪。

全てが重なり、全てが一つの方向に進み出す。

抵抗はできない。するつもりもない。これがもしかすると、誰かの与えた道であったとしても構わない。

――これは俺が選ぶ道だ。

――これはお前が選んだ道だ。

そうか、ならば。

「……令呪を以て、我が肉体に命ずる」

令呪の一画が白く輝き出す。膨れ上がる光と共に、ジークの軀が変貌する。英霊の情報を彼の軀に読み込ませる。身体情報を表出させ、戦闘経験を蓄積させ、保有能力を具現化し、更には宝具すらも再現する。

だが令呪といえども、その奇跡を再現するのはわずかな時間のみ。

数えて百八十秒。それが、一画の令呪における英霊再現の限界だ。それ以上を過ぎればジークフリートはジークに巻き戻る。

それでいい、と思う。たとえ三分でも、この身が彼の役に立つならば。この身が彼らを救う力になるならば。

逡巡など微塵もない。手にするべきものがそこにあるのならば。破滅も、衰退も、無残な死ですらも喜んで受け入れよう。

右手に力を籠めるでもなく、ただ意志が重要だとばかりにするりと剣が引き抜かれた。光に満ち溢れた地獄へと舞い戻る。

最後に、せめて怪物の姿を見ておくべきかと振り返り――。そこに、何故か己自身が立ち尽くしているのを視認した。

……この事象について考えるのは後回しだ。今は、やるべきことがある。ジークは思考を止めて、ただ前に進むことを選択した。

わずか三分、わずか三度であれど。その再現は完璧だった。身体能力において、ジークは完璧に〝黒〟のセイバーを再現していた。

背には幻想大剣。軀のあちこちを覆うは白銀の甲冑。胸元は大きく広げられ、竜の血で褐色に染まった肌を露わにしている。その肌は如何なる刃にも、そして魔術にも傷つけられぬ竜鱗だ。ただ一点、背中の一部を除いては……。

その奇蹟を成し遂げるは竜の呪い、その変身を許すものは竜の心臓。故にその名は竜告令呪。消費するごとに死が迫る、百八十秒間の結晶生命である。

かくして、地上に伝説の英雄――〝竜殺し〟が帰還した。

§§§

それは、その場に居た全てのサーヴァントが知覚し凍り付くほどの衝撃だった。膨大な魔力が爆発したかのように散ったかと思うと、凄まじい〝何か〟が生誕した。

睨み合っていた〝赤〟のライダーと〝黒〟のアーチャーは勝負を一時預けて森から飛び出し――。



〝黒〟（アヴィケブロン）のキャスターはゴーレムを手繰る操作を中断した。
〝黒〟（ラード三世）のランサーと〝赤〟（カルナ）のランサーは互いを警戒しつつも〝何か〟に視線を移した。
〝赤〟（アタランテ）のアーチャーはその駿足を停止し、唖然とした表情で〝何か〟を見た。
〝赤〟（イスカンダル）のキャスター、〝赤〟（セミラミス）のアサシンの二人もまた驚愕を隠せずにいた。
〝赤〟（バルタクス）のバーサーカーですら、一瞬動きを停止した。
〝赤〟（モードレッド）のセイバーは眼前で起きた現象に戸惑いつつも、マスターへ緊急の念話を送った。
〝おい、マスター！〟
〝何だ〟
〝確認するぞ。〝黒〟のサーヴァントは全員召喚されていたんだよな!?〟
〝そのはずだが〟
〝……じゃ、オレの目の前に居るアイツは誰だ!!〟
〝……梟の目から見ているんだが、どうやらサーヴァントだな〟
〝オレが見るに、アイツはアーチャーでも、ランサーでも、ライダー、バーサーカー、キャスターでも、ましてアサシンでもない。セイバーだ、オレと同じセイバーだ。どういうコトだ……！〟
〝ふむ。ま、これは聖杯大戦だ。そんなコトもあるさ〟
軽い口調で獅子劫はそう言うと、混乱する〝赤〟のセイバーに反駁する余地を与えず告げる。
〝叩き潰しちまえよ。お前さんの傷は大方だが治癒を済ませてある。向こうはセイバーとはいえ、イレギュラーだ。……正規のサーヴァントが、非正規の存在に打ち勝てないはずがない。だろう？〟
その言葉に、なるほどと了解して〝赤〟のセイバーは戸惑いを振り捨てた。獅子劫に合わせるように、軽い口調で告げる。
〝……何か上手く乗せられてる気がするんだが〟
〝なに、別に撤退しても構わんさ。お前さんがしたいようにすればいい。何だ、撤退したいのか？　それならまた令呪を使ってやるぞ？〟
〝――ああ、畜生。乗せられてる、絶対乗せられてる！　だが、やるさ！　やってやる。父上なら、ここで絶対に撤退を選ばない！〟
〝赤〟のセイバーは白銀の剣をぐるりと振り回すと高揚した戦意を塊にして――彼方に見える〝黒〟のセイバーへと向けて、叩きつけた。
そして、恐らくこの戦場で全てを識る唯一の存在である〝黒〟（アストルフォ）のライダーは、目尻に涙が浮かぶのを必死に堪えていた。だが抑えきれず、静かに嗚咽した。
あれは、〝黒〟のセイバーではない。あの時確かに、セイバーは消滅した。

ならば、あそこに立っているのは誰だ。〝赤〟のセイバーと向かい合い、その手に剣を握り締めているのは誰だというのだ。

決まっている、一人しかいない。どうしてそんな突拍子もないことが起きたかなど、ライダーには分からないし、どうでもいい。

ただ、彼が選ばなかった平穏な生活を惜しみ、彼が選んだ苦難の道のりに涙した。生前、己が弱いことを嘆いたことは一度もなかった。だが今は、嘆いた。己の弱さ、己の言動、己の判断が、彼を此処に迷い込ませたのだ。

「――ごめんね」

実のところ、〝黒〟のライダーは聖杯に懸ける望みと呼べるものは無かった。せいぜい、二度目の生を愉しむために受肉してみようか――程度のものでしかない。それにしたって、もしも〝黒〟のサーヴァントたちにこの上なく深刻な望みがあったとしたら、喜んで譲ってやろうと思っていたのだ。

今は違う。他を蹴落としてでもしがみつきたい願いがある。彼を助けたい。『助けて』と掠れた声で必死に囁いた彼を助けてあげたかった。

でも、できない。切々とした悲哀が、〝黒〟のライダーをひどく締め付ける。

〝赤〟のセイバーが悠然とした態度で、迎え撃つようにその一歩を踏み出す。〝黒〟のセイバーは剣を握り、相対する形を選んだ。だが、その視線は〝赤〟のセイバーの足下に居

る〝黒〟のライダーにある。

「――大丈夫か？」

「……ばかやろう」

元気そうだ、と〝黒〟のセイバーとなったジークは安堵する。後は、このセイバーの力を以て、セイバーを打ち倒すだけだ。

「……よう。偽セイバー」

兜越しの含み笑い。ジークは先ほどと同じ重圧を感じながらも、怯まぬ己に気付いた。質量さえ感じさせるような戦意を叩きつけられたにも拘わらず、精神の動揺はこれっぽっちも存在しない。

「俺は確かに、お前の言う通り偽者だが。この剣と力は紛れもない本物だ。お前の相手をするのに、不足はない。不足があるとすれば、それは俺の心だけだ」

「そうかい。なら――試してみるとしようか！」

一瞬で、〝赤〟のセイバーは間合いを詰めた。その重厚極まる鎧からは信じ難いほどに軽快な歩法（ステップ）と共に、袈裟懸けにジークを叩き斬ろうとした。

荒々しい癖に精密無比なその一撃は、まさに英傑の名に相応しい。だから、この一撃を打ち合えたならば、サーヴァントと見なして良い――そんな想いで〝赤〟のセイバーは剣を振るった。

ジークは打ち合わなかった、避けることも躱すこともなかった。何とも恐ろしいことに、彼は一歩前に踏み込み、籠手を翳して受け止めたのである。

〝赤〟のセイバーの目が驚愕に見開かれる。今のは何だ、今の恐ろしいほどの頑丈さは何だ。如何にサーヴァントの甲冑といえども、己の斬撃で斬れぬものなどあるはずがない。

いや、籠手に刃は喰い込んで皮膚に到達している。だが、斬れていないのは籠手ではなく皮膚だ。信じ難いことに、〝黒〟のセイバーの皮膚は鋼鉄を上回る頑丈さなのだ……！

あらゆる行動を予測していた〝赤〟のセイバーといえども、その驚愕から立ち直るのにわずかな時間が必要だった。直感が警告を発しても、その一瞬は軀がついていこうとはしない。

惜しむらくは〝赤〟のセイバーの隙を作り出すために、片腕で剣を受けざるを得なかったことだろう。全力とはいえ、片手の斬撃は威力がわずかに劣った。

とはいえ、衝撃は甚大だった。たたらを踏んで後退する〝赤〟のセイバーに、〝黒〟のセイバーは更に追撃を放つ。

刃鳴が散り、血が舞った。〝黒〟のセイバーは大剣を軽々と振り回す。いや、ただ力任せに振るっている訳ではない。そこには技がある。互いの切先が触れた瞬間、刀身が蛇のように絡みついた。

〝赤〟のセイバーの剣が、上方へ弾き飛ばされかかる。咄嗟に柄を握る手に力を籠め、

それを防いだ。だが、再び胴体ががら空きになった――〝黒〟はそれを見逃さない。

次の一撃は、両手で握った全力の横薙ぎ。

全身鎧は衝撃を吸収しきれず、〝赤〟のセイバーは踏ん張ることもできずに遥か彼方へと吹き飛ばされた。

地面を滑りながらも、どうにか体勢を立て直して立ち上がる。だが、そこに鋭い痛みが襲い掛かり、〝赤〟のセイバーは脇腹を押さえて呻いた。

「……ああ、畜生。マジでサーヴァントか、あのヤロウ」

〝黒〟のセイバーの斬撃は巧かった。バーサーカーのような力任せのそれではなく、人体を効率良く破壊する何とも情緒のない一撃だ。そしてその前振りである武器の弾き方も、また卓越していた。

つまり、彼はただセイバーの殻を纏っただけではない。どうやら、蓄積された膨大な戦闘経験すらも継承していると考えて間違いない。

サーヴァント――それも最優たる剣士が持つ類い希なる戦闘センス――それを、確かにこのホムンクルスは持っている！

不意に脇の痛みが消える――マスターの治癒魔術だ。それも、この迅速さはどうやら戦場に相当接近して観察しているらしい。恐らく、戦場のどこかに隠れ潜んでいるのだろう。あの大柄な肉体を、どこにどうやって隠しているかは見当もつかないが。

〝おい、マスター。気をつけろよ、下手に近付きすぎると……〟
〝まあ、そりゃそうなんだが。因果線（ライン）からの危機感知よりは、実際に目視した状態の方が反応早いだろ。……いや、俺も正直逃げたいがね〟
ぶつぶつと愚痴を零す。まるで傍らでぼやかれているようで、〝赤（モード・レッド）〟のセイバーは鼻息荒く、大地を踏み鳴らした。
〝おい、マスター。そんなにオレが信用できないか！〟
〝だってお前、〝黒〟のセイバーは――強ぇぞ？〟
さらりと、獅子劫は厳然とした事実を告げる。何の躊躇いもない返答に、〝赤〟のセイバーは怒るより先に絶句した。
〝ざっくり視た感じ、お前とステータス面ではほぼ互角。おまけに、どうも厄介なことに特殊な防御型の宝具かスキルがあるな。つまり真っ向勝負だと、防御面で上をいかれているってことだ〟
淡々と、獅子劫は事実及びそこから推測される事柄を告げていく。
〝……ああ、籠手を斬ったのに皮膚がオレの刃を防いだ〟
それは、異常だ。明らかに何かが彼女の剣を阻害したのだ。まさか、マスターの魔術ではあるまい。甲冑は普通に斬ることができたのだから、つまりその肉体に秘密がある。
〝世の中不死身を謳う英雄は多い。だが、真実不死身だった英雄はそれほど多くはない。

あらゆる不死身の伝承には『ただし、例外がある』というはずさ〟
〝へぇ。……で、アイツの弱点は？〟
〝そりゃ、お前さんが頑張って探り当てるしかねえな！〟
〝くそ、そりゃそうだろうな！〟
〝だが、ここでマスターからサーヴァントに提案だ。〝黒〟のセイバーとの戦いに限り、令呪でお前さんの強化をするってのはどうだ？〟
獅子劫の提案は、令呪本来の使用法からは些かズレている。令呪は本来、もっと状況を絞り込んで使用するものだ。例えば魔法に等しい空間跳躍、あるいは不可能なほど細かな一点を狙った精密攻撃、そういうものでなければ令呪の拘束力は弱まってしまう。
獅子劫の提案した使用法の場合、恐らくセイバーの力は全体的に向上するだろうが、それだけでしかない。だが――。
〝いや、そいつは妙案だマスター。それなら、この斬撃を押し通してみせる。セイバーの名に懸けてな〟
〝赤〟のセイバーの直感が囁いた。今しがたの斬撃は、手応えがなかったとか別の力に遮られたというものではない。純粋に、硬かったのだ。ならば、今以上の一撃を連続して加えれば、押し通す自信がある。令呪のバックアップで、この戦場での〝黒〟のセイバーとの戦いに絞れば、決して愚策ではないはずだ。

〝そうかい、じゃあ……お前を信じる、セイバー〟

〝お前を信じる〟――ただそう言われただけで、先ほど彼に感じた怒りはたちまち吹き飛び、胸に湧き上がるは高揚感。我ながらその単純さに呆れ返るが、今はそれが心地よい。

〝ああ……ああ！　了解したぞ、マスター〟

〝令呪を以て我が剣士に命ずる。この戦場にて〝黒〟のセイバーを打倒するため、己が全力を尽くせ！〟

因果線を通じ、膨大な魔力が迸る。それは終端である少女の軀に取り込まれ、魔術回路を通じて全身に流れ込み――。

〝その願い聞き届けた！　〝赤〟のセイバー、モードレッドの名において、必ずや〝黒〟のセイバーを打倒する！〟

瞬間、〝赤〟のセイバーが魔力を放出する。その様は、さながら人の形をした蒸気機関車だ。魔力という蒸気を猛烈に噴きながら、少女は剣を構えた。そこに恐れはない、あるのはただ純粋無垢な闘志だけだ。

そこから先の言葉は不要だろう。〝黒〟と〝赤〟が立ち並ぶことは無い。ジークは選び、〝赤〟のセイバーはそれに応じたのだ。

「――行くぞ、〝黒〟のセイバーよ」

白銀の側の呼び掛けに、黄金の側が応じた。

「――来い。〝赤〟のセイバー」

迷いなどない。恐怖は踏み越え、殺意は受け止めよう。報酬は不要、賞賛も無用、ただただ自らの選択に沿って、互いの剣をその両手に握り――走り出す。

スキル『魔力放出』による銃弾突貫。令呪によって更なる力が上乗せされたこの一撃は、まさに大地を疾走する彗星の如き勢いだ。迎え撃つジーク――〝黒〟のセイバーは、速度では出遅れた自分が勝てぬと悟り、そのまま迎え撃った。

銃弾とギロチンが正面衝突。炎の華が二人を彩る。狂ったように乱れる颶風、剣戟一合の度に轟音が戦場へ響き渡る。

「ハッ。なまっちょろい斬撃だぞ、〝黒〟のセイバー……！」

「く、っ――!!」

そして斬り合うこと十三合目。剣と剣を絡ませ、純然たる筋力勝負に移行する。となれば、当然ながら――『魔力放出』と令呪の援護がある〝赤〟のセイバーが上回る。

「オオオオオオオオオオオッ!!」

猛る〝赤〟のセイバーは、〝黒〟のセイバーを強引に押し込んだ。間合いが離れ――不

敵な笑みと共に、〝赤〟のセイバーは己が剣を突きつける。
「それでも、最優を誇るべきセイバーのクラスなのか？　失望したぞ。もっとも、紛い物ならば、この程度が限界か？」
〝黒〟のセイバーは沈黙のまま、立ち上がる。ダメージは……然程ではない、と〝赤〟の剣士は判断を下す。やはり、あの頑丈さは並大抵のものではない。ここで、必ず仕留めなければ――そう決意を固めた。
「――剣よ、満ちろ」
〝黒〟のセイバーが己の剣を解放段階に移行させる。剣から放たれる黄昏色の極光が、彼の顔を煌々と照らし出し始めた。
サーヴァントにとって最強の切り札――宝具を起動させたのだ。
「宝具を解放するか。……ハ、いいだろう！」
〝いいぜ、セイバー。お前の宝具を見せてやれ！〟
断りを入れるまでもなく、マスターである獅子劫が許可を下した。
「――では、マスターの許可も下りたことだ。こちらも宝具で対抗させてもらおうか！」
〝赤〟のセイバーが剣を構えると同時に兜の宝具としての機能が解除され、鎧に格納された。かつてブリテンに騎士王アーサー・ペンドラゴンあり、彼は王である間、老いることなく……剣を引き抜いた見目麗しい少年のままだったと伝えられている。

ならば、その嫡子たるモードレッドもまた――華奢で、可憐ともいえる少女の風貌をしていて当然だ。
もっとも、少女の外見をしていたところで、狂戦士もかくやという凶暴性は隠しきれていない。翠緑の瞳は、暴力への陶酔に充ち満ちている。
兜を外すと同時、彼女の持つ剣にも変化が起きていた。白銀の刀身は紅に染まり、その形を歪め始めている。激しい音が打ち鳴らされる度、剣の周囲に赤い雷が瞬いた。
この現象は、決してこの剣の本質ではない。アーサー王が手に入れ、保管していた王たる証『燦然と輝く王剣』――モードレッドが簒奪し、アーサー王に致命傷を負わせた剣。邪剣へと変貌するのは、その逸話故。モードレッドがこの剣を手にしたとき、王の剣は憎悪の邪剣へと変貌する。
「仕置きの時間だ。紛い物に相応しい最後を遂げるがいい。〝黒〟のセイバー――！」
圧倒量の魔力の渦が周囲の残骸を蹴散らし、全ての生ある存在を拒絶していく。両者ともに宝具の解放準備を整え始めただけで、この有様だった。
「……参る」
〝黒〟のセイバーは、ただ静かにそう呟く。
神代から現在に至るまで、交わることなど永遠にないと思われていた英雄二人が。遂にその〝必殺〟を開示した。

「我が麗しき父への叛逆(クラレント・ブラッドアーサー)!!」
〝赤〟のセイバー(モードレッド)が猛る。
「幻想大剣・天魔失墜(バルムンク)ッ!!」
〝黒〟のセイバーが吼える。

黄昏の光が満ち、赤雷が突き進む。輝く光が激突し、爆心地(グラウンド・ゼロ)を中心として凄まじい狂風を引き起こした。

高圧縮された竜巻のようなものだ。周囲を巻き込み、ただただ破壊し続ける。瓦礫どころか塵一つ残さない。

――そして。宝具の打ち合いは、わずかに〝赤〟のセイバーが上回った。

周囲一帯を殲滅する〝黒〟のセイバーの宝具と、直線上に存在する物質全てを破壊する〝赤〟のセイバーの宝具とでは、性質という点で〝赤〟の側が有利だった。

〝黒〟のセイバーが膝を突き――〝赤〟のセイバーは、怒り狂う。

「貴様、何故生きている……!!」

そう。〝赤〟のセイバーにとってはそもそも生きているということ自体が問題だ。

モードレッドにとってこの大剣(クラレント)は呪いのような栄光を持つ武器である。少女は父以外の誰にも敗北することを己に赦さないし、父を致命傷に追いやったこの剣が、誰かを殺し切れないこともまた許せない。

「そこを動くな〝黒〟のセイバー。オレが殺す、他でもないこのオレが、お前を殺してやる……!」

けれど、今回は〝黒〟のセイバーを討つに足るもう一つ大きな理由が存在する。

宝具を打ち合ったことで〝赤〟のセイバーは悟ったのだ。〝黒〟のセイバーは、まだ本調子ではない。そもそもが、令呪による変身という出鱈目な奇跡を用いて成し遂げたもの。なるほど彼の力は〝黒〟のセイバーと同等で、戦闘経験も彼が持つ全てを持っているのは間違いない。

けれど、どうしても精神(こころ)が追いついていっていない。あの男は、剣を振るう行為に戸惑っている。それ故に、此度の戦いは何もかもに一枚上を行くことができた――今回は、だ。

そして間違いなく、〝黒〟のセイバーの軀を持ったホムンクルスはこれが初陣だろう。

彼女の直感が囁いている。彼は一回目(みじゅく)の内に倒さねばならない。変身が解けた今の内に首級(しるし)を挙げねばならない。

恐らく、次の変身で彼は更なる覚悟を持って自分と並び立つ強さになるだろう。では、三回目ならば――。

勝利を摑むならば、〝次〟の機会を徹底的に排除せねばならない!

是が非でも彼の首を刎ね、その心臓に剣を突き立てなければ――と、〝赤〟（モード・レッド）のセイバーはその一歩を踏み出した。

§§§

〝赤〟（セミラミス）のアサシンの城塞宝具『虚栄の空中庭園（ハンギングガーデンズ・オブ・バビロン）』。戦場にありながら、この要塞だけは唯一静寂と平穏が支配している。

「――さて、マスター。アレは、お前の計算に入っていたかな？」

くつくつという意地悪い笑い。シロウ・コトミネは常になく険しい表情で、眼下で起きた現象を眺めていた。

「何と何と！　〝黒〟のセイバー、復活とは！　いやはや、聖人もかくやという大奇跡ですな！　まさに『魔法（エルゴ）などくそくらえ（ヨハネ・ゼロ）！』」

〝赤〟（ジェイクス・ピア）のキャスターの呟きに、シロウは無言で首を横に振った。

「いえ。復活ではないですね。……あれはどちらかというと、憑依に近い」

「憑依ですと？」

「……サーヴァントの中には、マスターの身体に強い影響を与えることができる者もいます。通常、マスターとサーヴァントは主と使い魔の関係と同じですが、中には肉体面を共有することが可能なスキルを持つ者がいます。その場合、マスターはほぼ不死に近い存在となります。もちろん、聖杯戦争の間だけですし……何より、戦闘能力が向上する訳ではないので、アサシン対策でしかないのですが」

「待て。我の目から見ても、あれは違うぞ。あやつはマスターではない、紛れもなくサーヴァントだ」

「ええ。ですから憑依。恐らく、令呪の膨大な魔力で〝黒〟のセイバーを召喚しているのでしょう。無論、いくら令呪でも通常ならば不可能ですが――」

〝黒〟のセイバーと、〝赤〟のセイバーが激しく打ち合っている。それは、神話にすら有り得ない〝竜殺し（ジークフリート）〟と〝赤〟のセイバーの戦いだ。

「あのホムンクルスに限っては例外です。彼はその身に、〝黒〟のセイバーに繋がる何かを帯びている。肉体の一部か、聖遺物かまでは分かりませんが。ともかく、それを媒介として彼は自身の肉体にセイバーを降臨させている」

「莫迦な。……我々はそこらの低級な悪霊ではない。英霊だぞ？　魂の純度、密度、強度、硬度、全てが違う。身体能力を憑依させるなど、不可能だ」

〝赤〟のアサシンは正しい。シロウの言葉が正しいならば、あれは〝殻〟だ。〝黒〟のセイバーという軀を纏った存在だ。だが、それは不可能だ。〝黒〟のセイバーは――いや、それ以外でも英霊と呼ばれる存在になったならば、その身体能力や魔術能力は無論、魂も人間の比ではない。

「肉体を憑依させたのなら、魂が耐え切れまい。ましてホムンクルスだろう？」

「ホムンクルスだからこそですよ。彼らの魂は幼いが故に純粋で、何物にも染まっておらず、どんな肉体の変質にも耐えられる」

ホムンクルスとは、そもそも魔術回路を基礎として〝鋳造〟される存在だ。人間のような蓄積がない分、その魂は赤ん坊のように純粋で頑丈だ。二十年生きた人間には、二十年の蓄積があり、危機的状況下ではその蓄積が時に素晴らしい力を生み出すこともある。

だが他者の肉体を憑依させるという状況では、その蓄積は白血球のように妨害を行う。他者が積み重ねた年月と、己が積み重ねた年月は全く適合しないからだ。

ところが、ホムンクルスは違う。彼には蓄積がない。ただ肉体が成熟した状態で産み出されただけの存在だ。故に、憑依の際に存在する拒絶反応がない。

「……もっとも、さすがに英霊の憑依は仮令一秒でも奇跡に等しい。令呪の補助があっても、数分保てばいい方でしょう」

「つまり、こういうコトか？　――あれは、無視しても良い存在だ」

シロウは頷いた。確かに〝黒〟のセイバーが復活したのは、驚異的であろう。だが、それが時間も回数も制限されているとなれば話は別だ。令呪が最大に残っていたとしても、残りは二回。取るに足らぬ存在だ。戦闘そのものにも慣れていないのだろう、〝黒〟のセイバー本来のスペックを十全に発揮しているとは言い難い。

〝だというのに。あのホムンクルスの存在は――やけに、苛立たしい〟

この戦場に揃った者は、全てシロウにとっての駒だ。こちらに敵対していようが、味方となっていようが、自分自身も含めて全てが駒だ。

だが、彼だけは明らかに違う。意図していない駒が、突然蘇って盤面に打たれた。胸に苛立ちが募るのはその為だろうか。あるいは、それとも――。

「……愚かなことです。刹那の寿命であろうとも、完璧な存在であろうとする方が遥かに良いだろうに」

シロウの呟きは、誰の耳にも届かなかったらしい。〝赤〟のアサシンが尋ねた。

「まあ、それなら問題あるまい。それよりシロウ、そろそろハッキリさせないともう間に合わんぞ？　ルーラーもこの戦場に来ている。今はバーサーカーにかかり切りだが、この庭園に辿り着かれれば一巻の終わりだ」

「ええ、彼らからは既に許可を戴いています。……後は、双方の同意を得た移譲儀式だけです。楽なものですよ。……立て続けに行わねばならないので、さすがに多少の時間は必

要ですが」

「ふむ、あの三騎が妨害しようとしたら、時間は稼いでやろう」

よろしく――と涼やかな笑みを残して、シロウはその場を立ち去った。残されたのは、彼をマスターと仰ぐ二騎のサーヴァント。

「ところでキャスター。折好く二人きりになった訳で、一つ聞いておきたいのだが」

「ああ、吾輩も一つ尋ねるべき事柄がありました。では、まずはお先にどうぞ、女帝殿」

「――お前、何を企んでいる？」

〝赤〟のアサシンは艶然とした笑みを浮かべたまま、酷薄な感情を瞳に乗せて叩きつけた。それは、獲物を見定める蛇の目にも似ていた。

そして。それを見て、冷や汗どころか不思議そうに首を傾げるだけで済ませる〝赤〟のキャスターもまた、並大抵の胆力ではない。武器がなくとも、魔術すらなくとも、彼にはよく回る舌がある。

「特に何も。申し上げた通り、吾輩はマスター……シロウ・コトミネの儚く壮大な夢を追っているのみ」

「ハン。お前がそのようなタマか、語り部（ストーリーテラー）よ。なるほどあやつの夢は硝子細工のように脆く、そして長大よ。道のりには幾つもの苦難が立ちはだかり、その苦難を乗り越えてすら叶うかどうかもあやふやだ。だが――仮に我がマスターがそれら苦難を全て撥ね除け、あ

まつさえ〝それ〟に至ったとしたら」

――それは、奇跡と呼ぶしかない。シロウが〝赤〟のアサシンに語った夢は、常人ならば滑稽だと一笑に付すべき、異常者のみが真剣に語り合うべき代物だった。

「……お前の役割は、この世界に存在しなくなるぞ」

「吾輩だけでなく、貴女も――いえ、全ての英霊がでしょうに！」

その言葉に〝赤〟のアサシンは微かに笑った。

「我は違うぞ。ちゃんとした役割がある。でなくば、さすがにシロウの案に従わんよ」

「ああ、なるほど。そういうコトですか！　ふぅむ、確かにマスターの夢が実現すればこの世に物語を紡ぐ必要すらなくなる。ですが――そこに至るまでの物語は傑作です。無限の猿に無限のタイプライターを持たせたとしても、絶対に辿り着けぬ前人未踏、空前絶後の傑作です！　それを書けたならば、まあ名残惜しいことはありますまい」

「……筋は通っているな」

それでも、〝赤〟のアサシンは訝しげな表情を崩しはしない。正直な話、彼が〝赤〟のバーサーカー（スパルタクス）を解放したことが、疑念の発端なのだ。

シロウの計画が順調に進めば、この男は下手をすると自ら苦難を作り出しかねない。

「ああ、それですか。ならばご心配なく！」

「……何が心配ないというのだ」

大仰に両腕を広げた〝赤〟のキャスター（ジェイクス・ピア）は歌うように告げる。
「我らがマスターは、既に『死と忘却という名の敵に立ち向かい』（Against Death and Oblivion）、それに勝利しようとしている！　こんな度外れた計画を、誰にも邪魔されぬはずがない！　吾輩が姑息な奸計を企てるまでもなく、ありとあらゆる者が、彼を邪魔立てしに来ましょうとも！　然るに！　然るに我らがマスターは、きっとそれすらも乗り越えるだろうと確信しているのです！」
〝赤〟のキャスターの興奮して捲し立てる様子に、ようやく〝赤〟のアサシンは警戒を解いた。
「――なるほどな。そういうコトであれば、お主の態度にも納得しよう。キャスター、お主は邪魔が入ると思っているのじゃな？　具体的には何が邪魔をする？」
「知れたこと。今は無知故に戸惑っている彼女ですよ」
「……ルーラーか。確かに、あやつの持つ特権は驚異的だが。その為の対策を、今行っているところではないか」
「いえいえ。特権も驚異的ですが、真に恐怖すべきは彼女そのものです」
「何だ、知っておるのか？」
「旗を掲げた聖女の英霊など、世界に幾人もいますまい。……彼女は我が祖国の愛すべき敵。神の声に従って破滅した、哀れで狂った田舎娘――ジャンヌ・ダルクでございます」
「ほう。あやつはお主の国の仇敵だったか」

〝赤〟のアサシンはそう言って笑う。彼女の言葉通り、ジャンヌ・ダルクはフランスの救世主として立ち上がり、イングランド軍を散々に打ち破った。最後には裏切りによって捕らえられたものの、彼らの恨みは余程深かったのだろう。当時、イギリスで書かれた作品の多くは彼女を敵と見なし、弾劾していた。
「いえいえ、最早含むところは何もありません。現に、我がマスターは極東の聖者ではないですか？　英国だの仏国など、どうでもいいことです。ただ――邪魔をすると言うなら、全く容赦せず、潰さなくてはね」
「……お前が？」
「吾輩が？　まさか。お任せ致しますよ、女帝殿」
〝赤〟のキャスターが声高らかに笑い、分かってはいたことだがと〝赤〟のアサシンは嘆息した。
「……それで？　お前の尋ねたいこととは何だ？」
「他ならぬマスターのことですよ。シロウ、は本名なので当然ですが。コトミネとはどこから来た名なのですか？　まさか適当につけたという訳でもありますまい」
「ああ、それか。コトミネとはあやつの養父（ちち）らしい。言うまでもなく、あの男は天涯孤独の身。それ故、共に生き残った監督官の言峰（ことみね）とかいう神父に頼んで確かな身分を頂戴したそうだ」

「ははあ、なるほど。聖杯大戦の監督官になったのも、その伝手ですか」
「そうらしい。もっともその神父はとうに亡くなっており、義理の兄弟に当たる男とは大した交流もないそうだ……何だ、その目と笑いは」
「いやいや、我がマスターが貴女をよく信頼していると思いまして。吾輩が尋ねたときは、適当にあしらわれたのですが」
「……恐らくお主が信頼されてないだけではないか」
〝赤〟のキャスターにうっかり己の出自を喋ってしまえば、ポロポロと口の端から零れ落ちそうで仕方がない。あまつさえ、伝記として出版されかねない。
「むむぅ。吾輩、人のプライバシーを嬉々として暴くほどの外道ではないつもりだったのですが――おっと」
庭園の底部から衝撃が走った。まるで地震いのように、ぐらりと庭園全体が揺れ動く。
「……今のは？」
「バーサーカーの攻撃の余波か。どうやら、そろそろ臨界点に達しつつあるらしい」
〝赤〟のアサシンは、空中庭園の上昇を命じた。あの『兵器』に、この庭園を狙われては困る。彼が狙うべきは庭園ではなく、ミレニア城塞でなければならないのだ。
「しかし――聖杯が壊れませんか？」
「安心しろ。大聖杯は城塞の地下にある、瓦礫程度でどうにかなるような代物ではなく、バーサーカーが直接叩きに出向かなければ問題ないさ。そして、あいつには最早そんな知恵は残っておらん」
〝赤〟のアサシンは遠見の魔術で、〝赤〟のバーサーカーと戦うルーラーを確認した。
「さて。……バーサーカーと対峙しているルーラーはどうするつもりかな？　最後の一撃を喰らえば、あやつとてただでは済むまい」
〝赤〟のアサシンの言葉通り、叛逆の闘士スパルタクスはまもなく最後の一撃を振るおうとしている。彼が狙うは、圧制者たちが集うミレニア城塞。狂った戦士には、そこに自分のマスターがいることなど眼中にない。
魔力で膨れ上がった肉体が自重による崩壊を開始したとき、バーサーカーは遂にその一撃に至った。それは、この戦場における終焉の一撃だ。

――来る。
ルーラーはそう確信した。次の一撃は〝赤〟のバーサーカーが繰り出す最大威力の一撃となるだろう。同時に、それが最後の一撃となる。彼は自身を現世に縛り付けるために必要な魔力すら使い果たし、消失するだろう。
それが、スパルタクスという英霊が選んだ道であるならば。彼女とて止めはしない。

だが、さすがに自分自身が巻き込まれることは避けなければならない。
まるでこちらを嘲笑うかのように存在する空中庭園に視線を移す。次いで、その視線は激闘を繰り広げる〝黒〟と〝赤〟のセイバーへ。
決めた。神から与えられる啓示ではなく、自身の意思に従って決意した。
旗をその手にしたまま、彼女は大きく後方へと跳躍――バーサーカーの視線が要塞へと移ったことを確認して、二騎のセイバーの下へと向かう。
彼女はひとまず、彼らに注意を促して退却させるつもりだった。既に他のサーヴァントたちは、〝赤〟のバーサーカーの異常な様子に気付いて安全圏へと離脱している。
〝黒〟のセイバーに変身したジーク、そして〝黒〟のライダー、〝赤〟のセイバーのみが、巻き込まれる領域にいる。
――いけない！
〝赤〟のセイバーと〝黒〟のセイバーが、あろうことか互いに宝具を打ち合った。その凄まじいエネルギーの余波は、ルーラーはもちろんのこと、〝赤〟のバーサーカーにまで到達する。
臨界点を突破し、〝赤〟のバーサーカーが咆吼した。カウントダウン、大地が震える。
ルーラーが叫んだ。
「逃げなさい！」

ジークにトドメを刺そうとしていた〝赤〟のセイバーは、愕然とした様子で破裂寸前のバーサーカーを目視した。わずかに逡巡したものの、マスターの指示か彼女は舌打ちして、即座に霊体化した。
実際に存在する人間、レティシアに憑依しているルーラーはもちろんのこと、ジークは霊体化で場を逃れることはできない。
「ジーク君！」
切羽詰まったルーラーの呼び掛けに、虚ろだったジークは無言で首を横に振った。どうやら、先ほど〝赤〟のセイバーに叩き込まれた宝具の一撃、そして変身による反動から来る激痛と損傷で、動けないらしい。
「……行け。貴女は此処で滅びていいサーヴァントではない」
だというのに。彼は躊躇いなく、ルーラーに逃げるよう告げた。はぁ、と嘆息する。
「馬鹿を言わないで下さい。……此処に貴方を連れてきたのは私です」
「戦うことを選んだのは、俺の意志だ」
「ぐ。頑固者にも程がありますね！」
「……人のことを言えた義理か、貴女が」
こんな状況にも拘わらず、ジークは冷めた目つきでルーラーに告げる。
「――ご心配なさらず。貴方を死なせる気はありません。そして私自身もまた、ここで滅

びる訳にはいかない」
右手に握っていた旗を大地に突き立てる。背後の様子を窺うと、疲労困憊という様子の〝黒〟のライダーが、ジークを守るように抱き締めている。
マスターがこの状況で霊体化して逃がさないとは思えない。恐らく、ライダーの方がそれを拒んでいるのだろう。『単独行動』のスキルを保有しているライダーは、魔力供給をカットされても、わずかな時間であれば生き延びられる。
……だがしかし。この状況で逃げないというのは、やはり無謀であろう。
「貴女は逃げないのですか、〝黒〟のライダー？」
「嫌だ」
「ですが――」
ライダーはジークを抱きながら、強く首を横に振った。
「嫌だと言ったら嫌だ！　もう、これ以上彼が傷つくのを見るのは嫌なんだ！　ボクは此処から、絶対に退かないからな！」
自身も相当の深手を負っているにも拘わらず、ライダーに逃げるという発想はない。何ができるという訳でもなく、ジークを庇ったところで二人諸共に滅びるだけだ。
意味がない。まるで、意味のない行為だ。
〝黒〟のライダー、アストルフォは宝具を考えなければ、二流と三流の間に位置する英

霊でしかない。シャルルマーニュ十二勇士の内、伝説に『弱い』と謳われるのもアストルフォただ一人だ。
けれど。それでもアストルフォは英雄だ。
「嫌なんだよ……」
震えながらも、ライダーは守ることを止めない。怯むこともない。生まれついての強者が勇を発揮するのは当たり前だ。何故なら強いから。自身の強さに誇りがあり、如何なる敵にも屈せぬという志があるからだ。
アストルフォは違う。このサーヴァントは弱く、運命という名の敵に打ち勝つことは決してできない。その強さは、山を動かすことも天を貫くこともできない。なのに、生前のアストルフォは誰もが認める勇者であった。弱くとも、力足らずとも、敗北することさえあっても。アストルフォは勇有る者であり、英雄たる資格を持つのだ。
「――分かりました。では、そこでじっとしていて下さい。動くと危険ですから」
それがサーヴァントの意志であるならば。ルーラーたる己に止める権利はない。
だから、これはジークを守るためだ。裁定者としてはほんの少し、逸脱しているかもしれない。だが、戦場での裁量は彼女に任されている。
獣でも、人間でも、魔物でも、英霊ですらもなく。
その巨大な〝タタリガミ〟めいたサーヴァントは遂に、最後の一撃を大地へ叩きつけた。

〝赤〟のバーサーカー（スパルタクス）は、脳が痺れるような多幸感に満ちていた。最後の一撃は、あらゆる圧政を破壊し、権力を打破するものになるだろう。

無論、彼は狂っているし……己が狂っていることすらも理解している。だが、止まれぬのだ。生まれついて、誰かに従うことなど我慢ができぬ性質だった。

いや、そうではない。蔑まれ、傷つけられることが快感だった。自分の内部に、淀んだ澱（おり）のようなものが沈殿していくのが、たまらない愉悦だった。

だから、笑い続けていた。そしてそれが臨界点に達したとき、スパルタクスは叛逆した。世に圧制者が存在する限り、自身の愉悦も憤怒も止まることはない。

そして今。第二の生を授かった彼は、生涯最高の一撃を叩き込もうとしている。視界は歪み、全身が何かに置き換わっていく痛みが彼の脳を苛んでいる。だが、それももう終わりだ。それは、力を籠めた一撃どころではない。自分の全てを生贄に捧げなければ到達し得ない、窮極とも呼べる破壊だった。

「――ああ」

感嘆の息すら零して。自身の肉体がどれほど醜く変貌したかなど、振り返ることすらもなく。生涯を叛逆に捧げた被虐の剣闘士は、遂にその一撃を振るった。

狙うはこの聖杯大戦における最高権力の圧制者、即ちルーラー。そしてその背後にある

ミレニア城塞諸共だ。月に届き、星を墜とすような一撃。生前死後含めて生涯最高のカウンターパンチ。果たして己の拳は、己の剣は圧制者たちに届いただろうか。

それを知ることもなく、知る気もなく。生涯をただただ叛逆に捧げた禁欲的な剣闘士（グラディエイター）は、笑いながら息を引き取った。

その一撃の直線上に、ルーラーと〝黒〟のライダー、そしてジークがいる。回避は不可能、どれほどに硬い盾であったとしても命を賭した一撃は防ぎ切れまい。

だが――その一撃を受けるは聖杯戦争の絶対裁定者、ルーラーである。

「我が神は（リュミノジテ）――」

旗を両手で握り締め、その真名を起動する。

聖女ジャンヌ・ダルクが剣の代わりに持ちし旗。我らに聖女ありきと付き従う兵士を鼓舞し、高揚させたその旗は、常に先陣を切って走る聖女を守護し続けたという。

「ここにありて（エテルネッル）！」

そしてこの聖旗を宝具として発動させたならば。ジャンヌが持つ規格外（EX）の対魔力を、物理的霊的問わずあらゆる護りに変換することになる。

ありったけの憎悪と歓喜を乗せて放たれた〝赤〟のバーサーカーの一撃。それを、旗はルーラーだけでなく、背後に立つ〝黒〟のライダー（アストルフォ）とジークを含めて完全に遮断した。

両手に力を籠める。今の彼らには、ルーラーが握る旗のみが命綱だった。苦悶を押し殺し、ただ前を見て――暴力的な光の渦に、ルーラーはただ耐える。

それはこの世全ての悪に立ち向かう誰かに似ていて。

それは墜ちる星に立ち向かう誰かに似ていた。

あまりにも小さき人の姿でありながら、眼前のそれを善しとせずに立ち向かう全ての人間に似ていた。

誇り、意地、愛、怒り、あるいはそれ以外の何かを籠めて。人は万人を鏖殺するに余りある暴力でさえも、恐れを上回る勇気を以て立ち上がる心を持つ。

ジークは彼女の小さな背中を見ながら、どこか悲痛な感覚を抱いた。驕りであることは百も承知だが、生前の痛ましい逸話を思うとどうしてもそれを捨て切れない。

裏切りによって全てを奪われた彼女。おおよそ考え得る限り、人として最悪の扱いを受けてなお、何も恨むことなく……絶望することもない聖女の化身。

恨んだならばいい、憎むならば納得する。だが、憎しみも恨みもなく、未練すらもない。

ジークには、それが不思議で仕方がなかった。

……〝黒〟のライダーは、何となく海を割った老人の神話を思い出した。完全に遮断された光は、分かたれた水のようだ。命に終わりがあるように、命を賭した一撃にも終焉が存在する。〝赤〟のバーサーカー渾身の一撃は、ミレニア城塞を半壊させ、戦場にいた多くのゴーレム、ホムンクルス、そして竜牙兵たちを死に追いやった。

だが、それほどの暴力ですらも三人を傷つけるには至らない。光が収まると、ルーラーは安堵の息をついて、振り返る。燦々（さんさん）と輝く笑顔で、安堵の息を零し――。

「……無事ですね、良かった」

そう呟いた。

斬撃というよりは、厄災に近い。それも、悪意ある地震であり津波だった。莫大な魔力を全て破壊に変換したそれは、大地を揺るがし、ミレニア城塞を薙ぎ払った。

魔術師たちの悲鳴が上がる。幸運なことに、彼らが戦況を見守っていた場所は直接の猛火に晒されることはなかった。だが、わずか数メートル先は惨憺（さんたん）たる有様だった。

「な、何だ……今のは、何が起きたのだ……」

魘（うな）されるようなゴルドの呟きも無理はない。直接攻撃されたのならば、まだ話は分かる。

だが、彼らが受けたのは単なる余波だ。
「……〝赤〟のバーサーカー（バルタークス）は？」
フィオレの問い掛けに、カウレスは嘆息して告げる。
「消失した。……他のサーヴァントはどう？」
「アーチャーは生きています。ライダーは？」
忌々しげにセレニケは頷く。霊体化して戻ってこい、とあれほど言ったにも拘わらず、戻ってくるどころか、ホムンクルスを守ろうとしていた。この状況を考えると、そろそろ決断すべき事態かもしれない。
「ライダーも生きているわ。キャスターは？」
ロシェは自分とキャスターが苦心して造り上げたゴーレムが木っ端のように散らされたことに、酷く衝撃を受けていた。だが、最大の関心事であるキャスターは生きていることが確認できた。
「先生なら無事だよ。……ゴーレムは八割方吹き飛んで、城塞で待機させていたゴーレムが、かろうじて稼働可能かな」
「そう。後はランサーですね。おじ様は生きていらっしゃるようですが……」
「領王（ロード）も無事だ、〝赤〟のランサーとの戦いが有耶無耶の内に終了でね。ひどくお怒りだよ。それよりも、緊急事態だ」

どこか掠れた声で、壊れた窓枠に立ったダーニックがそう言った。
「……緊急……事態？」
今以上の緊急状況など、有り得るはずもないとフィオレは思っていたが、ダーニックの声は予想以上に深刻だった。
「――空中庭園が、接近を開始した」
〝赤〟のセイバー（モードレッド）は霊体化を解除すると、周囲の状況を精査した。
――草原の左右に広がっていた森では、多くの木々が倒れている。巨人に踏み潰されたかと思うほどの、惨憺たる有様だ。
――ゴーレムやホムンクルス、竜牙兵たちはそのほとんどが死に絶えている。それはそうだろう。あれだけの魔力が一気に集束、爆発したのだ。生きているのは後陣で待機していた、あるいは状況を察知して逃亡した一部のホムンクルスくらいのものか。
――サーヴァントたちは迅速に戦場から避難していた。少なくとも、この一撃に巻き込まれるような鈍感さでは、三流以下であろう。
つまりは、更地だ。己諸共、あの奇妙な怪物（サーヴァント）はこの戦場を消滅させてしまった。怒る、呆れる、嘲る……どれも今の感情には相応しいとは思えず、〝赤〟のセイバーはしばし呆然としていた。

「おうい、セイバー」
「……ああ、マスター。現状は見ての通りだ」
背後から掛かった声に振り向いて、彼女は肩を竦めた。マスターである獅子劫も、戦場を見て呆れたような嘆息を一つついた。
「で、これからどうするマスター。指示を頼む」
「頼むったってなぁ……こんな更地で敵味方入り乱れる戦闘なんて、間違いなく酷いことになるぞ」
「じゃあ撤退するか？」
獅子劫はその言葉に同意しかけたが、ふと空を見てその提案を却下することにした。
「――いや、撤退は無しだ。見ろ、セイバー」
獅子劫が指差した先には、神代の産物である空中庭園。セミラミスについて綿密に調査を行っていた獅子劫は、それが〝赤〟のアサシンの宝具だと理解していた。
問題はその空中庭園が崩れかけたミレニア城塞に接近している、ということだ。
「……フン。確かにここで撤退してしまえば、オレたちが部外者扱いか」
「だろ？　行くぜ、セイバー」
「了解だ、マスター。で、アンタ飛ぶのは得意なのか？」
「それがどうにも苦手でね。あまり考えたくはないが、お前さんに頼ることになりそうだ」
獅子劫のぼやきに、〝赤〟のセイバーはくすくすと笑みを零した。そう、つまりは彼女の固有スキル『魔力放出』の出番であった。

§§§

「……ふむ。あの城塞を破壊するのは、些か面倒だと思っていたが手間が省けたな。ランサーの宝具でも使わなければなるまいか、と思っていたのだが……」
〝赤〟のアサシンはそう告げて、退却した他のサーヴァントたちを眺めた。
「ご苦労、皆の衆。滾った血はまだ収まりがつかぬと見えるが――何、少し我慢しろ。すぐに再戦だ」
その言葉に、〝赤〟のアーチャー（アタランテ）は首を傾げた。
「それは構わぬが。――あの城塞に接近してどうする気だ？　マスターを直接殺しに行くつもりか？」
「知れたこと。――大聖杯を返して貰うまでよ」
一瞬、その場にいたサーヴァントたちは静まり返った。ライダーやアーチャーは顔を見

合わせ、ランサーですら訝しげな表情でアサシンを見やる。
「返して貰う、だって？　いや、そもそも……どうやってだ」
〝赤〟のアサシンは笑って床を指差した。
「――この空中庭園が浮遊しているのは、『逆しまである』という概念によるものだ。植物は下に向かって生長し、水は下流から上流へと流れていく」
庭園がミレニア城塞の上空で留まる。トゥリファスの住人がもしこの夜空を見上げたならば、月すら隠す巨大な庭園に何を考えるだろうか。少なくとも、正気ではいられまい。
「聢と見るがいい、矮小な魔術師どもめ。これが魔術の真なる領域だ」
〝赤〟のアサシンは高笑い、両腕を広げてその術式を解き放った。
轟、と庭園の底部から風が吹き荒れる。竜巻にも似たそれは、まるでパイプか何かのように城塞に接続した。
「おいおい。……まさか、本当に奪うつもりか!?」
〝赤〟のライダーの言葉に、アサシンは頷き叫ぶ。
「無論だ！　この庭園はその為に設計されたもの故な！　さあ、出てくるがいい大聖杯よ！　神域の如き魔術で構築された、その醜くも美しき姿をな！」
土が崩壊し、吸い込まれていく。城塞は既に三分の二以上が破壊されていた。剝き出しの岩盤が砕け散り、とうとう大聖杯がその姿を表に晒す。

「あれが――聖杯、か？」
〝赤〟のアーチャーが唖然とした表情で呟く。鷹の目のような視力は、確かに下にある大聖杯を捉えた。だが、彼女が真に驚いたのはそれではない。
アーチャーだけでなく、ランサー、ライダー、そしてキャスターもただただ呆然とするしかない。六十年以上もの間、溜めに溜めた絶対不変、無色透明な膨大な魔力が渦を巻いていた。
「あれが聖杯……！　良い！　あれは良すぎる！　素晴らしい！　素晴らしい、素晴らしい、素晴らしいッ!!　ここから、吾輩ですらも感じ取れるあの圧倒的な魔力！　飛び込み溺れ、一体化したいとさえ願う！　その癖、あの剝き出しの人体のような醜さ！　まさに『綺麗は汚く、汚いは綺麗』！」
キャスターが歓喜の叫びを迸らせる。
あれならば、余程の望みでない限りは『万能の願望機』と呼ぶに差し支えないことは明白だった。彼らサーヴァントたちが色めき立つのも無理はない。
「……ちっ、霊脈と完全に癒着しているな。引き剝がすのには、時間が掛かりそうだ。だが、のんびりしてもいられん。来るぞ、皆の衆」
〝赤〟のアサシンに言われるまでもなく、その場にいたサーヴァントたちはそれを知覚していた。大聖杯強奪などという事態を防ぐため、〝黒〟のサーヴァントたちが次々と向

かってくる。
「我はしばらくあの大聖杯に注力せねばならん。他の連中は任せるぞ。ここで食い止めなければ、お主らの願いは露と消える。心して掛かれよ？」
嘲るような笑みを伴って放たれた言葉に、〝赤〟のライダーとアーチャーは敵意も隠さずに切り返す。
「――言われずとも分かっておるわ。汝こそ、失敗するなよ」
「やるべきコトはやるがな。いちいち指図すんなっての。言われなくても分かるっつーの」
が、そのあからさまとも思える敵意を叩きつけられてもなお、〝赤〟のアサシンの余裕が崩れることはない。
「それでは吾輩も、大聖杯のお陰でインスピレーションが湧きましたのでこれにて失礼！」
「……お前はせめて、手伝え」
呆れ返るような皆の視線を無視して、キャスターはそそくさと彼用に作られた工房――即ち〝書斎〟へと向かった。
「そうそう。一つ言い忘れていたことがある。この庭園は、ルーマニアではない。それに留意して、戦うがいい」
〝赤〟のアサシンはそう言い残して、姿を消した。大聖杯は変わらず、鈍重な速度ではあるが確実にトゥリファスから引き剝がされようとしている。

庭園が城塞のすぐ傍まで接近しているため、サーヴァントならば一飛びでここに辿り着くことができるであろう。
「――〝黒〟のランサー（ヴラド三世）はオレが獲る」
〝赤〟の槍兵はそう呟き、その神槍を構えた。〝赤〟のライダーは無論のこと、師匠である〝黒〟のアーチャー（イーロン）を選び、〝赤〟のアーチャーは初顔合わせとなるキャスターに狙いを絞ることにした。
攻守交代。〝黒〟のサーヴァントたちは、奪われる前に大聖杯を取り戻さねばならない。
〝赤〟のサーヴァントは、完全に奪い取るまで大聖杯を守らねばならない。
攻守と共に状況も逆転した。難攻不落の要塞だったはずのミレニア城塞は今や用済みのガラクタであり、圧倒的に優勢なのは〝赤〟の側だ。
だが、現状で問題になるものが一つ。即ち、既にこちらへと向かいつつあるルーラーの存在だ。ただし、それが分かっているのは〝赤〟のアサシンとキャスター、そしてマスターであるシロウのみ。
〝黒〟も、〝赤〟も、そしてルーラーも。これが時間との勝負だと分かっていた。大聖杯が霊脈から引き剝がされ、完全に空中庭園の内部に収まるまでの数分、彼らは死に物狂いで戦わねばならない。

ルーラーは〝黒〟（アストルフォ）のライダーとジークを残し、一人空中庭園へとひた走る。近付けば近付くほどに、あの浮遊する宝具には驚かされる。城を破壊する威力を持つ対城宝具は、稀少だが所持する英霊がいない訳ではない。だが、城そのものとなると恐らく相当に数が少ないだろう。

宝具としての城が存在するのは、ルーラーがすぐに引っ張り出せる知識だとアイルランドの光の御子くらいのもの。それも、母国限定だ。

まして浮遊する要塞となると、ほぼ零に等しい。加えて厄介なことに、どうやらあの浮遊要塞の持ち主は、こちらに悪意を抱いている。相当に回り道をしたが、ともかく〝赤〟の側には糾さねばならないことが多々あった。

――だが。

何かが、致命的な何かが始まって終わりかけている。そういう予感がしてならない。その悪寒をどうにかして振り払い、彼女はミレニア城塞の壁を蹴って上へ向かってひた走る。すぐ傍ではミレニア城塞に穿たれた大きな孔から、大聖杯がゆっくりとその姿を現しかけていた。

「……信じられません」

ぽつりと、ルーラーがそう呟くのも無理はない。全身を締め付けるような圧迫感が、その大聖杯を紛れもない本物だと知らせている。信じられないのは、それを引っ張り出そうとする〝赤〟の側だ。

確かに、これは大聖杯を巡る争いだ。最終的に〝赤〟の側が勝利すれば、こういう形になるであろうことも予測がつく。しかし、それは普通終わってからの話だ。何故、戦いの天秤がまだ揺蕩っている状況で、彼らは急いで大聖杯を回収しようとしているのだろうか。

恐らく、現状で問題を起こしているのは〝赤〟のサーヴァントではなく、マスターだ。

それも、少なくとも魔術協会の意向に沿っていない人物――。

そこまで推測を組み立てたところで、彼女はどうにか浮遊する要塞へと辿り着いた。水が上流に流れ、草木は明らかに上ではなく下へと成長している。

「逆しまの流れ……空中庭園（ハンギングガーデン）……！」

「その通りだ、ルーラー」

嘲るような声に振り返る――空中庭園を宝具として所有するような英霊は、ルーラーも二人しか知らない。一人はネブカドネザル二世、そしてもう一人――旧き伝承が混同された結果、〝造った〟という虚偽が振りまかれた伝説の女帝。

世界最古の毒殺者――セミラミスだ。
「〝赤〟のアサシン……貴女でしたか」
「然様。さて、ルーラーよ。我が庭園に何用かな？　別段、ルール違反をしたつもりは無いのだが」
灯火が薄暗いせいか、黒く艶やかなドレスは半ば闇夜と一体化している。ルーラーは、それが酷く――薄気味悪いものに感じた。
「いいえ、しています」
ほう、と〝赤〟のアサシンが関心を見せた。
「――では。我が何を違反したと？」
「己の良心に一切の呵責なく、聖杯戦争のルールに従っていると言うならば――貴女のマスターに会わせて下さい」
途端、〝赤〟のアサシンの目が嘲笑から警戒へと切り替わる。ルーラーはその目で、自分の辿った道筋が誤りでないことを知った。
「……残念ながら、我がマスターは忙しくてな。その上、小心者でとてもではないが他のサーヴァントに会わせられん」
「なら。この庭園に隠れている訳ですか」
ルーラーがあっさりと指摘する。〝赤〟のアサシンは、既に臨戦態勢に入っている。そ

れを押し止めるかのように、ルーラーは旗を突きつけ告げた。
「無駄だということは分かっているはずでしょう、〝赤〟のアサシン。空中庭園から放たれていた光柱は貴女の魔術ですね？　ならば――」
「ふむ。確かに我の魔術ではお前の対魔力を貫くことはできまい。ルーラーとしての特権の一つ、ということか」
「特権はまだあります。……〝赤〟のアサシン。どうか、私にこれを使わせないで下さい」
ルーラーの全身がわずかに青く輝き、さすがに〝赤〟のアサシンも顔を顰める。
「……ルーラーとしての最大特権、全サーヴァントに行使可能な令呪か」
これこそが、ルーラーが裁定者たる最大の理由である。ルーラーは各サーヴァントに対し、それぞれ二画の令呪を保有している。今回の場合、合計で二十八画。〝黒〟の側が彼女を味方につけようと策したのも無理はない。
極端な話、彼女が自害を命じれば大多数のサーヴァントがそれで終わる。無論、令呪には令呪で対抗できる。自害を命じられれば、自害を拒絶するように相手側のマスターが令呪を行使すれば良い。
だが、それはつまり二画の令呪を無駄に消費するのと同じこと。サーヴァントの裏切りを考慮して残り一画を残すならば、令呪は事実上使用不可能ということになる。
加えて、ルーラーが味方に回った側はルーラーの令呪も含めると合計四画の令呪を行使

可能なのだ。如何なる優劣をも覆すルーラーは、是が非でも欲しい人材だったろう。もっとも、そんな誘惑に乗るような英霊では、ルーラーが務まるはずもないのだが。

「だが、止めておけ。たとえ令呪が全て消費されたとしても、我はマスターを裏切る気などない。お前が令呪で我に命じたならば、マスターがそれを止める」

「……マスターは傀儡ではないのですか」

「無論だ。第一の生がどうあれ今の我はサーヴァント、全く私心なく、マスターに仕えているとも」

ルーラーは一歩を踏み出し、告げる。

「ならば。今の貴女は私の敵です」

此処に至り、遂に彼女は〝赤〟のアサシンとそのマスターを明確な敵と見定めた。その行動に、さすがのアサシンにも緊張の色が走る。

元より、アサシンとルーラーでは比べるべくもないスペックだ。加えて、魔術師とルーラーとでは、致命的に相性が悪い。令呪など使用せずとも、彼女は即座にアサシンを打倒できるだろう。

――そもそもの話、〝赤〟のアサシンとマスターはルーラーと戦うことなど望んではいない。

重要なのは、〝赤〟のランサーと〝黒〟のランサーが接敵すること。〝黒〟のランサーのマスターが、状況を確認すること。それまでの、ほんの数分を会話で稼げればそれで良い。

〝黒〟のランサーのマスターであるダーニック・プレストーン・ユグドミレニアの酷薄さをよく理解しているシロウは、状況が不利になれば必ずあの伝説を再現する宝具を強制的に発動させると確信していた。

「ほう、そうか。我はお前の敵か。いやしかし、残念だったな。たった今より、我らは利害を共有せねばならんぞ」

「――ッ!?」

ルーラーが振り返る。音もなく、魔力の乱れもない。だが、数秒後に最悪の事態が勃発する――そんな啓示が届く。

「そら、行くがいい。何、我も助けよう。あれと敵対せねばならんというのは――相当に厄介だからなあ」

わずかに歯軋り。だが、彼女の言葉は正しい。

既に膨大な魔力と共に、何かが〝生誕〟した。聖杯戦争どころではなく、致命的とも言える何かが。

ルーラーは彼女に背を向けて、全力で走り出した。

——圧倒的だった。

「……やはりな」

「くっ……！」

淡々とした声で、〝赤〟のランサーは〝黒〟のランサーを追い詰めていく。微塵の容赦も見せない的確さは、まさに大英雄に相応しい冷血さだった。

しかし、少し前までそれと拮抗していた英雄ヴラド三世は、劣勢に立たされる一方だ。

〝黒〟のランサー自身も、その異変は感じ取っている。力が抜けている、先ほどまでの己が十とするならば、今はせいぜいが六程度でしかない。

杭がずるりと、〝黒〟のランサー自身から産み出される。だが、その勢いも鋭さも先ほどのそれではない。炎を纏うまでもなく、〝赤〟のランサーはただ槍と鎧で全てを弾き返した。

「この空中庭園においては、こちらのアサシンが支配する領域だ。お前の領土という訳ではない。つまり——この庭園に居る限り、お前は救国の英雄ではない訳だ」

〝赤〟のアサシンの宝具『虚栄の空中庭園（ハンギングガーデンズオブバビロン）』は、一定領域を支配する城塞宝具だ。言い換えれば、ここはヴラド三世が英雄として崇められたルーマニアではない。従って、彼の知名度は零に等しくなる。

当然ながら〝赤〟のランサー、カルナも知名度は零に近い。だが、カルナとヴラド三世とでは、基準となる力そのものが異なっている。

知名度が零に等しくとも、世界の何処かでその伝説が存在する限り、カルナは紛れもない大英雄である。一方、ルーマニアから外に出れば、ヴラド三世は血に飢えた吸血鬼でしかない。

英雄としての特性を以て召喚された〝黒〟のランサーには、その知名度は力と成り得ない。むしろ、本来のスペックを発揮する阻害原因になる。

槍を振るって〝赤〟のランサーに立ち向かう〝黒〟のランサーは、常に保っていた優雅さや華麗さ、苛烈さすらも失っている。彼を支えるのは、英雄としての矜持ただ一点のみ。

そのただ一点のみが、彼に戦う力を与えていた。

しかし、それではあまりに〝赤〟のランサーの首級を挙げるには遠い。

英雄としての誇りによる〝黒〟のランサーの戦意がわずかでも弱まれば、後は雪崩のような勢いで終結するだろう。

二騎のランサーはそれをよく理解している。ならば〝黒〟の側は撤退すればいい、背を向けて逃げ出せばいいだろう。もっともそれができるくらいなら、英霊に成れる訳もない

のだが。

――余は、死ぬか。

不意に確信染みた思いが、〝黒〟のランサーの胸にこみ上げる。己の敗北は、当然ながら〝黒〟の側全ての敗北となる。だが、仕方ない。力及ばなかった、深追いしすぎた。何より、大聖杯ごと強奪されるなどさすがに脳裏にも浮かばなかった。

せめて、〝黒〟のセイバー（ジークフリート）が生きていれば。そんな思いもある。恥辱と絶望、後悔は溢れる河の如く、彼の心を乱している。

だが――。

やはり、どうにもなるまい。

そう思い、そう確信し、そう覚悟したその時、自身と契約したマスターが、それこそ魔法のように現れ、悪魔のように囁いた。

「いいえ、まだ勝てない訳ではありません。――貴方が、その宝具を解放してくれるならばね」

その場にいた全てのサーヴァントが動きを止める。その場に居るただ一人のマスター、ユグドミレニアの長、ダーニックである。

サーヴァントたちが戦闘中である開けた場所から離れ、神殿に似た様式の柱上でサーヴァントたちを睥睨しているダーニックは、妙に〝黒〟のランサーの癪に障った。

だが、それよりも今しがた彼が言い放ったことの方が遥かに問題だ。強い一撃を加えて、〝黒〟のランサーは〝赤〟のサーヴァントたちから距離を取ると、自身のマスターを睨み据えた。

「……ダーニック。貴様、今この余に何と申した」

遊びなどない、正真正銘の殺意だった。それを涼しげに受け止め、魔術師は尚も不遜なる言葉を吐き出し続ける。

「領王（リード）よ。宝具を解放なさいと言ったのです。勝機はそれ以外に有り得ない」

「貴様、何を言っている!?　あの宝具は使わぬと言ったぞ、忘れたか！　余はここで死ぬ！　無念と共に死に、朽ち果てる！　だが、それが敗者の定めだ！　ダーニック！　余はあれを使って、無様な存在に為ろうなどとは考えておらん！　断じて、断じてだ！」

「忘れているのは貴方です。我々は是が非でも大聖杯を手に入れねばならない！　あれを象徴とし、魔術協会に一矢報いるために。あるいは、根源へと到達するために。領王とて、願いは切実のはずだ。ならば――宝具を使うしかありますまい」

そう言って、ダーニックは片腕を翳す。そこには赤々と輝く三画の令呪。

「貴様……!?」

ダーニックは目を見開く〝黒〟のランサーを一笑に付して、底冷えのする声で告げた。

「令呪を以て命ずる。〝英霊ヴラド三世。宝具『鮮血の伝承（レジェンド・オブ・ドラキュリア）』を――発動せよ〟」

「ダーニック――貴様ァァァァァッ!!」

憎悪という憎悪、絶望という絶望を籠めて吐き出された叫びすらも、ダーニックには届かない。

「――余は、吸血鬼では、ない……ない、のだ……！」

震えるような呟きは、英霊ヴラド三世にとっての最後の理性だったろう。そしてそれを、マスターであるダーニックが粉々に打ち砕いた。

「いいや、お前は吸血鬼だよ。吸血鬼ドラキュラ、創作を以て哀れにも汚名を背負わされた怪物だ。第二の令呪を以て命ずる。〝大聖杯を手に入れるまで生き続けろ〟」

〝黒〟のランサーが咆吼し、マスターであるダーニック目掛けて飛びかかった。薄ら笑いを浮かべながら、彼はその腕を受け入れる。

ずぶり、と呆気ないほどに胸を貫かれた。軀が崩れる。鮮血が舞い、ランサーの顔に降り注ぐ。そして哄笑を上げるは――ダーニックだ。

「はははは！　これは失礼、我がサーヴァントよ！　詫びに我が血を吸うがいい！　お前はやはり吸血鬼、夜を統べる王だ！　貴様の願望など必要ない。私の夢を、私の願望を、私という存在を残すがいい！　第三の令呪を以て命ずる、〝我が存在をその魂に刻みつけろ、ランサー〟！」

「な――に？」

呟きは誰の物か、それともその場に居た全員か。〝黒〟のランサーがマスターを殺害し、そのマスターが口走った令呪による第三命令に、誰もが唖然とした。

サーヴァントは人間の魂を喰らい、魔力に変換することができる。これは、霊体である彼らの特権だ。人間が行えるのは、器に移し替えることと観察することだけに過ぎない。だが、この魔術師に限っては例外だ。彼は魔術において変換不能、役立たずの栄養分である魂に着目した。

……恐らく、第三次聖杯戦争でサーヴァントと共に戦った故だろう。あるいは、かつてとある魔術師に告げられた予言への恐怖が、この偉業を成し遂げたのか。

ダーニックは他者の魂を己の糧とする魔術を編み出したのだ。……けれど、それは禁忌に限りなく近い呪法だ。倫理的なものではない。彼は己の生命のためなら、赤子の頭蓋を潰すことも厭わない。

だが、この術はあまりに危険過ぎるのだ。ほんの数ミリ何かがズレれば即座に死へ繋がるほどの危うい大魔術。彼がこの六十年で魂を喰らった回数は、実に三度しかない。

その三度とも、彼の考え得る限り完璧な形で儀式を執り行ったが、それでも既に肉体と魂の適合率が六割を切っている。自分ではない〝誰か〟が、少しずつ己を支配しつつある。

恐らく、次の儀式では完璧に成功したとしても、既にダーニック・プレストーン・ユグ

ドミレニアという名は他人でしかない。記憶はあったとしても、細部を完全に記録していたとしても——それは決して己ではない。

つまり、ダーニックが儀式をすることもなくサーヴァントであるランサーの魂を喰らうなどというのは、正真正銘の自殺行為に他ならない。

何しろ、英霊の魂だ。七騎を揃えれば大聖杯を起動させられるという極上にして膨大な魂。そんなものを『器』でも何でもない人間が受け入れられるはずがない。

「莫迦な、有り得ん……!!」

だから、〝赤〟のアーチャー（アーラシュ・カマンテ）の唖然とした呟きも当然なのだ。

「——令呪。いや、それでも有り得ない。ダーニック……いや、今の貴方は……ダーニックでもなければ、ヴラド三世ですらないのだな」

〝黒〟のランサー……いや、ダーニックともつかぬ〝誰か〟が不敵に笑う。

「その通りだ、アーチャー。第三、の、令呪、で、ヴラド三世という英霊の魂を、極限まで私に、取り込まれやすいよう……加工、しても、英霊を支配することなどできはせぬ。まして取り込むなど不可能だ」

薄く笑う声は、最早ダーニックのものなのかヴラド三世のものなのか、判別がつかない。

「しかし、しかしだ。刻みつけることくらいはできる。この私の、百年に及ぶ思念を……聖杯に対する執念を、刻みつけることくらいはな……。私は最早ダーニックではない、だ

がヴラド三世でもない！　ただ聖杯だけを求める怪物、それで構わぬ……！」

元々、英霊の召喚は聖遺物を元に行ったとしても、精神性が近しいものになる傾向がある。汚名を雪ぐ（そそぐ）……つまり、過剰なまでの自信と誇りを纏ったダーニックとヴラド三世は精神面、魂の色が似通っている。

まして、わずかな期間とはいえ主従としての日々を共にした二人である。そこへ、第三の令呪による束縛が加えられれば、膨大な英霊の魂に『ダーニック・プレストーン・ユグドミレニア』という固有性（アイデンティティー）を刻みつけることも決して不可能ではない。

この魔術師の執念は、ほんのわずかといえども英霊を上回ったのだ。

「やめろ!!　やめろ、やめろ、やめろ、やめろ、やめてくれ……!!　余はワラキアの王、ヴラド二世が息子——余の中に入ってくるなァァァァァッ！」

最早怨念じみた形相で、〝黒〟のランサーが叫ぶ。だが、その顔は既にダーニックのような、ヴラド三世のような、極めてあやふやなものへと置き換わりつつある。それはさながら不定形の怪物だ。

「さあコレで貴方は私、私は貴方だ。領王（ロード）！　否、吸血鬼（ヴァンパイア）！　貴方の力は我らの共有財産となる！　全ては聖杯のため！　我が夢、我が希望は貴方の中で根付き、永遠に生き続ける！」

ダーニック・プレストーン・ユグドミレニア。彼は今や、癌細胞（キャンサー）にも等しい悪辣さで、

ヴラド三世という英霊の魂に寄生していた。
「お、のれェェェェェェェェェェェェェェェッ!!」
――いかんな。
『見』に徹していた〝赤〟のランサーは、即座に詰め寄ると自身の槍で〝黒〟のランサーの胸板を背中から貫こうとした。卑怯とは思わない、そもそも戦闘中によそ見をしたのは彼の方だ。
霊核がある心臓を貫いた。ほとんどのサーヴァントは、この時点で問答無用に死に絶える。耐久力に定評のある英霊ならば、それでもまだ現世と繋がっていられるだろうが、生憎と知名度を失ったヴラド三世は、そこまで強大なサーヴァントという訳ではない。
そう。〝赤〟のランサーが貫いたサーヴァントがヴラド三世だった場合だが。
「……ッ!!」
〝赤〟のランサーは、無防備に背中を見せた領王の心臓を確かに貫いたはずだった。
だが、消滅するどころか振り向きさえもしない。貫いた部分から血ではなく、黒い影のような何かが漏れ始めていた。
〝赤〟のランサーが、まじまじと自身の槍を眺めて呟いた。
「……確かに手応えはあったが。ああも成り果てては効果がない、か」
「ランサー、汝の槍で効果がなかったと?」

〝赤〟のアーチャーは驚愕を隠せない。ランサーの使う槍は、自分と同じく神から賜った業物だ。それを霊核に叩き込んで通用しない、ということは――。
「吸血鬼になる前だったら、恐らく普通に霊核を砕いて殺せていただろう」
蝙蝠が集まり、人のカタチへと集積していく。
「だが、オレたちの眼前に居るのは〝黒〟のランサー、ヴラド三世ではない。世界中から知られ、恐れられている――吸血鬼だ」
死徒、と呼称される吸血鬼がこの世界には存在する。人に紛れて血を吸うか、誰とも交わらずに孤高を保つか、いずれにせよ死徒は彼ら独自の概念と文化を持ち、世界の裏側でひっそりと生きている。
今、サーヴァントたちの目の前に居るのはそういう存在ではない。神秘という概念で言えば、わずか百年。だが、その恐怖は世界中を覆い尽くした。吸血鬼、と聞いて人が最初に思い浮かべるは世界から隠れ潜む死徒ではなく、ルーマニアの大英雄ヴラド三世――それを原形として創造された〝吸血鬼ドラキュラ〟である。
「――化物だな」
〝赤〟のランサーの率直な感想は、その場に集ったサーヴァントたち全ての同意を得られただろう。
完全に人のカタチを取り戻した吸血鬼がサーヴァントたちに顔を向けた。酷薄ではあっ

たが、知性溢れる眼差しはそこにはない。
優雅な黒い貴族服はズタズタに切り裂かれている——その内側からは、血や肉ではなく質量を持った影が零れだしている。
ランサーが持っていた槍は英雄としての側面が消滅したと同時に、塵の如く消え去った。
「……さあ、私の聖杯を返してくれ。私はあの大聖杯で、我が一族の悲願を叶えねばならないのだ。そう、我が宿願を叶えるため、私は無限に、そして無尽蔵に生きねばならぬ。血族を増やさなければならない。我が子を産み出さなければならない、眷属を更に増やさなければならない。才と努力と育成環境、それらを揃えて私の後に続く者たちを産み出さなくてはならないのだ。だから、大聖杯を……返せ、返せ、返せ、返せぇぇぇぇッ!!」
——その叫びは、ダーニックの身勝手な夢と吸血鬼としての本能が入り交じっていた。
根源に至るためではなく、根源に至るためにその前段階である一族を増やすという部分に人生全てを擲った。
増えなければならない——一族のために。
強くならなければならない——一族のために。
大聖杯に願うは、己の増殖、増強、増加。一族への愛と己の妄執を混同させた男は、自分の夢が如何に破滅的なものであるか、その理解を拒んでいる。
あるのはただ、血の色をした残酷な瞳と隠せぬ牙を剥き出しにした怪物だ。ゆっくりと、

周囲を観察するように見回し、一点に狙いを定める。
既にこの〝無銘の怪物〟は、庭園に取り込まれた大聖杯の在処を嗅ぎつけていた。
「ハッ。どうあれ神々からは程遠いバケモンってのには変わりねえだろうが！」
〝赤〟のライダーが進み出た。英雄殺しの槍を手にし、その駿足で一瞬にして吸血鬼に接近する。跳躍と共に投擲された槍は、銃弾の如き勢いで吸血鬼に肉薄する——！
「いかん！」
制止の声は〝黒〟のアーチャーから。けれど、遅い。槍は既に搦め捕られている。
「な……!?」
音を凌駕する勢いで射出された、必殺の一槍。躱すことなど不可能に近いそれを、何と吸血鬼は片手で搦め捕っていた。
飛来するミサイルを素手で摑むようなものだ、当然ながら肉は裂け、神経は断裂、骨はみしりと音を立てて砕け散る。
だが、吸血鬼の再生能力は傷つくより遥かに迅い。断裂した端から再生する様は、おぞましさすら感じさせた。
吸血鬼が笑い、〝赤〟のライダーに飛びかかる。跳躍していたライダーはたまらず組み伏せられた。が、それでもライダーには余裕がある。神の血を引いていない限り、この軀にあらゆる攻撃は通じないのだから当然だ。

吸血鬼が牙を剝いた瞬間、ライダーが咄嗟に腕を突き出したのは蓄積された膨大な戦闘経験、生存本能が警告した故だろう。噛みつかれた瞬間、感じたのは奇妙なむず痒さ。

――毒!?

次の瞬間、〝赤〟のライダーは〝黒〟のアーチャーに勢いよく蹴り飛ばされた。牙が離れ、むず痒さが消える。

呻きつつ立ち上がった〝赤〟のライダーは、師匠（アーチャー）に抗議した。

「いきなり何するんだよ、先生!?」

「……貴方への攻撃は、確かに『神性』スキルがなければ届かない。その勇猛さのせいで、精神へ干渉する幻惑魔術のようなものすら通じません。ですが神の血を引いておらずとも、貴方を仲間にする方法は存在します」

弓に矢を番え、つい先ほどまで味方であったはずの吸血鬼に向かって躊躇なく射ち込んだ。だがしかし、突き刺さった矢を吸血鬼は平然と引き抜いた。血の一滴も出ず、傷口はたちまち塞がっていく。

「今のは攻撃ではない、吸血行為です。貴方を殺すのではなく、貴方を仲間に引き入れるための行動だ。貴方の軀は悪意や殺意には無敵に等しい。だが求められることには、弱いのです。そう、つまり――」

〝赤〟のライダー――アキレウスの母親、女神テティスは赤ん坊の彼を神聖な火で炙ることで人間としての血を蒸発させ、完全なる神にしようとした。夫であるペーレウスの制止によってその行為は中止されたものの、その肉体は踵を除けば不死となった。

それはつまり、如何なる攻撃もアキレウスには効果がないということであるが……その特性にも、二つ落とし穴がある。一つ、同じく神の血を引く者であれば傷つく。二つ、攻撃ではなく――。

「……友愛を示す行動には通用しない」

〝赤〟のライダーは不機嫌そうな表情でその後を継いだ。〝黒〟のアーチャーは笑いもせずに頷く。

吸血鬼がぴくりとあらぬ方向へ顔を向けた。不愉快そうに顔をしかめ、握り締めていた〝赤〟のライダーの槍を投擲した。狙いはその場に集った〝赤〟と〝黒〟のサーヴァントいずれでもなく、駆けつけてきた少女である。

――闇を切り裂くような、輝く一閃。

〝赤〟のライダーの槍は、少女に届かず叩き落とされた。風にはためく旗は、如何なる暗黒をも打ち砕く極上の洗礼武装（ホーリーウェポン）だ。

「ルーラー……！」

〝赤〟のアーチャーの叫びに、全員がそちらを注視する。その中には、かつて彼女を葬り去ろうとした〝赤〟のランサーも存在したが、ルーラーは彼には目もくれず――ただ、この場に産み落とされた吸血鬼を一心に睨んでいた。

「ヴラド三世……いえ、吸血鬼であり、ダーニックでもある……」

サーヴァントであることすらも放棄した彼は、ルーラーの令呪を以て束縛することはできない。〝黒〟のランサーはほぼ消滅に近い状態であり、令呪で自決を命じたとしても、寄生したダーニックがそれを拒絶できる。

既に、ルーラーはこの吸血鬼が聖杯戦争を破壊する最大要因であると認識していた。

彼は誇り高き英霊ではなく、サーヴァントですらもない。吸血鬼としての力を手に入れ、倫理性の欠片も無くなった〝無銘の怪物〟だ。

何よりも厄介なのは、彼の概念。ルーマニアでは、ただでさえヴラド三世と――それにまつわる串刺し公としての伝説、吸血鬼としての伝説が混在しているのだ。ヴラド三世の威光、知名度がそのまま彼に適用される可能性もある。

もしこれが大聖杯に至って、空中庭園から解き放たれれば……ルーマニアは一昼夜で地獄へと成り果てるだろう。

それはつまり、歴史と伝承が混ざり合い溶け合ったもの。地に住まう人々をただただ殺戮するための傑作惨劇となる。心ある者ならば、その惨劇をこう名付けるかもしれない。

即ち――――『ワラキアの夜』と。

〝赤〟のアサシンの言う通り、何よりも先に彼を討たなければならない。

「聖杯戦争の調律のため、一時的ですが貴方がたには協力態勢を敷いて戴きます」

「……ほう。相手はこの吸血鬼か」

〝赤〟のアーチャーの言葉に、ルーラーは首肯した。

「はい。彼を倒すまでは、休戦をお願いします。この吸血鬼を聖杯に辿り着かせる訳にはいきません。……絶対に」

吸血鬼は沙汰でも待つかのように、ルーラーをただ睨み据えている。ルーラーが左手を掲げ、朗々と告げた。

「ルーラー――ジャンヌ・ダルクの名において。この場に集う全サーヴァントに令呪を以て命ずる！　かつてヴラド三世であった吸血鬼を打倒せよ！」

左腕に刻まれた令呪が強烈な光を放つ。〝黒〟のアーチャー、〝黒〟のキャスター、そして〝赤〟のアーチャー、〝赤〟のランサー、〝赤〟のライダーに戒めの鎖が絡みつく。

その鎖は、吸血鬼と戦う分には全く支障なく――むしろ、彼と戦う限りはサーヴァントとしての能力を向上させる。だが、一度対立する陣営と戦おうとすれば、動きは鈍り、得

物を振るう力は立ち所に弱まる。
　ならば、誰と戦うべきかは自明の理。元より彼らは英雄、怪物魔物悪鬼羅刹を打倒するための勇者たちでもある。
「――いいだろう。私と〝黒〟のアーチャーで援護する。ライダー、ランサー、汝らは好きに動くがいい」
「あいよ、姐さん。そんな訳だ、ランサー」
「……構わん」
「キャスター。〝赤〟のバーサーカーを捕縛したときのように、ゴーレムで枷を作れますか？」
「できなくはないが、バーサーカーのときのようにはいかん。良くて動きを鈍らせるだけだな。それに、霧や蝙蝠に姿を変えられればどうしようもない」
〝黒〟のキャスターが空中にその指を踊らせると、十体のゴーレムが滑らかに動き出した。一本の指に一体のゴーレム。ただそれだけで、十体のゴーレムは各自が全く異なる動きで吸血鬼に襲い掛かる。
　これに比べれば、戦場で自律稼働していたゴーレムなど木偶に等しい。
　ゴーレムは吸血鬼の突き出す腕を躱しつつ、青銅の拳で殴りつける。並のサーヴァントであっても、少なからず損傷するであろう強烈な一撃を喰らいつつも、彼はただ無造作に

反撃する。
　だが、ルーラーの令呪による勅令が下った今、彼に味方は一人とておらず、周囲に佇む者全てが彼の敵であった。
〝赤〟のライダーとランサーが、タイミングを合わせると二人して槍で襲い掛かる。片や師から賜った英雄殺しの槍、片や神々すら打ち倒すと言われた光の槍。
　更に、神域に達した技量を誇る二人の弓兵は、味方が接近しているにも拘わらず、その隙間をくぐり抜けて立て続けに矢を放つ。
　この上で、ルーラーたるジャンヌ・ダルクが加わった。少女は吸血鬼が苦手とする聖旗を使い、吸血鬼が伸ばす腕を片っ端から叩き落としている。
　合わせて六名。誰も彼も最強と呼ぶに相応しいサーヴァントたち。だがしかし、六人の表情に一切の余裕はない。油断をしないため、という訳ではない。文字通り、必死なのである。
「くっ、また霧に――!!」
　ヴラド三世は〝黒〟のランサーとして召喚され、自分の領土内ならば串刺し公たる由縁である宝具『極刑王』を与えられた。
　吸血鬼となり、ダーニックに取り込まれたことでそれらは封印されてしまったが、彼には新たな武器が与えられた。吸血鬼、というものが持つ比類無き能力の数々である。

夜に溶け込んでいた黒の外套、その内側からずぶりと杭が召喚された。地面から召喚される訳ではない以上、奇襲される恐れはないが――吸血鬼の怪力で投擲された杭は、至極当然のように音速を凌駕する。

「ちっ、鬱陶しい……!!」

〝赤〟のライダーが踏み込み、素早く弾く。おおよそこのサーヴァントたちの中で、速度という点で彼に勝る者はいないだろう。それは騎乗していようがいまいが同じこと。トロイア戦争の大英雄アキレウスに、速度で勝てた者など生前にも死後にも存在しない。

彼から一歩遅れる形となるが、〝赤〟のランサーとて俊敏だ。先ほどから射出される杭の悉くを破砕している。

だが――遂に、量産される杭の一つが〝赤〟のランサーの足を捕捉した。宝具並みの威力で、足の甲に突き刺さる。引き抜こうとした瞬間、わずかにランサーの動きが停止する。吸血鬼としての凄まじい怪力で、単純に殴り飛ばす。ただそれだけで、ランサーは壁まで撥ね飛ばされた。ダメージこそ軽微だが、その圧倒的な膂力（りょりょく）のみで己を圧倒した吸血鬼に、ランサーは驚きを隠せない。

〝赤〟のライダーが反射的にランサーが叩きつけられた壁へと視線を向けた。そうすると、あたかも狙い澄ましたかのように吸血鬼はライダーに襲い掛かる。血を吸って眷属にしようと牙を剝く。

それを、〝赤〟のランサーが槍を投擲して防いだ。

「――執念、怨念、あるいは妄念か。魔術師でもなく、英雄でもなくなったお前は最早、誰でもない。〝己ではない誰か〟に為ったお前の苦痛は生半可なものではあるまい。未練を残すな、怪物。疾（と）く消え去るがいい」

確かに〝赤〟のランサーの指摘通り、怪物の苦痛は並々ならぬものだった。

己という己が、ごっそりと消えていく感覚。人間にとって根本とも言える己が名すら、まるで他人のように感じられて仕方がない。

自分は誰で、自分は何なのか――それすら、消えかけている。

そんな彼がしがみつけるのは、偏（ひとえ）に第二の令呪による命令のためだ。六騎のサーヴァントに囲まれ、今にも消え落ちそうな命ながら、それでも吸血鬼は高らかに吼え立てる。

「……は、はは！　嫌だね！　まだ死ぬものか、まだ殺されてたまるものか！　否、大聖杯を手にするまで、私は死なん！」

矢が突き刺されば、片端から霧に変わり蝙蝠に変わり、果ては巨大な猛犬になって牙を剝いた。変幻自在に姿を変え、その怪力と爪はゴーレムだけでなく、時に空間転移にも似た俊敏さで、アーチャーたちを切り裂いた。

――だが。六騎総出で襲い掛かれば、さすがに形勢が不利になるということはない。全

彼らは時間を稼ぎ続ければ、それで良い。夜明けが来れば、吸血鬼の力は激減する。仕留めるには容易いだろう。

問題なのは、彼がともすれば大聖杯が格納された場へ向かおうとすることだ。戦いを繰り広げながらも、マスターであるダーニックが下した第二の令呪、そしてダーニック自身の意志によって、吸血鬼は大聖杯に拘り続けている。

もし、彼が大聖杯に到達したらどうなるか。六十年溜めた魔力の渦で、彼は何を願うのか。一片の理性が残っていれば、彼の願いは魔術における究極を極める――即ち、根源に至ることだろう。

だが、その理性すら残っていなければ。彼の願いは、極めて破壊的なものだろう。

――間違いなく、そうだ。

そして、ルーラーにはそういう予感がある。彼は大聖杯で、破滅を願うということを。大聖杯が完全に起動するには至っておらず、願いが叶わないという可能性も存在するが、それに望みを託すほどルーラーは愚かではない。

六騎は前衛と後衛をハッキリ分けて、効率的に戦闘を続けていた。

〝いける〟

その場に集ったサーヴァントはそう確信できただろう。ゆっくりとだが、攻撃の速度が傷の快復に勝り始めた。霧になっても、〝赤〟のランサーの『魔力放出』による炎が逃げ

る暇も与えない。

憎悪の視線を浴びせながら、吸血鬼は攻撃を繰り出すが〝赤〟のライダーが前面に出ることでそれを防いだ。だが――。

あまりにも唐突に、全く前兆もなく〝赤〟の側のサーヴァントたちが苦悶の表情で膝を突き、動きを止めた。

「ぐっ……な、んだ……!?」

「マスター、か……!?」

一瞬だが、彼らの存在がひどく弱まった。そのわずかな隙を吸血鬼は見逃さず、跳躍して大聖杯へと走り出す。

「――待て!!」

ルーラーと〝黒〟のアーチャーが同時に走り出す。先ほどからルーラーが感じているこの悪寒は、吸血鬼が願いを叶えることへの恐れだろうか？

思考を振り払い、猛烈な勢いで疾駆する吸血鬼の背を追うことに専念する。幸い、ここからでも大聖杯の魔力は感知できる。見失うということはまずない。

だが――迅い！

「〝黒〟のアーチャー、足止めを！」

ルーラーの指示に、アーチャーは無言で減速を一切行わないまま、弓に矢を番えて立て

続けに五本掃射した。狙った足と腰に、全ての矢が突き刺さる。だが、吸血鬼は蝙蝠に姿を変化させた。

速度は多少鈍るが、足止めが通用しない。首を振って、〝黒〟のアーチャーは追跡に専念した。

「……〝黒〟のアーチャー、先ほど〝赤〟の側が動きを止めた理由は分かりますか？」

「いえ。令呪の効果が切れたのかと思いましたが――そうではなさそうですね」

〝黒〟のアーチャーはマスターからの魔力供給とは別に、体内から湧き出るような力を感じ取っていた。これが、恐らく令呪によるブースト効果であろう。

ルーラーはそちらも気になっている。マスターが共闘戦を承知しなかったのか？　……いや、それならまずサーヴァントにそう伝えるはずだ。あれは、まるで――。

先を行く蝙蝠が、突然次々と撃ち落とされていく。収縮され、細い糸のような光が廊下の遥か奥から、立て続けに射出されていた。

「くっ……こっちもお構いなしですか！」

ただし、それは必然追跡していたルーラーたちをも巻き込む事態となった。放った側である〝赤〟のアサシン（ミラベス）は、そこを全く考慮していないのだろう。自分一人の力で、事足りると考えていたようだ。

だが、それは油断だった。蝙蝠たちは再び吸血鬼の姿を取り戻すと、全身をズタズタに

引き裂かれながらも、両足のみを優先的に再生することで加速を取り戻した。

走る、というよりは柔軟なボールのように壁に激突を繰り返して前へ前へと進んでいく。やがて、吸血鬼は一つの扉を見出した。その先へと足を踏み入れれば。そこに求めていたものがある。この胸の内に湧き出る激情を放てる、万能の願望機が存在する。

――あと少しで、我が願望は叶えられる。

〝黒〟のバーサーカー（フランケンシュタイン）、〝赤〟のバーサーカー（バルタクス）、そして〝黒〟のセイバー（ジークフリート）と、既に三騎のサーヴァントが小聖杯に格納されているはずだ。〝黒〟のセイバーは奇妙な現象が起きて再召喚されているが、それでも二騎。小規模な願いならば――つまり、世界への改変を要求するランクの願いでなければ、大聖杯を強引に起動させて叶えることができるはずだ。

我が肉体の増殖、我が肉体の増強、我が肉体の補填。その程度ならば問題ないだろう。

ダーニック・プレストーン・ユグドミレニア。その名は既に他者のそれとして知覚するようになっている。

だが、その男が聖杯を求めた果てに己が此処に居るのは理解している。だから――喜べ、ダーニック。貴様の願いは、もうすぐ叶えられよう！

一瞬の躊躇もなく扉を開くと、果たしてそこは望んだ通りの場所だった。目の前にある

日乾煉瓦で組み上げられた幅広の階段は下へ下へと真っ直ぐ向かっており、最上層に突き抜けるような形で、超巨大構造物（ギガストラクチャ）が屹立している。

青白い光で満たされた、万能の願望機――冬木の大聖杯だ。

「――ああ」

数多のサーヴァントはおろか、ルーラーすらも出し抜いて。とうとう吸血鬼は辿り着いたのだ。後は大聖杯を強引にでも起動させ、願いを叶えるだけ……。

「そこまでですよ、ダーニック・プレストーン・ユグドミレニア」

大聖杯へと続く階段途中、人が立っている。サーヴァントではないので、マスターだと判断し、吸血鬼は殺害を決意していた。

だが、それを制するような呼び掛けに反射的に立ち止まってしまった。いっそ、一気呵成に飛びかかってしまえば良かったものの、その声に〝何か〟が引っ掛かってしまった。

「……誰だ？」

かつん、という靴音に吸血鬼は反射的に身を竦ませる。悪寒がする、眼前の誰かと出会ってはならないと本能が告げている。それは爆弾だ。導火線に火は既に点っており、無遠慮な爆発まで数秒もない。

吸血鬼の前に立ったのは、褐色の肌をした少年だった。彼は穏やかな笑みを浮かべて、厳かにこう宣言した。

「あるいはその残滓と言い換えるべきでしたか。その執念には正直感服しました。ですが、貴方に聖杯を渡す訳にはいかない。まして、吸血鬼に成り果てた貴方などにはね」

爆発した。ダーニックには、たとえ己の名を忘れても絶対に忘れ得ぬ過去の記憶がある。魔術師として死力を尽くして戦い抜いたあの第三次聖杯戦争――全てが始まったあの戦いを、忘れることは絶対にない。

だからこその、驚愕。

「……そんな、莫迦な」

「おや。貴方にしては真っ当で凡庸な台詞ですね、ダーニック。貴方が生きていたのだから、私が生きていたとしても驚くことはないでしょうに」

「そんな、莫迦な！　有り得ない！　何故だ！　何故お前がここにいる！　何故お前が生きている……!?」

肩を竦め、何とも飄々とした態度で少年は言った。

「――無論、この聖杯大戦に参戦したからですよ。〝赤〟の側のマスターとしてね」

それは、吸血鬼にとって絶対に有り得ない宣言だった。絶句する吸血鬼を他所に、少年はますます声高らかに叫ぶ。

「この時を待っていたのさ、ダーニック！　冬木の大聖杯は、俺のものだ！　魔術師、あるいは吸血鬼。どちらでもないにせよ――世界を破滅に追いやるしか能の無い貴様に、この大聖杯は断じて渡すものか！」

その言葉に、無意識に己を縛り付けていた恐怖という名の枷が外れた。

「……ほざけェェェェェェェェッ!!」

激怒した吸血鬼は加速するべくその一歩を踏み出し――無様に転んだ。

「ギ、ッ……!?」

見れば膝に何か鋭く尖ったものが突き刺さっている。これは、代行者が好んで扱う投擲用の概念武装――『黒鍵（こっけん）』だ。

「貴方は吸血鬼だ。残念なことに、吸血鬼はその比類なき力の代償に様々な弱点も内包せねばならない。陽光は苦手でしょうし、聖印にも弱い。そして――黒鍵のような浄化を旨とする武器にもね」

そう、少年の言うことは確かに正しい。代行者の黒鍵ならば、死徒を浄化させるに相応しい概念武装であろう。

だが、この威力はあまりに破格……いや、異常に過ぎた。

冷然と、厳然と、褐色の少年は謳う。

「いや何、貴方を追跡している彼女（ルーラー）と比較すれば、私など取るに足らないですよ。取るに足らない、認定すらされなかったただの聖人もどきです。とはいえ、今の貴方を粉砕するに足る力は有る」

赤い聖骸布がはためき、銀刃が舞う。周囲に突き刺さった黒鍵によってあらゆる反撃を封殺し、少年は吸血鬼の顔を摑んだ。

少年の気配がガラリと変貌する。今の彼は既にマスターではなく、違う誰かだ。そう、これはかつて自分が召喚したサーヴァントと殺し合った――。

「では、祈りの時間です。――名も無き吸血鬼」

〝私が殺す。私が生かす。私が傷つけ私が癒す。我が手を逃れうる者は一人もいない。我が目の届かぬ者は一人もいない〟

悲鳴が上がり、手足がもがく。

だが、摑んだ手は万力のように吸血鬼の顔を締め付けている。

〝打ち砕かれよ。敗れた者、老いた者を私が招く。私に委ね、私に学び、私に従え。休息を。唄を忘れず、祈りを忘れず、私を忘れず、私は軽く、あらゆる重みを忘れさせる〟

階段をたちまちの内に上りきって、廊下を疾走する。筋力がどうとかいう問題ではない。これは信念であり信仰の激突だ。

ならば鋼のように硬く、剣のように鋭い彼の信仰に、吸血鬼と成り果てた〝何者か〟が敵うはずもない。

――一言ごとに存在が削られていく。先ほどまで手の届く場所にあったはずの大聖杯が、見る見る内に遠ざかる。それが無念だ。

〝裟うなかれ。許しには報復を、信頼には裏切りを、希望には絶望を、光あるものには闇を、生あるものには暗い死を〟

昏く、そして穢れのない瞳。詠唱の悉くが刃のように吸血鬼へと突き刺さる。人間では有り得ない、破格の洗礼詠唱。

――そして、何故己はよりによって彼に殺されようとしているのだろうか。サーヴァントならば納得する、マスターであれば無念を刻もう。だが、不可解過ぎる。これならば、隕石に頭を破壊された方がまだ理解できる。

〝休息は私の手に。貴方の罪に油を注ぎ印を記そう。永遠の命は、死の中でこそ与えられる。――――許しはここに。受肉した私が誓う〟

――ああ、ああ、ああ！　私の聖杯、私の幻想！　余の聖杯！　余の希望が！　届かない、届かない、届かない!!

吸血鬼が扉に叩きつけられる。委細構わず、とばかりに少年はそのまま前へ前へとひた走る。扉が砕け散り、少年はそのまま踏み込んだ。そこは礼拝堂だ。身廊を駆け抜け――神の御前で、少年は憐憫の色すら帯びた眼差しを浮かべながら最後の聖言を告げる。

――しかし、何故なのだろう。

〝この魂に憐れみを〟

かつて敬虔な信者であり領王だった、そしてかつて魔術師であり、最後には誰でもなくなった『無銘の怪物』の全身からしゅうしゅうと、白い煙が立ち上り始めていた。溶けて

いる。肉ではなく、存在そのものが溶けていこうとしている。
無念の呻き、絶望の喘ぎを残しながら。吸血鬼は、最後の一片までも昇華された。故国を救いし英雄も、魔術師たちを統率する一族の長も既に亡い。
かつての王たちは死に、現在の王が、声高らかに凱歌を上げる。
そしてそこに、吸血鬼を追っていたルーラーたちが礼拝堂へと踏み込んだ。
「ここに……!?」
奇しくもその二人は、礼拝堂という似合いの場所で出会った。身廊で溶けかけている吸血鬼、既に声も動きもない。昇華されている。彼の魂は、在るべき場所へと還っていくのだろう。
その傍らで静かに佇む少年が一人、いた。褐色の肌、銀にも似た白い髪、カソックの上に赤いストラとマントを羽織っている。
彼を見た瞬間、ルーラーは全てを悟った。
「……そん、な」
悟ったが故に、息を呑む。馬鹿な、有り得ない。目の前の少年は——サーヴァントだ。
いや、それはいい。マスターがサーヴァントであるというのは、ルールを逸脱しているが、少なくともそれは有り得る可能性だからだ。
だが、問題はそのクラス。セイバーではない、アーチャーではない、ランサーではない、

ライダーでもない、バーサーカーでも、キャスターでも、ましてアサシンでもない。
「——初めまして。今回のルーラー」
「……十六人目の、サーヴァントだと……!?」
冷静沈着な〝黒〟のアーチャーですら、驚きを隠せない。それは、慌てて彼らを追ってきた〝赤〟の面々とて同じこと。
彼らがマスターだと思い込んでいた少年は、確かにサーヴァントとしての霊格を露わにしていた。
「十六人目ではないんですよ、ケイローン。十六人目は、貴方の隣に居るルーラーです。私は厳密に言えば一人目のサーヴァントです」
「アサシンのマスター……我らのマスターに、何をした!?」
「アサシンのマスター……我らのマスターに、何をした!?」
激昂する〝赤〟のアーチャーの問い掛けにくつくつと笑って、少年は片腕を掲げて袖を捲り上げた。全員が、それを見て息を呑む。
〝赤〟のアーチャー、〝赤〟のランサー、〝赤〟のライダー、〝赤〟のバーサーカー、〝赤〟のキャスター、〝赤〟のアサシン——それぞれ、総計十八画の令呪。
「平和的にマスターとしての権利と三画の令呪を譲って頂きました。心配せずとも、貴方がたが現界するに当たって消費する魔力など、大聖杯が接続した現状では取るに足らない量です」

「平和的に――？」

誰かの呟きに少年は頷き、〝赤〟のランサーを一瞥して言った。

「何しろ、〝赤〟（こちら）のランサーは人の嘘を見抜くに長けた施しの英雄。だから、出来うるだけ嘘をつかず、尚且つ自分たちの狙い通りに事を運ばねばならなかった。私の命令を、わざわざマスターに経由させていたのはその為です。そう、マスターたちは嘘をついていない。彼らは己の判断で指示を出したと思っている、今も……ね」

「――そう。私が知覚していたのは、神が警告していたのは貴方だったのですね」

「それはどうでしょう。私は神に逆らっている気は毛頭ないのですが」

考えてみるまでもなく。ジャンヌ・ダルクの召喚は一から全てがおかしかった。人の軀（にく）を借りての憑依召喚。当初は前代未聞の十四騎召喚が故かと思ったが、考えてみれば逆だ。十四騎で混乱が起きること必至、という状況ならば大聖杯は何が何でもルーラーの召喚を正しく成功させねばならなかったのだ。

それができなかったのは、大聖杯の認識が混乱していたが故だ。ルーラーが二騎存在するという絶対に有り得ない状況。

ならば。後から召喚される方はどう正しくとも混乱するに決まっている。そして、この神父が彼女から逃げた理由もルーラーであった為だ。ルーラーが特権の一つとして保有するスキル――『真名看破（しんめいかんぱ）』。

サーヴァントのクラス、そして真名を暴くこのスキルは、受肉した者にも当然ながら有効である。万が一、戦場で彼女と出会ってしまえば少年の計画は破綻していただろう。

「貴方は……冬木において第三次聖杯戦争で召喚されたルーラーか」

ルーラーの言葉に、その場に集ったサーヴァントの誰もが息を呑む。

「ええ。彼らの正式なマスターとなる前に、貴女と顔を合わせては困ったことになった。何しろ、貴女には令呪がある。気付いてしまえば全てを台無しにしてしまったでしょう？俺の夢を、邪魔させはしない」

少年の声に憎悪はない。だが、そこには決然とした意志があった。説得など不可能、殺されぬ限り、この少年が止まることはない――少女はそう確信した。

ルーラーは少年を紫水晶（アメジスト）のような瞳で見据え、彼の名を呼んだ。



「――何が目的なのです。天草四郎時貞（あまくささしろうときさだ）」
「知れたこと。全人類の救済だよ、ジャンヌ・ダルク」

報われぬ民草から、背を追いかける兵士から〝奇跡〟と謳われた少年と少女が二人。
互いの存在を許さぬと、静かに睨み合っていた。

解説

鋼屋ジン

——男の話をしよう。

出会った時から、男は病理に繋がれていた。

二挺拳銃、鳩、教会。ゾンビ、チェーンソー、血の池地獄（ブラッドバス）。

アタマが悪いと、と余人は蔑む。アタマが悪いと、と彼は喜ぶ。

堪能、溺愛、泥酔、絶頂。

ふしだらな嗜好のツケは、因果めぐってこの稼業（ロクデナシ）。

だがまあ、そう珍しい事でもない。

B級を貪るのは、紳士淑女（オタクども）の嗜（あくしゅみ）みだ。

無論、東出祐一郎の話である。そして、思い出話でもある。

時はまさに世紀末。だからと言って別段、腐敗と自由と暴力の真っ只中というわけでもなく、それほどイカれた時代（クレイジータイム）でもなかったけど、とにかく澱んだインターネットの黎明期で僕らは出会った。

出会いのきっかけは、とあるゲームメーカーだ。つまり「電波届いた？」であり「あなたを、殺します」であり「はわわ～」であり（※孔明ではない）、あと当時はまだ発売前だったけど「私、冬弥君と寝たの」であり、まあ、要するに葉っぱ（リーフ）だ。二次創作の小説だ。

出会った時からお互いモノを書いていた。

それが、ここまで長い付き合いになったのは、やはり趣味が合っていたから——というのは間違っちゃいないけど、正確でもない気がする。たとえば自分にはB級映画（特にホラー）を観る趣味はなかった。染まったのは一〇〇％東出祐一郎のせいだ。愉悦神父かよ。

ちなみに去年末も、何の説明も無しに『キャビン』観せられたりしたので（しかも英語版）一五年経った今もやってることは全然変わっていない。クリスマスに何やってんだ。

閑話休題。なら何で長い付き合いになったかといえば、まあ少なくとも自分にとって、東出祐一郎という人物が、すこぶる面白い男であるからだと思う。そしてその認識が間違っていなかったことは、この本の存在が何より証明している。

というわけで皆さん、お待ちかね！　散らすは火花か命の花か！　交わす剣戟、悲劇に喜劇！　聖杯大戦の第二幕！　より鮮やかに、より壮絶に、お届けいたします！

……というかアレだね。一巻のあとがきで本人も言ってたけど、本当に楽しんで書いている感じが伝わってくるのよね。

——うん、やはり変わっていない。あの時と同じように、本当に好きなものを、本当に好きなように書いている。それは東出祐一郎の「根源」である。

創作は物語に対するラブレターのようなものだ。「好き」という「根源」を見失わない限り物語に裏切られることはない。作者の想いも読者の想いも、いずれ天の杯へと至ろう。

あの時の想いが、今こうして花を咲かせ、実をつけているように。

——世紀末の、さらに末だった。二〇〇〇年の一二月だった。

とある一本の同人ゲームが、世間を騒がせた。

『月姫』

制作はタイプムーンというサークルだった。

その熱狂の中に自分はいて、当然、東出祐一郎もいた。

「好き」なものだった。だから、この物語に対する愛を、何らかの形でしたためたいと思ったに違いないのだ。

無論、この時は東出祐一郎の『Fate/Apocrypha』が生まれることなど、知る由もない。

だがまあ、間違いなくこの時だったのだろう。決定的な人生の分岐点。

つまり、だ。

——その日、東出祐一郎（ロクデナシ）は運命に出会った。